

# 平成18年度新教育課程の実施状況 中 間 評 價 報 告 書

(2006～2009年度)

(平成18～21年度)

北海道大学

高等教育機能開発総合センター

2010年3月



# **平成 18 年度新教育課程の実施状況 中 間 評 價 報 告 書**

**(2006～2009年度)**

**(平成 18～21 年度)**

**北海道大学**

**高等教育機能開発総合センター**

**2010年3月**

「平成18年度新教育課程の実施状況中間評価報告書」執筆担当一覧

担当者項目等		所属	教員氏名	備考
科目責任者	一般教育演習（フレッシュマンセミナー）	文	押野武志	
		工	宮永喜一	
		医	寺沢浩一	
	総合科目	理	倉本 圭	
		教	大塚吉則	
		文	佐々木啓	
		高等	亀野 淳	
	主題別科目	文	細田典明	
		法	得津 晶	
		経	西部 忠	
		理	松王政浩	
	共通科目	教	水野眞佐夫	
		工	工藤峰一	
		経	柿沢佳秀	
		高等	亀野 淳	
	外国語・ 外国語演習	外	小川泰寛	
		外	橋本 聰	
		文	清水 誠	
	文系基礎科目	文	千葉 恵	
		教	姉崎洋一	
		法	松浦正孝	
		経	小島廣光	
	理系基礎科目	理	利根川吉廣	
		理	羽部朝男	
		理	谷野圭持	
		理	瀧谷重治	
		理	池田隆司	
	心理学実験	文	和田博美	
	基礎自然科学実験	理	知北和久	
	自然科学実験	理	松山秀生	
		理	小西克明	
		理	増田隆一	
		理	永井隆哉	
	日本語・日本事情	留	柳町智治	
センター長補佐		理	小野寺彰	座長
高等教育機能開発総合センター		教	小内 透	
		外	竹中のぞみ	
		文	安藤 厚	編集担当
高等教育開発研究部長		高等	細川敏幸	
高等教育開発研究部 入学者選抜研究部		高等	山岸みどり	

## はじめに

北海道大学高等教育機能開発総合センター（以下センターという）は、大学設置基準の大綱化に伴って廃止された旧教養部に替わり 1995 年 4 月 1 日に設置され、高等教育開発研究部、生涯学習計画研究部、入学者選抜研究部とならんで、全学教育部が置かれている。

全学教育部の任務は初年次学生に対する教育であり、これを全学教育科目として展開し、一般教育演習、総合科目、主題別科目等からなる「純粋な教養科目」を中心に、北大独自のカリキュラムを構成している。このカリキュラムは、12 の学部のうち水産学部をのぞくすべての学部がひとつのキャンパスに集中しているという本学の利点を生かしたもので、北大の特色を明確に表している。

初年次教育については、まず全学教育の「純粋の教養科目」の部分の再構築が行われ、コアカリキュラムとして 2001 年度から実施された。このコアカリキュラムは、2003 年度には“進化するコアカリキュラ”として「特色ある大学教育支援プログラム」（特色 GP）に選定されている。

一方で、いわゆる「2006 年問題」、「学生の学力の多様化」への対応を進めてきた。特に理系科目では、従来のリメディアル教育から進んで、さらに「専門系／準専門系」2 コース制および総合的「自然科学実験」による基礎教育の強化を図ってきた。

2006 年度の新カリキュラムでは、基礎科目、外国語科目、情報科目などを刷新するとともに、「秀」評価、GPA 制度、履修登録単位数の上限設定の導入により「単位の実質化」に取り組んでいる。GPA 制度は、まず全学教育で実施され、その後多くの学部で専門教育の評価にも利用されつつある。

本報告書には、過去 4 年間（2006～09 年度）における、平成 18 年度新教育課程と「単位の実質化」の総合的取り組みの実施状況と、それについての点検と評価を記載した。

2009 年度をもって第 1 期中期目標・中期計画（2004～09 年度）が終了し、第 2 期中期目標・中期計画（2010～15 年度）においては、本学の教育の国際化が大きな課題となっている。また、2011 年度からは新たに総合入試が導入され、総合教育部における新たな全学教育が展開される。

これらの新たな挑戦に向けて、本報告書が本学の教職員のみならず学生、学外でも読まれることによって、全学教育ひいては北大の教育全体の今後の改善について議論する一助となることを期待している。

高等教育機能開発総合センター長

全学教育委員会委員長

脇田 稔

# 平成 18 年度新教育課程の実施状況中間評価報告書

## 目 次

はじめに	
1. 平成 18 年度教育改革の理念・目標と計画・実行・評価・改善	1
2. データで見る平成 18 年度教育改革の成果	21
(教養科目)	
3-1. 一般教育演習（フレッシュマンセミナー）・論文指導	27
3-2-1. 総合科目「環境と人間」	29
3-2-2. 総合科目「健康と社会」	31
3-2-3. 総合科目「人間と文化」	34
3-2-4. 総合科目「特別講義」	35
3-3-1. 主題別科目「思索と言語」「歴史の視座」「芸術と文学」「社会の認識」	37
3-3-2. 主題別科目「科学・技術の世界」	43
3-4-1. 共通科目「体育学」	46
3-4-2. 共通科目「情報学」	47
3-4-3. 共通科目「統計学」	49
3-4-4. 共通科目「インターナシップ」	51
3-5-1. 「英語」「英語演習」	53
3-5-2. 初習外国語・初習外国語演習・外国語特別演習	57
(基礎科目)	
4-1. 文系基礎科目「人文科学の基礎」「社会科学の基礎」	64
4-2-1. 理系基礎科目「数学」	69
4-2-2. 理系基礎科目「物理学」	71
4-2-3. 理系基礎科目「化学」	73
4-2-4. 理系基礎科目「生物学」	75
4-2-5. 理系基礎科目「地学」	77
4-3-1. 心理学実験	79
4-3-2. 基礎自然科学実験	80
4-3-3. 自然科学実験	80
4-3-3-1. 自然科学実験（物理系）	81
4-3-3-2. 自然科学実験（化学系）	82
4-3-3-3. 自然科学実験（生物系）	84
4-3-3-4. 自然科学実験（地学系）	86
5. 日本語・日本事情	89
参考文献一覧	90
図・表・資料一覧	91

## 1. 平成 18 年度教育改革の理念・目標と計画・実行・評価・改善

平成 18 年度新教育課程と「単位の実質化」の総合的取り組みは、本学の学士課程・初年次教育にとって、1995 年の全学教育の開始、2001 年の「進化するコアカリキュラム」導入につづく大きな改革であった。その経緯は「北海道大学高等教育機能開発総合センター点検評価報告書 2002~2006 年度（平成 14~18 年度）」（2008 年 3 月）に、以下のように記されている。

### 高等教育機能開発総合センター点検評価報告書 2002~2006 年度

#### 1 理念と目標

本センターの使命は、本学の教育改革を先導し、その理念と目標の実現をはかることがある。

北海道大学は、札幌農学校以来 130 年を超える歴史のなかで、①フロンティア精神、②国際性の涵養、③全人教育、④実学の重視を基本理念として掲げ、自由・自主独立を重んじる学風を培ってきた。

##### （1）北大の歴史と伝統

本学の前身である札幌農学校は、北海道開拓のため、近代的農業技術の指導者養成を目的として設立され、米国・マサチューセッツ農科大学から教授陣を招き、初代教頭に W・S・クラークを迎えた。建学の経緯から、国際性の高い実学中心の学校であったが、専門技術や知識の習得のまえに学生が「一個の人間として育つ」ことを目指し、文系の教科や体育を含む全人教育を重視した。クラーク博士が残した「Be gentleman 紳士たれ」「Be ambitious 大志を抱け」という言葉から、本学の自由・独立・人間尊重の学風とフロンティア精神の理念が生まれた。

1949 年の新制北海道大学発足の際にも、本学の全人教育の伝統は以下の特徴として確認された——①旧制の帝国大学とは異なり、人文科学、社会科学、自然科学のすべてについて基本的知識を学ばせる一般教育を重視する。②学者の養成よりも、より高度な専門への準備教育を重視する。③学生の自発的学习を重視する。④研究および研究者養成のために大学院をおく。

北大では、この当時から学士課程教育の中心は一般教育にあると認識され、「各学部の最良の教員たちによる最良の教育内容を提供する」観点から、一般教育担当の学科目教官も関係各学部に分属する一方、講座教官も一般教育を担当する、全学支援の原則に則った「北大方式」の伝統が定着した。

設置基準の大綱化をうけて、1995 年に学部一貫教育体制と大学院重点化がはじまったときにも、北大の全人教育重視の姿勢は堅持された。新しい全学教育の立案においては「カリキュラム編成にあたって、大学・学部・専攻にかかる専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養および総合的判断力を培い、豊かな人間性を涵養するように配慮されねばならない」「一貫教育に移行するにあたって、専門教育の論理のみが貫徹されて一般教育が実質的に消滅することがあってはならない」ことが強調され、最良の専門家による最良の非専門教育をモットーとして、「責任部局体制」と「全学支援」「全学協力」にもとづく「新北大方式」による全学教育実施体制の構築が目指された。

学部一貫教育の開始と同時に本センターが設置され、丹保憲仁総長（1995~2001）の主導のもと、高等教育開発研究部に学部一貫教育研究会、ついでコアカリキュラム研究会がおかれて、新しい学部一貫教育と全学教育の発展を目指す研究を進めた。研究会では、「副専攻モデル」の検討をへて、最終的には、全人教育の理念に立脚し、理系の専門基礎科目とは区別され、外国語科目、情報科目などを含む、リベラルアーツを中心とする「純粋な教養科目」として、分野別科目（2006 年度からは「主題別科目」），複合科目（同「総合科目」），一般教育演習等からなる「コアカリキュラム」が提案

され、全学的な検討をへて、2001年度から実施された。コアカリキュラムとそれを支える本センターのシステムは、「進化するコアカリキュラム」として2003年度「特色ある大学教育支援プログラム」（特色GP）に選定され、わが国の大学の教養教育の一つのモデルとなった。

本学では、水産学部を除く11学部が札幌キャンパスに集中して立地する総合大学としてのメリットが強く意識されてきた。全学教育はこのメリットを活かした共通教育である。共通授業検討専門委員会答申「共通授業の在り方について」にもとづき、2000年度から研究科等の枠を越えた大学院共通授業が開講され、現在は約60科目に拡充され、本学の大学院教育の大きな特色となっている。

平成12年度未来戦略検討WG最終報告「新世紀における北海道大学像」（2001）では、優れた総合的判断力や高い見識を備え、専門的知識を広い視野のもとで活用できる人材の育成を目指して、21世紀の本学の教育の目標として「21世紀の開拓者は、①高いコミュニケーション能力を持ち、②社会や文化の多様性を理解し、③独創的な思考力と建設的な批判能力を持ち、④社会的な責任と倫理を自覚するものでなければならない」ことが挙げられた。これらはコアカリキュラムの教育目標として学生に周知され、さまざまな科目の設計に活かされている。

## （2）北大の理念と目標の今日性

札幌農学校以来の伝統に立脚する本学の教育理念と目標の今日的意義は、北海道大学の基本理念と長期目標（2003年9月17日、北海道大学評議会）に明確に述べられている。

「フロンティア精神とは、学生及び教職員がそれぞれの時代の課題を引き受け、敢然として新しい道を切り拓いていくべきとする理想主義を意味する。札幌農学校の開校式にあたってクラーク博士が唱えた“lofty ambition”（高邁なる大志）という言辞を端緒として、世紀を超えて北海道大学を搖るぎなく支えてきた基本理念である。」（フロンティア精神）

「北海道大学は、豊かな人間性と高い知性を涵養する幅広い人間教育を進め、自由・自主独立の精神の涵養と自律的個の確立を図るとともに、人権を尊重し、社会的要請に的確に対応しうる基盤的能力の育成を目指す。」（全人教育）

本センターの重要な使命の一つに、地域連携教育の推進がある。社会人教育等を通して、大学の研究成果・教育資源を開放し、地域社会に貢献することは、本学の重要な使命である。地域との教育連携によって本学が得るものも少なくない。

また、中央教育審議会答申我が国高等教育の将来像、新時代の大学院教育では、各高等教育機関の個性・特色の明確化、高等教育の質の保証、大学院教育の実質化（教育の組織的な展開の強化、国際的な通用性・信頼性の向上）が求められており、大学教育の国際化は今後の大きな課題である。

これらについても、本学の基本理念と目標では、次のように述べられている。

「（北海道大学は）産学官の連携協働の拡大を通じて、研究成果を北海道、さらに日本、世界に還元する。あわせて大学院における高度な専門家及び職業人の養成並びに社会人教育を充実することを目指す。」（実学の重視）

「北海道大学は、学生及び教職員の国際性を涵養し、国際社会の発展に寄与するため、海外留学・研修の機会を拡大するとともに、外国人研究者・留学生の受け入れを積極的に推進し、アジア・北方圏をはじめとする世界の人々との文化的・社会的交流の促進を目指す。」（国際性の涵養）

以上のように、北海道大学の基本理念と目標は、21世紀を迎えた今日も、本学の教育改革の指針として有効に機能している。

### 3 活動（2002～06）

コアカリキュラムの導入について、中村睦男総長（2001～07）のもとで、実学の重視の理念に連なる専門基礎教育と、国際性の涵養の核となる外国語教育の改善について全学的な検討を進め、2006年度から、高校教育の変容とともに「学生の学力の多様化」に対応し、基礎教育、外国語教育と専門教育の有機的連関の強化をはかる新教育課程が導入された。

また、学業成績評価に関する教員学生アンケート調査（1997）以来、本学の成績評価システムの再検討が進み、履修科目の登録の上限設定に関するWG報告と北海道大学通則改正（2000）、教務委員長通知「成績評価基準の明示と厳格な成績評価の実施等について」（2002）を出発点として、①厳格な成績評価（2003～）、②「秀」評価およびGPA制度（2005～）、③1年次における履修登録の上限設定（2006～）の総合的運用による単位の実質化（授業改善と自習促進）の取組がはじまった。ここにも、学生に将来社会の指導者として重要な職責がまっていることについて自覚を促し、厳格な成績評価、進級・卒業判定を行った札幌農学校の伝統が生きている。

この間、生涯学習計画研究部、入学者選抜研究部では、公開講座・インターンシップ科目・キャリア教育等の研究と実践、入試改革の研究、入試広報の強化、高大連携の推進等に取組んできた。毎年、研究部合同の研究会を開催し、3研究部の連携の強化に役立っている。

### 4 点検・評価と改善策

本センターは少人数ではあるが、「組織よりも理念とシステムにもとづいた活動」をモットーとして、3研究部と全学教育部および学内の諸組織との連携により、研究と実践を調和させて、高大連携、入試、全学教育、学部教育、大学院教育、社会人教育、他大学・社会との教育連携、教員研修、教育評価等、多岐にわたる課題によく応えている。その活動成果は「センターニュース」「高等教育ジャーナル」等に公表され、北大の教育改革に役立てられ、学外からの関心も高い。

全学教育については、コアカリキュラム、2006年度新教育課程導入の過程で、全学教育委員会、科目責任者会議、各部局の連携が格段に強化された。外国語教育、基礎教育の実施体制については、全学教育委員会、教育改革室、全学教務委員会が連携して、さらに検討する。新教育課程と単位の実質化の取組の企画→実行→検証→改善の過程（PDCAサイクル）では、これらの連携が有効に機能した。単位の実質化に関しては、全学教育における取組が各学部の取組の先導的役割を果たした。

互換性科目（異なる学部で展開されている共通の内容をもつ専門科目）、大学院共通授業等、共通教育の拡充については、教育改革室、全学教務委員会と連携して、さらに全学的な検討が必要である。

授業改善のための教員研修と研究の義務化、社会人の学び直しの要望の高まり、入試広報の強化と入試改革の要請などにより、3研究部の活動場面は飛躍的に増え、高度化・複雑化している。

次期中期計画に向けて、今後は、①高等教育の国際的な通用性・信頼性の向上（教育の質の保証：単位の実質化、FDの充実）、②学生指導FDの充実、③地域連携教育の推進、④入試改革と学士課程改革の総合的展開等が課題になる。センター研究部には、基本的な調査・研究、取組の検証・改善等において、多くの貢献が求められる。

## II. 全学教育部

### 1 理念と目標

全学教育部の使命は、全学教育の実施を通して、北海道大学の4つの基本理念（①フロンティア精

神, **②国際性の涵養, ③全人教育, ④実学の重視**) と 4 つの教育目標 (**①高いコミュニケーション能力, ②社会や文化の多様性の理解, ③独創的な思考力と建設的な批判能力, ④社会的な責任と倫理の自覚**) の実現をはかることがある。

中央教育審議会答申我が国高等教育の将来像では、「分野ごとにコア・カリキュラムが作成されることが望ましい」とされ、医・薬・工学系等では全国共通のコア・カリキュラムが整備されてきた。一方、本学では、教養教育こそは各大学が個性を發揮し、固有の教育理念を実現できる場であるとの考え方から、本学の理念と目標に立脚して教養教育のコアカリキュラムがつくられている。

これらの理念と目標および、総合大学としてのメリットを活かした共通教育, 最良の専門家による最良の非専門教育といった基本的考えは、全学教育の準備段階から数えれば約 15 年にわたる本学の教育改革を先導するとともに、その過程でさまざまに議論され、深められ、今日のかたちに定式化されてきた。それらは、廣重力総長（1991～95）から佐伯浩総長（2007～）まで 4 代の総長、7 代の副学長・センター長のもとで、さまざまな委員会、WG における検討に参加した、のべ数百人の教職員の英知の結集であり、今後の北大の教育改革の堅い基盤となるであろう。

### 3 活動（2002～06）

本センター設置（1995）以来、全学教育委員会、高等教育開発研究部、全学教務委員会（1999 年設置）、教育改革室（2004 年設置）が連携して、全学教育の教育課程改革と実施体制強化を進めた結果、全学教育のシステムは新たな段階に到達した。

学部一貫教育と全学教育の開始（第 1 次教育改革、1995）のあと、教養教育・基礎教育・専門教育を総合した新しい学士課程教育の構築を目指して、全人教育の理念にもとづく、教養教育へのコアカリキュラム導入（第 2 次教育改革、2001）について、実学の重視の理念に連なる専門基礎教育と、国際性の涵養の核となる外国語教育の改革を中心に、「学生の学力の多様化」に対応し、全学教育と高校教育・専門教育の連関の強化をはかる、新教育課程を実施した（第 3 次教育改革、2006）。

これと並行して、①科目責任者制度（1999）と、②準責任部局制度（2004）の導入により、「新北大方式」にもとづく全学教育実施体制の基盤強化をはかった。

成績評価基準の明示と厳格な成績評価の実施等についての教務委員長通知（2002）を出発点として、①全学教育科目的成績評価基準（ガイドライン）の設定と成績分布の公表（2003～）、②「秀」評価および GPA 制度（2005～）、③1 年次における履修登録単位数の上限設定（2006～）の導入を進め、その総合的運用により単位の実質化を目指している。

今後の課題は、①導入科目（一般教育演習、総合科目）、入門科目（数学、理科）による高校教育との接続の改善、②くさび形履修（教養科目的高年次履修）、理科基礎科目と互換性科目との一体的運用による全学教育と専門教育の有機的連関の強化、③2 年次以上における履修登録の上限設定、④これと連動した早期卒業制度等による学士課程と大学院課程の接続の改善、⑤教員研修（FD）による教育課程改革・授業改善・教員の意識改革、⑥データにもとづいた教育評価等である。

#### 3-2 全学教育の改革

##### ①進化するコアカリキュラムの新科目開発（2001～）

新しい全学教育（1995～）では、伝統的な学科目・講義中心の授業の改善策として、少人数、主題・課題中心、学生参加・双方向型の授業を重視し、一般教育演習、論文指導等の充実をはかった。

この方針はコアカリキュラムに受け継がれ、高等教育開発研究部と連携して、①図書館職員による情報探索指導（2001～）、②地域と連携した芸術科目（2002～）、③フィールド体験型一般教育演習（同）、④工学的創成実験（同）、⑤科学・技術と人間の倫理（2003～）、⑥TOEFL-ITP 試験（同）、⑦CALL 授業（2004～）、⑧インターナーシップ科目（同）、⑨キャリアデザイン（2005～）等が開発された。

2006 年度からは、一般教育演習は原則として論文指導として充実をはかることになった。

### ① 地域と連携した芸術科目

コアカリキュラムには欠かせない芸術科目の拡充をはかり、「作り手側からの美術」（2001）、「ピアノ音楽の楽しみ・魅力」（2001～）、本学のパイプオルガンを活用した「パイプオルガンとその音楽」（2002～）、「音楽療法入門」（同）等の集中講義について、地域と連携した芸術科目「PMF の響き」（同）、「北海道立近代美術館に学ぶ」（2003～）、「札響と音楽文化」（2004～）が開講された。地域連携型芸術科目の今後の発展には、大学間連携の推進も検討課題となる。

### ② 科学・技術と人間の倫理

1998 年度から STS (Science, Technology and Society) 研究会を組織し、本学の教育目標に沿って学生に社会的責任と倫理の自覚を促す授業の開発を進め、2003 年度から 3 科目（テーマ）合同の全体講義とテーマ別の少人数グループ学習（事例研究）を組み合わせた「科学・技術と人間の倫理」が開講された。この手法は大学院共通授業科目「応用倫理」にも活かされた。今後は、各学部・研究科等と連携して、学部高年次・大学院においても、より広く倫理教育を展開することが課題となる。

### ③ フィールド体験型一般教育演習（フレッシュマンセミナー）

札幌農学校以来の本学の教育研究の伝統である「自然に学ぶ」をモットーとして、附属の練習船、フィールド科学教育研究施設（研究林、牧場、臨海実験所等）を活用したフィールド体験学習の開発を進め、正課外での試行をへて、2002 年度から一般教育演習として開講し、学生にもっとも人気の高い、コアカリキュラムを代表する科目に成長した。2006 年度からは、練習船上の体験学習を発展させて、水産学部 1 年次生向けの専門科目「基礎乗船実習」が開講された。今後は、学生を主体とする体験型学習の新たな展開が課題となる。

### ② 準責任部局制と新たな基礎科目（初習理科）（2004）

医療技術短期大学部の改組・医学部保健学科の設置（2004）の際に、その一般教育担当教官定員の一部を薬学部、農学部に移し、両学部が準責任部局となり、全学教育実施体制の基盤が強化された。

コアカリキュラム導入後すぐに、全学教務委員会の WG で理系基礎科目の改革が検討され、2004 年度から医学部保健学科、獣医学部、水産学部で新たに初習理科（基礎物理学・化学・生物学・地学）が開講され、水産学部のクラスで、共通教科書・演示実験・ビジュアル資料・授業中のクイズ・TA によるきめ細かな指導・IT による自習支援などを取り入れたパイロット授業がはじまった。

### ③ 新教育課程・単位の実質化（2006）

コアカリキュラムの充実、新たな基礎科目（初習理科）の導入等を踏まえて、教育改革室の WG で新教育課程と単位の実質化について検討を進め、2006 年度に、高校教育の変容にともなう「学生の学力の多様化」に対応して、ステップアップ授業方式と基礎学力の育成を一体的な二本柱とし、全学教育と専門教育の有機的連関の強化をはかる学士課程教育改革に踏み出した。

#### （1）2006 年度新教育課程における主な改善点

## ① コアカリキュラムの手直し

- ・「分野別科目」を「主題別科目」，「複合科目」を「総合科目」に改称
- ・「情報処理・情報科学」を「情報学」に再編・刷新，「体育学B」（講義，2単位）を新設

## ② 外国語科目的再編・刷新

- ・旧「外国語科目」を基礎部分の「外国語科目」（4単位必修）と発展部分の「外国語演習」（2～4単位必修）に再編，英語III，外国語演習等で選択クラス制を導入
- ・英語IIでCALLオンライン授業およびTOEFL-ITP試験にもとづく成績評価を導入，TOEFL，TOEIC試験等の優れた成果にもとづく英語単位「優秀認定」制度を新設
- ・外国語演習では，専門科目との連関を強化，卒業年次までいつでも履修できる態勢を構築
- ・「外国語特別演習」（第3外国語）を充実
- ・一般教育演習，外国語演習等において，履修調整（抽選）のシステムを整備

## ③ 基礎科目的再編・刷新

- ・理科基礎科目的「コース別履修制度」：「専門系コース」では理科基礎科目（4単位）と互換性科目（2単位）を一体的に運用，「準専門系コース」では初習理科（4単位）を導入，授業内容を標準化，高校でその科目を履修しなかった者にも理解でき，履修した者も興味をもって学習できる内容とし，物理学，生物学のリメディアルクラス（2000～05）は廃止，パイロット授業を推進
- ・数学，物理学，化学の入門科目を新設，文系学生向けコアカリキュラムとしても活用
- ・基礎実験を総合的「自然科学実験」に刷新，文系学生向け「基礎自然科学実験」を充実
- ・文系基礎科目「人文科学の基礎」「社会科学の基礎」を新設

## ④ TA研修の強化

- ・新教育課程に対応して全学教育TA研修会を充実，マニュアルを一新

### (2) 単位の実質化

履修登録の上限設定に関するWG報告（2000），厳格な成績評価の実施についての教務委員長通知（2002）および中期計画に沿って，厳格な成績評価・GPA制度・履修登録上限設定の総合的運用による単位の実質化を進めている。

#### ① GPA制度

- ・2005年度入学者から全学部で「秀」評価およびGPA制度を導入
- ・GPAを利用した修学指導を推進，クラス担任アンケート等により指導状況を点検
- ・2006年度から体育学A，情報学Iを通算GPAに算入しない「パス・ノンパス科目」とする
- ・2006年度から授業料免除，新渡戸賞（成績優秀者表彰制度）等の選考基準にGPAを利用
- ・大学院の全研究科等で「秀」評価を導入（2007）

#### ② 履修登録の上限設定

- ・2006年度入学者から1年次に上限設定を実施，成績優秀者に対する「特例措置」を導入
- ・2年次以上の上限設定について全学部で検討を開始

#### ③ 厳格な成績評価

- ・全学教育科目については，2003年度から，①成績評価基準（授業科目ごとのガイドライン）の設定，②成績評価基準の明示（シラバスに「到達目標」「評価の基準と方法」を明示），③成績

評価結果（クラス別の成績分布）の公表、④成績評価の妥当性の検討（評価の極端な片寄りの点検）を進め、2006年度から成績分布WEB公開システムが稼働

- 専門科目についても同様の取組を進め、全学部で成績分布を公表
- 大学院における成績評価基準（ガイドライン）について各研究科等で検討

#### ④単位の実質化（授業改善と自習促進）

- 単位の実質化に関する学生アンケート、授業アンケート等で学生の自習時間を調査
- 全学FD等で単位の実質化を目指す授業を開発

#### ④新教育課程・単位の実質化の検証と改善

新教育課程導入と単位の実質化（上限設定）の結果、大きな変化が起きたので、学生の履修動向・学修状況を検証し、国立大学法人評価、認証評価や、大学院設置基準等の改正を考慮して、2007年度以降のGPA・上限設定・成績評価、カリキュラム、FD等の改善策をまとめた。

##### ①新入生の平均履修単位数

1学期は文系で2005年度24.8→2006年度19.9→2007年度20.1単位、理系で32.1→22.4→22.3単位、2学期は文系で19.9→21.1→19.5単位、理系で22.0→23.7→22.0単位と変化。

##### ②科目ごとの履修者数

（全学教育科目履修者数対比表：102～109ページ）

2005年度と2006年度の比較では、1学期は主題別科目約50%減、総合科目65%減、一般教育演習40%減、全体で25%減、2学期は主題別科目8%減、総合科目22%減、一般教育演習4%増、全体で7%減、1・2学期合計では全体で17%減少。

GPA・上限設定導入前の2004年度と2年次まで新教育課程となった2007年度との比較では、1学期は全体で24.9%減、外国語を除く教養科目合計で35.3%減（主題別科目41.6%，総合科目52.4%，一般教育演習19.4%，共通科目10.6%減），外国語・外国語演習14.8%減、基礎科目14.9%減、2学期は全体で20.4%減、外国語を除く教養科目合計で29.1%減（主題別科目31.9%，総合科目21.0%，一般教育演習13.2%，共通科目34.6%減），外国語・外国語演習15.3%減、基礎科目12.1%減、1・2学期合計では全体で23.0%減少。これらはおおむね想定内の変動で、新教育課程と単位の実質化の取組の結果、本学の教育は「量より質」の充実の時代に入ったといえる。

##### ③全学教育実施体制

（全学教育における各部局の授業担当状況：96～101ページ）

2006年度には、7つの責任部局と2つの準責任部局の専任教員が約1,300コマ、外国人教師（特任教員）が約160コマ、理系基礎科目に対する「全学支援」でその他の部局の専任教員が約80コマ、総合科目・一般教育演習・外国語演習に係る「全学協力」で全学各部局の専任教員が約220コマ、非常勤講師が約600コマを担当。旧基礎実験（水産学部2年次）と新自然科学実験（全学部1年次）が同時開講となるため、理系各学部の協力で「全学支援」のコマ数を臨時に20コマ増加。

全学教育科目の開講数は、1・2学期合計で2004年度1,817科目（2,369コマ）→2007年度1,742科目（2,159コマ）に、非常勤講師採用数は710→501.5コマに減少。

その結果、1クラスの平均履修者数は、1学期は2004年度56.3人→2005年度56.4人→2006年度43.5人→2007年度45.5人、2学期は49.5人→47.9人→41.3人→39.6人、1クラス25人以下の少人数クラスは2006年度32.7%と、「量より質」の教育への転換が進んだ。

##### ④学修状況

（全学教育科目成績評価の分布状況・GPAグラフ：116～139ページ）

単位の実質化の方針にもとづき「少ない科目に集中して取組む」よう指導した結果、附属図書館北

分館入館者が増加（2006年4月は前年度比約60%増、10, 11, 12月は20%増、1年間合計で10%増）、理系基礎科目等で学生の自習時間が増加、授業の出席率や学期末試験・レポートの成績が向上、CALLオンライン授業で90%以上の学生が着実に課題を完了、TOEFL-ITP試験の平均点が上昇（2005年度460.3→2006年度462.2→2007年度466.0）、1年次学生の学期GPAの全学平均値が上昇（1学期は2.23→2.36→2.38、2学期は2.20→2.28→2.31）等、よい傾向がみられた。

##### ⑤自習時間 (学生の「自習時間」に関するアンケート調査結果：142～143ページ)

単位の実質化に関する学生アンケート（2007年2月）によれば、平日1日あたりのおよその自習時間は、30分未満35%，1時間40%，2時間以上25%，平均は1学期1.15時間、2学期1.22時間（2007年度1学期は1.17時間）。2006年度1学期の授業アンケートによれば、90分の授業1回あたりの予習復習時間の平均は、全学教育科目全体で1.12時間（専門科目1.02時間）。外国語科目（1単位）では、30分以下33.8%，1時間38.3%，2時間以上27.9%，平均1.22時間。主題別科目（2単位）では、30分以下68.0%，1時間18.8%，2時間以上13.3%，平均0.85時間。いずれをみても、今後時間をかけた改善の取組が必要といえる。

以上を踏まえて、単位の実質化をはかりつつ、コアカリキュラムの幅広い履修を確保するために、2007年度以降の改善策をまとめた。

##### ① 総合科目（特別講義）および一般教育演習の履修促進策

- ・特別講義・一般教育演習から各学期に1科目を上限設定外で履修できるようにする。
- ・履修者が3人以下の一般教育演習は開講中止
- ・総合科目の科目責任者会議の機能を強化
- ・全学教育科目規程（別表），各学部の実行教育課程表，全学教育科目実施の手引き等を見直し、「導入科目」としての位置づけを明確化、2009年度を目標として、総合科目を1単位科目とする。

##### ② 厳格な成績評価

- ・2007年度の全学教育科目の成績分布の目標値は、「秀」評価「10～15%」，GPA「2.35」，「評価の極端な片寄り」の点検基準「学期GPAの平均値（2.35）±0.5～0.6」を目安とする。
- ・全学部で専門科目の成績分布を公表（2008）
- ・学部専門科目、大学院授業科目の成績評価基準（ガイドライン）について各部局で検討

##### ③ GPA制度

- ・学期末試験に近い時期（6, 12月）に履修取消し制度を導入
- ・2009年度を目標として「学生の申請によるパス・ノンパス制度」の導入を検討

##### ④ 履修登録の上限設定

- ・成績優秀者に対する「特例措置」の基準値を「GPA2.40以上」に変更
- ・上限設定外の登録枠について、「予備科目」を「追加・入れ替え科目」，「再履修」を「学期加算単位数」，「教職科目等」を「上限設定外科目」と名称変更
- ・2年次以上の上限設定・早期卒業制度について各学部で検討、教育学部、理学部、工学部で2006年度入学者の2年次以上の上限設定単位数を決定

##### ⑤ 単位制度の実質化・授業の実質化・自主的な学習の促進

- ・ 大学院通則および各研究科等の規程を改正、単位の計算基準（1 単位の授業科目は授業時間外を含めて 45 時間の学修が必要）を整備
- ・ 定期試験期間、補講期間を廃止し、1 学期 15 週の授業時間を確保（2008）
- ・ 初習理科等で単位の実質化・自習支援に配慮した授業を開発
- ・ GPA データ、附属図書館入館者数、授業アンケートおよび学生アンケートにおける出席状況、自習時間等のデータおよび個別の意見、「学生の声」への投書等を検証して改善
- ・ 授業アンケートのデータを科目責任者会議等で検討、授業改善・教育改革に活用
- ・ 自主的な学習の促進のため、附属図書館北分館の参考図書を充実
- ・ クラスのコミュニケーションシステム、シラバス・履修登録・成績分布公開システムおよび図書館の蔵書データベースを結びつけた統合的学生支援システムを提言

#### ⑥ GPA 制度の利用・修学指導

- ・ GPA を利用したクラス担任等による修学指導を強化
- ・ クラス担任マニュアル、「心のケア」マニュアルを改訂
- ・ 必修科目の授業を 3~4 回連続して欠席した学生について、授業担当教員からクラス担任に連絡して指導を行う制度の運用を強化
- ・ 学生への個別指導のシステム（アドバイザー・アドバイジー制度）を提言
- ・ 学生委員会と連携して学生生活全般の指導と修学指導を関連づけ、総合的な指導体制を構築
- ・ 修学指導の充実のため、父母等との連携を強化（2008 年度入学生から学修簿を保証人に送付）

#### ⑦ 進級状況・学位取得状況の調査・点検

- ・ データを各学部で継続的に点検・評価する体制を整備、入学者に対するストレート卒業者（死亡・退学・除籍・休学・留年者を除く）の割合は、全学平均では（2006.3 卒業）77.9%→（2007.3 卒業）80.6%に向上、70%を下回っていた 2 学部でも（2007.3 卒業）では 10 ポイント程度向上

#### ⑧ 今後の外国語教育の在り方について（最終報告）への対応

- ・ 外国語科目、外国語演習にスペイン語（演習）、韓国語（演習）を新設（2007）
- ・ 全学の各部局からも外国語演習を開講する「全学協働体制」を構築
- ・ 大学院における外国語教育の強化策を検討
- ・ TOEFL-ITP 試験受験料の補助を要請
- ・ スペイン語、韓国語を除く初習外国語でも全学部で CALL オンライン授業を開始（2008）

今後は、全学教育改革の経験を専門教育、大学院教育の改革に活かし、学士課程における単位の実質化、大学院の教育課程の実質化を推進すること、中期計画の後半 3 年間を迎えて、これらの改革の成果を法人評価（中間評価）、認証評価に活かすことが課題となる。

#### 4 点検・評価と改善策

- ①**2005 度年に 4 年次生を対象に行ったコアカリキュラムの成果に関するアンケート調査では、今も記憶に残っている科目として、一般教育演習がもっとも多く挙げられている。教育目標の達成度に関しては、1) コミュニケーション能力、3) 批判的な能力の育成については「何とも言えない」、2) 人間や社会の多様性の理解については「良好」、4) 社会的な責任と倫理については「悪い」と判断される。今後のコアカリキュラム改善の課題である。

- ②**今後は、①高大連携科目の本格的展開、②自然科学実験、芸術科目等における大学連携、③倫理科目、体験型学習の新たな展開、④学生主体のサービスラーニングの開発等が検討課題である。
- ③**新教育課程と単位の実質化の企画→実行→検証→改善では、高等教育開発研究部、全学教育委員会、センター運営委員会、教育改革室、全学教務委員会、各部局の連携が有効に機能した。①効果的で効率的な教育を目指し、2004～09年度に非常勤講師採用を半減する(710→355コマ)計画も、達成の見通しつなった。②全学教育における助教、退職教員、特任教員の活用についても整理が進んだ。
- ④**その過程で科目責任者会議の機能が強化されたが、科目責任者は毎年のように交替するので、つねに具体的課題をもって活動し、形骸化を防ぐ努力が必要である。
- ⑤**残された課題 ①理科基礎教育における「全学支援」の基盤強化：(1) 責任部局(理学部)における科目責任者の任務を援助する組織の確立、(2) 研究所、センター等の「全学支援」の在り方等、②外国語教育に関する諸問題：(1) 特任教員(外国人教師)の経費、(2) 旧言語文化部の全学運用定員(流用定員)解消計画等)については、教育改革室等で引き続き検討する。
- ⑥**初年次学生の指導については、クラス担任マニュアルの改定作業(2007.3, 2008.3)を通じて、全学教育部、教育改革室、学生相談室、保健管理センター、学生委員会の連携が強化された。これについては留年・自殺の防止等の大きな課題もあり、さらに緊密な連携が必要である。たとえば、①クラス担任会議を春・秋2回開催し、学生指導FDとして発展をはかること、②クラス担任制度を規程化して組織的基盤を強化することなどが、今後の検討課題となる。
- ⑦**現在、教育改革室で「大きくくり」入試と学生編成について検討が進められている。
- ①2006年度新教育課程は、外国語科目・理系基礎科目の基本的な部分は1年次で履修できるようになり、理科のコース別履修制度、外国語演習等、教養科目の高年次履修(くさび形履修)を促進する態勢を構築するなど、1年次の「大きくくり」学生編成に対応できるように設計されている。
- ②全学教育実施体制は、全学教育部に専任教員を配置せず、「責任部局体制」と「全学支援」「全学協力」にもとづく「新北大方式」によって運営される、現在の体制を基本的に維持し発展させるのが現実的である。
- ③初年次学生の指導については、学部一貫教育体制のもとでも改善すべき点は多く、「大きくくり」学生編成導入の機会には、クラス担任制度等の抜本的な強化策を検討する必要がある。
- ④「大きくくり」学生編成に対応する新たな学生所属組織については、これまで10年以上の全学教育実施の経験を踏まえて、できるだけシンプルで効率的な組織とするのが望ましい。

点検評価報告書(2008年3月)以降の改善状況については、平成20・21年度全学教育委員会の検討事項(報告)に、以下のように記されている。

#### 平成20年度全学教育委員会の検討事項(報告)

- 中期目標・中期計画の実施状況について(年度計画の関係各項目の着実な達成)
  - 一般教育演習・総合科目(導入科目)の充実(H21)

・平成 21 年度から、一般教育演習及び総合科目の導入科目としての位置づけを確認する方策として、以下のとおり変更する。

①全学教育科目規程別表における授業科目の配列順について、一般教育演習及び総合科目を授業科目の先頭に置く。

②「一般教育演習」の科目名を「一般教育演習（フレッシュマンセミナー）」と改める。

③総合科目の単位数を、2 単位から 1 単位に改める。

(2) 主題別科目、共通科目（情報科目的検証）

・履修者数は、主題別科目で 1 学期の前年比 101.5% (6,880 人) , 2 学期の前年比 100.4% (5,454 人) となり、全体的に履修者数が安定した。

・情報学を含む共通科目的履修者数も同様に、1 学期の前年比 100.9% (5,797 人) , 2 学期の前年比 96.2% (2,940 人) となり、履修者数が安定した。

(3) 外国語科目・外国語演習（検証）

・平成 19 年度から新たに導入したスペイン語と韓国語の履修者は、履修希望者の多かったスペイン語を 1 クラス増やしたにもかかわらず、平成 20 年度もスペイン語の希望者が多数のため、履修調整を行った。

・平成 20 年度入学者の選択した外国語は、ドイツ語 997 名（前年比 98.1%）, フランス語 496 名（同 121.0%）, ロシア語 77 名（同 124.2%）, スペイン語 237 名（同 121.5%, ただし第一希望は 290 名）, 中国語 677 名（同 86.6%）, 韓国語 154 名（同 94.5%）となった。

・平成 20 年度 CALL オンライン授業（英語 II）の実施状況について報告があり、TOEFL-ITP 試験では、成績下位層の減少が目立ち、上位層も減少したが、平均点は引き続き上昇している（468.1）。

・TOEFL-ITP 試験は、平成 20 年度より、受験料全額を大学が負担して実施された。

・英語 IV の履修調整方法については、平成 21 年度より英語 III と同様に、レベル別のほか、内容別に学生の希望に沿ったクラス編成を導入する。

・外国語演習については、平成 21 年度より、一部の科目を除いて、履修希望者が 3 名以下の授業の開講取消しを実施する。

・初習外国語の CALL オンライン授業が、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語の II において平成 20 年度から実施された。

・初習外国語における「外国語クラス」制度の見直しについて、検討を開始した。

(4) 基礎科目（文系基礎科目、理系基礎科目、自然科学実験の検証）

・文系基礎科目的履修者数は、前年比 99.2% (1,417 人) であった。

・理系基礎科目的履修者数は、数学が 1 学期の前年比 98.4% (4,174 人) , 2 学期の前年比 99.4% (3,132 人) , 理科が 1 学期の前年比 97.4% (5,930 人) , 2 学期の前年比 98.9% (5,483 人) であった。

・自然科学実験の履修者数は、1 学期の前年比 97.6% (969 人) , 2 学期の前年比 101.4% (1,121 人) であった。

・2008 年 3 月に「北海道大学全学教育 自然科学実験アンケート調査」報告書が発行された。

(5) 互換性科目（検証）

(6) コアカリキュラムの検証（倫理科目、工学的創成実験、芸術科目、総合科目等）及び新科目の開発（チャレンジ科目、サービスラーニング（社会・地域・国際体験型科目））

(7) 大学間連携（自然科学実験、芸術科目等）

- ・北海道薬科大学との間で「理科基礎実験科目の共同利用に関する覚書」が締結され、本学の自然科学実験プログラムの共同利用が開始され、およそ 30 名が参加した。

## 2. 単位の実質化について

(1) 成績評価基準の明示と厳格な成績評価の実施

- ①成績評価基準の設定 ガイドラインを作成、今後学内に公開することについて検討する。

- ②成績評価基準の明示 シラバスに明記

- ③成績評価結果の公表 成績分布 WEB 公開システムで公表

- ④成績評価の妥当性の検討

- ・平成 19 年度 2 学期分 21 件、平成 20 年度 1 学期 21 件について、担当教員に問合せを行った。回答内容について、これまで特にコメントしていないが、今後はコメントを作成することも検討する。

(2) 「秀」評価及び GPA 制度・履修登録単位数の上限設定制度の検証

- ・平成 21 年度入学者から「自由設計科目制度」を導入するのに伴い、①体育学 A 及び情報学 I を GPA の対象外とする取扱い、学期加算単位数及び総合科目・一般教育演習の特別枠は廃止する、②履修取消し制度は引き続き実施する、③特例措置については、各学部の判断で 2~4 単位の範囲で実施可能に変更する。

(3) 学生の申請によるパス・ノンパス制度 (H21)

- ・平成 21 年度入学者から、名称を「自由設計科目制度」と変更して導入し、学生の幅広い履修への要望に対応する。

(4) 単位制度の実質化（総合科目の単位数を 1 単位に : H21）

- ・平成 21 年度から、総合科目の単位数を 1 単位とする。

(5) 学期末試験を含めた授業期間（16 週）の運用方法 (H20)

- ・平成 20 年度より、学期末試験を含め 16 週で授業期間を設定した。学期末試験の試験監督については、TA に試験補助を認めることで対応した。

(6) 自習時間の調査、単位の実質化（自習支援）を進める授業改善、FD の充実

- ・「授業アンケート」及び「学生アンケート」の、「自習時間」に関する設問に対する集計結果について分析した資料をもとに関連の委員会において検討した。90 分の授業 1 回あたりの予習復習時間は、平成 19 年度第 1 学期の全学教育科目で平均 1.16 時間（専門科目 1.13 時間）となつた。平成 18 年度第 1 学期の調査結果では、全学教育で平均 1.12 時間（専門科目 1.02 時間）であった。引き続きデータを検証し、改善策を検討する。

(7) シラバスの改善（内容・項目の充実）

(8) TA の活用、TA 研修の充実（修了率の向上、TA マニュアルの改善 : H23）、TA 研修・業務実績に関するデータベース

- ・平成 20 年度全学教育 TA 研修会（4 月 4 日）は午前ののみの参加者 220 名、午後までの修了者 194 名で、対象者 334 名に対する修了率は 58.1% だった。

- ・平成 21 年度の全学教育における TA 採用予定は、のべ 857 (前年度は 812) 人、31,239 (前年度は 30,595) 時間、経費は 3,971 (前年度は 3,870) 万円となった。

### 3. 全学教育科目の充実について

#### (1) 履修調整結果、開講時間帯、翌期再履修クラスの検証

- ・英語演習の履修調整（抽選）における人数調整は、希望者数を考慮して 1 学期は 25 名、2 学期は、28 名を上限として行った。初習外国語演習については、1・2 学期とも 25 名を上限として行った。
- ・1 年 2 学期の水曜 1 講時の開講時間帯（平成 20 年度までは「理系学部のみ対象」）を、平成 21 年度から「全学部対象」に変更した。

### 4. 全学教育支援体制の強化について

#### (1) 科目責任者会議、責任部局における運営組織の確立

#### (2) 責任部局の「責任コマ数」、基礎科目等における「全学支援」、一般教育演習・総合科目・外国語演習等における「全学協力」の検証

- ・「全学協力」による開講数は、総合科目 61 (前年度は 55) 科目、一般教育演習（フレッシュマーケティングセミナー）は 142 (前年度は 140) （うち退職教員担当 4 (前年度も同じ)）科目であった。
- ・外国語教育センター以外の部局からの外国語演習の開講数は、平成 19 年度は 40 科目、平成 20 年度は 70 科目、平成 21 年度は 76 科目の予定となり、提供科目数が安定しつつある。
- ・メディア・コミュニケーション研究院と情報基盤センターの間で外国語担当教員に係る人事・組織上の整理が行われたのを受けて、外国語教育センター、情報基盤センターの「配当教員」数について検討したが、教育改革室 WG 等でさらに検討を続けることとなった。

#### (3) 一般教育演習・外国語演習に係る各部局への依頼数に助教を加えること (H21)

- ・平成 21 年度の開講計画提出依頼文書において、一般教育演習及び外国語演習の開講依頼数の算定基礎となる教員数を、助教以上、13 名につき 1 コマの依頼とした。

### 5. 非常勤講師・特任教員について

#### (1) H20～21 年度非常勤講師削減計画、H22 年度以降の計画（全学運用定員解消との関連）

- ・非常勤講師数については、平成 21 年度までの削減目標であった、平成 16 年度比 50% 減をほぼ達成した。

#### (2) 退職教員に関する承認事項・申合せの見直し (H22 以降)

#### (3) 特任教員（外国人教師）の在り方

### 6. 新教務情報システムに係る改善事項について

#### (1) シラバスの項目に「準備学習等についての具体的な指示」を追加 (H21)

- ・平成 21 年度シラバスから、新項目「準備学修（予習・復習）等の内容と分量」が追加された。

#### (2) 学生の申請によるパス・ノンパス制度 (H21) への対応

- ・平成 21 年度入学者から「自由設計科目制度」として導入するため、対応するシステム開発を外注した。

#### (3) 事前履修調整（抽選）、履修取消しのオンライン化

- ・平成 21 年度から事前履修調整（抽選）、履修取消しの申請手続き及び学修簿による成績確認をオンライン化するために、対応するシステム開発を外注した。

- (4) アカデミックキャリアとしての TA の資格化のための学生個人ごとのデータベース構築 (TA 研修, 担当科目, 「単位化」の記録)
- (5) 新システムにおける入力作業等に関する改善事項の検証
- (6) 教務情報システム上でのシラバスの運用の検証
  - ・シラバスの未入力項目対策として, 今年度から, 必須項目に未記入がある場合には, シラバス入力を完了できないよう, システムを修正した。
- (7) シラバスのペーパーレス化

## 7. 新教育課程の実施に伴う教務事務体制について

## 8. 施設・設備の充実について

- (1) S 講義棟, N1, N2 講義室, 大講堂への渡り廊下, S 教員棟の整備・充実
  - ・S 講義棟及び N302, N304 講義室の改修工事を行った。
- (2) 視聴覚機材 (資料提示装置等) の整備
  - ・大講堂の液晶プロジェクターを更新した。
- (3) 理科基礎科目パイロット授業・自然科学実験のための施設・設備の充実
  - ・クイズ回答・集計用の「クリッカー」システムを「次世代 FD 研究会」の経費で購入し, 平成 21 年度より教務課で貸出を開始する。
- (4) CALL システムの充実

## 9. 履修指導について

- (1) 組織的な履修指導
- (2) 履修相談会 MANAVI (ピアサポート)
  - ・平成 19 年度に引き続き, 上級生による履修相談会 MANAVI を実施し, 約 1,670 名 (新入生の約 60%) が参加した。
- (3) GPA を用いた修学指導
  - ・実施状況をクラス担任アンケートで調査した。

## 10. クラス担任制度の強化について (教育改革室・学生委員会と連携)

- (1) 個別指導 (オフィスアワー)
- (2) クラスアワ一年 4 回・クラス担任会議年 2 回開催 (学生指導 FD として位置づけ)
  - ・クラスアワーを年 4 回行うよう依頼した。
  - ・第 2 回クラス担任全体会議を 10 月 28 日に「学生支援 FD」として実施し, グループ作業を取り入れた。クラス担任アンケートの結果を参考に, 来年度に向けて全体会議・学生支援 FD の日程・内容の改善を図り, クラス担任マニュアルの整理を進めた。
- (3) 全学教育の授業を 3~4 回連続して欠席した学生について, 授業担当教員からクラス担任に連絡して指導を行う制度の実質化
  - ・必修科目である外国語科目を担当する授業担当教員あてに依頼した結果, 1 学期は 41 名, 2 学期には 16 名について, 連続欠席の連絡があり, 所属学部の教務を通じて対応した。
- (4) 学修簿を連帯保証人に送付する準備 (H20)
  - ・学修簿を連帯保証人に送付する際の「同意書」を確認し, 平成 21 年 5 月の発送に向けて, 送付文書等について検討を進めた。

(5) クラス担任における助教の役割、クラス担任制度の規程化

- ・「北海道大学基礎クラス担任制度に関する要項」を平成 21 年度から施行する予定。

11. 高大連携授業の今後の在り方について（H21 に向けて WG で検討中）

- ・高校生による全学教育科目の聴講を本格的に実施することになり、準備を進めた。

12. 各種アンケート調査結果の活用について

学生による授業評価アンケート、コアカリキュラムアンケート、学生生活実態調査、単位の実質化に関するアンケート、TA アンケート、卒業生アンケート等

- ・授業アンケートによる自習時間（平成 18 年度 1 学期～19 年度 1 学期）のデータが報告された。

単位の実質化に関する学生アンケート（2007 年度分）は 2009 年 3 月公表の予定。引き続きデータを検証し、改善策を検討する。

13. 既修得単位認定における科目等の見直しについて

14. 平成 19 年度以降の GPA・上限設定・成績評価、カリキュラム、FD 等の改善策について（最終報告）（H19.3）に基づく充実・改善について

(1) 学生からの成績評価に関する申立て制度の検討

- ・平成 21 年度から、全学教育科目について、成績評価に関する申立て制度を導入する。

(2) 高年次履修の時間帯の確保（くさび型履修の促進）

(3) 外国語演習を大学院学生が正規の授業科目として履修できる仕組み

(4) e-LearnIng システム利用のクラスのコミュニケーションシステムと教務情報システム及び図書館蔵書データベースを結びつけた統合的な学生支援システムの構築

(5) 学生への個別指導のシステム（アドバイザー・アドバイジー制度）の整備

### 平成 21 年度全学教育委員会の検討事項（報告）

1. 中期目標・中期計画の実施状況について（最終年度計画の関係各項目の着実な達成）

1) H18 以降の新教育課程の実施状況の検証・中間評価（報告書の作成）（H21）

(1) 一般教育演習（フレッシュマンセミナー）・総合科目（導入科目見直し）

- ・平成 21 年度から一般教育演習（フレッシュマンセミナー）及び総合科目の導入科目としての位置づけを確認する方策として、以下のとおり変更した。

①全学教育科目規程別表における授業科目の配列順について、一般教育演習（フレッシュマンセミナー）及び総合科目を授業科目の先頭に置いた。

②「一般教育演習」の科目名を「一般教育演習（フレッシュマンセミナー）」と改めた。

③総合科目の単位数を、2 単位から 1 単位に改めた。

(2) 主題別科目、共通科目

- ・履修者数は、主題別科目で 1 学期の前年比 99.9%（6,871 人）、2 学期の前年比 118.9%（6,486 人）となり、全体的に履修者が安定した。

- ・情報学を含む共通科目の履修者数も同様に、1 学期の前年比 94.1%（5,453 人）、2 学期の前年比 103.4%（3,041 人）となり、安定している。

(3) 外国語科目・外国語演習

- ・平成 19 年度から導入されたスペイン語と韓国語の履修者は、引き続きスペイン語の希望者が多数のため履修調整を行った。
- ・平成 21 年度入学者の選択した外国語は、ドイツ語 981 名（前年比 98.4%）, フランス語 456 名（同 91.9%）, ロシア語 64 名（同 83.1%）, スペイン語 237 名（同 100.0%, ただし第一希望は 305 名）, 中国語 666 名（同 98.4%）, 韓国語 156 名（同 101.3%）となった。
- ・平成 21 年度 CALL オンライン授業（英語 II）の実施状況について報告があり、TOEFL-ITP 試験では、成績下位層の減少が進み、上位層は減少したものの、平均点は引き続き上昇を続けていく。
- ・英語 IV の履修クラスについても、英語 III と同様に、レベル別・内容別のクラスを学生の希望に沿って抽選により決定する方法を導入した。
- ・平成 20 年度から導入された初習外国語 II のドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語における CALL オンライン授業の実施状況について報告がなされた。

(4) 基礎科目（文系基礎科目、理系基礎科目、自然科学実験）

- ・文系基礎科目の履修者数は、前年比 97.2%（1,378 人）であった。
- ・理系基礎科目の履修者数は、数学が 1 学期の前年比 92.5%（3,861 人）, 2 学期の前年比 96.3%（3,016 人）, 理科が 1 学期の前年比 98.3%（5,831 人）, 2 学期の前年比 99.2%（5,437 人）であった。
- ・自然科学実験の履修者数は、1 学期の前年比 98.9%（958 人）, 2 学期の前年比 101.4%（1,137 人）であった。

(5) 互換性科目

- (6) キャリア科目の充実  
(7) 統一教科書の拡充

2) その他の検討事項

(1) 初習外国語の選択システムの見直し

- ・初習外国語の選択の条件・方法の改善として、以下のような検討を進めることが了承された。
  - ①例えば、入学後に学生が選択希望科目を申請し、履修調整により履修科目及びクラスを決定する方式を採用すること。
  - ②能力と意欲のある学生に、2 つ目の初習外国語についても十分な学習機会を確保するため、初習外国語 4 単位を選択科目として履修できるようにすること。

(2) コアカリキュラムの検証（倫理科目、工学的創成実験、芸術科目、総合科目等）及び新科目の開発（チャレンジ科目、サービスラーニング（社会・地域・国際体験型科目），博物館「教育 GP」関連科目）

- ・総合博物館の教育 GP 「博物館を舞台とした体験型全人教育の推進」関連科目として、一般教育演習（フレッシュマンセミナー）で「北大エコキャンパスの自然－植物学入門」及び「北大エコキャンパスの自然と歴史」の 2 コマを開講した。

(3) 大学間連携（自然科学実験、芸術科目、キャンパス・コンソーシアム函館提供科目等）

- ・キャンパス・コンソーシアム函館提供科目として、総合科目「人間と文化」で「市民がになう国際観光論」及び「アントレプレナー（起業家精神）育成」の 2 コマを集中講義の形で開講した。

(4) 芸術科目の充実・支援

- ・芸術科目の充実の一環として、情報教育館のスタジオ型多目的中講義室にグランドピアノを購入し、芸術科目で活用するとともに、授業に使用しない期間は学生へも開放した。また、防音のため、設置場所（スタジオ型多目的中講義室）の窓サッシの取り換え工事を行った。

(5) 外国語による全学教育科目の拡充（英語による授業のみで学位取得が可能なシステムの形成を含む）

- ・「外国語教育の在り方検討 WG」等において、検討を開始した。

## 2. 単位の実質化・授業改善について

(1) 成績評価基準の明示と厳格な成績評価の実施

①成績評価基準の設定 ガイドラインの見直しを行った上で学内に公開

②成績評価基準の明示 シラバスに明記

③成績評価結果の公表 成績分布 WEB 公開システムで公表

④成績評価の妥当性の検討

- ・極端な片寄りに関する問合せへの回答に対するコメントを送付

⑤学生からの成績評価に関する申立て制度の導入

- ・平成 21 年度から学生からの成績評価に関する申立て制度を導入し、1 学期には 3 件の申立てがあったが、いずれも成績訂正の必要はないと判断された。

⑥授業への出席等に関する具体的な統一基準、出席調査の徹底（IC カード）、休講・補講の状況のデータ調査

- ・休講・補講を含めた授業の実施に関する現状を把握するため、「全学教育科目に関する単位の実質化に関するアンケート調査」を実施した。

(2) 「秀」評価及び GPA 制度・履修登録単位数の上限設定制度の検証・改善

- ・平成 21 年度入学者から「自由設計科目制度」を導入し、併せて体育学 A 及び情報学 I を GPA の対象外とする取扱い、学期加算単位数及び総合科目・一般教育演習の特別枠は廃止した。

(3) 単位制度の実質化

- ・平成 21 年度から総合科目の単位数を 1 単位に変更した。

(4) 学期末試験を含めた授業期間（16 週）の運用状況

- ・2. (1) ~~に~~記載の「全学教育科目に関する単位の実質化に関するアンケート調査」において、16 週の運用状況に関する調査を実施した。

(5) 自習時間・GPA・履修単位数の調査・検証

- ・「授業アンケート」の「自習時間」に関する設問に対する集計結果について分析した資料をもとに関連の委員会において検討した。90 分の授業 1 回あたりの予習復習時間は、平成 20 年度第 1 学期の全学教育科目で平均 1.01 時間（専門科目 1.08 時間）となった。なお、自習時間の算出にあたって、より厳密となるように「30 分以下」との回答について、これまで 0.5 時間と計算していたところを 0.25 時間に修正して検証を行った。

(6) 単位の実質化（自習支援）を進める授業改善・FD の充実

- ・クリッカーを複数セット（60 個入り 4 セット、120 個入り 1 セット）用意したところ、1 学期 16 名、2 学期 7 名の利用があり、全学教育科目、専門科目や大学院のゼミナールといった授業だ

けでなく、クラスオリエンテーション、オープン・キャンパスや公開講座の実施にも活用された。

- ・「アカデミック・サポート推進室」が開設され、学生の基礎科目等（数学、統計学、物理、化学、生物、英語、中国語）の自習支援を目的とした「学習サポート」を開始した。

(7) シラバスの改善（内容・項目の充実）

- ・シラバス入力時に必須項目が未入力の場合は、入力が終了できないようシステム設定を変更した。
- ・「シラバス・コンクール」として、参考例となるようなシラバスを選定し、ホームページに掲載のうえ、シラバス入力を依頼する際に参照できるようにした。
- ・英文シラバスの導入に向けて、シラバスの各項目に英文表記を併記することとした。

(8) TA の活用、TA 研修の充実

- ・平成 21 年度全学教育 TA 研修会（4 月 6 日）は午前のみの参加者 215 名、午後までの修了者 192 名で、対象者 361 名に対する修了率は 53.2% だった。
- ・平成 22 年度の全学教育における TA 採用予定は、のべ 1,025（前年度は 857）人、34,208（前年度は 31,239）時間、経費は 4,354（前年度は 3,971）万円となった。

(9) 全学教育における授業公開制度、OCW を活用した授業公開

- ・平成 22 年度から、「授業アンケート」結果によるエクセレント・ティーチャーズなどが担当する一部の全学教育科目について、「授業公開・参観支援システム」により授業参観が可能な制度を導入する。

(10) 4 セメスター制の導入、授業時間の見直し（90 分→60 分/120 分）

### 3. 全学教育科目の充実について

(1) 履修調整結果、開講時間帯、翌期再履修クラスの検証

- ・一般教育演習（フレッシュマンセミナー）では、履修希望者数が 3 名以下のため 1 学期には 7 科目、2 学期には 1 科目が開講取消しとなった。
- ・外国語演習では、平成 21 年度から、一部の科目を除いて、履修希望者が 3 名以下の授業の開講取消しを実施し、1 学期には 23 科目、2 学期には 14 科目が開講取消しとなった。

(2) 既修得単位認定における科目等の見直し

### 4. 全学教育支援体制の強化について

(1) 科目責任者会議、責任部局における運営組織の確立

(2) 責任部局の「責任コマ数」、「全学支援」、「全学協力」の実施状況

- ・「全学協力」による開講数は、総合科目 57（前年度は 61）科目、一般教育演習（フレッシュマンセミナー）は 137（前年度は 142）（うち退職教員担当 5（前年度は 4））科目であった。
- ・外国語教育センター以外の部局からの外国語演習の開講数は、平成 19 年度は 40 科目、平成 20 年度は 70 科目、平成 21 年度は 74 科目、平成 22 年度は 69 科目の予定となり、安定した科目数の提供が続いている。

(3) 責任部局の在り方

### 5. 非常勤講師・特任教員について

(1) 全学運用定員解消計画（外国語、その他）

- ・全学運用定員解消計画は、平成 21 年度中に解消の予定であった理学部 1 名及び工学部 2 名分が

解消され、外国語教育センターを除くすべての運用定員が解消された。

(2) 非常勤講師削減（H22 年度以降の計画）

- ・平成 22 年度の非常勤講師採用については、平成 16 年度比 50% 減を達成した平成 21 年度の採用実績を維持する形で開講計画を作成した。

(3) 退職教員に関する承認事項・申合せの見直し（H22 年度以降）

- ・平成 22 年度以降についても、従来どおりの枠組みで退職教員を採用可能とするよう承認事項・申合せの更新を行った。

(4) 特任教員（外国人教師）の在り方

- ・「外国語教育の在り方検討 WG」等において、検討を開始した。

## 6. 新教育課程の実施に伴う教務情報システム・教務事務体制に係る改善事項について

(1) 自由設計科目制度への対応

- ・「自由設計科目制度」の導入に伴い、学生が履修登録時及び成績確定後にオンラインで自由設計科目の登録・解除が可能なシステムを整備した。

(2) 事前履修調整（抽選），履修取消し，成績確認のオンライン化（H21）

- ・各学期途中における「履修取消」及び「成績確認」がオンラインで可能なシステムを整備した。  
「履修取消」については、授業担当教員が「履修者名簿」で取消者を確認可能なシステムの対応も併せて行った。

(3) TA の資格化のための学生個人データベース

- ・平成 22 年度から、TA 研修と業務の実績を学生ごとに記録する「TA データベース」の運用をはじめめる。

(4) シラバスの運用状況の検証

(5) 授業公開制度支援システムの導入

- ・「授業公開・参観支援システム」（流通科学大学提供）の導入に向けて、必要なカスタマイズなどの検討・準備を進めた。

(6) 教務情報システム上での「アンケート」システムの導入

- ・教務情報システム上の「アンケート」システムを導入し、学生に対するアンケート調査や、クラス担任アンケート調査を実施した。今後は教員に対するアンケート調査実施にも活用する予定である。

(7) シラバスのペーパーレス化

(8) 全学教育部 HP の更新

## 7. 施設・設備の充実について

(1) 視聴覚機材（資料提示装置等）の整備

- ・液晶プロジェクターが設置されていない教室への設置を進めるとともに、古い液晶プロジェクターの更新を行った。

(2) 理科基礎科目パイロット授業・自然科学実験のための施設・設備の充実

- ・自然科学実験のための顕微鏡等、実験・実習用の装置を購入し、施設・設備の充実を図った。

(3) CALL オンライン用授業設備の充実

(4) シアターコンプレックスの拡充

(5) その他

- ・体育館の改修工事及び講義室の机・椅子の更新を行った。

8. 履修指導について

(1) 組織的な履修指導

(2) 履修相談会 MANAVI, ピアサポート

- ・平成 19 年度から実施している、上級生による履修相談会 MANAVI を引き続き実施し、約 1,931 名（新入生の約 75.5%）が参加した。

(3) GPA を用いた修学指導

- ・クラス担任マニュアルに役割として GPA を用いた修学指導を記載し、さらにクラス担任連絡会でも併せて指導を依頼した。

9. クラス担任制度の強化について（教育改革室・学生委員会と連携）

(1) 「北海道大学基礎クラス担任制度に関する要項」の整備（H21）

- ・平成 21 年度から新たに「北海道大学基礎クラス担任制度に関する要項」を整備し、クラス担任の業務等について明確に示した。

(2) 個別指導（オフィスアワー）

- ・オフィスアワーの設定を依頼し、学生に掲示により周知した。

(3) クラスアワ一年 4 回・クラス担任会議（学生支援 FD）年 2 回開催（H21）

- ・クラス担任マニュアル及びクラス担任連絡会において、クラスアワーを年 4 回行うよう依頼した。
- ・第 2 回クラス担任連絡会を 9 月 28 日に開催し、学生支援に関する講演やパネルディスカッションを取り入れた。

(4) 全学教育の授業を 3~4 回連續して欠席した学生について、授業担当教員からクラス担任に連絡して指導を行う制度の実質化

- ・必修科目である外国語科目を担当する教員あてに依頼した結果、1 学期は 64 名、2 学期には 41 名について、連續欠席の連絡があり、所属学部の教務を通じて対応した。

(5) 学修簿を連帯保証人へ送付を開始（H21）

- ・平成 21 年度から学修簿の連帯保証人への送付を開始し、平成 20 年度入学者の 1 年次分の成績を 5 月に発送した。

(6) クラス担任（学生支援）マニュアルの整備（冊子として刊行）（H22）

- ・平成 22 年度版から冊子として刊行した。

10. 高大連携授業の今後の在り方について

\*高校生の全学教育科目聴講に関する要項等の作成（H21）

- ・高校生による全学教育科目の授業聴講は、平成 21 年度から「北海道大学高大連携授業聴講型公開講座」として本格実施となり、3 校（札幌旭丘、札幌北、藤女子）と協定を結び、2 学期に計 18 名の高校生が 15 科目を受講した。

11. 各種アンケート調査結果の活用について

授業アンケート、学生生活実態調査、単位の実質化に関するアンケート、TA アンケート、コアカリキュラムアンケート、卒業生アンケート、4 大学学生調査等の継続・活用

- ・授業アンケートによる自習時間（平成 19 年度第 2 学期及び平成 20 年度第 1 学期）のデータが報

<p>告された。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・アンケートシステムを活用して、戦略的大学連携事業（国公私立4大学IRネットワーク）による「一年生調査2009年」（同志社大学、北海道大学、大阪府立大学、甲南大学）を実施した。</li> </ul> <p><b>12. 平成19年度以降のGPA・上限設定・成績評価、カリキュラム、FD等の改善策について（最終報告）（H19.3）に基づく充実・改善について</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 高年次履修の時間帯の確保（くさび型履修の促進）</li> <li>(2) 外国語演習を大学院学生が正規の授業科目として履修できる仕組み</li> <li>(3) ELMSを活用した統合的な学生支援システム（授業紹介、授業支援、クラスの連絡） <ul style="list-style-type: none"> <li>・情報基盤センターで作成した、ELMSを利用した履修者の連絡先などのデータ入手方法等についてのマニュアルを、全学教育科目の担当教員に周知した。</li> </ul> </li> <li>(4) アカデミックアドバイザーリスト制度、学生への個別指導のシステム（アドバイザー・アドバイジー制度）の整備 <ul style="list-style-type: none"> <li>・アカデミック・サポート推進室を設置し、学習サポートなど学生への個別指導のシステムの整備を行った。</li> </ul> </li> </ol> <p><b>13. 第二期（平成22年度～平成27年度）中期目標・中期計画関連事項（教育改革室）</b></p> <p><b>14. 学生編成・学生募集単位の改定関連事項（教育改革室）</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・平成23年度の総合入試制度の導入に向けて、各WGにおいて検討を実施した。</li> </ul> <p><b>15. 教育GP等への応募の促進・支援</b></p>
--

## 2. データで見る平成18年度教育改革の成果

平成18年度新教育課程の重点項目は、外国語科目の再編（外国語演習の拡充、英語・初習外国語におけるCALLオンライン授業の全面展開など）、文系基礎科目の新設、理科基礎科目における「専門系／準専門系」2コース制と「互換性科目」の導入、総合的「自然科学実験」、情報科目の刷新などであった。

新教育課程開始から4年を経て、その成果の中間報告書（本書）を編集した。各科目責任者からの報告によれば、刷新された多くの科目が着実に成果を上げはじめている（27ページ以下を参照）。

文系基礎科目など、問題の残っている科目については、平成23年度の総合入試導入に合わせて見直しが進められている。

新教育課程と同時にはじまった「単位の実質化」の総合的取り組み（授業改善と自習促進）は、北大の学士課程教育に予想以上の大きな変化をもたらした。成績評価基準（ガイドライン）の設定と明示・成績分布の公表・成績評価の極端な片寄りの点検の開始（2003）、「秀」評価とGPA制度の導入（2005）をうけて、2006年度から1年次に履修登録単位数の上限設定（CAP制）が実施された。当初は学生や教員から「とりたい科目がとれない」「履修者数が激減した」という苦情が殺到する一方で、図書館北分館（現「北図書館」）の入館者が急増し、理系基礎科目などでは、受講生の授業への取り組み姿勢が改善された、自習時間が増え、試験の成績も上がっている、文系科目でもレポートの質が目に見えて向上したなどの報告が聞こえてきた。2009年度からは、2年次以上についても大部分の学部

で上限設定が実施されている。

その後、統計データによって、「単位の実質化」(授業改善と自習促進) の動向が次第に見えてきた。

- (1) 学生の1年次1学期の履修単位数の平均は、理系で約32→22単位、文系で25→20単位に減った(図1)。

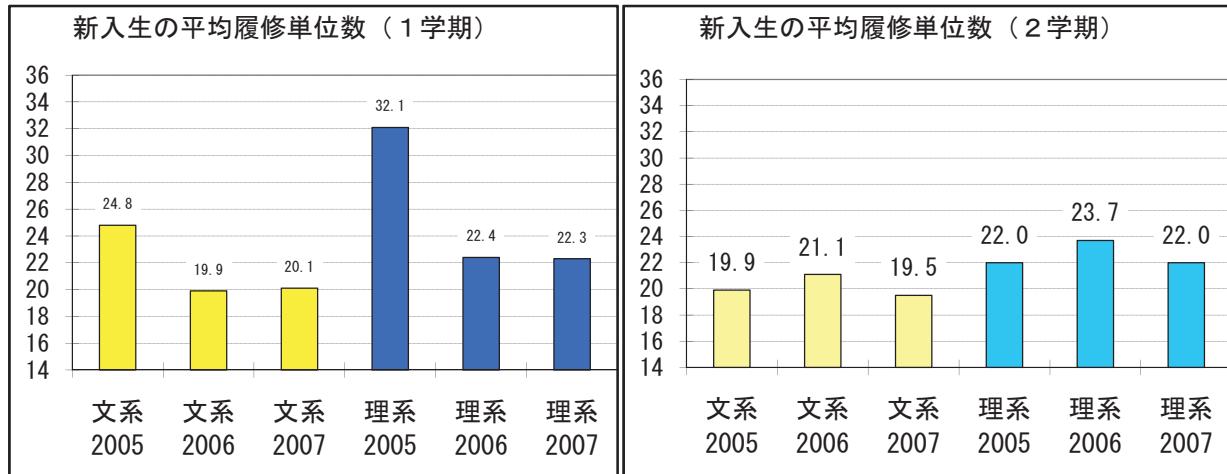


図1：新入生の平均履修単位数（2005～2007, 1・2学期）

- (2) その結果、全学教育科目の履修者総数は2005～09年度で約25%減少し、1クラスの履修者数平均も（2005年度通年）52.52人→（2009年度同）44.71人に減少した（102～109ページ）。
- (3) 同時に、1年次の学期GPAの全体平均は1学期2.23→2.40、2学期2.20→2.35に上昇した(図2)。

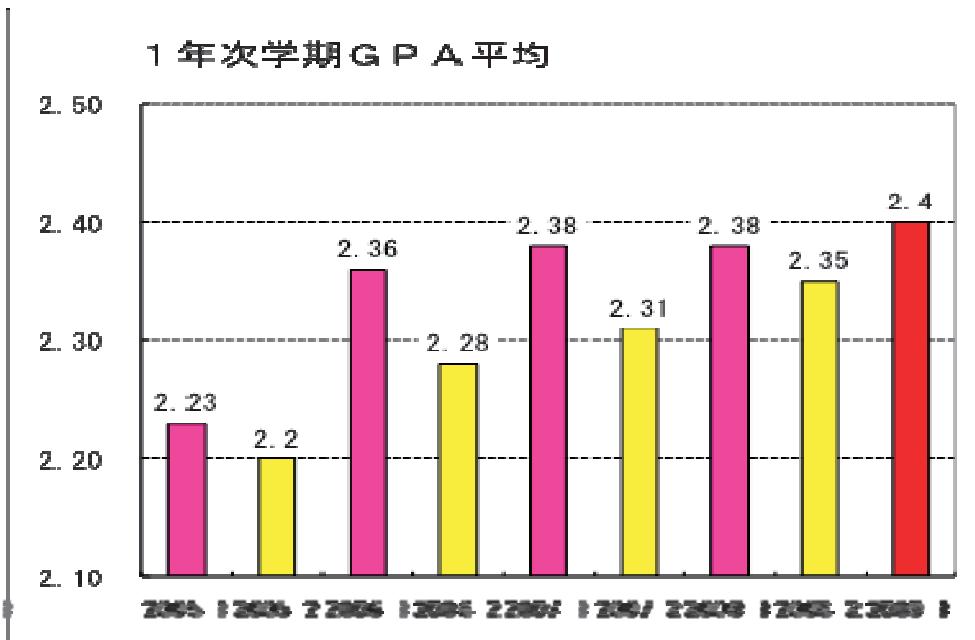


図2：1年次の学期GPA（全体平均）の推移（2005～2009）

- (4) 成績分布の極端な片寄りも是正されつつあり、2006年度以降は全学教育科目全体の評価の分布は、優・良：各33%，秀・可：各13%，不可5%程度に安定してきた（116～139ページ）。
- (5) 90分の授業1回あたりの自習時間の調査では、2006年度1学期～2009年度1学期の間に、自習時間「1時間」以下という回答の比率が（全体平均）78.4→76.1→74.0→70.2%と減少した(図3)。

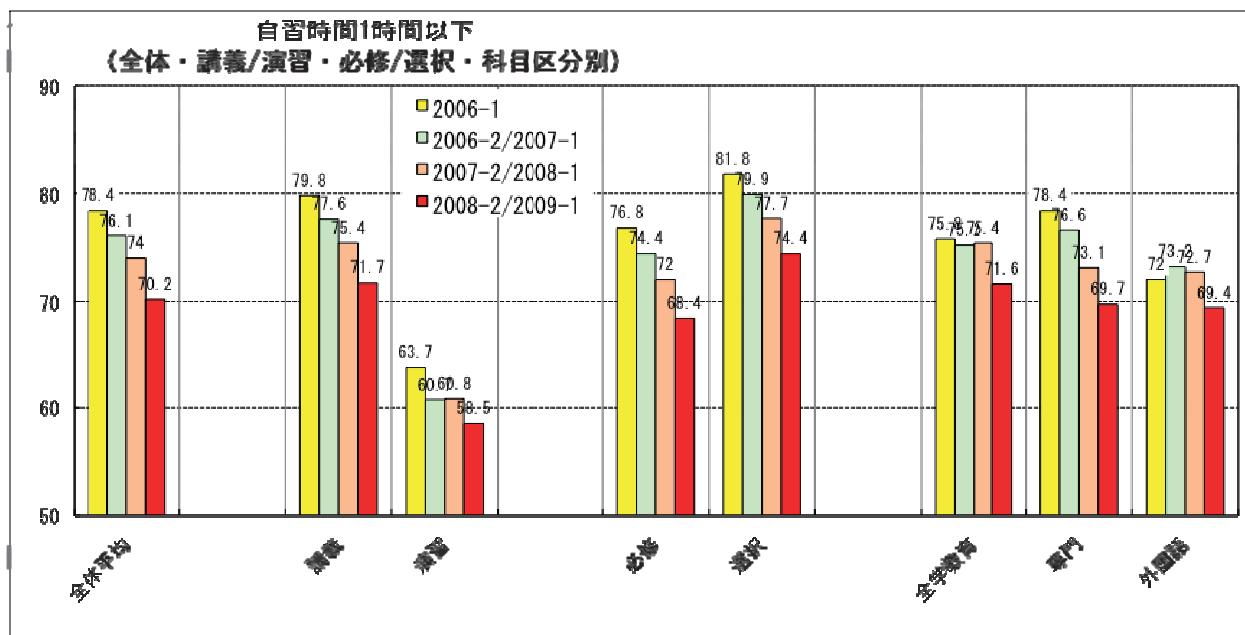


図3：授業アンケートにおける90分の授業1回あたりの自習時間「1時間」以下の回答の比率の推移

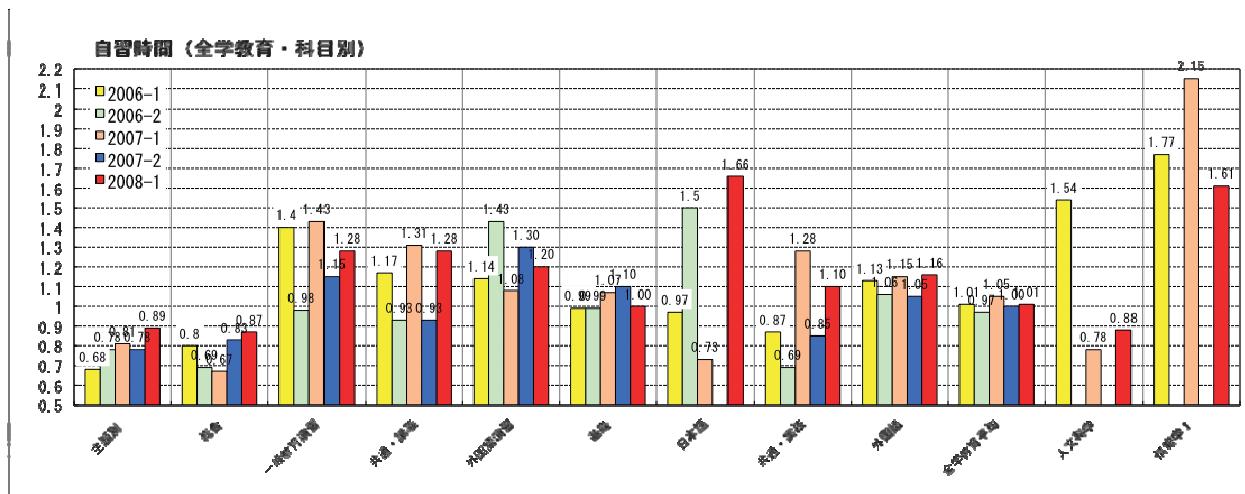


図4：90分の授業1回あたりの自習時間（全学教育・科目別）

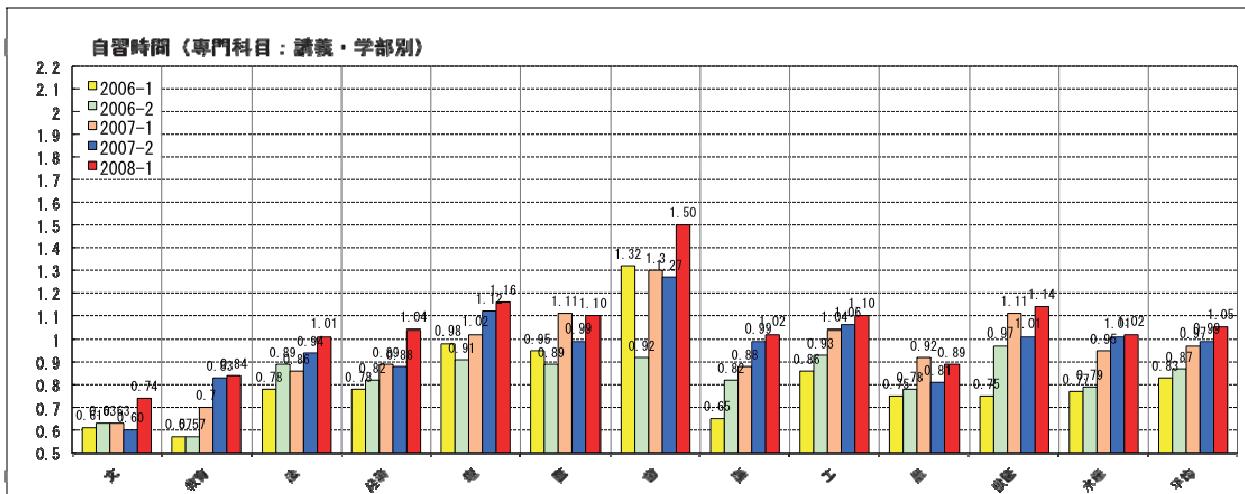


図5：90分の授業1回あたりの自習時間（専門科目 : 講義・学部別）

これは18年度以降の入学者が高学年に進み多数を占めてゆくのに対応した変化と考えるなら、「自習」についての意識が18年度以降の入学者では、それ以前の学生より10～20%ほど向上しているとも理解できる。初年次の取り組みが、学年進行に伴って高年次にもよい影響を与えていようとすれば幸いといえる。

次期中期目標・中期計画では、「教育効果を検証しつつ、単位の実質化を推進する」「GPA等に基づく厳格な卒業認定基準を全学において導入する」ことが計画されている。2009年度に「自由設計科目」制度が導入され、選択科目における「不可」などを通算GPAから除外できるようになった。この制度を定着させ、データの変化に注目しながら、専門科目を含めて「単位の実質化」の取り組みを進めるなら、上記目標は確実に達成できると思われる。

学生による授業評価アンケートの総合点の推移には、この間の全学教育の改革が反映しているように見える。平成11年度の授業アンケートの開始以来、総合点平均は全体に着実に上昇しているが、細かくみると、上昇傾向の中にも多少の起伏がある。最初の3年ほどは、全学教育（外国語を除く）の総合点は（全体平均と同じく）急速に上昇したが、4～5年目には頭打ちから緩やかな下降に転じ、平成15年度頃から再び上昇に転じる。これは平成13年度コアカリキュラムの成果とみることもできる。その後も、2～3年上昇したあと、4～5年目には再び頭打ちから緩やかな下降の傾向がみえはじめ、平成20年度には再び上昇に転じている。これが平成18年度教育改革の成果であれば幸いである。また、平成12～16年度には、全学教育科目的総合点は専門科目や全体平均を目立って下回っていたが、平成18～20年度には専門科目や全体平均とほぼ同じ、あるいはわずかに上回っている。これも平成13、18年度教育改革の成果であるなら幸いである。一方、外国語科目的総合点は常に全体平均をはるかに上回っているが、平均4.0を超えるあたりに上昇の限界があるようにもみえる（図6）。

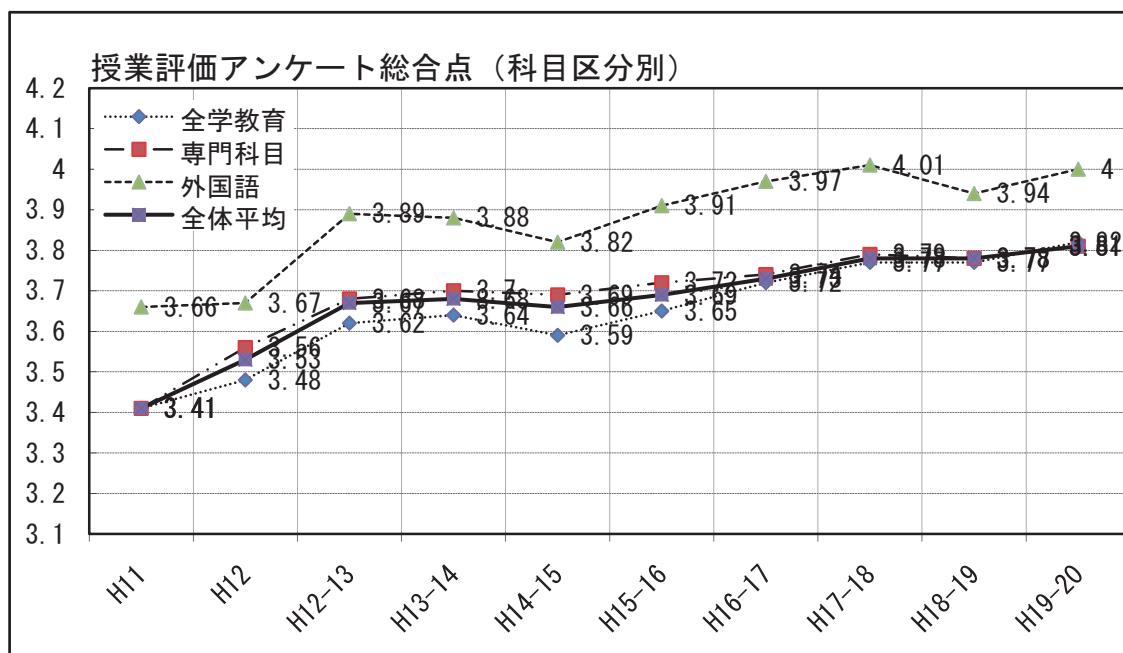


図6：授業評価アンケートの総合点（科目区分別）の推移

全学教育関係分の授業アンケートのデータは、2003年度から全学教育部にも提供されるようになり、必要に応じて科目ごとのカリキュラム改革・授業改善のための参考資料として利用されている。また、

全学教育では非常勤講師にも授業アンケートの実施を依頼している。

授業アンケートのほかに、2006～08年度に、平成18年度新教育課程・「単位の実質化」に関する学生・教員アンケートを行い、制度改善に役立てた。また、今年度から戦略的大学連携事業（国公私立4大学IRネットワーク：同志社大学、北海道大学、大阪府立大学、甲南大学）による「1年生調査2009年」で、さまざまな能力・学習成果についての学生の自己評価のアンケート調査を始めた。この調査では、2年後に「3年生調査」を行う予定である。さらに、4年次生に対するコアカリキュラムの成果を調べるための2回目のアンケートも今秋に行う予定である。今後はこれらの調査も加えて、多角的に学士課程教育の成果を調査する予定である。

平成18年度教育改革においては「データに基づいた改革」を標榜し、開講科目・履修者数、成績（GPA）・自習時間等のデータを共有し、評価と改善に活かしてきた。本報告書にも、できるだけこれらのデータを収録するよう配慮した。米国では、インディアナ大学ブルーミントン校を中心に、ネッシー（NSSE: National Survey of Student Engagement）という学生調査が運用され、全米4千の大学のうち約700校のデータが集計され、参加校にフィードバックされている。戦略的大学連携事業（国公私立4大学IRネットワーク）では、将来展望として、同様のデータの共有を目指している。

そのほか、履修者数の減少に伴って、開講クラス数の調整が進み、全学教育における非常勤講師採用数の半減（2004年度710→2009年度353コマ）が達成された。

表1：非常勤講師採用数の推移

年度	①全学運用分				② 部局経費 負担分	合計 (①+②)	非常勤 依存率
	非 常 勤	一 般 教 育 演 習	小 計	増 減			
6	690	—	690		—	690	—
7	848	—	848	158	—	848	—
8	752	—	752	△ 96	—	752	—
9	651	—	651	△ 101	—	651	—
10	656	4	660	9	—	660	—
11	659	5	664	4	—	664	32.43
12	656	9	665	1	—	665	31.58
13	675	10	685	20	—	685	32.07
14	679	7	686	1	—	686	31.88
15	692	15	707	21	—	707	31.03
16	694	16	710	3	—	710	30.02
17	655	14	669	△ 41	—	669	28.41
18	571	7	578	△ 91	—	578	24.64
19	488	7	495	△ 83	6.5	501.5	23.23
20	397	6	403	△ 92	40	443	21.41
21	347	6	353	△ 50	51	404	20.41

《部局経費負担分の内訳》

文4, 理1.5, その他(戦略本部)1

\*<sup>1</sup>

\*<sup>2</sup>

\*<sup>1</sup> 文4, 理17(創成2含む), 薬1, 外18

\*<sup>2</sup> 文3, 経2, 理20(創成2含む), 薬1, 外25(北京オフィス所長分4コマを含む)

また、全学教育の授業改善と、大学院生の将来のキャリアに必要な能力の育成の観点から、全学教育におけるTAの活用を推進し、採用数はのべ人数で3.7倍、予算額で2.3倍になった。「北大型」FD

(新任教員研修会, 教育ワークショップ, TA 研修会) の十年の歴史においても, 全学教育 TA 研修会は特筆すべき成果といえる。最近数年は毎年, 修了者約 200 人, 修了率 50%以上と, 全国でも例のない規模で実施されている。特に情報学, 自然科学実験, CALL 外国語授業などでは, 分科会においてもきわめて組織的な研修が行われている(表 2)。次の十年の北大の FD の課題としては, 大学院における人材育成に焦点をあて, TA 研修の刷新と「北大型」Preparing Future Faculty (大学院生のティーチングとライティング能力の育成) プログラムの開発が重点項目と考えている。

表 2 : 全学教育 TA 採用人数・予算の推移と TA 研修会参加・修了者数

年度	全学教育 TA 採用人数・予算			全学教育 TA 研修会					
	のべ人数	総時間数	予算総額	対象者	参加者	参加率	修了者	修了率	日時
1998	233	12,868	17,122,950	162	55	34.0%	55	34.0%	3.23
1999	217	11,940	15,880,650	125	64	51.2%	64	51.2%	3.16
2000	234	11,631	15,708,300	158	51	32.3%	51	32.3%	3.23
2001	324	14,088	19,108,900	216	80	37.0%	58	26.9%	4.5
2002	400	14,766	19,816,200	252	108	42.9%	93	36.9%	4.5
2003	427	15,853	21,335,800	269	136	50.6%	120	44.6%	4.4
2004	506	18,461	24,028,200	340	209	61.5%	165	48.5%	4.6
2005	577	19,926	25,770,150	374	201	53.7%	162	43.3%	4.6
2006	798	26,793	34,474,200	443	243	54.9%	242	54.6%	4.5
2007	672	26,983	34,578,600	379	202	53.3%	168	44.3%	4.4
2008	812	30,595	38,703,750	334	220	65.9%	194	58.1%	4.4
2009	857	31,224	39,696,000	361	215	59.6%	192	53.2%	4.6
2009/98 比	367.8%	242.6%	231.8%	3,413	1,784	52.3%	1,564	45.8%	累計

\* 対象者：その年度の全学教育 TA 担当予定者のうち, 研修会を修了していない者

\* 参加者：研修会の一部（午前：全体会）に参加した者

\* 修了者：研修会の全部（午前：全体会, 午後：科目ごとの分科会）を修了した者

\* 参加率：参加者数/対象者の%

\* 修了率：修了者数/対象者の%

(安藤 厚)

## (教養科目)

### 3-1. 一般教育演習（フレッシュマンセミナー）・論文指導

#### ■科目の目的

「一般教育演習」は新入生が新しい環境に親しみ、高校生活から大学生活への切り替えを容易にするための科目である。異なる学部の新入生が半年間同じ議論に参加し、総合大学で学ぶ恩恵を享受することができる。受講者 20 人程度のゼミナール形式をとっているので、他の授業とは異なった効果が期待できる。1 クラス 20 人なら、参加者がお互いに名前を覚え、議論し合うことができる。

さまざまな主題をもつ少人数クラスで構成されており、学生同士の意見交換、討論なども含めた演習を通して、受講者を文系・理系に区分することなく、異なる専門分野を志向する学生間の討論を通して、相互の理解を深める。大学という新しい環境に親しみ、学問を通して教師と学生、学生と学生が触れ合いながら、大学での学び方を学習し、コミュニケーション能力などを養成する。

新入生が従来の教科区分に拘束されない共通のテーマについて教員の指導の下に学修し討議する機会を持つことで、教員の学問への姿勢に触れ、教員と学生、学生相互の人間的ふれあいを通じて、新入生が大学という新しい環境に早期に適応できるようにすることが、この演習のねらいである。

また、このような演習に参加することにより、知的関心を触発し合い、大学生活での方向づけが得られるように配慮する。自ら主体的に学ぶという大学にふさわしい学習態度への転換をはかる。

#### ■各部局の授業担当状況

これらの目的のため、この演習はすべての部局よりさまざまなテーマが提供されている。開講コマ数は、「一般教育演習」と「外国語演習」を合わせて、講師以上の教員（平成 20 年度：約 1,400 名）の 10 名につき 1 コマの提供を各部局に依頼して、毎年、1・2 学期を合わせて約 140 コマが開講されている。その内訳は「一般教育演習」を 8 割、「外国語演習」を 2 割とし、「一般教育演習」の提供科目数は、平成 18 年度 1 学期 95, 2 学期 63, 19 年度 1 学期 92, 2 学期 54, 20 年度 1 学期 84, 2 学期 56 コマであった。平成 21 年度からは、助教も授業担当が可能となり、助教以上の教員（約 1,850 名）の 13 名につき 1 コマ程度以上の提供を依頼し、21 年度 1 学期 84, 2 学期 48 コマとなった。

一般教育演習は、「論文指導」や「フィールド体験学習」を含む、多様な授業科目によって構成され、その内容は多岐にわたり、全分野をカバーしており、コマ数を考えると充実している。

「論文指導」は、平成 7 年度から現在の主題別科目において、また 13 年度からは一般教育演習においても開講してきた。日本語による論理的な表現能力と論文作成能力の向上を目的とし、論文の読解や観察に基づくレポートの作成を行い、主体的で積極的な学習態度の育成を目指すものもある。少人数授業で、レポート作成と教員による添削のフィードバックを繰り返しながら授業を進めるところに特色がある。そのため、履修者は一般教育演習で 20 人、主題別科目では 30 人を限度とする。

「フィールド体験学習」は、「自然に学ぶ」をモットーとして、平成 14 年度から導入された科目で、研究林・牧場・練習船・道内附属研究施設等を活用して行われる。「フィールド体験学習」の 1 クラスの平均履修者数は、平成 18 年度 1 学期 22.45, 2 学期 28.33, 19 年度 1 学期 23.67, 2 学期 27.0, 20 年度 1 学期 23.90, 2 学期 28.75, 21 年度 1 学期 24.08, 2 学期 36.0 人である。

「一般教育演習」や「論文指導」の平均履修者が、例年 16~19 人程であることを考えれば、「フィ

「ールド体験学習」は、学生にもっとも人気の高い、コアカリキュラムを代表する科目といえよう。平成18年度からは、練習船上の体験学習を発展させて、水産学部1年次向けの専門科目「基礎乗船実習」が開講された。学生を主体とする体験型学習の新たな展開は、今後の課題となるだろう。

各部局の授業担当状況では、工学部が、平成18年度34、19年度29、20年度29、21年度21コマと、全学でいちばん提供コマ数が多い。全学教育科目全体では、教員1名あたりの担当コマ数はすべての学部で同程度であるから、これは工学部の教員数が多いことと、工学部の提供科目が「一般教育演習」にやや重点が置かれていることによる。この傾向は、学生から見ると、工学系のテーマが若干多いと認識される。なお、工学部提供の特色ある科目として、平成12年度から毎年「工学的創成実験」が開講されている。

次いで提供コマ数が多いのは、理学部で、平成18年度19、19年度19、20年度16、21年度15コマである。その次が医学部で、平成18年度14、19年度12、20年度12、21年度12コマを提供している。農学部、北方生物圏フィールド科学センターは毎年10コマ程度を提供している。全体としては理系科目が充実している。文系では、文学部の提供コマ数がいちばん多い。平成18年度10、19年度7、20年度10、21年度5コマである。

履修者数は、平成18年度1学期1,314、2学期765、19年度1学期1,688、2学期884、20年度1学期1,666、2学期929、21年度1学期1,598、2学期884人と、19年度からは、履修者数2,500人を越える全国でも最大規模のフレッシュマンセミナーとなっている。

## ■履修取消し率の高さ

一般教育演習は、新入生に大学での学習方法を修得させることに共通の目的がある。しかし、内容や指導方法は各担当教員に任せられているので、必ずしも共通の理解が得られていないおそれがある。

履修届を出しながら、途中で履修を放棄する学生に対して、平成19年度から履修登録の取消し制度が導入された。一般教育演習における履修登録取消しの延べ人数及び科目数は、平成19年度1学期77人(42科目)、2学期91人(41科目)、20年度1学期59人(36科目)、2学期98人(38科目)、21年度1学期22人(18科目)、2学期29人(19科目)であった。この取消し人数と取消し科目数は、英語演習と並んで、他の全学教育科目と比較すると突出して多い。

参考までに、平成19年度1学期、一般教育演習に次いで取消しが多い英語演習は46人(37科目)、その次が「科学・技術の世界」42人(15科目)である。同2学期は、英語演習が最も多く、94人(44科目)、次が一般教育演習、その次が「科学・技術の世界」の50人(10科目)である。20年度1学期は、英語演習78人(46科目)、「科学・技術の世界」64人(17科目)、一般教育演習の順である。同2学期は、一般教育演習に次いで多かったのが「思索と言語」の90人(12科目)、英語演習の88人(39科目)がそれに続いた。

平成21年度1学期には、一般教育演習の取消し人数が激減した。「社会の認識」73人(18科目)、英語演習68人(39科目)、「環境と人間」44人(14科目)の順で、はじめて一般教育演習がワースト3位からはずれる。同2学期には、取消し人数が多い科目は英語演習76人(39科目)、「思索と言語」63人(12科目)、「社会の認識」61人(14科目)であった。今後の推移は速断できないが、21年度から抽選科目の履修希望提出がオンライン登録になり、1週間の授業を見た上で登録できるようになったことが大きく影響しているものと考えられる。

一般教育演習の授業内容と受講学生の関心やモチベーションとのミスマッチをできるだけなくすた

めにも、シラバスやガイダンスのさらなる充実が求められる。

さらに、平成 19 年度から、履修希望者が 3 人以下の場合は開講中止とすることになった結果、履修者 0 の科目数は、19 年度 1 学期 9, 2 学期 3, 20 年度 1 学期 1, 2 学期 6, 21 年度 1 学期 7, 2 学期 1 科目であった。また、開講はしているが、受講生が 10 人未満の科目は、平成 19 年度 1 学期 7, 2 学期 3, 20 年度 1 学期 4, 2 学期 2, 21 年度 1 学期 6, 2 学期 5 科目であった。

これは、一般教育演習が少人数教育であり、実施されている演習が初年次学生の理解力に見合った内容となっていないためとも想定される。一方で、平成 21 年度 1 学期は、履修者 0 あるいは 10 人未満の科目の数は減少傾向にあり、履修している学生へのフォローアップが徐々に改善されているものと考えられる。その一方、現時点でも履修者 0 の科目が存在することは、対象となる科目のテーマの見直しや内容改善が必要であることも示している。ただし、こうした科目の数は、全開講コマ数に対して、過去 3 年間平均で約 7%であることから、全体的にみると各年度の学生に対して、魅力的な科目を提供できていると考えられる。

### ■高い GPA 値

一般教育演習の成績分布をみると、GPA の値は、平成 18 年度 1 学期 2.84 (論文指導 2.83), 2 学期 2.8 (論文指導 2.90), 19 年度 1 学期 2.70 (論文指導 2.78), 2 学期 2.65 (論文指導 2.88), 20 年度 1 学期 2.79 (論文指導 2.83), 2 学期 2.54 (論文指導 2.77) である。1 年次の全学教育科目全体の学期 GPA 平均値は 2.3~2.4 であるから、他の科目に比べて高い値といえる。これは、少人数の、学生主体の演習形式で、きめ細かな指導ができるためとも考えられる。

一般教育演習は、年間を通して 100 以上の多様なテーマを提供し、少人数教育で内容の濃い演習形式で実施している。総合大学として、あらゆる分野の教員による、多量で、かつ多種多様な教育が実現されており、多くの学生がその演習を通して良好な成績を残しており、結果として有益な知識や能力等を獲得できているものと判断されよう。(押野武志, 宮永喜一, 寺沢浩一)

## 3－2－1. 総合科目「環境と人間」

### 1) 目的と理念

本学では平成 18 年度から、新学習指導要領による小・中・高校教育を受けてきた学生の「学力の多様化」に対応するために新教育課程を導入した。「環境と人間」は、その一環として、従来の「複合科目」から改称された「総合科目」に区分される科目の一つである。「環境の人間」の授業目的は以下のように設定されている。「人間はこれまでにさまざまな活動によって自然を変え、自分たちに都合のよい環境を作り出してきた。しかし人口の増加や産業の発展によって地球規模の環境変化が起こり、人々の生活に深刻な影響を与えるようになった。これからは、人間も生物の一員であるという立場から、環境をモニターしながら人間の活動を制御する必要に迫られている。地球環境の保全、維持のための基本的な考え方、自然に関する知識、技術、法律、経済などを総合的に学ぶ。」(「北海道大学全学教育科目実施の手引き」(教職員用) 以下「手引き」と略記)

参考までに、平成 21 年度に開講された「環境と人間」の講義題目一覧を掲載する(表 1)。講義内容は身近な生活や産業に直結したものから、いわゆる地球環境問題を取り上げたもの、宇宙地球の起

源進化に関するものまで、多岐にわたっている。幅広い観点の授業が提供されていることは、学生に多様な視野を持たせる点で教養教育の担うべき役割の一端を果たしているといえる。

表1：平成21年度「環境と人間」講義題目一覧

生物の多様性	理
宇宙惑星科学入門	理
マテリアル創成—環境調和型マテリアル製造と機能性—	工
生命を支える共生システム—生態系から個体レベルまで—	農
食料生産と環境保全	農
湿原の科学	農
フィールド科学への招待	北方
農耕地のバイオマス—食料、エネルギー、有用物質の生産	北方
森林保全の科学	北方
くらしと動物	獣医
脊椎動物の生態と進化	獣医
感染症と免疫	人獣
マリンバイオマスの探索と利用	水産
サケ学入門（サケ・マスと人の関わり）	水産
海の環境と資源を測る	水産
変わりゆく地球環境	地球研
地球環境と石油エネルギー	地球研
化学で見る大気と海の環境	地球研
地球未来学：2070年の人類生存環境	地球研
気候変動を科学する	地球研
寒冷圏の科学	低温
サステイナビリティ学への誘い	サス
地域プロジェクト論入門	公共
光・バイオ・ナノで拓くナノテクノロジー	電子
先端の科学	触媒
触媒化学のフロンティア	触媒
今、大学博物館が面白い！—物にこだわる科学—	総博
北大総合博物館で学ぼう。ヒグマ学入門	総博
大学博物館講座—北大自然史研究の系譜	総博

## 2) 履修ルール・開講形式

総合科目はクラスごとに具体的な内容を表す講義題目が付され、クラスごとに内容の異なる授業が行われている。時間割の重ならないクラスであれば、「環境と人間」という同一科目であっても講義題目の異なるクラスを複数選択履修し、それぞれ別個に単位を取得することができる。

「環境と人間」は基本的に文系理系を問わず全学生を対象に開講しているが、時間割の制約上、一部の学部・系の学生が受講することが困難な場合もある。

開講形式は、数人～十数人の講師による比較的大人数のオムニバス講義形式が主で、教養科目に用意されている少人数クラスの一般教育演習とは相補的な位置づけにある。

### 3) 実施状況

「環境と人間」の開講クラス数は、平成18～21年度（1学期／2学期）で、それぞれ32（23／9）、24（13／11）、25（14／11）、29（15／14）科目である。この数字は他の総合科目「健康と社会」および「人間と文化」の開講数のほぼ倍であり、これは本学に、広い意味で「環境」に関連する教育研究に携わる教員および組織が、数多く在籍しているためと考えられる。

「環境と人間」を担当している部局は、工学・獣医学研究科、理学・農学・水産科学・地球環境科学研究院、低温科学研究所、電子科学研究所、触媒化学研究センター、総合博物館、北方生物圏フィールド科学センター、公共政策学教育部、サステイナビリティ学教育研究センター、人獣共通感染症リサーチセンターと多岐にわたる。開講クラスの半数以上は学部を持たない部局が担当しており（表1）、これは「総合大学としてのメリットを活かした共通教育、最良の専門家による最良の非専門家教育」（「北海道大学高等教育機能開発総合センタ一点検評価報告書2002～2006年度」以下「点検評価報告書」と略記）という、本学の全学教育部の基本理念に合致したものとなっている。

担当は理系部局を中心だが、法律や経済を取り上げる授業もあり、本科目の授業内容は多彩である。このことは本科目の目的「学部または分野を横断する科目群」（手引き、1頁）に適っているといえる。個々の授業についても、講義題目と目的の設定や、トピックス、講師の選定などに分野横断の性格を持たせる努力がみられ、これを今後とも継続発展させることが望まれる。

1クラスあたりの平均履修者数は、平成18年度（1学期／2学期）50／110、19年度95／100、20年度77／87人ほどである。18年度1学期は、履修者数に比べて開講クラス数が多かったため、1クラスあたりの履修者数が少なくなった。その他の学期はおよそ80～100人超で推移している。

成績評価に関しては、本科目は1クラス当たりの履修者が50人超の場合、相対評価を原則としている。多くのクラスがこの基準に該当するため、科目全体の成績分布は、いずれの学期についても「良」にピークを持ったバランスのとれたものとなっている。  
（倉本 圭）

#### 3－2－2. 総合科目「健康と社会」

「健康と社会」の開講科目数は、平成19年度を除き、1学期が2学期を上回っている。1学期の開講数は、平成17～21年度には8→9→5→8→9科目で、19年度に一時期減少したものの、再び9科目に戻っている。これは開講数の減少に対応して、「健康」に関連している多数の部局に協力を要請し、その協力が得られた結果である。2学期の開講数は、平成17～21年度には5→5→7→7→8科目で、増加傾向にある。また平成17～21年度の、年間を通しての開講総数は13→14→12→15→17科目で、19年度1学期の減少を反映した一時的な落ち込みはあるが、全体として開講数は増加している（図1）。

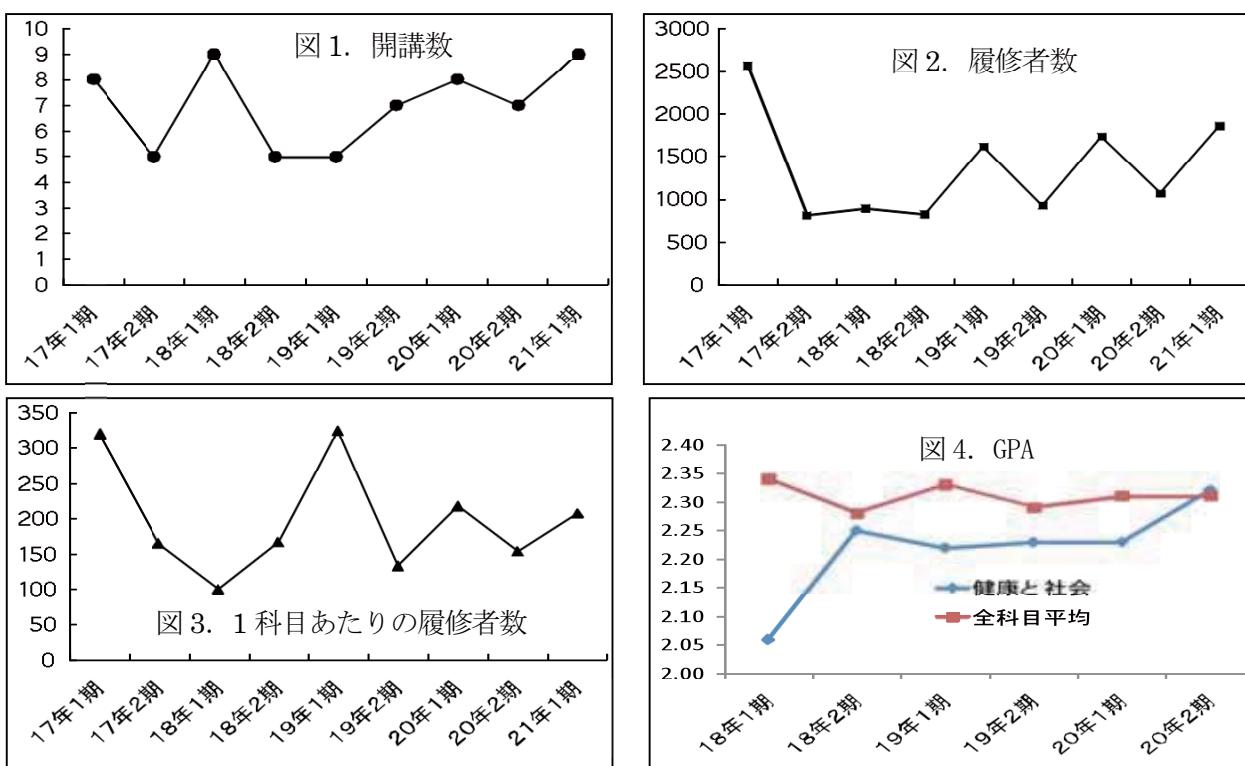
履修者数（図2、3）は1学期が2学期より多い。これは1学期に開講数が多いこともあるが、2学期は学部移行のあとで、特に水産学部生が函館キャンパスへ移ったあとであることとも関連している。この傾向は1学期の開講数が少なかった19年度も同じであった。履修者総数は平成17年度1学期で2,558（1科目あたり319.75）人と異常に多数であったが、18年度は履修登録上限設定の影響もあり、

全体でも 1,737 (1 科目あたり 133.57) 人と減少した。しかしその後、前年度を上回る増加が毎年続いている。21 年度 1 学期には 1,863 (1 科目あたり 207) 人となっている。

平成 21 年度から総合科目の単位数が 2 単位から 1 単位になったため履修者数の減少が危惧されたが、各学部の実行教育課程表を見ると、総合科目から 2 単位以上を必須あるいは推奨している学部が多いいため、履修者数の減少は認められず、むしろ増加している。

履修者の成績 (GPA) は平成 18 年度 1 学期 2.06 (全体平均 2.34), 2 学期 2.25 (2.28), 19 年度 1 学期 2.22 (2.33), 2 学期 2.23 (2.29), 20 年度 1 学期 2.23 (2.31) と全体平均を下回っていたが、2 学期には 2.32 (2.31) と平均値と同等になった (図 4)。

これから課題として、①履修者数の多い 1 学期の開講数を増加させる。②開講日が特定の曜日・時間帯に限定されているため、重複しての開講が多いので、開講可能な日程の再考が必要。③学生の学習意欲を高めるには、レポートによる評価よりも試験の導入を考えるべきである。④そして何よりも、「健康」というキーワードに多少なりとも関わりのある部局は、積極的に「健康と社会」を開講していただくことが、学生のニーズに答えていくためには必要であると考える。



以下に、個々の科目ごとに寄せられた担当教員の意見を記載する。

#### 教育学部「食の健康学」(1 学期)

所属教員 (教授 1 名) が中心となり、学内外の専門家に講師を依頼して行っている。毎回 500 人近くの履修者がいたが、開講日を変更したことと試験を課すことをシラバスに記載したことが原因となったのか、突然 200 人を切る状況になった。毎回の小レポートを見ると、出席者はかなり熱心に聴いていることがわかり、大学においても食育の重要性が認識された。

#### 歯学部「咬むことと健康」(1 学期)

平成 17 年度から歯学研究科の教員 14 名によるオムニバス形式の講義である。教員の専門がさまざ

まであるため、一貫性のない科目になる可能性を孕んでいる。そのため、講義プリントをファイルして各教員に順送りし、他の教員の講義内容を知ることができるようにしている。学生にとっては、健康の基礎である食と密接に関係するきわめて身近な講義内容であり、「かむ健」と略されて親しまれている。受講学生は文系・理系のすべての学部にわたり、250～300人程度が多いのが毎年の傾向である。評価は出席状況とレポートによって行っているが、インターネットなどで得た情報を切り張りして提出する学生が増加してきたため問題となっている。今年度からは最終回の講義時間をレポートの作成に充て、必ず手書きのものを提出させるようにした。各講師の講義内容の刷新、充実も要請する。

#### 薬学部「生命科学・創薬科学とその周辺」(1学期)

教授 15名が一回ずつ講義を担当している。内容は各教授の専門分野から、創薬、そのデザインと合成、天然の薬、蛋白質の立体構造、生体膜と受容体、細胞増殖のメカニズム、免疫、がん、薬の効き方と毒性、などをキーワードとして、基礎的な内容から少し専門的な内容まで、1年次学生にも理解しやすいように解説を行っている。とくに教科書は指定しないで、講義資料は必要に応じて担当者が用意している。講義の時間は60～70分程度とし、残りの20～30分で、学生に自分がその講義で何を理解したか、どのようなところに啓発されたかなどを、自分の言葉で書いて提出させている。評価は、出席状況とレポートに基づいて総合的に評価している。その結果、薬学に関する幅広い知識について教育することが出来たが、PowerPointを使った講義が多く、学生にとってはフォローするのが少々難しかったかも知れない。今後学生が復習しやすいように、講義資料の配付を行う。

#### 教育学部「健康科学」(1, 2学期)

所属教員（教授）2名のほか5名の学部外講師に依頼して、1学期と2学期にほぼ同じ内容でオムニバス形式にて行っているが、毎回履修者数が400人を超えることが多い。従来、成績の評価方法にレポートを用いていたが、試験を課すこととしたためより客観的な評価がなされるようになったのと、学生もネットからのコピー＆ペーストを止め、真剣に勉強を始めたことが試験結果からも推察される。本講義と次の「食の健康学」で始めた期末試験が、健康と社会全体のGPAアップに貢献している可能性がある。

#### 歯学部「健康長寿と口腔科学」(1, 2学期)

平成19年度2学期より講義タイトルを一新して、歯学研究科教員14名によるオムニバス講義としてスタートした。20年度1学期より新たな講師陣14名による同様のシリーズ講義が新設された。これに伴って、1学期を「健康長寿と口腔科学1」、2学期「健康長寿と口腔科学2」という現在の科目名になった。講義内容は「健康長寿と口腔科学」に関するもので、各講師の専門分野や最先端の研究内容等を含めながらも、1年次の学生であることを十分考慮して、分かりやすく話していただくよう依頼してきた。これらの科目にはそれぞれ異なる講師が当たり、講義内容の重複がないように配慮している。1学期の履修者数は、平成20年度106、21年度191、2学期は19年度80、20年度164、21年度200人である。開講当初より実施している学生のレポートを見ると、本講義の内容に大変興味を持って聞いている学生が多数いることが伺え、開講初年度より年々受講生の増加が認められる要因だろうと判断している。これは、各講師が最先端の研究内容を講義に盛り込見ながら、興味深くかつ分かりやすい講義を行っている成果であろう。今後は講義内容を毎年更新して、実生活で役に立つ内容を充実させる。また、講師陣の入れ替えも検討し、受講生をさらに増加させるとともに、より興味深く分かりやすい講義を提供する。

## 歯学部「口腔における生体防御機構」(2学期)

10名の歯学研究科教員がオムニバス形式で講義を行っている。平成17年度までは平均80人程度の履修者がいたが、20年度は9人の履修者しかいなかった。その原因として、同じ時間帯に学生の興味をひく講義が設定されたこと、さらに、我々の講義のシラバスに定期試験と書いていたことが考えられた。そこで講義時間帯を変更し、定期試験をレポートに変更した。その結果履修者が154人に急増した。このことから、学生にとっては内容よりもどのように成績を評価するかが重要であるように思える。履修者の急増により、教員側の意欲も増してきており、講義内容は充実しているものと推測される。今後は講義内容等を担当教員で再検討し、講義題目の変更を含めた改善を考えている。

(大塚吉則)

### 3-2-3. 総合科目「人間と文化」

「学生の学力の多様化」に対応すべく導入された2006年度新教育課程において、「複合科目」から名称が変更された「総合科目」は、「複数の分野を融合する科目で、学部または分野を横断する科目群及び大学全体として企画する特別講義科目」(手引、1頁)とされ、全学各部局の専任教員による「全学協力」体制によって運営されている。

2006年度から「人間と文化」を開講している部局を列挙すると、文学部(3コマ。以下コマ数の記載のないものは各1コマ)、教育学部(2008年度なし)、法学部、経済学部(2007年度なし)、言語文化部(2007年度から外国語教育センター)、スラブ研究センター、情報基盤センター、留学生センター(2007年度2コマ、2008年度なし)、高等教育機能開発総合センター(2008年度なし)、公共政策学教育部(2006年度なし)、観光学高等研究センター(2006年度創設、2007年度2コマ、2008年度2コマ)、アイヌ・先住民研究センター(2008年度創設)となっている。「人間集団の生活様式全体を意味する文化を、多様な学問的視点から分析かつ総合することによって、人間とは何かを問おうとするものである」(手引、2頁)「人間と文化」というテーマのもとで、文系部局の担当が多いが、「最良の専門家による最良の非専門教育」をめざす「全学協力」体制は整っているといえる。また、2006年度以降新たに創設された観光学高等研究センター、アイヌ・先住民研究センターがこの科目を積極的に開講しているのは、この科目の本来の目的やあり方に照らしても望ましいことといえる。

「人間と文化」の開講総数を年度・学期ごとにみると、2006年度1学期5、2学期5、2007年度1学期5、2学期9、2008年度1学期7、2学期5、2009年度1学期7、2学期5コマ(キャンパスコンソーシアム函館の提供する集中講義(各学期1コマ)を含む)、平均6コマである。2007年度2学期と2008、2009年度1学期に若干増えたものの、おおむね開講総数は5コマである。この開講総数は、年度ごとに多少の変化もあり、他の総合科目3科目と比較する必要もあるが(たとえば、この間の「環境と人間」の開講総数は9~23と、「人間と文化」よりもかなり多い)、おおむね妥当といえる。

「人間と文化」の履修者総数は、2006年度1学期275、2学期328、2007年度1学期312、2学期777、2008年度1学期544、2学期505、2009年度1学期439(うち集中18)、2学期333(うち集中10)人である。したがって、1科目の平均履修者数は、2006年度1学期55.0、2学期65.6、2007年度1学期62.4、2学期86.33、2008年度1学期77.71、2学期101.0、2009年度1学期70.17、2学期66.6人である。この数は、他の総合科目の履修者数と同程度で、この種の講義科目の1クラス

の人数としてはほぼ妥当といえる。

2005 年度 1 学期の履修者総数は 331, 2 学期は 654 人に上ったが、2006 年度 2 学期には 328 人とほぼ半減（50.2%）した。履修者数のこの大きな減少は、2006 年度から新たに実施された履修単位の上限設定の結果であり、他の主題別科目などにもみられる傾向で、学生が選択科目を絞り込んで履修せざるを得なかつたことをうかがわせる。この事態を積極的に捉えるならば、「少ない科目を集中して取組む」という、「単位の実質化」につながっているといえるだろう。（点検評価報告書、15 頁）。

「単位の実質化」という観点からみた場合、その指標の一つとなるのは、学生たちの自習時間であるが、総合科目（「人間と文化」だけに限った統計資料はない）に関してそれを見てみると、2006 年度 1 学期 0.80, 2 学期 0.69, 2007 年度 1 学期 0.67, 2 学期 0.83, 2008 年度 1 学期が 0.87 時間であり、2006 年度 2 学期から 2007 年度 1 学期にかけて一度落ち込んでいるものの、確実に増加してきており、2008 年度前期は、2006 年度前期に比べて、0.07 自習時間が増加している。ただし、2008 年度 1 学期の学習時間充足率は 39.5% と、文系基礎科目「社会科学の基礎」の 35.7% に次いで低い。したがって、学生たちの自習時間をいかに増やすかが、総合科目運営上の課題の一つといえるであろう。

「人間と文化」の GPA は、2006 年度 1 学期 2.32, 2 学期 2.15, 2007 年度 1 学期 2.29, 2 学期 2.16, 2008 年度 1 学期 2.47, 2 学期 2.31 であり、おおむね各年度・学期の全科目の平均値（2006 年度 1 学期 2.34, 2 学期 2.28, 2007 年度 1 学期 2.33, 2 学期 2.29, 2008 年度 1 学期 2.31, 2 学期 2.31），さらに「厳格な成績評価」の平均 GPA 目標値「2.35」（点検評価報告書、16 頁）にも近い。「評価の極端な片寄り」の点検基準「 $2.35 \pm 0.5 \sim 0.6$ 」（同）を超えるのは 2006 年度 2 学期、2007 年度 2 学期、2008 年度 1 学期である。したがって、評価の仕方もおおむね妥当といえる。

総合科目は、上記のような趣旨のもとで、関連領域の複数の教員による講義である点に特色があるが、その分、講義全体が散漫・細切れになる危険性もある。また、「主題中心」という観点からみた場合、「主題別科目」との違いが見きわめづらいのではないかという懸念もある。それらも踏まえて、この科目のメリットが十分生かされているかどうかを検証する必要がある。そのひとつの目安として、学生による授業アンケートの総合評価（授業への満足度）の数値を、可能な限り拾ってみると（2006 年度、2008 年度 2 学期はデータがない）、2007 年度 1 学期：3.93, 4.45, 2 学期：3.65, 4.17, 3.33, 4.08, 4.40, 2008 年度 1 学期：4.24, 3.94, 4.35, 4.10, 4.10, 4.49（5 点満点）で、2007 年度（2006 年度 2 学期・2007 年度 1 学期実施）の全学教育講義科目平均 3.73, 2008 年度（2007 年度 2 学期・2008 年度 1 学期実施）の全学教育講義科目平均 3.77 を、ほとんどの講義が上回っている。したがって、授業の内容・方法等に関しても、比較的高い評価を得ているといえるだろう。

以上のように、「人間と文化」は、全体として、当初の計画に基づいて、適切な仕方で展開されないと報告することができる。

（佐々木啓）

### 3-2-4. 総合科目「特別講義」

#### 1) 実施の経緯

「特別講義」は総合的な主題に基づいて、学内外の有識者などが担当する特別に企画された授業科目で、「北海道大学の人と学問」「大学と社会」「キャリアデザイン」の 3 科目が開講されている。特に「大学と社会」と「キャリアデザイン」は、全学教育におけるキャリア教育の一環として入学直後

の1年生を中心に将来のキャリアや大学生活の重要性を考えさせるために実施している。

「北海道大学の人と学問」は、入学直後の学生が、北海道大学の4つの基本理念と4つの教育目標、本学設立の経緯、発展の過程、現状などを理解し、さらに、さまざまな学部の最新の研究あるいは問題意識を知ることによって、本学の学生としての自覚を持ち、本学でのこれから勉学への意欲を高めることを期待して開講された。

「大学と社会」は、平成10年度に当時の中村総長の発案により開講された。受験勉強の中で社会経験が乏しく、また、将来の進路等について考える機会が少ない現在の新入生を対象として、自らの将来を考える機会を与える、有意義な大学生活を送るきっかけにするために開講された。

「キャリアデザイン」は、入学後のできるだけ早期に自らのキャリアを考えるきっかけを与え、自らの目標に向かって前向きに勉学することを促すために、キャリア教育科目として2005年度から開講されている。

## 2) 履修者数の推移

履修単位の上限設定、単位数の減少（2単位→1単位）の影響もあって、特別講義の履修者数は減少傾向にある。

表1：特別講義の履修者数の推移

	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度
北海道大学の人と学問	61	74	50	37
大学と社会	411	297	335	202
キャリアデザイン	28	78	72	73
合計	500	449	457	312

## 3) 各科目の内容

「北海道大学の人と学問」では、総長が本学の歴史などについて、各学部長が当該学部の歴史や最新の研究状況などについて講義を行う。各回の講義ごとにレポートの作成・提出を行っている。

「大学と社会」は、北大を卒業し産業界、行政、マスコミ等さまざまな分野で活躍する方々を講師としてお招きし、学生時代から現在までの体験談や、職業人として活動することを通して「現在あるいは将来の職業人としてどのような資質が求められるか」「そのために大学でどのように学べばよいか」「北海道大学や学生諸君に期待することは何か」などを講義していただき、これらの話をもとに、学生が自らの生活や将来について考え、これらをレポートにまとめている。

「キャリアデザイン」は、大学で「学ぶこと」と社会で「働くこと」の意義や関連性を考え、今後の自らのキャリアを考えるきっかけとする目的に、社会の第一線で活躍している方々の学生生活から現在に至るまでの体験談、キャリア形成についての講義に加え、これらをテーマとした小グループによるディスカッション、プレゼンテーションや自己分析などを行っている。

## 4) 成果

キャリア教育の一環として実施している「キャリアデザイン」において、受講終了後のアンケート調査結果（図1）をみると、大半の学生が、将来のキャリアに役立った（「非常に役立った」+「やや役立った」）、学習意欲が高まった（「非常に高まった」+「やや高まった」）と回答しており、本科目の成果があったことがわかる。

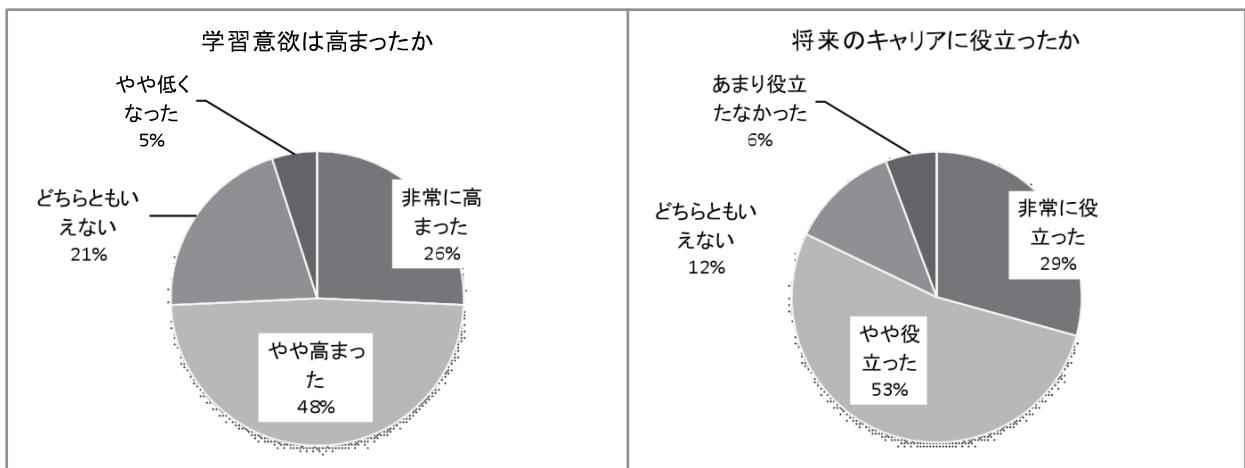


図1：「キャリアデザイン」受講生に対するアンケート調査結果（2006～2008年度の累計）

## 5) 今後の課題

特別講義は、入学直後の学生に対して、本学でのこれから勉学への意欲を高めることや、将来のキャリアを考えることを目的としているので、新入生を中心に多くの学生が受講することが望ましい。しかしながら、2) でみたように履修者数は減少傾向にある。このため、特別講義の意義や有効性を入学直後の新入生に効果的にアピールできる方策を検討すべきである。

また、特別講義は学内外の有識者が講師となるため、講師の選定・確保、講義内容の調整を図るとともに、授業科目全体の統一性を図るため、担当教員によるとりまとめや講義等も必要である。

(亀野 淳)

### 3-3-1. 主題別科目「思索と言語」「歴史の視座」「芸術と文学」「社会の認識」

#### 新教育課程の基本方針と内容

新教育課程の一般的な目的は、「学力の多様化」に応じたステップアップ授業方式と基礎学力の育成にあり、新教育課程の実質的な改正点のうち主題別科目に関連するものは、①1学期 20単位・年間40単位の履修登録単位数の上限設定、②分野別科目を主題別科目と名を改め、文系の専門教育につながる入門的な科目を文系基礎科目としたことにより、主題別科目は「全学共通の必須の教養科目（非専門科目）」に特化の2点が挙げられる。また、主題別科目については前身の分野別科目等の履修者数の減少が懸念され、5科目から各2単位、計10単位以上修得が望ましいという提言もなされた。

本報告では、はじめに「I. 実施状況」として学期別・科目別・論文指導の有無別と履修取消しについて、「II. 教育改善の成果」としてGPA値の向上についてデータ分析を行う。次に「III. 今後さらに改善を要する点」として、履修登録単位数上限設定と「学力の多様化に応じたステップアップ授業方式」について、これらの具体的改革が所期の目的を達成していたかどうかを検討し、「IV. 改善の方策」を提言する。

#### 1) 主題別科目の実施状況（開講クラス数、履修者数、履修取消し）など

##### (1) 1学期

新教育課程の実施状況を、学期別の開講クラス数と履修者数でみると、1学期では、平成17～21

年度に99→77クラスに、履修者数も7,857→5,289人に減少した。クラス数・履修者数は年度ごとに増減が大きいため、平成18~21年度の4年間の平均値と17年度の増減率を、科目別・論文指導の(なし/あり)の別で算出すると、クラス数は68/84%に、履修者数は63/69%に減少した(表1)。

表1：主題別科目的開講クラス数と履修者数の推移(平成17~21年度1学期)

授業科目	クラス数							履修者数						
	年度	17	18	19	20	21	平均	17比	17	18	19	20	21	平均
思索と言語	15	11	10	7	7	8.8	58%	1,396	709	985	833	809	834.0	60%
思索と言語 (論文指導)	7	7	6	7	5	6.3	89%	168	141	109	131	104	121.3	72%
歴史の視座	14	10	9	7	12	9.5	68%	1,125	601	872	903	985	840.3	75%
歴史の視座 (論文指導)	6	4	2	2	3	2.8	46%	102	60	33	31	92	54.0	53%
芸術と文学	15	6	7	7	13	8.3	55%	1,158	364	717	542	865	622.0	54%
芸術と文学 (集中)	2	3	2	2	2	2.3	113%	170	300	194	173	140	201.8	119%
芸術と文学 (論文指導)	4	4	3	6	6	4.8	119%	125	69	51	115	121	89.0	71%
社会の認識	24	18	17	21	19	18.8	78%	3,332	1,901	1,958	2,098	2,008	1,991.3	60%
社会の認識 (論文指導)	12	11	12	10	10	10.8	90%	281	150	273	219	165	201.8	72%
論文なし 計	70	48	45	44	53	47.5	68%	7,181	3,875	4,726	4,549	4,807	4,489.3	63%
論文 計	29	26	23	25	24	24.5	84%	676	420	466	496	482	466.0	69%

表2：主題別科目の開講クラス数と履修者数の推移(平成17~21年度2学期)

授業科目	クラス数							履修者数						
	年度	17	18	19	20	21	平均	17比	17	18	19	20	21	平均
思索と言語	6	11	13	13	11	12.0	200%	365	632	695	1,006	1,210	885.8	243%
思索と言語 (論文指導)	8	7	3	3	3	4.0	50%	165	59	26	25	55	41.3	25%
歴史の視座	7	10	12	12	5	9.8	139%	582	691	878	1,167	1,085	955.3	164%
歴史の視座 (論文指導)	4	5	2	2	3	3.0	75%	60	90	17	31	54	48.0	80%
芸術と文学	11	19	13	11	7	12.5	114%	758	1,807	1,069	1,030	784	1,172.5	155%
芸術と文学 (集中)	1	0	1	0	0	1.0	100%	63	0	70	0	0	70.0	111%
芸術と文学 (論文指導)	4	3	4	1	1	2.3	56%	113	64	68	22	10	41.0	36%
社会の認識	21	14	20	12	14	15.0	71%	2,786	1,282	1,479	1,330	1,926	1,504.3	54%
社会の認識 (論文指導)	6	8	10	6	6	7.5	125%	82	113	117	107	96	108.3	132%
論文なし 計	46	54	59	48	37	49.5	108%	4,554	4,412	4,191	4,533	5,005	4,535.3	100%
論文 計	22	23	19	12	13	16.8	76%	420	326	228	185	215	238.5	57%

## (2) 2学期

2学期では、平成17~21年度に68→50クラスに減少し、履修者数は4,794→5,220人に増加した。

平成18~21年度の平均値と17年度の増減率を、科目別・論文指導の(なし/あり)の別で算出する

と、クラス数は 108／76%，履修者数は 100／57%で（表 2），論文指導なしの科目は増減なし、論文指導科目は減少している。これは、1 学期の開講分の一部を 2 学期に移して両学期の開講数を調整し、18 年度 2 学期にいくつかの科目の開講数・履修者数が大幅に増加したためである。

### （3）1 学期と 2 学期の合計

新教育課程の実施状況全般をみるため、1・2 学期合計のクラス数と履修者数を表 3 に示す。平成 17～21 年度に、合計クラス数は 167→127、履修者数は 12,831→10,509 に減少した。平成 18～21 年度の平均値と 17 年度の増減率を、科目別・論文指導の（なし／あり）の別で算出すると、クラス数は 84／81%，履修者数は 77／64%に減少した。論文指導の有無で 1 クラスあたりの履修者数に開きがあるのは、論文指導では履修者数を制限しているためで、開講クラス数もガイドラインで責任部局に配分される数に従っている。

表 3：主題別科目的開講クラス数と履修者数の推移（平成 17～21 年度 1・2 学期）

授業科目	クラス数							履修者数						
	年度	17	18	19	20	21	平均	17比	17	18	19	20	21	平均
思索と言語	21	22	23	20	18	20.8	99%	1,761	1,341	1,680	1,839	2,019	1,719.8	98%
思索と言語 (論文指導)	15	14	9	10	8	10.3	68%	333	200	135	156	159	162.5	49%
歴史の視座	21	20	21	19	17	19.3	92%	1,707	1,292	1,750	2,070	2,070	1,795.5	105%
歴史の視座 (論文指導)	10	9	4	4	6	5.8	58%	162	150	50	62	146	102.0	63%
芸術と文学	26	25	20	18	20	20.8	80%	1,916	2,171	1,786	1,572	1,649	1,794.5	94%
芸術と文学 (集中)	3	3	3	2	2	2.5	83%	233	300	264	173	140	219.3	94%
芸術と文学 (論文指導)	8	7	7	7	7	7.0	88%	238	133	119	137	131	130.0	55%
社会の認識	45	32	37	33	33	33.8	75%	6,118	3,183	3,437	3,428	3,934	3,495.5	57%
社会の認識 (論文指導)	18	19	22	16	16	18.3	101%	363	263	390	326	261	310.0	85%
論文なし 計	116	102	104	92	90	97.0	84%	11,735	8,287	8,917	9,082	9,812	9,024.5	77%
論文 計	51	49	42	37	37	41.3	81%	1,096	746	694	681	697	704.5	64%

表 4：主題別科目的開講クラス数と履修者数の推移（科目別）（平成 17～20 年度 1・2 学期）

授業科目	クラス数							履修者数						
	年度	17	18	19	20	21	平均	17比	17	18	19	20	21	平均
思索と言語	36	36	32	30	26	31.0	86%	2,094	1,541	1,815	1,995	2,178	1,882.3	90%
歴史の視座	31	29	25	23	23	25.0	81%	1,869	1,442	1,800	2,132	2,216	1,897.5	102%
芸術と文学	37	35	30	27	29	30.3	82%	2,387	2,604	2,169	1,882	1,920	2,143.8	90%
社会の認識	63	51	59	49	49	52.0	83%	6,481	3,446	3,827	3,754	4,195	3,805.5	59%
計	167	151	146	129	127	138.3	83%	12,831	9,033	9,611	9,763	10,509	9,729.0	76%

### （4）科目別・論文指導の有無別にみた開講クラス数と履修者数

主題別科目の 4 科目について平成 17 年度以降の実施状況を、科目を区別しない論文指導の有無別（表 3：「論文（指導）なし」「論文（指導）」計）と論文指導の有無を区別しない科目別（表 4）でみると、いずれにおいても平均的数値を示しており、科目間・論文指導の有無による不均衡はない。

## (5) 履修取消しの状況

平成 19 年度から履修取消し制度が実施され、その科目別・学期別の推移は表 5 の通りで、19~21 年度に、取消し延べ人数は 208→346→320 人、取消し講義件数は 82→84→86 件であった。取消し人数はやや増加傾向にあるが、履修者数とクラス数全体における取消し人数および取消し講義の比率(%)は表 6 の通りで、取消し申請者率は、「思索と言語」が 4~6%，他は 2~3%，取消し該当講義率は 55~70% であり、科目間の大きな差はない。

表 5：主題別科目の履修取消し者数と講義数（平成 19~21 年度 1・2 学期）

注) 人=取消し延べ人数、件=取消し講義件数

年度	19・1		19・2		19年度		20・1		20・2		20年度		21・1		21・2		21年度		合計		学期平均	
	人	件	人	件	人	件	人	件	人	件	人	件	人	件	人	件	人	件	人	件	人	件
思索と言語	21	7	29	11	50	18	31	9	90	12	121	21	18	9	63	12	81	21	252	60	42	10
歴史の視座	7	4	27	11	34	15	19	6	53	11	72	17	19	8	34	5	53	13	159	45	27	8
芸術と文学	12	5	35	12	47	17	21	9	30	8	51	17	37	14	15	6	52	20	150	54	25	9
社会の認識	28	15	49	17	77	32	63	20	39	9	102	29	73	18	61	14	134	32	313	93	52	16
合計	68	31	140	51	208	82	134	44	212	40	346	84	147	49	173	37	320	86	874	252	146	42
4科目平均	17	8	35	13	52	21	34	11	53	10	87	21	37	12	43	9	80	22	219	63	36	11

表 6：主題別科目全体と履修取消しの比率(%)（平成 19~21 年度 1・2 学期）

年度	19 年度		20 年度		21 年度		平均	
	人	件	人	件	人	件	人	件
思索と言語	2.75	56.25	6.07	70.00	3.72	80.77	4.21	68.18
歴史の視座	1.89	60.00	3.38	73.91	2.39	56.52	2.59	63.38
芸術と文学	2.17	56.67	2.71	62.96	2.71	68.97	2.51	62.79
社会の認識	2.01	54.24	2.72	59.18	3.19	65.31	2.66	59.24
平均	2.16	56.16	3.54	65.12	3.05	67.72	2.92	62.69

表 7：主題別科目の GPA の推移（平成 18~20 年度 1・2 学期）

年度・学期	18-1	18-2	18 年度	19-1	19-2	19 年度	20-1	20-2	20 年度	平均
思索と言語	2.21	1.97	2.09	2.03	1.97	2.00	2.26	2.22	2.24	2.09
思索と言語(論文指導)	2.36	2.07	2.22	2.32	3.05	2.69	2.58	3.04	2.81	2.54
歴史の視座	2.29	2.09	2.19	2.15	2.00	2.08	1.88	2.27	2.08	2.12
歴史の視座(論文指導)	2.30	2.34	2.32	2.81	2.64	2.73	2.84	2.52	2.68	2.56
芸術と文学	2.28	2.35	2.32	2.13	2.30	2.22	2.13	2.31	2.22	2.25
芸術と文学(論文指導)	2.61	2.40	2.51	3.05	2.49	2.77	2.46	2.18	2.32	2.56
社会の認識	2.05	2.14	2.10	2.00	2.03	2.02	2.09	2.13	2.11	2.07
社会の認識(論文指導)	2.46	2.71	2.59	2.49	2.65	2.57	2.74	2.87	2.81	2.63
平均	2.32	2.26	2.29	2.37	2.39	2.38	2.37	2.44	2.41	2.35

## 2) 教育改善の成果（GPA 目標値の向上）

GPA の目標値は、平成 19 年度には 2.35 であったが、20 年度から 2.40 に引き上げられた。18~20 年度の集計を表 7 でみると、18 年度 2.29→19 年度 2.38→20 年度 2.41 と、理想的な向上値を示している。表 7 の項目別には数値に「ばらつき」がみられるが、論文指導を区別せず、科目別に集計すると、表 8 の通り科目間に成績評価に関して大きな格差はない。論文指導を伴う授業の成績評価(GPA)

は高いが、論文指導のない授業との格差を表9で確認すると、その差は平成18年度0.24、19年度0.61、20年度0.49、平均すると0.44である。

表8：主題別科目のGPAの推移（科目別）（平成18～20年度1・2学期）

年度・学期	18-1	18-2	18年度	19-1	19-2	19年度	20-1	20-2	20年度	平均
思索と言語	2.29	2.02	2.15	2.18	2.51	2.34	2.42	2.63	2.53	2.32
歴史の視座	2.30	2.22	2.26	2.48	2.32	2.40	2.36	2.40	2.38	2.34
芸術と文学	2.45	2.38	2.41	2.59	2.40	2.49	2.30	2.25	2.27	2.41
社会の認識	2.26	2.43	2.34	2.25	2.34	2.29	2.42	2.50	2.46	2.35
平均	2.32	2.26	2.29	2.37	2.39	2.38	2.37	2.44	2.41	2.35

表9：主題別科目のGPAの推移（論文指導とそれ以外）（平成18～20年度1・2学期）

年度・学期	18-1	18-2	18年度	19-1	19-2	19年度	20-1	20-2	20年度	平均
集中・論文指導以外	2.21	2.14	2.17	2.08	2.08	2.08	2.09	2.23	2.16	2.13
論文指導	2.43	2.38	2.41	2.67	2.71	2.69	2.66	2.65	2.65	2.57
差	0.22	0.24	0.24	0.59	0.63	0.61	0.57	0.42	0.49	0.44

### 3) 今後さらに改善を要する点

#### (1) 履修登録単位数上限設定の目的と効果

上限設定の導入の目的としては、一般的な目的である「学力の多様化に応じたステップアップ授業方式」と「基礎学力の育成」とは別に、1) 学生の主体的な学習を促し、十分な学習時間を確保することによって、単位の実質化を図り、2) 卒業時の学生の学力の質を確保することを基本線とする。他にも、3) 成績不振の学生には、履修科目を絞り込み・少ない科目に集中して取り組むよう指導、4) 成績優秀な学生には、履修登録単位数の上限を高めて、幅広い学習を奨励することが目的として掲げられているが、3), 4) については資料の制約上、分析ができないので、1), 2) について検討する。

表10：授業アンケートによる学生の自習時間（平成18年度1学期～20年度1学期）

自習時間	全体平均	全学・講義	全学・演習	全学平均	専門・講義	専門・演習	専門平均
H18-1学期	0.93	0.98	1.19	1.01	0.83	1.47	0.87
H18-2学期	0.93	0.96	1.04	0.97	0.87	1.54	0.91
H19-1学期	1.03	1.01	1.28	1.05	0.97	1.54	1.01
H19-2学期	1.03	0.98	1.11	1.00	0.99	1.61	1.04
H20-1学期	1.06	1.00	1.21	1.01	1.05	1.54	1.08

まず上限設定の第一義的目的である1) 自習時間の増加について確認する。ところが、北海道大学による自習時間のアンケート調査は平成18年度以降しか行われておらず（表10）、上限設定によって自習時間の増加がみられたかどうかは確認できない。しかし、それでも18年度1学期以降、自習時間は増加の一途をたどっていることに気づかされる。上限設定は導入されたか否かの0-1で表わされる制度であるため段階的に趣旨が及ぶということは論理的にありえない。すなわち、上限設定の導入とは関係なく自習時間は増加しているということである。このような現象は、近時の学生が昔に比較してpositiveにもnegativeにも優等生気質の学生が増えているのではないかという現場の教員の実感と一致するものとして説明できる。反面、自習時間の増加という観点からは上限設定制度の有用性を疑わせる間接証拠といふことになろう。残念ながら上限設定は所期の目的を達成する手段として適切

ではないと判断せざるを得ない。

全学・講義／全学・演習に着目すると、1学期の自習時間と比較して2学期の自習時間が減少していることに気づかされる。反面、専門科目の自習時間は増加し続け、専門・講義は平成18年度の時点では全学・講義よりも自習時間は少なかったにもかかわらず、21年度1学期には逆転されている。このことをどう評価するか。一つには、専門科目が全学の自習時間を榨取しているという考え方であろう。しかし、全体としての自習時間は増加していることからすれば全学教育科目の自習時間の減少を補って余りある増加を専門科目は供給していることからすると、仮に専門科目による榨取が存在したとしてもマイナスに評価することは早計である。むしろ、学生のニーズ（しかも口先だけの楽な授業を受けたいというニーズではなく現実に勉強を伴う真摯なニーズ）は専門教育に向いていることを正面から考えなくてはならない。しかも、2学期に全学教育科目の自習時間が減少することは受講経験者が全学教育科目の自習時間を割く価値評価を下げているのであって、仮に1年次に専門科目の開講を避けると2学期において絶対値としての勉強時間は減少する（サークル活動その他の活動に割く時間を増加させる）可能性が高い。

次いで、2) 卒業時の学生の学力の質の担保については、卒業時の学力が向上したのであれば、卒業生の就職先への変化、国家試験への合格率の上昇に表れなくてはならない。確かに大学は就職養成機関や国家試験受験予備校ではないが、客観的に正しい基礎学力が付いていることの最も適切な外部評価は学生が社会にどのように評価されたのかという就職先、国家試験合格率であろう。新教育課程による卒業生は平成21年度3月まで存在せず、現段階（平成21年11月現在）では評価できないが、既に結果の出ている国家公務員I種試験合格者については平成19年度58人（出身大学別7位）、20年度57人（6位）に対し、21年度は45人（8位）と全体数で10人程度例年よりも数を落としている。一概には言えないが、段階的ではなく一年で急落したことからすると、新教育課程によって卒業間近の学生の学力の質はむしろ下がったと外部に評価されている恐れがある。無論、外部試験の結果のみが学力の指標ではないが、上限設定が学生の授業を受ける利益を制約するものである以上、上限設定によって上昇した学力（仮にあるとすれば）の内実を積極的に説明する責任が求められよう。

## （2）文系基礎科目との役割分担について～ステップアップの有無～

主題別科目は「全学共通の必須の教養」と定義されているが、仮に全学に必須の教養なるものが高等学校教育を超えて存在するとしても、1科目でカバーすることは不可能であり、かといって上限設定からして多数の科目を履修することはできない。となると、非専門科目という点にのみ特質があることになろう。シラバスを参照するかぎり文系基礎科目と主題別科目を対比すると、概ね前者は専門科目につながるトレーニングとなるような教育が積極的に施されている点からして運用も目的に沿つたものとなっている。ただし、主題別科目の中にも若干数、専門科目のトレーニングとなる科目が散見される。このことをどう評価するか。

文系科目は高等学校の政治経済、日本史・世界史や国語とは方法論がそもそも異なる。この方法論の導入として文系基礎科目が予定されているわけであるが、文系基礎科目の受講資格は文系に限定されていることから理系には文系専門科目の基礎となる方法論を学ぶ機会が失われる恐れがある。これに対して文系向けの「科学・技術の世界」においては線形代数、微分積分、物理学等の理系科目の基礎ともなる科目の学習が可能である。今後、文系・理系の枠を越えた学際的な研究や社会の求める人材の変化の可能性からすると理系学生にも文系専門の導入となるような学習機会を確保すべきである

とするならば、若干数の主題別科目が専門科目導入的な内容を提供することはむしろ積極的に評価されるべきである。

#### 4) 改善の方策

まず、上限設定については所定の目的を達成するどころか、学力の増加について反するおそれもあることから、廃止の可能性も念頭において再検討せねばなるまい。特に、文系については、学力低下につながっていることが強くうかがわれる。このような制度を説明なしに存続させでは、結果を問わずに改革をすることのみに存在意義を見出す組織の存続のみを目的とした非効率的組織として、昨今の政治情勢から真っ先に予算の縮減等の対象となる恐れもある。少なくとも現段階では積極的説明がない以上、上限設定は文系については撤回が望ましい。

また、主題別科目は非専門科目であることに意義があるのはわかるが、理系学生に文系専門科目の方法論を学ばせる機会として活用する方向も考えてよいであろう。それには今まで通り若干数、専門科目導入的な主題別科目を設けるか、もしくは専門科目の導入か非専門かを明示した上で文系基礎科目と再統合する方法も考えられる。

(細田典明、得津 晶、西部 忠)

### 3-3-2. 主題別科目「科学・技術の世界」

本科目は、教員の専門分野について一般学生を対象として講義を行う主題別科目のうち、自然科学および科学技術について、その基本的な思考方法や、各分野が抱える課題について説き、学生に科学・技術への関心を深めさせる狙いをもつものである。新教育課程では、それまでの科目の基本的な考え方を引き継ぎつつも、学生が一層、科学・技術に深い興味を抱けるような授業となるよう、内容・方法についていくつかの改善が試みられている。

#### 1) 実施の概況

平成 18 年度以降の担当部局とその担当科目数は、それぞれ文学部 (4~7, ほかに論文指導 1~4), 教育学部 (平成 18 年度のみ 3), 理学部 (19~22, ほかに論文指導 0~1), 工学部 (3~4, ほかに論文指導 0~2), 地球研 (1~2) コマである。平成 18 年度は 3 コマが非常勤の担当であったが、19 年度にはこれを 1 コマに減らし、20 年度以降は非常勤枠がなくなりて全員専任教員の担当となった (平成 16 年度の非常勤講師検討 WG の答申に沿った削減)。各年度の開講数、履修者数は表 1 のとおり (平成 19 年度以降の履修者数は、履修取消し受付後の数)。平成 16 年度と 19 年度のそれぞれ 1 学期の履修者数の比較で履修者数 2,561 人減 (16 年度比 36.5%) に基づき、19 年度のクラス数検討において、1 学期開講数 20 (論文指導除く) を 5 クラス程度削減するのが適当との見方が示され、21 年度 1 学期は講義数が 17 に調整されている。新教育課程が始まってから、本科目の通常講義の履修者平均は 70 人前半から 80 代後半に収まっており、旧課程の平均 (平成 16 年度 1 学期 144.11, 17 年度 1 学期 155.24) 人に比べると約半数である。これは、学生の様子を見ながら授業の内容や進度の適切さを判断する上で、また授業ができるだけインタラクティブに進める上でも適当な数と思われ、今後もこの数を上回らないよう配慮する必要がある。

表1 「科学・技術の世界」開講科目数・履修者数の推移（平成18～21年度）（論文：論文指導）

		H18年度			H19年度			H20年度			H21年度		
		開講数 (前年)	履修者 (前年比)	1クラス 平均	開講数	履修者	1クラス 平均	開講数	履修者	1クラス 平均	開講数	履修者	1クラス 平均
1 学 期		19 (25)	1,376 (35.5%)	72.42	20	1,474	73.70	21	1,806	86.00	17	1,518	89.29
	論文	3 (4)	74 (72.5%)	24.67	4	110	27.50	1	29	29.00	3	64	21.33
2 学 期		17 (16)	1,417 (80.8%)	83.35	12	1,012	84.33	9	736	81.78	14	1,266	90.43
	論文	2 (1)	39 (169.6%)	19.50	0	0	0	0	0	0	0	0	0

授業内容は、i) 天文学や半導体エレクトロニクス、ダイヤモンド科学などの単分野、ii) 生物保全や種々のインフラストラクチャ、自然災害など、複数の科学・技術分野ならびに社会問題に関わる複合分野、iii) 科学的思考（哲学）や歴史、方法論など科学・技術の背景的な基礎分野の3つに大きく分けることができる。学生の科学・技術に対する多様な興味をできるかぎり満たす（特に、科学・技術分野の授業機会が少ない文系学生に対し）という点で、現在は内容的に概ねバランスのとれた授業提供がなされていると思われる。

成績評価については、新課程導入後、上記の授業の多様性に鑑み、統一基準を設けることは特にしていないが、授業ごとに評価方法を明示し、「『秀および優』を取得する者の数が履修登録者の50%を超えないように努力する」ことを共通の基準としている。結果は、平成20年度までの各年度（1学期／2学期）の「秀」＋「優」の割合は、18年度（47.1／38.6）、19年度（44.1／42.2）、20年度（47.8／41.1）%で、この基準を逸脱した科目はこれまでのところ一科目もなく、また本科目の平均GPAは18年度（2.37／2.18）、19年度（2.24／2.20）、20年度（2.27／2.19）%となっており、分布に著しい偏りはない。学生からの成績評価結果問い合わせも、本科目に関してはこれまで一件もなく、成績評価方法については特に大きな問題は認められない。

## 2) 教育改善の成果

本科目では、新課程導入後に授業内容・方法において、いくつか改善が試みられた。まず内容に関しては、理系の学生が専門に分属してからはなかなか学ぶことができないような、科学・技術をより広い視点で客観的・反省的に顧みる授業科目が複数開講されたことが挙げられる（「科学的に思考する」「ゼロからはじめる『科学力』養成講座」「科学哲学入門」など）。これらの授業では、科学・技術のバックグラウンドに焦点を当てることで、科学・技術へのより一層深い興味を呼び起こしつつ、自分が今後学ぼうとすることをより広い視点で捉え、その目標や意義を先鋭化する効果が期待できる。また、こうした授業は科学の前提知識をさほど要求しないため、文系学生も履修しやすく、授業内で理系学生と共にテーマを論じ合うことも可能である。これは現在重視されつつある科学コミュニケーションの観点からも好ましいことである。さらに、特に大学初年次の学生は、「科学とは何か」「技術とは何か」という本質的テーマに漠然とではあるが興味をもっているケースが多く、こうした科目には、専門科目への橋渡しとしての意義もあると考えられる。この試みの成果は数値的には示しにくいが、各授業担当者が行っている授業アンケートの自由記述等で、「高校時代から気になっていたことがきちんとと考えられてうれしい」「科学的に考えることの面白さがよく分かった」など、学生の興味・関心の高さを示す結果が多く得られている。

方法に関する改善としてはまず、元々米国で普及していた「クリッカー」システムが本科目の一部

の科目（「ゼロからはじめる『科学力』養成講座」「『数学はいらない』人のための物理学」）で導入されたことが挙げられる。これは北大では、鈴木久男教員を中心とする物理学教員チームが、平成19年度に一部学部の学生を対象とした物理学の授業に試験的に導入したものであるが、その後「科学・技術の世界」でも同じく鈴木教員を中心に導入された。このシステムは、教員の質問に対して、学生が一人一人与えられたリモコンで回答をクリックして送り、すぐにその結果が確認できるというシステムである。このシステムを用いることによって、i) 理解度にかなりバラツキのある大規模クラスで、学生の理解度を教員が小まめにチェックし授業進行の調整ができる、ii) 学生がただ受動的に授業を受けるのではなくクリックすることで積極的に授業に参加するようになり、授業中の集中力が増し、理解度の自己把握ができる、あるいは出席率が上がることなどが期待されている。「科学・技術の世界」を含む北大での実践においても、90%の受講生が授業でのリモコンクリッカーの使用を支持しており、使用した教員の側では、自ずと教授法の改善につながるとの意見が出されている（「授業応答システム“クリッカー”による能動的学習授業」鈴木・武貞他、高等教育ジャーナルNo.16（2008））。

クリッカー以外の方法的改善の試みとしては、同じく学生の能動的な授業参加を目指したグループ・ディスカッションの導入（「情報科学技術と新しい倫理」「科学技術とどうつきあうか」など）がある。いずれも一定の基礎知識を与えた上ででの討論であり、グループも少人数なので、概ねグループの誰かが話を束ねる役をする中でほとんどの学生が抵抗なく討論に参加している。その結果、討論での意見交換により、自らの考えをまとめる作業が加わり、授業全般への能動的参加が促されたと考えられる。これは、討論後の講義に対する集中力の増加（次の討論に供えた心の準備）、レポート内容の充実（グループディスカッションを行う以前の授業との比較）、アンケートでの記述などに見て取れる。

### 3) 今後の改善点と方策

(1) 本科目の各授業の平均履修者数は適当な数を保っているが、一部に300人を超す授業があるなど、極端な偏りがある。教員の負担、教育効果の点で、たとえTAをフルに活用するとしてもこうした授業は問題があろう。これを避けるためには、学生の興味がさらにうまく分散するような授業種類の工夫、および開講時間帯（学生がその授業に集中せざるを得ないような開講時間帯の偏り）の調整、評価の厳しさについての合意を行う必要があろう。

(2) 学生に授業へのより能動的な参加を促すために、教員側でクリッカーの使用を検討することが望ましい（将来的にはWebとの連動等により、自習時間を増やすことも視野に入るだろう—自習時間の少なさが他の科目同様、本科目でも問題である）。有効な使用を拡大するためには、すでに導入している教員からの情報提供が不可欠であり、そうした情報提供の場を設ける必要がある。ただし、クリッカーは択一的回答しかできず、本科目のすべてがそのようなクイズ形式の授業に馴染むわけではないので、その場合はグループディスカッションなど、他の方法についても併せて検討を要する。グループディスカッションは学生の参加意欲を高めるが、これをどう個々人の成績評価に結びつけるかは難しい問題である。一つの方法はTAをディスカッションに直接参加させるなどグループに張り付かせて報告させることであるが、TAの人数確保と報告内容の保証をどうするかなど、今後さらに検討しなければならない。もう一つの方法として、科学技術コミュニケーション養成講座のスタッフから、希望する教員が効果的な方法についてのレクチャーを受けることなどが考えられる。

(3) 論文指導の授業は、学生にとって直接自分の文章を指導してもらえる貴重な機会であり、人気も高い。フレッシュマンセミナーや他の主題別科目の一部でも論文指導を受けることは可能だが、

特に理系学生にとって本科目の提供する論文指導は将来の専門研究の準備ともなり、たいへん貴重である。しかし、上の表でも示したように提供数は年によりバラツキがあり（平成 20 年度は 1, 2 学期併せて 1 科目の提供しかなかった）、できるだけ毎年一定の数が提供できるようにしたい。特に初年次の学生は、ある程度学習の要領を得た 2 学期に論文指導を受けることが効果的だと思われ、2 学期の提供数を増やしたい。これまででは「科学・技術の世界」の総数としてのみ科目を考え、論文指導は教員の希望に任せてきたが、今後は講義と論文指導を分け、一定数の論文指導を担当部局で回り持ちすることを検討してよいと思われる。

（松王政浩）

### 3-4-1. 共通科目「体育学」

#### ■実施状況

「体育学」は、各学部において選択科目であるにもかかわらず、毎年度 1 学期では新入生の約 8 割に相当する 2,000 人、また、2 学期では約 6 割相当の 1,700 人が受講した（医学部保健学科・教育学部・理学部は選択必須）（表 1）。体育学 A（実技・1 単位）、または平成 18 年度から新設された「体育学 B」（理論・2 単位）は、教職免許状を取得する学生にとって 2 単位の取得が必要であるため、例年半期に約 50～80 人が体育学 B を受講した。平成 21 年度に体育学 A は教育学研究院専任教員 10 名、高等教育機能開発総合センター教員 1 名、非常勤講師 11 名により、1・2 学期で通算 101 コマの授業を開講した。

体育学 A（実技）は、室内種目（バレー、バスケットボール、バドミントン、卓球、軟式テニス、エアロビクスダンス、トレーニング）と屋外種目（ハンドボール、サッカー、ソフトボール、テニス、野外活動）、さらに、冬季にはクロスカントリースキーを開講した。

体育学 B（理論）は、個人の発達と社会の発展という観点から、スポーツ・身体運動への参加の価値や意味および社会における生涯スポーツの役割を取り上げ、専任教員各 5 名のオムニバス方式により 1・2 学期にそれぞれ開講した。

学生が仲間と共にスポーツ文化に親しみ、身体運動を楽しみ、技術・戦術の「できる」喜びを体験するだけでなく、生涯にわたる心身の健康の保持・増進に向けて、日々の生活においてスポーツ・運動習慣を構築できる学生の力量形成と実践力の養成を「体育学」の目的とした。

表 1：体育学 A（実技）の履修者数

	H18 年度		H19 年度		H20 年度		H21 年度
	1 学期	2 学期	1 学期	2 学期	1 学期	2 学期	1 学期
履修学生数	2,064	1,682	2,069	1,765	2,078	1,727	1,978

#### ■教育改善の成果

1・2 学期間において学生が同種目の受講を避けるために異なる種目の開講を推進したこと、また履修者数を種目ごとの特性に対応して調整したことにより、授業の質の向上が図られた。平成 20 年度までは半期 3 名から 5 名の TA 数であったが、21 年度から TA 数を 2 倍に増員することにより、きめ細かな指導と厳格な成績評価がより可能となった（表 2）。

表2：TAの人数

	H18年度		H19年度		H20年度		H21年度
	1学期	2学期	1学期	2学期	1学期	2学期	1学期
TA人数	5	3	5	3	3	4	10

### ■今後さらに改善を要する点

学生がケガをせず安全に履修できることを保障することは、「体育学」運営の重要な課題である。近年、急増しているケガの発症数についての原因の究明と予防の対策を図ることが急務である（表3）。

表3：体育学Aの履修時におけるケガの発症件数

	H18年度		H19年度		H20年度		H21年度
	1学期	2学期	1学期	2学期	1学期	2学期	1学期
ケガ発症数	9	7	11	8	33	19	22
年間合計	16		19		52		22

（水野眞佐夫）

## 3－4－2. 共通科目「情報学」

### 1－1) 情報学Iの実施状況

情報学Iは、高校で学ぶ教科「情報」の履修を前提として、1学期に開講し、情報活用、情報社会及び情報科学について、学部の専門性に関わらず、北大生が修得すべきより高度な情報活用能力を実践的に習得することを目的としている。ほとんどの学部において必修科目となっており、履修者数は毎年約2,600人である。

教材として、情報学I・IIで全クラス共通の教科書、情報基盤センターが作成したテキスト及び情報倫理ビデオ教材等を使用している。

成績評価は、全クラス全グループで統一したガイドラインに基づいて実施している。非常勤講師とTAが出席状況やレポート提出状況をまとめ、それらに基づいて専任教員がグループ間のバランスを考慮して調整を行っている。

### 1－2) 情報学IIの実施状況

情報学IIは、情報学Iをさらに発展させ、情報社会における法・倫理・安全性等を理解するとともに、情報科学の基礎となる内容を学ぶことを目的とし、2学期に開講するほか、再履修クラスを1学期に開講している。履修者数は、学部により必修／選択の別が異なるが、毎年合計700人程度である。教材として、情報学I・IIで全クラス共通の教科書を使用している。成績評価は、共通のガイドラインにしたがって、担当教員の責任により行っている。

### 2－1) 情報学I・IIの企画責任体制

責任部局の工学部では、情報学の企画を円滑に行うために「情報学(I・II)企画委員会」を設置し、内規に則り運営している。委員会の構成は、科目企画責任者(委員長)、情報基盤センター教員2名(うち1名は科目担当責任者)、情報科学研究科教員2名、及び工学研究科教員1名である。

また、企画委員会の判断の下で具体的な企画作業を行うために、5名の教員からなるワーキンググループを組織している。

## 2-2) 情報学Iの実施体制

情報学Iの実施体制として、まず、学部学科に応じて全体を20クラスに分割し、各クラスに1名ずつの北大専任教員を担当教員として置いている（合計延べ20名）。さらに、各クラスを20人程度のグループ（合計136グループ）に分割し、各グループに1名ずつの非常勤講師またはTAを置き、少人数授業を実施している（合計：非常勤講師延べ43名、TA延べ93名）。TAの職務は、事実上、非常勤講師と同じである。特色として、経験豊富なTAを内部で「スーパーTA」（合計14名）と呼称し、担当教員や企画委員と学生の間のパイプ役として、彼らが経験の浅いTAの管理ばかりか授業の円滑運営に重要な役割を果たしていることが挙げられる。彼らは、勤務時間中に一般の学生（その時間帯が情報学の授業になっていない学生）からの質問や相談も受け付ける。

シラバスは、情報学企画委員会が共通のシラバスを作成し、担当教員に実施させている。

FDの一環として、新任のグループ担当者に対しては、新任指導研修会を実施している。新任ではない担当者に対しても、年度当初に説明会を行っている。TAに対しては、高等教育機能開発総合センターと連携して、一層強化されたTA研修会を実施している。また、「TAの単位化」として、TAの教育指導の質の向上を目指した大学院共通授業科目「情報学教育特論」を開講している。TAの本講義履修率は3割程度である。単位修得後は、翌年度のスーパーTAに就任するなど、質の高い教育実施の連環体制を構築する上で本講義は機能している。

## 2-3) 情報学IIの実施体制

情報学IIの実施体制として、各クラスに1名の担当教員（専任または非常勤：合計延べ13名）とTAを置いている。TAの人数は概ね各クラス1名程度である。授業は担当教員による講義が中心である。シラバスは、情報学企画委員会が基本となるシラバスを作成し、担当教員が必要に応じて修正して作成している。

## 3) 教育改善の効果

情報学I・IIは、高校教育に新たに導入された必修の普通教科「情報」を履修した学生が平成18年度から入学することを踏まえ、より高度な情報活用能力の育成をめざし、新教育課程以前の情報処理I・IIと情報科学を再編したものである。

大学での情報リテラシー不要論が言われて久しいが、A、B、C三種類の高校教科書の内容差ならびに高校での扱いの差により、大学入学時における習熟程度のばらつきは大きく、必要なスキルを身に付けてきていない学生が毎年2、3割いる。情報学Iの履修を通してこれらの学生が一定程度のスキルを身に付けることの教育効果は大きい。

情報学は、予習・復習を前提として授業を構成しており、学生による授業評価によると（情報学ではWebを使った独自の授業評価も行っている）、学生は毎週平均約2時間の自習をしている。また、約8割の学生が他の授業に比べ多くの時間を割いていると回答している。学生による授業全体の評価は、授業のわかりやすさや指導者の対応など指導の質と強い相関を持つものの、概ね高評価であり、これは実用性や興味の高さにも強く影響を受けていると思われる。情報学は、内容及び指導の継続的改善により、学生による授業評価を下げることなく、単位の実質化を着実に進めている。また、TA

の指導に対する学生の評価は非常勤講師と変わらず、これには「TA の単位化」も役立っている。

情報学は、社会環境における情報化の進展に応じて、教育内容及び教育方法を逐次改善することが求められる科目である。実際、講義内容を毎年の見直しており、調査では、約9割の学生が新しい内容が多いと回答し、約7割の学生が役に立つ内容が多かったと回答している。新教育課程では、知的財産権や情報セキュリティも含む広い意味での情報倫理の教育を重視して取り組んでいるが、教材の評価も高く、情報倫理への理解も進んでいる。

また、情報学では、先進的な教育学習支援機能を有する情報基盤センターの教育情報システムELMSを全面的に活用している。出席の自動管理、Webを利用した教材の提示・課題の提出と評価、グループでの協調学習、課題の相互評価（他者による評価及びその評価の評価）などで効果的に利用している。これらの方は今後、広く一般の講義においてこのようなシステムを導入する場合の実験の場を提供しているともいえる。

#### 4) 今後の改善方策

初等中等教育の学習指導要領が、平成20～21年にかけて改定され、情報に関する教育、とりわけ、情報モラルが強化される。教科書も「社会と情報」「情報の科学」と2つにまとめられ、これまでより教えられる内容のばらつきが減ることが予想される一方、文系・理系での前提知識が分断される可能性もある。よって、これらの教育を受けた学生が入学してくる平成28年度からの情報教育へ向けて、教育内容を検討し始める必要がある。さらに総合入試における実施体制を鑑みて、非常勤やTAのより効率的な運用方式も継続的に検討する必要がある。  
(工藤峰一)

### 3-4-3. 共通科目「統計学」

#### 1) 統計学の現状

統計学は、平成13年度から以前の基礎科目でなく、共通科目の枠に設定された。開講形態は、統計学の責任部局として経済学部所属の統計学を担当可能なおよそ10名の教員がローテーションを組んで担当しており、他に非常勤講師2名と学内他部局の協力のもとに実施している。統計学は、医学系の3学部（医学部・獣医学部・歯学部）と工学部の一部の系が必修クラス、その他は選択必修科目として開講されている。一部の必修クラス（100人程度）を除いて、50～80人規模の履修者の講義形態となっている。

統計学シラバスは、学生が初めて統計学を系統的に学ぶことを前提にしており、主に

- ①データの整理と記述統計
- ②確率変数と確率分布
- ③標本分布論と統計的推測（推定・仮説検定）

について習得させることを目標にしている。このようなシラバスは開講全クラスで基本的には共通にしているが、担当者の研究領域の差異から、講義内容とそのレベルは必ずしも同じではないと思う。しかし、「秀」評価およびGPAの集計表から、成績公平化の点について概ね改善できていると判断する。なお、平成21年度前期ではGPA平均が2.37であって、近年では最も高い数値（秀23.5%、優

28.0%, 良 22.9%, 可 12.7%, 不可 12.6%) となっているが、これは他の科目並の「秀」評価に近づけようとする各教員の意識変化によるものと思われる。また、近年では後期の履修者は確実に減少傾向にあり、平成 23 年度以降の総合（大きく）入試の枠組みでの「統計学」の履修者数の大幅な変化も危惧される。

表 1：統計学の GPA 平均・履修者数・成績分布（優・秀・良・可・不可）の推移

	H18 前期	H18 後期	H19 前期	H19 後期	H20 前期	H20 後期
GPA	2.05	2.29	2.05	2.26	2.29	2.28
履修者数	874 人	589 人	862 人	495 人	889 人	450 人
秀	12.7%	18.3%	11.8%	15.4%	19.1%	16.4%
優	25.7%	28.5%	28.0%	31.7%	28.2%	30.7%
良	27.2%	24.1%	26.7%	24.4%	26.7%	26.4%
可	20.5%	18.7%	21.9%	17.2%	14.7%	17.8%
不可（+無欠）	13.8%	10.3%	12.2%	11.3%	11.2%	8.7%
開講数	11 コマ					

（平成 19 年度までの「不可」には「無欠」（評価せず）も加えている）

なお、成績評価に際して、従来の「無欠」（評価せず）に相当する「不可」の学生も含まれているのだが、履修科目取り消しの制度が機能していないように思う。

## 2) 統計学の教育改善について

平成 12 年度までは、基礎科目・数学の中の「統計学 I」「統計学 II」として開講されていた経緯もあるのだが、当初は『確率変数』に関わる数学的な部分を重要視した講義展開であった。近年は、統計推測的な内容を重要視した講義展開であり、その結果、

- ①データの整理と記述統計
- ②確率変数と確率分布
- ③標本分布論と統計的推測（推定・仮説検定）

の中で前半部分の理解度が低い学生は「不可」となることが多いため、「統計学」の導入部分にて学問的な興味を抱かせる工夫が必要であると思われる。

また、複数教員が担当するため、担当教員の全ての講義にあてはまるわけではないが、学生アンケートの結果を踏まえて、以下のような教育改善も試みている。

(1) 統計学の講義は多くの教員がスライド形式の講義を行うが、スライド資料を配付あるいは HP からダウンロードできるようにしている。スライド講義は学生から「スライドが見えない」「スライドが早すぎる」といった苦情が出ることが多く、プリントを配付することになるのだが、反面学生はノートを取らないといった逆効果もみえて、「手を動かさずに講義を聴く形態」は好ましくないのは明らかである。そこで、穴埋め式の題材を作成した事例や、講義スライド資料に演習問題をつけて宿題を課す工夫をしている教員もいる。

(2) 視覚的な理解ができるような例題については、JAVA 言語による動く教材を利用することも効果的である。典型的には「確率変数の密度関数・確率関数のグラフ」のパラメータを動かすことから、「2 項分布のポアソン分布近似」「中心極限定理」といった 15 回の講義では時間不足になりがちにな

る事項を視覚的に理解させることは重要である。

### 3) 統計学教育の提言

統計学の履修者は、近年、明らかに減少傾向にあり、50人規模の講義クラスも多くあるが、100人を超える過去の教育体制とは違う視点での教育改善の検討も必要であろう。新教育課程における「統計学」のシラバスは、過去の教育体制と大きく変わることはなかったが、2009年3月9日公示の高等学校の新学習指導要領では、「高等学校の教科「数学Ⅰ」に統計学の内容が明示的に示されており、全ての高校生が統計学の内容を学習することになる」とのことである。従って、近い将来、全学教育での統計学のあり方の再検討が必要になるであろう。実際、現状の「統計学」では、初めて統計学を体系的に学ぶことを念頭に置いた教育内容であったが、新学習要領が“真”に機能して、新入生が基礎的な統計学素養をもって大学に入学するならば、基礎的な事項を再教育するのは単なるリメディアル教育であり、それよりはむしろきめ細かなシラバスが求められる。以上のことから、平成23年度以降の総合教育部の実施体制に鑑みて、かつ、上記のような「高等学校により強化された統計学・情報学」教育を受けた学生を想定した“新しい”より効果的な教育体制を継続的に検討する必要がある。

(柿沢佳秀)

### 3-4-4. 共通科目「インターンシップ」

#### 1) 科目設定の経緯

2003年度学生委員会インターンシップ専門委員会報告を受けて、職業意識の育成や学習意欲の向上を目的として、キャリアセンターと協力して、2004年度より全学教育においてインターンシップ（全学インターンシップ）を正課として実施している。

#### 2-1) 実施体制

全学インターンシップは、高等教育機能開発総合センター生涯学習計画研究部とキャリアセンターの共同で実施し、学生への指導（学生への事前指導・事後指導、学生と企業とのマッチング、成績評価など）に係る部分は生涯学習計画研究部が、事務手続き（学生の申込、企業の募集、企業との連絡調整、保険の加入など）に係る部分はキャリアセンターが担当している。参加人数は表1のとおり。

表1：全学インターンシップの参加者数

	2006年度	2007年度	2008年度
学部生	80	80	64
インターンシップA	46	49	36
インターンシップB	16	17	20
単位外	18	14	8
大学院生	9	5	10
合 計	89	85	74

#### 2-2) 学生への指導

##### (1) 事前指導

インターンシップの実習先が決定した学生に対して事前指導を7月上旬から8月上旬にかけて3回

実施している。内容は、①手続きや心構え、②実習先企業等研究の方法、③実習先企業等との事前調整、④仮説の設定、⑤個人面談などである。

実習先企業等との事前連絡は学生自らが実施している。これも重要な事前研修の一環であると位置づけている。具体的には、学生が自ら実習先企業等に連絡を取り、できるかぎり事前に訪問し、実習内容、留意事項などについて直接担当者と調整を行うよう指導している。

仮説の設定については、漫然とインターンシップに参加するのではなく、よりインターンシップの効果を上げることを目的に実施している。具体的には、仮説を事前に設定し、実習期間中にその仮説を検証させる作業を課している。

個人面談については、1人約10分という短時間ではあるが、参加学生と担当教員が1対1で個人面談を行っている。個人面談の内容は、①実習先企業等研究の状況、②実習先企業等との事前連絡の状況把握、③仮説についてなどである。個人面談の状況に応じてさらなる個人指導も行っている。

このように、全学インターンシップの主目的は就業体験ではあるが、実習先企業等との事前連絡、仮説の設定など教育的要素を加えることにも配慮している。

## (2) 事後指導

事後指導の主な内容は研修成果レポートである。

研修成果レポートは、研修終了後1ヶ月以内に研修成果レポートの作成・提出を義務付けている。内容は①志望動機・目的、②仮説、③研修内容、④仮説の検証結果、⑤研修の結果得たもの、⑥今後の大学生活に向けて、⑦研修の感想の7項目についてA4で2~4ページである。

## (3) 成績評価

原則として、事前研修（個人面談を含む）、インターンシップの実施状況、終了後の研修成果レポート等をもとに評価を行っている。

また、受入企業等に対しては、評価表への記入を依頼して、評価の参考にしている。評価表は①理解力、②企画力、③表現力、④規律性、⑤協調性、⑥積極性、⑦総合評価を5段階で評価してもらい、さらに自由記入によりインターンシップの状況を把握している。

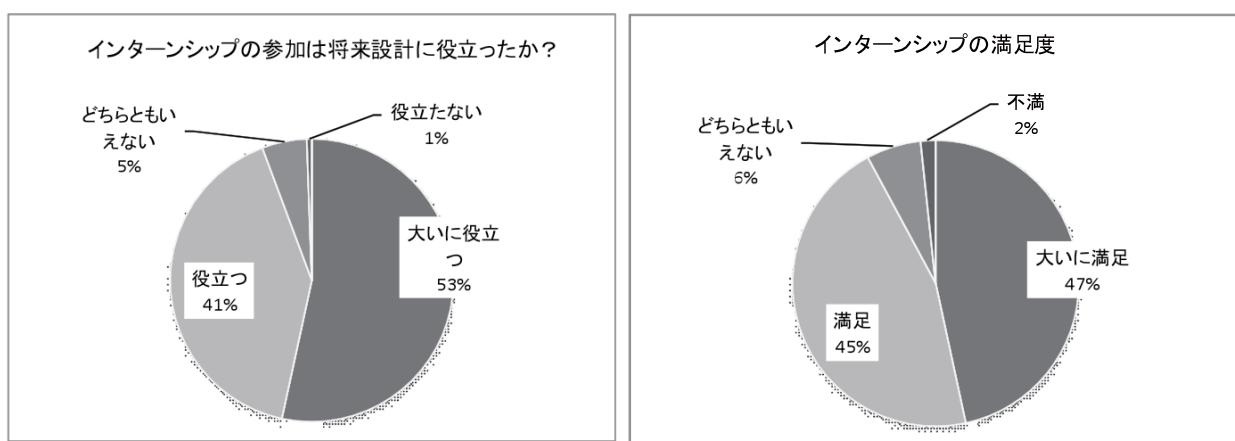


図1：インターンシップ参加学生アンケート調査結果（2006～2008年度）

## 3) 成果

インターンシップに参加した学生に対するアンケート調査結果をみると、ほとんどの参加学生が将来設計に役立ったと回答しており、満足度も高くなっている。

#### 4) 今後の課題

##### (1) 参加学生・企業等の拡大

インターンシップ参加人数は毎年 100 人弱であるが、参加希望者はその倍以上である。これは実習先の企業等が少ないという面もあるが、学生の希望と実習先とのミスマッチも大きな課題である。

##### (2) インターンシップの質的充実

インターンシップの実習カリキュラムは基本的には企業等が作成しているが、その質的充実を図るには、カリキュラム作成に当たって、大学側が企業等との連携をより強化する必要がある。

##### (3) 多様なインターンシップの実施

全学インターンシップの多くは 2 週間の就業体験型を中心であるが、より長期のものや、より専門性の高いインターンシップの実施も求められている。これについては、全学インターンシップだけではなく、各学部・研究科・学院で実施しているインターンシップとの連携も必要である。

(亀野 淳)

### 3－5－1. 「英語」「英語演習」

#### 1) 英語 I (1 年次 1 学期；必修)

旧カリキュラムで、必修の「英語 I」は英語母語話者のみが担当する科目であった。本学の学生に、少なくとも 1 科目は必ず、いわゆる生の英語に接する機会を与えるという方針のもとに施行された。臆する学生が出ることも予め懸念されはしたが、結果的には杞憂に過ぎなかった。それなりに目標は達成されたと思われる。

「英語 I」は新カリキュラムでも設けられた。旧カリキュラムの形態が踏襲されても良かったかもしれないが、実際には、名称はとどめおかねながらも、別科目として開講されることとなった。英語科では本科目を「英語 A」と呼ぶ予定でいた。概ね「言葉で明確に表現する」の謂の“articulation”の頭文字に由来する。最終的に「英語 I」に落ち着いたのは、演習は別として他の英語科目がすべてローマ数字を含む表記となっていることを考え合わせれば、整合性が認められ評価し得る。

呼称は変わったものの、立案の理念は大筋で保たれた。即ち、発信能力の基本的育成が本科目の眼目である。発信は大別して、話すことと書くこと、端的に言えばスピーキングとライティングから成る。前者では発音、リズム、イントネーションが重きをなすが、そればかりではない。この技能を然るべく培うにはプレゼンテーションの実践も、ある程度必要であろう。音読の暗唱も効果的であるに相違ない。後者では、昨今パラグラフライティングの重要性がとみに指摘されている。英語科では実際、「英語 I」のシラバスに、原則としてこれらすべての項目を盛るよう申し合せている。

発信行為と対照的な受信行為においてもそうであるが、文法は揺るがせに出来ない。むしろ、受信の場合よりも重視されねばならない。このことに鑑み、文法に力を入れている授業担当者もいる。又、発信の前提として受信があるとの信念に基づき、リーディングをも採り入れているケースもある。

英語母語話者だけではなく、日本人教員もこの科目を担当している。旧カリキュラムでは先述した通り、英語母語話者で占められていた。1 学期間で投入し得る英語母語話者には限界があったから、学期を違えて開講するのを余儀なくされた。こうした不都合は解消され、すべての学部・学科で同一の年次・学期に開講されることとなったのは喜ばしい。

実は、殊更時代の要請を容れて本科目は企画・施行された。従って教育の実はあげられねばならぬ

いが、強いて言えば一つだけ難点がある。本科目はその性質上、専ら実践的学習を旨とするものでなければならぬと推察されるが、反面、理論も構成要因となっている。そのためか、講義科目に分類され、クラスサイズもそれに合わせ 40 人前後に設定されてしまった。発信能力を養成する授業で、受講生があまりに多く、かなり不都合である。概して、スピーキングよりもライティングに、より比重をおいた授業展開をはかっていると思われる日本人教員は、私自身も含め、このことを痛感している。20人が発信型の授業におけるクラスサイズの国際的な標準であるという。この数値に近づけるのは、講義科目という枠組みのしばりからしても、更には、人員の制約からしても難しかろう。にもかかわらず、例えば、講義の面をもっと柔軟にとらえ、せめて 30 人くらいにおさえるようにもって行くことを、ここで敢えて提言したい。

財政上の理由から、教員の増員は、常勤は言うに及ばず、非常勤でさえ望み薄である。とすれば現有の勢力で対処するしかない。前期に比較的多く開講されている英語演習のクラスを相応分減らすのが、現時点では実行可能な唯一の方策であると推量される。無論、全学教育の側の特段の理解が先決である。

外国人及び日本人という担当者の混在を望ましくないとする声も英語科の中にある。どちらかにするとすれば、外国人ということになるであろう。つまりは旧カリキュラム「英語 I」の復活に帰着してしまう。だが現行の新カリキュラムでは、これが極めて非現実的な考えであるのは言を俟たない。

## 2) 英語 II (1 年次 1 学期 ; 必修)

現行新カリキュラムの柱の一つが、「英語 II」の科目名で全面展開されている CALL にあるのは疑い得ない。前身と言うべきは、「英語 II CALL」。必修で、すべての学生が履修せねばならなかつただけでなく、英語科の教員にも例外なく担当が義務づけられた。ただ、これは 2 年間続いただけで、廃止されてしまった。「英語 II」がそれに取って代わったのである。

CALLにおいて極めて有効であるとみなされる自学自習方式に則っている。前期に他の英語科目の授業負担を免除された英語科の選任教員 4 名から構成された特設の「英語 CALL 実施委員会」が、専属で本科目を担当し、かつ企画・運営の実務にあたっている。学期の最初と最後各々数回分、これらの教員が教室に出て学生を指導している以外は、世話役の TA がいる中、学生は与えられた課題と各自、自分のペースで取り組むことになっている。全部で 4 室の CALL 教室がフルに活用されている。教室と時間帯は定められ、時間割にも反映されている。

授業はオンラインで展開されている。サーバーとしては、音声の鍛錬に特化した「Glexa」が昨年より本格的に稼働しているが、数年前から使われている「WebTube」が主体であるのは周知の通りである。学外での利用も可というのが、本科目の特性に合致している。

教材作成が容易に行えるのが「WebTube」の長所である。実施委員会はこれを存分に活用してかなりの数に上る自学自習用の教材を作成し、当該サイトで公開している。以下、参考までに、適宜番号を付して主なタイトルを挙げておく。

- 1) "Introducing England" (1) ~ (4)
- 2) "Introducing Hokkaido University" (1) ~ (4)
- 3) "Using Gairaiigo" (1) ~ (8)
- 4) "Reading Skills" (1) ~ (2)
- 5) "Academic Writing" (1) ~ (4)
- 6) "CNN listening" (1) ~ (5)
- 7) "TOEFL-ITP sample mini-test" "TOEFL prep" (1) ~ (5)

委員会のうちで英語母語話者の委員が主体となって作成した完全に自前の教材である 1), 及び 3) が特筆に値しよう。動画で構成されている本教材, 英語は非常に聞き易く, 設えられている練習問題も適切である。自主的な制作であることから, オンライン授業で注意を大いに払わねばならない著作権侵害の問題も発生しない。

要するに, 上記二つのサーバーが組み込まれた e-learning system に基づき本 CALL 授業は実行されている。現今 e-learning system は高等教育機関で広く採り入れられているはずであるが, 態勢がそれなりにしっかりとしているところはそう多くないと思われる。それ以上に強調されるべきは, 教材の充実振りである。しかし, 現状に甘んじてはいられない。陳腐化は何としても避けねばならない。斬新な教材が絶えず提供されるのが望ましい。件の委員会は教材開発に一層務める決意でいる。「英語 II」は同委員会の, CALL 授業に寄せる熱意に支えられている。

本学の CALL 教育は先進性を誇り得る。かなりの部分, それは非常に優れた CALL 設備に負っている。経費は, 年間の維持費に限っても相当の額に達する。然るに, これが恒常的に措置されているがため, 高いレベルの CALL 授業が継続的にかなえられているのは歴然たる事実である。恐らく, 発信に勝るとも劣らないくらい, コンピュータを駆使しての語学学習, 即ち, CALL は時代の要請であると言つて過言でないであろう。現行の条件が決して後退することなきよう望むばかりである。

自学自習を旨とした本科目に関し, 成績評価について触れねばならない。

先述したオンライン教材のうち, 学習が必須とされているものがいくつかある。それらをこなした場合, 最大で 60 点が加点される。これと TOEFL-ITP スコアの合計が総合得点となる。評価の基準は, 秀 : 590 点以上, 優 : 535 点以上~589 点以下, 良 : 490 点以上~534 点以下, 可 : 400 点以上~489 点以下。数字は丸い方が良いであろうが, 一応適正と判断される。

平素の自学自習を重く見る立場から, オンライン必須教材を一つでも所定の期限までに完了していなければ, TOEFL-ITP スコアの如何にかかわらず, 不合格となる。一つの見識であると言うことが許されるであろう。TOEFL-ITP スコアが 400 点未満の学生には再試験の機会が与えられる。

### 3) 英語 III, 英語 IV (1 年次 2 学期 ; 必修)

新機軸は習熟度別クラス編成の導入。TOEFL-ITP スコアが 420 点未満の学生は初級クラスに, 420 点以上 500 点未満の学生は中級クラスに組み入れられる。「英語 III」では, 初級クラスは総合基礎を謳い一律に開講されているが, 中級クラスは従来通り, リーディング, リスニング, スピーキング, ライティング, そして CALL という風に技能別に展開されている。すべての学部もしくは学科に対し, これらの技能の各々につき少なくとも 1 クラス提供されている。「英語 IV」ではリーディングの能力の強化に重点が置かれている。両科目とも, 習熟度に応じて開講されているので, 授業の効率的推進を期し得る。これは受講生にとっても学習し易い環境であると考えられる。ただ, 成績評価に限って言えば, 初級のクラスでも「秀」評価が適用されるのは疑問なしとはしない。この点は, 後述する演習初級で先鋭化する。

「英語 III」は当初から, 学生が履修する科目を選ぶことが出来る選択制で運用されて来たが, 「英語 IV」でも今年度から同様の形態が採り入れられた。

### 4) 英語演習 (選択必修)

主題別の展開が, 旧カリキュラムの「英語演習」との最大の相違点。受講を希望したクラスで学生

が特定のテーマに即し英語を学習するよう、はかられている。「英語III」や「英語IV」と同じく、習熟度別に展開されている。初級及び中級のみならず、TOEFL-ITP スコアがおよそ 500 点から 530 点の間の学生を対象とした上級があるのも、特徴的といえる。初級、中級の編成は前二者の場合にはほぼ倣っている。ほぼと言うのは、分かれ目の点数が絶対の基準ではなく、目安に過ぎないからである。

本来中級クラスに属すべき学生が敢えて初級クラスで履修するケースが、しばしば見受けられる。その逆は、ほとんどないというのが現実である。上級についてもそれ以下の級で履修している学生がいるものと察せられる。上級クラスの履修者は極めて少ない。上級の対象者が、既に言及したように TOEFL-ITP スコアで 500 点から 530 点の間と、その層が比較的限られているのが主因ではあろうが、あるいは学生のこうした動向と一部関連しているとするなら、考えさせられる。

平成 21 年度から、外国語演習は受講希望者が 3 人以下の場合、開講中止とすることとなった。英語では前期と後期に開講された各々 5 クラスの演習上級のうち、前期は 2 クラス、後期は 1 クラス開講中止となった。受講を促そうと、予め特別に喧伝方努めたが効果はなかったようである。

因みに、後期の当該クラスは、HUSTEP と合同開講の科目であった。HUSTEP としては 10 数人の学生が集まつたとのことであるが、全学教育英語演習としては、受講希望者が 3 人で上の制約を被る結果となった。規則は規則である。ただ、前者の外国人学生と後者の日本人学生との間の活発な討論を軸に授業を進める予定でいたとの話を、担当者である英語母語話者から聞いている。クラスでのかかる交流は、本学が国際化の重要な一環として推進している事柄ではないであろうか。

これら 3 人の日本人学生は国際交流科目として本科目を履修するという選択肢は残されていた。しかしながら、こうした履修を認めていない学部もある。これでは不公平ではないであろうか。教育の機会均等は極力守られねばならない。それに向学心を無にされる学生が一人でも出るのは、教育上好ましくないであろう。更に又、HUSTEP の学生にとっても、せっかく日本人学生と授業で触れ合うことが出来る機会を奪われてしまうようなことになれば、大きな損失ではあるまいか。

「規則は規則」と先に書いたが、例外のない規則はない。実際、本規定では、例えばギリシャ語やラテン語の演習については適用が猶予されている。このことに異論はない。しかしながら、HUSTEP と合同開講の英語演習上級が同じような特例に与れないものか。そのような思いは禁じ得ない。

そもそも、英語演習上級は、例えばシラバスの良し悪しには関わりなく、構造的に受講生が集まりづらい科目なのである。その要因は既に二つ挙げたが、もう 1 点つけ加えたい。TOEFL-ITP スコアが 530 点以上の学生に目を向けてみよう。これらの学生は後述するように、本科目に対し「秀」評価が与えられる。それでも本科目を履修することは出来るが、評価で「秀」は保証されていない。否、極端な話、不合格とならないとも限らない。履修に消極的であるのは、想像して余りある。

いっそのこと、英語演習上級はすべからく本規定の適用外とする。それでは收拾がつかなくなるというのであれば、無理を押すつもりはない。

## 5) 英語再履修

不合格となった科目を翌年以降の同一科目で履修するのは従来と変わらないが、特別に開講された再履修クラスで、単位を落とした科目名に関係なく履修することも可能となった。長い間懸案であった翌期再履修の問題が解決されたという意味で、これは大きな前進であるといえよう。本科目は便宜上「スーパー再履」と称される。「スーパー再履」がある以上、従来方式の再履修は不要と思われる。これが存続しているのは、時間帯の関係で「スーパー再履」を受講出来ない学生が出る事態を考慮し

てのことである。ただ、そのような学生は極少数なはずである。再履修生がいると、授業運営に影響が出る場合もなくはない。英語再履修の、「スーパー再履」への一元化は今後検討されて良いであろう。

## 6) 英語単位「優秀認定」

TOEFL-ITP 等で所定のスコアに達した者は、申請すれば、英語科目の履修が一定数免除されることとなった。評価は一律「秀」である。  
(小川泰寛)

### 3-5-2. 初習外国語・初習外国語演習・外国語特別演習

21世紀以降、外国語教育において世界的に顕著となったのは、学習者主体の自律的な言語習得を重視すること、異言語習得を異文化理解と結びつけること、そして学習者に対し複数言語の学習を政策的に奨励すること、という3つの流れである。

このうち3点目の複数言語の学習について言えば、多数の国家が政治的経済的統合を進めるヨーロッパ、あるいは、メルティングポット的（アメリカ合衆国）社会統合よりもモザイク的な社会の多様性を重視するカナダ、オーストラリアなどで徐々に明確となった理念である。しかし現在では、世界のどの国・地域も伝統的に多言語的であること、しかもグローバル化の進展でその傾向がいっそう強まっていることへの認識が深まり、複数言語を学ぼうという理念は、上記以外の国・地域でも、また初等・中等・高等教育はもちろん、初等教育前や生涯学習などにおいても重視され始めている。その際、英語がすでに学術を含む多くの分野で世界的リンガ・フランカの地位を確立していることから、英語教育とは異なるアプローチや相乗的な成果を目指す可能性が模索されはじめている。

そこで以下では、このような世界的趨勢も念頭に置きながら、本学の平成18年度以降の新教育課程における必修選択外国語科目ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、韓国語（以下、初習外国語と呼ぶ）の教育について報告と検討を行う。

#### 1) 初習外国語における新教育課程の特徴

新教育課程の特徴は、端的に言えば、外国語科目・初習外国語の必修単位数が変更された点にある。本学では戦後一貫して、また平成3年度の大学設置基準の大綱化以降も、基本的に英語8単位、初習外国語8単位という単位数の構成が保持されてきた（卒業に必要な必修単位数は学部によって異なる）。それに対して新カリキュラムでは、こうした外国語科目の単位構成が見直され、初習外国語については、1学期の初習外国語I（2単位）と2学期の初習外国語II（2単位）の計4単位が全学部共通のコアカリキュラム相当部分となり、これに一部の学部が必要に応じて、発展部分である外国語演習の単位数を上乗せすることとなった。具体的には文学部、教育学部、法学部の文系3学部で4単位が、また医学部で2単位が上乗せされて必修6単位となっている。文学部、法学部については当初、初習外国語III（2年次1学期）が開設されていたが、その後外国語演習を利用する方法に変更された（表1）。

表1：学部別初習外国語必修単位数（平成21年度）

学部	文	教	法	経	理	薬	医	保	歯	工	農	獣	水
初習外国語I	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
初習外国語II	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
初習外国語演習ないし外国語演習（*）	4	4	4				2	2*					

このような必修単位数の変更、とくに理系学部全般での必修単位数の削減については、新カリキュラム策定の過程で多くの議論があったが、その紹介はここでは割愛する。むしろ重要なことは、新カリキュラム導入後ほぼ4年を経た現在、本学のカリキュラムが北大生に対し良質な言語学習を提供するための枠組みとして機能しているかどうかを問うことだろう。

結論から言えば、平成18年度新カリキュラムは確実に機能しており、初習外国語教育はその枠組みの中で十分な教育成果を上げている。必修単位数の削減、つまり総学習時間数が少なくなった分、学習量や到達目標は従前と比べ控え目なものになったものの、報告者の私見を交えて言えば、新カリキュラムにおける初習外国語科目は、個々の言語の習得もさることながら、英語以外の異言語を学ぶメタレベルの経験を北大生に提供する授業としての性格を強めている。ことばを換えて言えば、在学中、卒業後を問わず、北大生が新たな言語と接触する必要性が生じたとき、それがどの言語であれ、当該言語をどのような方略を使って習得していくべきかを体験的に学ぶ授業、という位置づけである。大学ではドイツ語を学んだのだが実際に必要になったのはヴィエトナム語でドイツ語の知識は役に立たなかったとか、学生時代に学んだのは韓国語だったが仕事で必要になったのはスペイン語で途方に暮れた、というのではなく、世界のどの言語の学習であれ、いざというとき学部時代の初習外国語学習の経験を生かせる、異言語の学び方を体験的に知っている、それによって異文化に前向きに適応できる、という点が重要であり、それはグローバル化時代に求められる重要なコミュニケーション能力の一部だといえる。L1（日本語）、L2（英語）に加え、L3（選択必修の初習外国語）を学ぶということは、北大生にとって将来への投資、生涯にわたって役立つ汎用的能力の獲得にほかならない。新カリキュラム導入後の本学における初習外国語学習は、そうした総合的コミュニケーション能力の涵養を目指す方向へと向かっているのである。

その意味で、総合入試以降に導入される新カリキュラムにおいても、初習外国語必修選択4単位が保持される方向で準備が進んでいることはたいへん喜ばしい。現状の4単位をさらに削減することになれば、上で述べた広い意味でのコミュニケーション能力を獲得する機会が学生たちから奪われることになるからである。

一方、現カリキュラムで修正すべき点を上げるとすれば、外国語演習の履修、つまりL3（初習外国語）学習の補強・上乗せ、あるいはL4、L5（その他の外国語）学習への挑戦に対し、卒業要件とからめて明確なインセンティヴを与えている学部があまりに少ないことである。次のカリキュラム改革では、外国語学習の単位を余剰単位扱いせず、卒業要件に算入可能とするなどの工夫を期待したい。

## 2) 初習外国語I、II

### ■言語別履修者数、開講クラス数、クラス規模、教員数

現在本学では、必修選択の初習外国語としてドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、韓国語の6つの言語を学ぶことができる。これらのうち、スペイン語と韓国語は平成19年度に新規に開講されたもので、全学から的人事定員面での配慮があつて実現した。21年度1学期の段階での各言語の履修者総数、開講クラス数、1クラス当たりの平均履修者数は表2のとおりである。

新入生がどの言語を選択するかは例年数10人規模で変動があり、事前の予測は難しい。そのため、あらかじめ慎重な準備をしていても、開講クラス数と実際の履修者数との間に齟齬が生じるのは避けがたく、どうしてもクラスサイズに影響が出る。また統計データからは読み取りにくいことであるが、開講曜日・時間帯ごとにクラスを1つ増やすか減らすかによって、クラスサイズが10人ほど上下に

変動する事がある。一般的な傾向として、高額な授業料を支払って学びに来る新入生に対し、40人を大きく上回るクラスとなるべく避ける配慮が先行しがちである。

表2：初習外国語の履修者総数、開講クラス数、1クラスの平均履修者数（平成21年度1学期）

	履修者総数	開講クラス数	1クラスの履修者数
ドイツ語	1,053	32	32.91
フランス語	490	15	32.67
ロシア語	73	5	14.60
中国語	722	26	27.77
スペイン語	259	6	43.17
韓国語	166	5	33.20
(計)	2,763	(計) 138	(平均) 33.20

とはいえる、過去数年のクラスサイズのデータを見ると、明らかな不具合も見て取ることができる。例えばスペイン語の場合、履修希望者数に比して提供クラス数が不足し、開設当初から抽選による履修者調整が行われている。平成22年度からはスペイン語担当の特任教員が採用されるなどの対応がとられているものの、19年度に言語文化部が廃止されて大学院メディア・コミュニケーション研究院が設立されたことに伴い新任教員採用の方針に変更が生じたことや、非常勤教員の確保が容易ではないなどの事情があり、この問題の解消は短期的には難しい。したがって当面の間、学習者のニーズと外国語教育センターの言語別教員構成にはずれが残らざるをえないが、総合入試導入後すべての外国語について抽選による履修調整が行われることになれば、学習者の不公平感は多少なりとも緩和されるかもしれない。なお、21年度における外国語教育センターの担当言語別教員構成は、英語26名（特任教員6名を含む）、ドイツ語13名（特任教員1名を含む）、フランス語7名（特任教員1名を含む）、ロシア語4名（特任教員1名を含む）、中国語9名（特任教員1名を含む）、スペイン語1名、韓国語1名、その他2名である。流用定員の解消、改組による学内での人事異動（一時的なものを含む）の結果、18年度には62名だった配当教員数が大幅減となっており、22年度には54名となる見込みである。また非常勤教員担当コマ数については、全学的合意である16年度比半減を21年度に達成した。

### ■シラバス、統一教材、統一試験、成績評価、TAなど

初習外国語のシラバスは、従来から言語別に共通のものとし、さらにここ数年は、外国語教育センター開講の全外国語科目についてはある程度共通性のある文面となるよう配慮されている。とはいえる、各言語の教育内容にはそれぞれの言語教育系が責任を持ち、言語によっては新たな文字を覚える必要があるか否か等の事情があるため、厳密な意味での標準化や摺り合わせ（全言語共通の目標、計画の設定）は行っていない。しかしどの言語の教育でも、教授法の最新動向を踏まえ、多かれ少なかれコミュニケーション・メソッド、あるいは異文化理解の要素を重視する方針が採用されているといえる。

統一教材、統一試験については、10年ほど前から部局内で徐々に取り組みが始まり、平成19年度からはすべての初習外国語の授業で統一教材の採用、第1学期、第2学期末の統一試験の実施が実現している。中国語教育系ではすでに自己開発の統一教材が用いられ、他の一部の系でも鋭意開発中である。ただし、統一試験のあり方については言語ごとに方針の違いがあり、統一教材からの出題を重視する系がある一方で、世界的な認定試験との連動性を重んじた試験を毎学期開発している系もある。その他、成績評価に対する統一試験の算定方法にも言語ごとに多少の相違がある。統一試験の成績は、

結果を広く公表していないが、一般論として言えば、担当教員・クラスごとの平均点の差よりも学部ごとの平均点の開きが顕著である。そのため従来、統一試験の成績の善し悪しにかかわらず、すべてのクラスでなるべく GPA を揃えなければならない（例えば平成 21 年度は 2.4）というジレンマが生じていた。しかし、総合入試導入後の初習外国語のクラスが全学部混成ないしなるべく多くの学部の混成という編成となれば、そうした成績評価上の矛盾は解消されると思われる。

なお、言語別の GPA の相違であるが、平成 20 年度 1 学期の場合、ドイツ語 I=2.30、フランス語 I=2.17、ロシア語 I=2.30、中国語 I=2.23、スペイン語=2.25、韓国語=2.44 で、最大 0.27 の差が生じ、第 2 学期にはドイツ語=2.29、フランス語=2.23、ロシア語=2.22、中国語=2.45、スペイン語=2.08、韓国語=2.35 で、同じく 0.37 の差が生じた。この差はおそらく許容範囲内と思われるが、今後も外国語教育センターとして全学的な目標値にそった成績評価に努める所存である。

TA については、中国語、韓国語のようにネイティヴの院生を確実に採用できる言語とそうではない言語とがあり、TA の利用に前向きな教員とそうではない教員もいる。とはいえ、中国語教育系が TA を積極的かつ組織的に外国語教育に利用していることは全学的に見ても特筆に値するだろう。

### ■初習外国語 II の CALL 授業

外国語教育センターでは、平成 19 年度における試行を経て、20 年度からは本格的に CALL 授業を展開している。実施されているのは、第 2 学期開講のドイツ語 II、フランス語 II、ロシア語 II、中国語 II で、週 2 コマのうち 1 コマを CALL に充てている。その目的は、非常勤を含め、初習外国語担当教員の増員が望めず、むしろ減員傾向にある状況の中で、最新の ICT 技術、機器、そして知見を利用することで然るべき教育効果を得ることにある。

CALL 授業が成功するためには、少なくとも 3 つの条件が必要である。①ICT 技術、機器、そしてそれを利用した外国語教育について深い知識を持つ教員がいること、②CALL 授業に相応しい教材が開発されていること、③ソフト、ハードともに信頼性が高く、十分な保守管理が行われることである。

表 3 : CALL 授業に対するオンラインアンケート結果（平成 20 年度 2 学期）

質問 1 : CALL 授業を受講したことは自分にとってプラスとなりましたか？

(回答)	なった	ならなかつた	どちらともいえない
ドイツ語	56.5%	12.0%	31.5%
フランス語	61.0%	13.0%	26.0%
ロシア語	56.5%	17.4%	24.6%
中国語	69.3%	9.3%	21.3%

質問 2 : CALL 授業は充実した外国語学習の機会を提供していると思いますか？

(回答)	そう思う	思わない	どちらともいえない
ドイツ語	34.4%	16.0%	49.6%
フランス語	33.0%	15.0%	51.0%
ロシア語	40.6%	26.1%	33.3%
中国語	38.9%	10.7%	50.4%

結論から言うと、過去 3 年間における本学の CALL 授業はおおむね成功し、全国的に見ても初習外国語教育における CALL 利用のモデルケースとなっている。受講生たちの反応も、表 3 のオンラインアンケート結果のとおり、かなりの程度肯定的なものだった。

今後の課題としては、特定の教員、技術専門職員の献身的活躍に依存している状態から脱すること、e-learning の先進的知見を参照、あるいは自ら創造しながら充実した教材を開発提供すること、そして CALL の安定的運営に向けて全学からの支援を引き続き取り付けることであろう。スペイン語と韓国語の CALL も、現在は専任教員が 1 名ずつのため見送られているが、今後人事的な目処がつけば導入を検討することになるだろう。

### 3) 初習外国語演習と外国語特別演習（外国語教育センター提供分）

外国語特別演習は、初習外国語以外の言語の演習である。外国語教育センターが提供している初習外国語演習および外国語特別演習（非常勤担当授業を含む）は、平成 21 年度を例に取ると、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、韓国語のほか、イタリア語、ギリシャ語、ラテン語、チェコ語、広東語、ポーランド語、ハンガリー語、フィンランド語の計 14 言語で、全国的に見ても数が多く、22 年度からはさらにオランダ語が開講される。表 4 は、平成 21 年度における開講クラス数と履修者数、1 クラス当たりの履修者数である。

表 4：初習外国語演習と外国語特別演習の履修者総数、開講クラス数、1 クラスの平均履修者数

	履修者総数	開講クラス数	1 クラスの平均履修者数
ドイツ語演習	195	14	13.93
フランス語演習	227	13	17.46
ロシア語演習	22	4	5.50
中国語演習	206	16	12.88
スペイン語演習	88	6	14.67
韓国語演習	79	6	13.17
外国語特別演習	158	11	14.36

外国語演習、外国語特別演習のレベル設定は、入門（初習外国語 I に相当）、基礎（II に相当）、初級（それ以上）、中級、上級である。初習外国語演習の場合は、毎学期、初級、中級、上級レベルまで開講されることが多いが、しばしば正規履修者を確保することが難しく（大学院生などの非正規の履修者はある程度集まる）、とくに平成 21 年度からは正規履修者が 3 人以下の授業の開講中止措置が決まったため、今後は初級以上の開講クラス数がかなり減ると予想される。一方、イタリア語などその他の外国語の場合も、かねてから入門、基礎レベル中心の開講となっている。

### 4) 外国語科目に対する授業評価アンケート

平成 11 年度から本学が実施している学生による授業評価アンケートでは、学部レベルでの授業を全学教育、専門、外国語教育の 3 つのカテゴリーに分けて評価結果を公表しているが、外国語教育はその中で常に最もっとも高い評価を受けている。18 年度以降について公表されている数値は表 5 のとおりである。

表 5：学生による授業評価アンケートの結果

	H18 後期+H19 前期	H19 後期+H20 前期
全体平均	3.78	3.81
全学教育	3.77	3.82
専門教育	3.78	3.81
全学教育外国語	3.94	4.00

このほか、外国語教育センターの教員は、本学ウェブサイトに公表されるエクセレント・ティーチャーズにも毎年数名が確実に選ばれている。

### 5) おわりに

平成 19 年度の改組により、旧言語文化部の教員は新設の大学院メディア・コミュニケーション研究院に籍を移すとともに、外国語教育センターでの教育業務を兼担することになった。とはいえ、全学教育における外国語教育は、われわれにとって旧言語文化部時代と変わらず重要な任務であり、その研究は研究院の研究分野としても柱の一つとなっている。部局構成員一同、今後も質の高い外国語教育を目指して邁進していく所存である。  
(橋本 聰)

### 6) 各部局が提供する外国語演習

外国語演習は、外国語教育センター（旧言語文化部）以外の部局に属する教員によっても、数多く担当されている。平成 18 年度以降には、組織の改変がなされており、統計処理の上で必ずしも一貫しがたい部分も認められるが、およそ次のような推移を示している。すなわち、開講コマ数から見ると、18 年度は総計 28、19 年度 40、20 年度 62、21 年度 76 コマである。このように、開講数は当初の約 2.6 倍に増加しており、急速な充実がなされて来ている。この間、19 年度には旧言語文化部に代わって、外国語教育センターが外国語教育の中心を担うようになった。さらに、21 年度からは外国語教育センターと情報基盤センターの間の「協力教員」が解消され、情報基盤センターは「その他の部局」に算入された形で、各部局の全学教育科目担当状況の一覧表に記載されている。

部局別の外国語演習担当コマ数は表 6 のとおりで、文学研究科が突出しているが、学内の多くの部局から提供されていることも評価すべきである。年度によってある程度の異同が見られ、部局の構成人員によっても大きく左右されることは言うまでもないが、他方ではまったく担当していない部局も見受けられることも事実である。この点については、全学協働体制の見地から、さらに改善の余地があるといえるだろう。

表 6：部局別の外国語演習担当コマ数（平成 21 年度）

文	教	法	経	理	医	歯	薬	工	農	獣	水	電	情	留	北
30	2	5	5	4	9	2	0	6	1	0	1	2	6	2	1

次に、外国語別の開講状況を見ると、当然のことながら、英語が圧倒的に大多数を占めている。しかし、英語以外の外国語についても、少なからず開講されていることも事実である。その推移を年度別に見てみると、平成 18 年度は総計 5、19 年度 13、20 年度 21、21 年度 27 コマとなっており、当初の 5 倍以上に増加している。これは外国語演習の総コマ数の増加率よりも、さらに約 2 倍の割合で高い増加率を示しており、急速な充実がなされたことを示している。平成 21 年度には、言語別の開講コマ数は、表 7 のような分布になっている。なお、韓国語については、18 年度までは「朝鮮語」という授業科目名で開講されていたが、19 年度以降「韓国語演習」に変更されている。

表 7：言語別の外国語演習開講コマ数（平成 21 年度）

ドイツ語	フランス語	ロシア語	スペイン語	中国語	韓国語
9	4	1	2	9	2

このように、ドイツ語と中国語を筆頭に、すべての初習外国語6ヶ国語に及んでいる。また、年度によってはブラジルポルトガル語が開講されている。そのほか、アジアの言語の充実が期待されている。

以上のことから、外国語教育センター以外の部局による外国語演習の担当については、平成18年度以降、特筆すべきハイピッチで拡大充実がなされてきたといえる。

ただし、英語演習も含めて、一部では開講中止となったものも少数あり、履修者数には全体的にかなりばらつきが認められる。しかしながら、入門、基礎、初級、中級、上級とレベルアップしていく外国語演習という授業科目の性質上、高いレベルの受講者が相対的に減少していくことはむしろ自然である。とくに中級・上級の受講者は、例外なくきわめて高い学習上の動機を持った優秀な学生たちである。外国語演習に関しては、機械的な「数」の原理だけではなく、「質」の側面も考慮することが不可欠であり、それが全学教育の真の充実に通ずることは疑う余地がない。この点に関する十分な配慮が必要である。

もう一つの問題は、担当する教員の大多数が外国語教育の専門家ではないという事実である。外国語演習という授業科目の性質上、これはかならずしも本質的な問題とはならないとも考えられるが、初めて担当する教員には予期せぬ負担と対応の必要性も予想される。担当教員には、実際の授業運営のさいに一層の努力と創意工夫が求められるところである。(清水 誠)

## (基礎科目)

### 4－1. 文系基礎科目「人文科学の基礎」「社会科学の基礎」

#### ■文学部

文系基礎科目的設置は受験勉強を終えたばかりの初年次生にとり、それまでの勉学との連続と不連続を伝える機能を担うものとして有益でありうると思う。文系基礎科目における「基礎」という語は二義的である。ひとつは専門の基礎訓練という意味である。専門分野を選択する前に、そしてその準備として各専門分野の基礎教育を施すという意味がある。実際、理系の基礎科目はより特定された名称を持っている。もうひとつは専門教育に行く前にどのような専門を選択するにしても初年次生が学んでおくべきことがらとしての基礎教育を意味する。

私見としては後者にこそ力点を置かれるべきであると主張したい。初年次生の目線に立って見ると、これまで学問（勉強）とは百点を取らせるためのものであった。百点しか取らせないものであると言ってもよい。与えられた学習課題を一つの正解のあるものとして、理解することがこれまでの学習目標であった。その目標に制約されることにより、学習方法もゴールを実現する最善の手段（所謂「傾向と対策」）の選択に集中した。これらの学習は基礎教育として必要であるが、もし受験勉強において習い性となった勉学への理解を学問と同一視する傾向性が助長されるとするなら、それは克服されねばならない。素早く与えられた枠のなかで思考することが重要なのではなく、枠それ自体を問い合わせ新たな領域を開拓するそのような知的活動の喜びを提示することにより、真理の大平原を提示することこそ初年次教育の目標でありたい。学問の世界においてどういうことが問われ、また問い合わせの立て方そのものについてどのような言論の技術の訓練がなされ、どのような知見が発見され、蓄積されてきたかを伝えたい。このような状況のなかで、本学の「教養科目」とならんで「専門基礎科目」はまず初年次生を従来の学問一般をめぐる固定観念ないし偏差値への固執から解放するものでなければならない。20年の初年次生の指導の経験から言えることは、ともかく、彼らが真理の大平原に漕ぎ出す助けをすることが最も重要な最初の課題であることを痛感している。小学校以来の勉強即競争というトラウマを癒さない限り、そして知的探究がそのような力あるものであることを伝ええない限り、全学教育が彼らにとって魅力あるものにはならないであろう。

大学における一般教養は目的合理性からなる高校時代までと社会人としての例ええば企業における活動のはざまで、人間を幅広い視点から考察する絶好のというか、ほとんど唯一のチャンスである。企業人として会社のゴールの枠のなかで行動が規定される前に、大学生活において自由な精神と時間を確保することは不可欠のように思える。実際、Liberal Arts は Liberales（自由人）の学芸を意味しており、そのなかで自らの生を考察し、また生の目的を構築してゆくそのような時間であってほしいと心から願っている。しばしば、社会人経験者から一度学校制度の外にでないと哲学や神学などにより人間そのものを広い視点から考察の対象とする人文学の重要さ、不可欠さを身にしみて理解することはないと聞かぬではないかという話を聞くが、専門分野に特化して長い年月を過ごした彼らの発言は何らかの傍証を提示していると思われる。

教養教育の制度設計も以上のような現状認識に基づき、そして古典ギリシア以来の若者に不可欠な教育の長い伝統に基づき、構築されねばならない。自由な学芸の習得を妨げる制度は極力排除すべき

である。例えば、単位の上限設定は不熱心な学生への対応から制度化されたが、それは一面的であるだけでなく、熱心な学生の学習意欲に対し制度的にブレーキをかけるものとなっている。実際、或る学部では履修授業の多い学生ほど成績がよいという報告を耳にするが、それはさもありなんと、ためらいなしに納得される。学生の自由を一部の学生への憂慮から一般化した制度により制限をしてはならないと考える。GPA制度や「秀」評価の導入で十分に抑止力になっていると考える。本学の初年次教育がよりよい制度となることを望んでやまない。

人文学の基礎、ならびに社会科学の基礎も以上の状況から設計されるべきである。担当者は自らの専門領域を人間とその構成する社会の営みとして、できるかぎり広い視野のもとに位置づけることを心がけたい。担当者は初年次生に知的営みが生身の人間のことがらの探究の見取り図と奥行きの深さを提供できるものであることを示していただきたい。

(千葉 恵)

## ■教育学部

### 1) 制度設計問題

文系基礎科目の制度設計は、理系基礎科目のそれと同一思想によるものと思われる。すなわち、専門「基礎」科目としての位置づけである。しかし、理系基礎科目が自然科学分野の基礎的学理の共通分野（数学、物理学、化学、生物学、地学）のリテラシーを目標として、高校を卒業した学生の自然科学分野のリメディアル教育としてデザインしやすいのに比して、文系基礎科目の制度設計の共通理解は必ずしも一義的にはなされていないように思われる。それは文系基礎科目が、人文・社会科学基礎科目と別称されるように、極めて広範囲の領域にまたがっていることにもよる。極論すれば、人文・社会科学において、何が共通基礎科目を構成するのかについての合意が存在しないと言っても良い。それを、一部のグランドセオリー科目（言語学、哲学、史学、社会学、経済学など）に設定するとしてもその合意は困難である。応用的学際的な領域や、マイナーな学問領域の場合は、そうした古典的分類からは除外されることになり、また他の科目群（主題別科目、総合科目）との重複も生じやすい。

従って、文系基礎科目に対しては、一方には、ヨーロッパの古典的大学や米国大学の学生にとっての共通教養としてのリベラルアーツ教育を想起しての教養リテラシー教育を志向する向き（教養教育としての文系基礎科目）もあれば、他方には、細分化されたそれぞれの人文・社会科学の専門領域の入門教育（その限りでは、学際的横断性に乏しい）を意識される場合との二極化が生成しやすい。このことは、1991年の大学設置基準の大綱化を実施したときにも予見され得たことであったが、実際上も存在してきたといえる。

従って、文系基礎科目を担当することになる教員に共通の悩ましいディレンマは、すべての学生に開かれた文系の共通基礎とはなにか、あるいは専門基礎とは何かであろう。それは、学の動機づけなのか、学の枠組みの提示なのか、学の技法なのか、学の基本概念の修得なのか。しかも、一人の人間が人文・社会科学の共通基礎を魅力的に教授することは、たとえ現代の「知の巨人」を任ずる人が仮にいても、おそらくは不可能ともいうべき困難な課題である。しかし、自らの専門領域を、初年次学生向けにリメイクして教えるだけでよいのであろうかとの悩みはつきないであろう。実際に、専門領域に引きつけて教授する場合は、受講した学生の反応においても、その分野を専攻して継続的に専門学習を深めて行きたいとする学生と、それ以外の一般学生との間には、学習のインセンティブは極度に異なったものとなりがちである。その両者の学生の満足を共に引き出すことは、よほどの巧みな話

者か、学的な傑出度においてスター的な存在でないと難しいであろう。また、150人以上の大規模授業となれば魅力ある講義を演出するには、さらなる困難が生じることになる。従って、現状では、専攻志望領域の枠組みを超えて、学生の人気が出やすい領域は限定されることになる。すなわち、フィールドワークなど体験的であり、頭と手と足をつかっての調査を伴うものなどである。しかし、そのような場合でも、事前事後の予習・復習が必要である。まして理論的な基礎的構築学習を事前・事後に不可欠とする学問分野では、それを厳格に質保証しようとすれば、学生からの評価が厳しくなり、また科目選択を忌避されやすいという困難をともなうことになる。ある調査によれば、我が国の学生は総学習時間において、欧米と遜色をもつものではないが、その大半は受講時間において確保されており、欧米の学生のように、講義時間外の学習時間に多くをさいているという文化的な慣習と環境はない。その意味で、学生は、GPAや履修科目の上限を考慮すると、科目選択において負担の少ない科目を志向しやすくなることになる。従って、一部の優秀で魅力的な講義を行う力をもつスーパースター教員を別にすれば、「普通」の教員は、たとえ、FD努力やシラバス改善を行っても、どこかに限界を覚えざるを得ないといえる。この隘路を断つにはどうしたらよいであろうか。

## 2) 改革の方途を求めて

現代の高等教育改革、教育課程改革におけるメガトレンドは、米国や高等教育モデル、あるいは欧州のボローニャプロセスを意識しての、「国境を越えた高等教育」の質保証を強く志向していることがあると思われる。中教審の「学士課程教育の構築に向けて」(2008年12月)はその一つである。それならば、それに単に追従するのではなく、それに対する対応と代案を北大も考える必要がある。

- ① 初年次教育の総合的協働体制の整備；北米、豪州などの初年次教育は、教職協働であり、個別教員だけではなく、TAや多様な教育支援スタッフ職員の助力を得て、高等教育機関として総合的な戦略を持って行われている。学生のニーズ、企画デザイン、実施評価、アドバイス、モニタリングなど分厚い支援がある。個別教員の自助努力に委ねるだけでは、底上げは難しい。
- ② カリキュラムのモジュール化の促進；多少の偏りがあっても、キャリア形成を支援する形の科目選択の自由を認める。卒業単位の共通ゴール枠組みがあればよいので、その履修課程上の科目選択度を増やす。ダブルデイグリーなどを含めて、その幅の拡大を考える。無理な共通基礎履修は、学生にも教員にも負担を増す。文系基礎科目もその線で見直す。
- ③ 総合大学にとって、今必要なのは、初年次教育、4年間一貫教育、あるいは大学院教育を問わず、その専門に関係なく、言語リテラシー（外国語学習を含む）、芸術科目（表現能力、享受能力）、身体的・環境的・文化的リテラシーである。それが十分でないか、欠けていることが問題である。

(姉崎洋一)

## ■法学部

### 1) 文系基礎科目の現状

文系基礎科目は、学習指導要領改定に伴う高校教育内容の希薄化に対処するために設けられた科目である。しかしこれまでのところ全般的に見てうまくいっていない。教育改革室はうまくいっていると評価しているが、本学部では、データの解釈について根本的に認識を異にする。授業アンケートの学生の声、授業担当者の意見などを現場に即して詳細かつ総合的に分析すると、問題点と改善方法とが浮き上がってくるように思われる。

施行の第一年目・第二年目に多く見られた「この授業を学ぶ意味がわからない」「二度とこんな授業は受けたくない」という学生の不満は、科目の既成事実化により抑え込まれているだけで根強く残っている。データ上うまくいっているように見える授業は、どのような授業や講演をしても「聞かせる」能力の極めて高いカリスマ的な「看板教授」が、自分の専門に引きつけつつ、その分野の学問の魅力を伝える授業に限られている。万一学生の満足度が上がったように見えるとしたら、それは、この科目が学生にも教員にも極めて問題の多い科目で、実質・評判の悲惨なこの科目を引き受ける教員が限られているからである。引き受け手が居ないため、定年前のベテラン教員の指定席としている学部もある。評判が良いのはエース級の「看板教授」や「名物教授」を投入している場合に限られており、熱意を評価された「名物教授」の場合でも、その学部に進まない学生にとっては「抽象的すぎる」「ひとりよがり」「難しすぎる」などの苦痛に満ちた悲鳴が自由記述に溢れている。「普通」の教員が熱心にこの授業をやろうとした場合には、さらなる悲劇が待ち受けている。専門講義などではある程度高い評価を得ている教員でも、この講義に限っては学生の授業評価の結果が、全学の全講義（母数は1,200程度）のビリから数えて2位～70・80位程度に集中しているのである。その原因は技術的な問題だけではなく、この科目の難しいコンセプトにある。今こそ、現実を直視し軌道修正する勇気を持つ時である。

また、単位の実質化という負荷が問題を複雑にしている。教育改革室が模範的授業の美談として宣伝したN教授の場合、他の真似できないほどの涙ぐましい超人的な課題・添削などの努力をされた挙げ句、学生評価ではビリから二桁という極めてお気の毒な結果になっている。たださえ「社会科学の基礎」「人文科学の基礎」という科目のコンセプトに忠実に、教員の方でも専門を大きく広げて新たな工夫をするのは、負担が大きい上、慣れるのに時間がかかる。大人数相手に単位の実質化を担保するためには、そのチェックや添削に絶大な時間がかかり、TAなどの実質的制度裏付けを欠落させたままの（授業アンケートでもTA問題が大きく取り上げられており、これは、大学院生を取り巻く就職事情の氷河期入りでTAの供給源たる日本人院生が激減していることと強く関わっている）単位の実質化は、教員・学生どちらにとっても巨大で不毛な負担となっているのが現状である。

同時に設けられた理系基礎科目が理数教育のリメディアルという明確な目標を持っていたのに対して、文系基礎科目は共通の目標に乏しく、実施形態が目標に合っていなかった。即ち、人文科学、社会科学とも、①大学で学ぶとはどういうことか、②人文科学・社会科学とは何か、③基本的概念、④基礎的技法、という学習内容から成っているが、②は抽象的に過ぎ（文系基礎科目の共通教科書作成という発想は、作成者も、講義をする担当者も得られず、現実性が全くない）、④は150人規模の大講義というスタイルに合わない、③は担当者が自分の専門に引きつけて話しているのが現状（これは当初の制度設計の講義骨格案から明らかであった）、などの致命的欠陥を持っている。高校を出たばかりの1年生に、かつて一般教養の授業で見られた「概論」型講義をしても、人文科学・社会科学の専門的面白さや身近な具体的事例を欠いているため平板・退屈になりがちで、共感も理解もできない。それ故に、多くの聴衆を魅了するカリスマ教員が専門に引きつけて授業をした場合にのみ成功するのである。学生は、興味や必要性を感じる専門的講義なら必死に勉強する。

さらに、2011年度から導入が決まっている、総合（大きく）入試という一大改革により状況は大きく変化し、この科目を改善することが喫緊の課題となった。即ち、この科目は、必修になるだけではなく、大事な一生を決める進学振り分けの「主戦場」となる。望まない科目に抽選で振り分けられ、

苦しみ放棄している学生が多い現状のまま、こうした「競争」に突入した場合、学生の怒りも怨嗟の対象となる教員のストレスも頂点に達することが容易に予測される。学ぶことに何の意味も感じられないという学生の感想が未だに多い（実際に教えた教員の中でもそう思う者は少なくない）この科目を現状のまま据え置くことは、教育現場に残される教員と、何よりも新1年生に気の毒である。

## 2) 文系基礎科目改革に向けての建設的提案

(1) 「専門基礎」的内容を講義する科目として再編する。これは、上記③が担当者の専門に引きつけて講義されている現状を追認し、本来の「文系基礎科目」の理念を蘇らせる。主題別科目では扱われるテーマが細分化されているので、この科目では先端的な話も一部盛り込みある程度専門性の高い授業とし、各学問分野の基礎知識と手法をまとった形で提供して学問の面白さを1年生のうちに実感させる。これなら単位の実質化も容易に実現できる上、総合入試導入に伴い、入学者が進学先学部を決定する前の「お試し期間」に、ある程度各学部の専門分野の内容を聞いて適性を見極められるため、新制度の趣旨も生きる。

(2) 現行の内容のうち、①は例えばクラス担任が話せばよいし、②はそれ自体として聞かせても教育効果に乏しいと思われる。④は150人規模で行ってもほとんど効果はなく、一般教育演習などで習得させる方が格段に効果はある。そこに力を入れるべきである。

(3) 具体的には、2科目4単位の専門基礎科目修得を卒業要件とし、総合入試による入学者が2年次に移行する際の移行点算出にそれらを含める(その時点で未修得ならゼロと見なす)。これはほぼ決定済みだが、総合入試入学者が広い分野の授業を聴くべき点を考慮すると、3科目6単位を卒業要件とし、1科目は同一学部以外の科目を取らせることが望ましい。

(4) 現在、1年前期のみ2開講時間帯の設定だが、1年前期後期に各3時間帯で開講する。こうすれば、現在は落とすと1年待つ必要のある再履修も、2学期に可能となる。 (松浦正孝)

■ 経済学部

平成 21 年度 1 学期開講の文系基礎科目「社会科学の基礎」を担当した。

「文系基礎科目」とその1つである「社会科学の基礎」については、次のように説明されている。文系基礎科目は「高校を卒業した学生が、大学において社会や人間について学ぶことがいかなる営みであるか、それはいかなる視角、思考、手法によってなされるかにつき、大まかな見取り図を示し、人文・社会科学を学ぶ心構え、基礎的知識を与えることを目的としている。人文・社会科学が共通の基盤としている基本的な考え方、道具概念、学問の技法について扱い、全体として大学というシステムのもとで学問することの意義を自覚させ、今後の勉学のモチベーションを高めることをねらいとする」(手引き、4頁)。

社会科学の基礎は「社会現象をおもに言語により自覺的に認識し、記述するための視座を確立し、そのための道具概念、基本的な技法について習熟させることを目的とする。概ね以下の項目から構成される。①大学で社会科学を学ぶということ（大学論、学問論、自分の学問史、心構えなど）、②社会科学とは何か（社会を科学的に認識するということ、社会科学の諸分野概観、必要な能力・技法など）、③社会科学の基本概念（担当者の専攻分野に則して取り上げる基本概念は異なりうる。たとえば、国民国家、近代、個人、ナショナリズム、イデオロギー、価値、文化、規範、市場、企業、貨幣、言語、コミュニケーション、共同体など）、④社会科学の技法（情報収集と整理の手法、帰納と演繹、社会調査法など）

査、報告の仕方、レポートの書き方、レジュメの書き方、統計数字の扱い方など)」(手引き、5頁)。

私が担当した講義は、収容人数が約200人のE201教室で行われ、受講学生は120人であった。

「社会科学の基礎」に関しては、次の4点が指摘できる。

(1) 受講生の8割を占める1年生にとって重要なことは、方法論を教えることではなく、社会現象に対する知的好奇心を育むことであると考えられる。2単位講義の中で方法論の指導まで行うことは意味がない。コンピュータの使い方を知らない学生に、コンピュータのアーキテクチャーを教えてもピンとこないのと同じである。方法論の指導は、社会現象に対する知的好奇心と理解力を持った大学院生に対して行うべきである。

(2) 「社会科学の基礎」は、それぞれ文系学部の学生にとって必修である。必修で縛るのは、学生の社会現象に対する知的好奇心を殺すことになると考えられる。必修化が、大人数教育の原因になってしまっており、教育効果を大きく減じている。

(3) 「社会科学」にもさまざまな分野があり、その多様性が考慮されていない。たまたま1つの専門分野の研究者が「社会科学」全般について講義することには無理がある。

(4) 上記の「手引き」に示されるような真の「社会科学の基礎」を展開するためには、社会科学の複数の教員が密接に連携する必要がある。しかし、このような教員の密接な連携には、多大な負担・コストをともなうであろう。しかも、大きな負担・コストに見合う成果は期待できない。

以上の理由から、「社会科学の基礎」さらには「文系基礎科目」は、廃止を含めて再検討の時期にきていると考えられる。

(小島廣光)

#### 4-2-1. 理系基礎科目「数学」

##### ■施状況および実施体制

新教育課程における基礎科目の数学は、線形代数学IおよびII、微分積分学IおよびII、数学概論の5種類の2単位科目を含む。これらは多くの理系学部で選択必修科目または必修科目であり、大多数の理系学生が複数科目履修している。例えば工学部ではすべての系で線形代数学I, IIと微分積分学I, IIが必修科目であり、多くの系で数学概論(級数)が要履修となっている。文系向けの線形代数学および微分積分学は、それぞれ前期に入門科目を設定し、理系向けとは1学期ずらしてI, IIを履修できるようにきめ細かい教育に取り組んでいる。

表1：数学の各科目の開講数、履修者総数、1クラスの平均履修者数

	H18年度			H19年度			H20年度		
	開講数	履修者数	クラス平均	開講数	履修者数	クラス平均	開講数	履修者数	クラス平均
線形代数学	62	3,359	54.18	60	3,277	54.62	58	3,320	57.24
微分積分学	73	4,196	57.48	61	3,633	59.56	60	3,655	60.92
数学概論	4	383	95.75	6	486	81.00	6	331	55.17
計	139	7,938	57.11	127	7,396	58.24	124	7,306	58.92

平成18~20年度の開講数は表1のとおりで、これらは旧教養数学教官団を継承した責任部局であ

る理学研究院数学部門に所属する専任教員と非常勤講師等が担当している。数学部門の教員は全学教育数学科目および関連する主題別科目（科学・技術の世界と入門科目の一部）や一般教育演習を全員で担っており、全学教育科目を各教員が平均して毎年度 2 コマ程度担当している。平成 17 年度以降の顕著な履修者数減少およびそれに伴う開講科目数の減少は非常勤講師担当コマ数の減少によって相殺されている。また数学部門の専任教員は平成 16～21 年度の間で約 1 割減員している。

各科目的履修者総数および 1 クラスの平均履修者数は表 1 のとおりで、新カリキュラムと同時に導入された履修単位数上限設定による変化が大きかった平成 17～19 年度においても、50～60 人程度の平均履修者数となるようにおおむね良好に調整されている。一方、数学履修者総数の減少は、その基礎学問的性質より懸念されるべきである。

### ■成績評価分布

平成 17 年度に導入された「秀」評価および GPA 制度により、各科目における成績評価の標準化・クラス間の成績評価の公平化について教員の意識は少なからず変化した。各学期の GPA 平均は表 2 のとおりである。（ ）付きの数字は実質的には再履修クラスも含むため、下ぶれが大きくなっているが、それ以外は 2.3 の近傍に平均があり、成績評価の標準化が進んでいることを示唆している。

表 2：数学の各科目・各学期の GPA（ーはデータなし）

	H18 前期	H18 後期	H19 前期	H19 後期	H20 前期	H20 後期
線形代数学 I	2.31	(1.94)	2.31	(2.56)	2.33	(2.38)
線形代数学 II	—	2.20	(0.71)	2.20	(1.56)	2.17
微分積分学 I	2.35	(2.32)	2.26	(1.87)	2.33	(1.85)
微分積分学 II	—	2.32	(1.05)	2.30	(1.60)	2.32
数学概論	—	—	2.18	2.33	1.93	2.36

### ■教育改善の取り組み

- （授業アンケートの実施）履修学生による授業アンケートは開講科目のほぼ 3 分の 1 で実施されている（平成 18 年度後期～19 年度前期：42 件、19 年度後期～20 年度前期：39 件）。教員は、1 年間に 1 科目程度、授業アンケートの実施を要請されており、教員によっては理学部専門科目で授業アンケートを実施する場合もあるため、現在の枠組みにおいては一定の割合で実施されているといえる。授業アンケートの総合評点の平均値は、平成 18 年度後期～19 年度前期：3.51、19 年度後期～20 年度前期：3.64 となっている。
- （FD 活動の実施）平成 21 年度から数学部門独自の FD 活動の取り組みとして、主として所属専任教員による FD 講演会を開催している。これらは全学数学教育に携わる教員や非常勤講師向けの企画で、実施状況は以下のとおりである。

（1）平成 21 年 7 月 21 日（12：00～13：00）

「線形代数講義、わたしはこんなふうにしています」（講師：数学部門教授 中村郁）

（2）平成 21 年 12 月 3 日（12：30～13：30）

「オランダにおける国際教育～海外 FD 見聞録」（講師：数学部門准教授 松下大介）

講義やセミナーに重複しにくい日の時間であること、また同じ立場で全学教育に携わっている同

僚の講演であることなどから、多数の教員((1)では25人)の参加を得ている。今後も年2回程度のFD講演会を実施する予定である。

### ■今後の取り組み

現在、平成23年度以降の総合（大きくり）入試の導入に伴う新しいクラス編成に対応した全学数学教育体制の構築が大きな課題となっており、その点を考慮したさまざまな改善策および対策が検討されている。また近年、中・高校教育における授業時間の減少に伴う学生の計算力・忍耐力の低下が全般的に顕著になっており、さらに踏み込んだきめ細かい対応が必要になっている。具体的な対応策および改善策としては以下の案が挙げられる。

- ・（同科目間の標準化）総合入試の枠組みでは現在より格段に大きな母数の学科・学部分属がGPAによって行われるため、同科目間の極端な講義内容や成績評価の違いが自然に避けられるような教育体制が必要である。そのため、教育的配慮を欠くような極端な画一性を避けつつも、公平性を担保するため同一科目間における、(1)教材の標準化、(2)期末試験の難易度の標準化、を行う。(1)はシラバスの統一などで講義内容はある程度標準化されているが、さらに踏み込んで教科書を数種類の指定教科書から各教員が選ぶことを想定している。(2)は過去の試験問題を担当教員に配布することによって試験難易度の標準化を促進することを想定している。また試験内容のガイドライン化および事後チェック体制を整える。
- ・（質問コーナーの設定）地理的なことであるが、全学数学講義はすべて高等教育機能開発総合センターで行われており、担当教員の研究室がある理学部とは歩くと10分程度である。そのため現況では多くの場合、学生が講義内容やレポート問題について気軽に質問できる機会は講義時間前後のみである。この状況を改善する為、センターで週1コマ程度の頻度でTAによる全学数学教育全般に対する質問コーナーを設定して、学生が気軽に質問しやすい場を作る。その時間は多くの1年生の講義がない時間に設定する。またその質問のフィードバックをTAが教員に行うことによって、よりきめ細かい教育を教員が行える体制を整える。

(利根川吉廣)

### 4-2-2. 理系基礎科目「物理学」

平成18年度新教育課程では、理系基礎科目が再編され、入門科目の新設、専門系コースと準専門系コースの設定、互換性科目の新設などが行われた。

「物理学」では、入門科目として入門物理学、準専門系基礎科目として基礎物理学I、II、専門系基礎科目として物理学（力学）、物理学（熱力学・波動）、互換性科目（表2）として物理学（電磁気学）が設けられた。入門物理学は、物理学を教養として身につけたい学生のため、基礎物理学は、学部の専門が物理学を直接必要としないが基礎知識として必要とする学生のため、専門系基礎科目としての物理学は、学部の専門が物理学を必要とする学生のための科目である。

同時にGPA制度、履修単位の上限設定が導入され、「単位の実質化」の取り組みが推進されている。新教育課程の実施上の問題点について、責任部局である理学部物理学科で議論した。担当教員が新教育課程を担当する際の留意点について意見交換し、教育成果を上げられるよう配慮した。また、物

理学の教育では、学生が基礎的な事項を理解し、それを積み上げていくことが重要であるので、責任部局である理学部物理学科でシラバスを統一し、教育する項目や到達目標を明確にした。担当教員には、高校での物理の履修者と未履修者の混在クラスに対する十分な配慮をお願いした。(準専門系) 基礎物理学 I, II と (専門系) 物理学 (力学) + 物理学 (熱力学・波動) の履修者数と開講数を表 1 に示す。履修者数、開講数ともにほぼ一定である。

表 1 : (準専門系) 基礎物理学と (専門系) 物理学の履修者数と開講数

科目	2006 年度			2007 年度			2009 年度		
	履修者数	開講数	履修者数	開講数	履修者数	開講数	履修者数	開講数	履修者数
(準専門系) 基礎物理学	2,642	42	2,681	42	2,659	42			
(専門系) 物理学	1,169	23	1,048	24	1,036	24			

表 2 : 専門科目における互換性科目 (専門系物理学 (熱力学) および (電磁気学)) の利用状況

年度・学期	科目名	曜日 講時	担当教員	履修者数				学部専門 科目名	専門科目の 履修者数	うち 他学部	備考
				理	工	その他	合計				
H19年度 1学期	物理学 (熱力学)	水 3	安住 和久	2	3		5	(工学 部) 熱力学	60	0	
		木 4	高橋 英明	3	3		6		62	*1	*理
		月 3	平沖 敏文	9	1		10		58	0	
	物理学 (電磁気学)	木 2	三品 具文	0	14	*1	14	(理学 部) 電磁気学	51	0	*文
		木 2	小池 和幸	0	5		5		22	0	
		月 3	河本 昇	3	8		11		43	0	
H20年度 1学期	物理学 (熱力学)	水 3	伏見 公志	6	6		12	(工学 部) 熱力学	59	0	
		木 4	大塚 俊明	4	3		7		69	0	
		月 3	平沖 敏文	9	1		10		60	0	
	物理学 (電磁気学)	木 2	大川 房義	1	39	*2	40	(理学 部) 電磁気学	—	—	*農
		木 2	小池 和幸	0	1		1		79	0	
		月 3	河本 昇	0	6	*1	6		39	0	*農
H21年度 1学期	物理学 (熱力学)	水 3	折原 宏	0	1		1	(工学 部) 熱力学	74	0	
		木 4	大塚 俊明	7	2		9		71	0	
		月 3	市村 晃一	6	2		8		69	0	
	物理学 (電磁気学)	木 2	河本 昇	1	5		6	(理学 部) 電磁気学	43	0	
		木 2	根本 幸児	0	1		1		73	0	
		月 3	網塚 浩	2	22		24		2	0	

全学教育科目を担当した教員に対してアンケートを実施して、実施状況を調べた。以下、それにもとづいて報告する。

GPA 制度の実施については、ほとんどの教員がシラバスの到達目標にもとづいて相対評価を行った。学生の評価分布のクラスごとのばらつきも少なかった。

学生の学力の多様化に対する取り組みでは、以下のような多様な取り組みがなされている。

- ・ 物理学履修の意義が明確になるように、物理学と化学や生物学との関係などを講義の導入部で説明する
- ・ 運動方程式を微分方程式として教えることで既履修者にも興味を持てる講義とする
- ・ 高校での未履修者の混在を前提に到達目標や教科選定を工夫する
- ・ 物理の次元や単位の話を詳しくする
- ・ 座標やグラフの見方の説明、数値と物理量の関係などを詳しく行う
- ・ 基礎事項や基本的な問題のプリントを作り学生の理解の助けとした

- ・高校の内容の復習を適宜行いながら授業を進める
- ・クリッカーの使用による双方向性授業の実施

これらの対策は、高校で物理を履修した学生にとっても有意義なものと受け取られている。これらの努力によって、未履修者がよい成績をあげる例も見られたが、未履修者と履修者の間にテストの平均点でかなりの開きが見られたクラスも存在していた。

単位の実質化については、以下の工夫が行われた。

- ・多くの教員が宿題やレポートを定期的に出し、学生の自習を促した
- ・質問者、教員からの質問に対する回答者にはボーナス点を付加し、積極的な授業参加を促すとともに、理解できない部分を残さないようにした
- ・毎回、前回の内容について小テストを行い、復習を促した
- ・コースマネージメントシステムを用いての自習管理

今後は、担当教員間でこれらの経験の交流と蓄積が必要である。学生の学力の多様化に対応するため細かな指導の必要性を指摘する意見が教員の中に多く、TA や非常勤講師の活用による学生の指導の充実を求めている。また、物理学のような積み上げが重要な科目では、学生の学力の多様化に応じたクラス編成の可能性を検討すべきという意見があり、今後の検討が必要である。一方、教員の自己努力の負担はかなり大きく、TA や非常勤講師の充実をお願いしたい。これらの課題は総合（大くくり）入試導入後のクラス編成でも重要なポイントと考えられる。

(羽部朝男)

#### 4－2－3. 理系基礎科目「化学」

化学は、物質と生命の根幹にあって理学・工学・農学・薬学を支える学問であり、理系学部からの期待に対して全学教育科目「化学」が果たすべき役割は極めて大きい。理系学部の学生においては、高校で化学を選択した者は他の理系科目よりも多い傾向にあり、大学で初めて化学を履修するケースは少ない。ただし、化学の専門性に対する要請には学部間で差があるため、全学教育科目「化学」は以下の変遷をたどってきた。

##### ■平成 17 年度までの実施状況

全学教育から専門教育への円滑な連結を目的として、平成 16 年度から理学部、医学部、歯学部、薬学部、および農学部を専門系コース、獣医学部、水産学部、医学部保健系を準専門系コースとする 2 コース制が採用された。全学教育科目「化学」については、専門系コースの化学 I, 化学 II, 化学 III（計 6 単位）と、準専門系コースの基礎化学 I, 基礎化学 II（計 4 単位）が開講されていた。

平成 17 年度の履修者数は、1 学期は化学 I が 1,477, 基礎化学 I が 457, 2 学期は化学 II が 1,327, 基礎化学 II が 412 人であった。

##### ■平成 18 年度以後の実施状況

準専門系コースは、基礎化学 I と基礎化学 II の計 4 単位で変更ないのでに対して、専門系コースの化

学Ⅰ, 化学Ⅱ, 化学Ⅲは、化学（化学結合論）と化学（化学熱力学・平衡）の計4単位に再編成された。化学（化学結合論）と化学（化学熱力学・平衡）は物理化学分野を対象とし、量子力学や熱力学など物理学の基礎事項も関係している。このため、高校で物理学を履修していない学生にとっては、かなり難解な内容を含むといえる。一方、基礎化学Ⅰも物理化学分野を対象としてはいるものの、専門性はより低く、有機化合物を含む多様な分子の構造を理解する基礎を学習するのが目的である。続く2学期の基礎化学Ⅱでは有機化学を学び、ライフサイエンスの基礎を修得することになる。

このように化学（化学結合論）と化学（化学熱力学・平衡）は専門性が高いため、理学部、薬学部、工学部（応用理工系）のみが対象となり、残りの理系学部では基礎化学ⅠとⅡを履修することとなった。平成20年度の履修者数は、1学期は化学（化学結合論）が618、基礎化学Ⅰが1,306、2学期は化学（化学熱力学・平衡）が604、基礎化学Ⅱが1,242人であった。クラスサイズは平均65人前後で、最大でも100人以下であるため、講義の補助に当たるTAは採用されていない。

講義は、理学研究院および地球環境科学研究院所属の教員を中心に、工学部、薬学部、農学部、電子科学研究所の分担協力を得て行われている。このうち工学部と農学部の教員は、各所属学部の1年生を担当している。なお、平成19年度には計6コマが全学運用枠による非常勤講師（退職教員）の担当だったが、削減に努めた結果、21年度には全学運用枠はゼロとなった（理学部枠は一部使用）。

学部間の学力差と、それに応じた担当教員の創意工夫に配慮し、全学的な教科書の統一は行っていないが、理学部の6クラスについては担当教員の打ち合わせを経て同一の教科書を採用した。授業の目標・到達目標・授業計画を含むシラバス項目を科目ごとに統一し、採点基準を明確にした結果、クラス間でのGPAのばらつきは僅かに留まっている。

### ■教育改善の成果

各科目のGPAについて、表1にまとめる。すべての科目についてGPAは2.09～2.35の範囲で推移しており、新教育課程の実施前後においてもほとんど変動は見られない。これは、シラバスにも記載の通り、相対評価（秀・優・良・可・不可の比率が、15%：30%：40%：15%程度を目安とする）を講義担当者が実施した結果である。

新教育課程の目的の一つは、いわゆる「2006年問題」に対処しつつ全学教育から専門教育への円滑な移行を実現することにあるため、その成果は1年生が学科に所属して専門科目を履修するようになって初めて現われるものと思われる。すなわち、この改革の評価はむしろ専門科目を担当する各学科の教員を対象に調査すべきであろう。

表1：化学の各科目のGPA

年度		H17	H18	H19	H20
1 学期	(旧カリ) 化学Ⅰ	2.16	—	—	—
	(専門系) 化学（化学結合論）	—	2.18	2.11	2.21
	(準専門系) 基礎化学Ⅰ	2.18	2.30	2.35	2.29
2 学期	(旧カリ) 化学Ⅱ	2.19	—	—	—
	(専門系) 化学（化学熱力学・平衡）	—	2.24	2.09	2.12
	(準専門系) 基礎化学Ⅱ	2.14	2.28	2.33	2.28

### ■今後の改善課題について

総合（大きくり）入試への移行に伴って現在の 2 コース制は平成 22 年度で終わり、23 年度以後の全学教育科目「化学」は基礎化学 I, 基礎化学 II（計 4 単位）に統一される見込みである。これと関連して、以下の問題が重要となると考えられる。

(1) 化学に対する専門性の要請が学部間で異なるため 2 コース制が採用されてきたが、総合入試の施行後は各クラスが均質化する。最大公約数的な見地から、基礎化学 I, 基礎化学 II に統一することになっているが、例えば 2 年生で理学部に進学した場合は、改めて専門性の高い化学を教育し直す必要が生じる。

(2) 学部間で見られたクラスサイズの不均等は是正されることになるが、クラス内での学力の幅はむしろ拡大することが予想され、講義のレベル設定が従来より難しくなる可能性が高い。

(3) 従来の「化学」では統一された教科書がなかったが、各クラスの均質化を前提に、共通の教科書を指定または編集することが今後の課題になると考えられる。

(4) 分子模型を利用した化学の講義は、履修者の理解を深め、かつ意欲を引出すのに効果的であるが、一人一人に細かい部品を配布して最後に回収するのは大変な手間が必要となる。現在、70 人以下のクラスでは基本的に認められていないが、このような講義を実現するための TA の採用を推進することも今後の課題であろう。

（谷野圭主持）

#### 4-2-4. 理系基礎科目「生物学」

##### 1) 実施にあたっての改善点・変更点

理系基礎科目「生物学」では、新教育課程の実施にあたって 2 つの点で、それ以前とは大きな変更を行った。1 つは、他の理系基礎科目と同様に（準専門系）初習生物学として「基礎生物学 I」と「基礎生物学 II」を開講し、これに合わせて従来のリメディアルクラスは廃止した。前期に開講する「基礎生物学 I」では、生物の基本単位となる細胞を構成している生体分子や、細胞構造とその機能、生命活動に不可欠なエネルギー代謝と生体分子の生合成過程、生物にとって本質的な機能である細胞分裂や遺伝の仕組み、遺伝子の働きと制御について学び、生命存在の基本となる仕組みの理解を目指している。後期に開講する「基礎生物学 II」では、生物の多様性を認識し、多様な生物を生み出してきた進化や、生物相互の関係、生物の形態や構造の多様性、生物の体を構成する組織や器官、さらには免疫系や内分泌系などのシステムが果たす多様な機能について学び、生物と生命現象を多様性の側面から理解することを目標としている。これに対し、高校で生物学を履修してきた学生を主な対象として、前期には（専門系）「生物学（細胞生物学）」を、後期には「生物学（生物多様性）」を開講し、上記の観点をより深く掘り下げる目標としている。

新課程実施に伴うもう 1 つの変更点として、生物と生命現象の理解に必要となる基礎的知識をクラスによらず共通に提供することや、学生の自習支援のための教材として、また、講義内容の理解に役立つ図の活用を目的として、平成 18 年度から上記の講義の変更に合わせて共通教科書の使用を始めた。この教科書は、レーヴン／ジョンソン「生物学」（上・下、培風館発行）で、北大の「生物学」担当教員を中心とした翻訳委員会が 57 章にわたる原著を翻訳したものである。カラフルな図版が多数用いられており、学生が視覚的にも楽しくわかりやすく学習できるようになっている。さらに、理系基礎科目「生物学」の教育は、理学部生物科学科（生物学）に所属する学科目担当者が中心となって

いるが、これ以外にも多くの部局に所属する教員の協力を得て進められていることから、多様な背景を持つ教員が開講するクラスで、講義内容の基本的事項について統一化することに役立っている。

クラス編成に関しては、担当教員の減少からクラスの統合を図ったため、1 クラスあたりの履修者が多少増えたが、TA の活用やビジュアル資料を用いたパイロット授業などの工夫を重ねている。

## 2) 成果と検討課題など

共通教科書の使用により、学生は「生物」と「生物学」を理解するために必要な基本的事項について、担当教員の違いに関わらず共通性の高い講義を受けることができるようになったと考えている。また、担当教員も講義内容を一から設計するのではなく、教科書を活用しながら独自の工夫を加えることができ、教員の負担軽減につながっている。今後に予定されている総合（大きく）入試導入後のクラス編成において、講義内容の共通性を確保することはさらに重要になると思われるが、共通教科書の使用はそのための基礎となる。さらに、教員間での情報や認識の共有も一層重要になってくるが、この点については科目責任者が情報交換の中心となる必要があると考えている。

担当教員数の減少から一部クラスの統合を行い、クラスあたりの学生数が増えた。対応として、TA の活用や教授法の工夫を行っているが、次に述べるような「単位の実質化」や総合入試への制度変更などに対応するためには、学生へのきめ細かな指導対応が必要になると思われ、TA のさらなる活用やクラスサイズの再検討も必要になるかもしれない。TA の増員には予算上の制約や、対象となる大学院生の確保などの問題も考えられることから、全学支援体制の一層の強化によって担当教員を増やすことも検討課題となる。この点について、多くの関係部局や教員諸氏のご理解をお願いしたい。

90 分の講義 1 回あたり 4.5 時間の予習・復習を学生に求めるという「単位の実質化」に向けて、学生の自習を促す試みも行っているが、必ずしも十分な自習時間が確保されていないように見受けられる。これは、勉学や単位に関する学生の認識不足が一番の原因として考えられ、入学当初に指導を丁寧に行うことで解決できる点も多いと思われるが、教員側でも、提出された課題を添削し学生に返却したり、提出課題の問題点を抽出し講義へフィードバックするなどの指導が考えられる。ただ、これらの作業への TA の活用には限界もあり、また、多忙な教員が大人数の学生の提出課題を毎回詳細に点検するのは容易ではない。さらに、総合入試導入後は、高校で生物学を履修して来た学生と初習者が同じクラスに混在することが予想され、個別の対応が必要になってくることも考えられる。これらの問題に対応できる体制作りが課題の一つである。

平成 18 年度から、成績評価における GPA 制度が取り入れられたが、総合入試導入前のクラス編成においては、その運用および GPA 値の活用と解釈については慎重を期する必要があるように感じた。現行のクラスは、入試の時点において特定の科目や専門への指向性や親和性を既に持っている学生を集めた集団であり、「生物学」に対しても、あるクラスは学習意欲が高く達成度が高いのに対し、別のクラスでは初習クラスとしての講義内容であるにもかかわらず達成度が低く学習意欲も低いという現象が生じている。目標の達成度という観点から成績評価を行うと、この 2 つのクラスには、当然 GPA 値に比較的大きな差が生じる。これを単純に GPA 値の偏りという観点から論じるのは、達成度の高いクラスの学生に対してかえって不公平を生じるようと思われる。ただし、この問題は総合入試導入後のクラス編成ではほぼ解消されることが期待される。このような例を考えると、ある制度の有効性や意義が他の制度のあり方と強く関係していることを考慮する必要があるように思われる。

言うまでもないが我々自身が生物であり、従って健康に関わるさまざまな問題、特に病気の原因解明と治療、食品の安全性や信頼性といった身近な問題において、あるいは事件や事故での個人の特定、さらには環境保護と生物機能の有効活用といった社会的問題を通じて、生物に関する知識の必要性は日常においても社会的にも高まっている。身近な問題に関して正確な知識を持つこと、社会的問題に関して正確な知識をもとに自分なりの考えを持つことは、本学の教育理念である「全人教育」や「実学の重視」と重なり、教育目標にかかげられている「建設的批判能力」や「社会的責任と倫理の自覚」の実現にも重要である。時事的な話題を講義と関連づけたり、生命倫理に関する問題をとりあげるなどの工夫は教員ごとに行われている。限られた時間の中で、理系基礎科目として必要とされる内容を講義しつつ、これらの問題にどの程度踏み込むか、「生物学」担当教員にとっては考慮すべき点もあるが、工夫しがいのある課題もある。理系基礎科目「生物学」は、生物学が一つの学問を超えて人間の生活と社会に密接なものとなった現在において、生物に関する「知」と、それをもとにした「独創的思考能力と建設的批判能力」を身につけるための基礎を与える役割を果たすものと考えている。

(瀧谷重治)

#### 4－2－5. 理系基礎科目「地学」

地学が対象とする領域は、地球内部から大気海洋、宇宙空間まで極めて広い。全学教育の地学科目では、これらの広い領域をカバーする基礎的な概念を入門として学び、さらに専門的な分野への発展を目標とする。また、地学系自然科学実験と相まって、環境、資源、災害といった我々に身近な社会的問題に关心を持ち、自ら自然との共生を考えることができるようになることにも重点を置いている。

##### 1) 実施状況

基礎学力の育成と学力別ステップアップ授業方式の導入ということでは、基礎科目で基本的なところを学び、主題別科目、総合科目で専門への入門を行い、一般教育演習でさらに専門科目への導入が行われた。これらによって、基礎学力育成の充実が図られた。カリキュラムの編成、教員の構成、履修者数等については以下に述べる。

1. 地球科学科を構成する理学研究院の自然史科学部門、地震火山研究観測センター、総合博物館および地球環境研究院の教員が講義を分担している。
2. 基礎科目は、「基礎地学Ⅰ」7クラスを前期に、「基礎地学Ⅱ」4クラスを後期に配し、教員14名が担当している。それぞれ同一の教科書で共通化するとともに地学（地球科学）を体系化した。平成18～21年度における履修者数の推移は、「基礎地学Ⅰ」711→587→534→626人、「基礎地学Ⅱ」372→426→454→524人となっている。
3. 主題別科目は、前期2クラス、後期2クラスを開講している。担当教員が一人の科目とオムニバス形式の科目があり、総勢教員9名が担当した。「科学・技術の世界」は、それぞれ専門科目への入門としての役割を果たしている。
4. 総合科目は1クラスで、宇宙物理学、天文学、惑星科学の3分野にわたる複数部局の教員11名によるオムニバス形式の講義である。平成20年度の受講者は180人程度であった。
5. 一般教育演習は4クラス開講し、より専門性への導入を意識して演習が行われた。また、英語演

習として、さらに1クラス担当教員1名を開講し英語教育の充実を図った。

## 2) 教育改善の成果

6. 基礎科目は、年度により履修者数の変動が見られるが、概ね平均化してきている。クラスによっては、驚くほど出席率が高く、とくに地学科目に関連する学部学生の受講態度は積極的である。レポート課題をこなすにある程度調べたりする必要があるが、学習時間もそれなりに確保されていると考えられる。
7. しかしながら、大部分の学生は高校時代に地学を学習していないこともあり、入門レベルからステップアップするには工夫が必要である。基礎科目、主題別科目、一般教育演習へと一連の流れで受講することによってステップアップを図っているが、講義内容に関しては担当教員に任せられており、必ずしも満足のいく連携が取れなかった。しかし、地球科学科所属の教員ができるだけ専門に近いテーマを担当し、時に最先端の研究の紹介なども織り交ぜながら関心を誘い、専門科目との連携を強くしている。平行して行っている地学系実験の受講者も多く、地学（地球科学）への興味喚起や知識・理解の獲得をできたといえる。
8. TAの数が十分確保されている点は、大きな改善点であり今後も必要なことである。

## 3) 今後さらに改善を要する点

### 9. 教科書の執筆

理系の学生は高校で地学をほとんど履修することがないという現状の中で、本学卒業生たるにふさわしい知識を身につけるためには、授業に使用する教材を一層充実させることが必要である。改善の方策としては、地球惑星科学の全分野を網羅した、教科書を作ることが望ましい。

### 10. 講義レベル

基礎科目といえども、水準の高い講義を行い、直近に学習した数学や物理の知識を地球科学に如何に活かしていくかに重点を置いている教員もいる。これも学部によっては批判的な意見が出るので、それに合わせたレベルを考える必要があろう。これもクラス編成を工夫することで改善されると考えられる。

### 11. 時間割の編成

学部専門教育へのステップアップを意図して開講時間帯を設定したものの、同一時間帯の講義の都合で希望している学部の学生が受けられないことがある。クラスの学生の所属によっては講義内容を変える必要も出てくるし、学部に移行してからも基礎科目を履修していない学生も見られる。基礎科目と専門科目の有機的連関の強化のためには、より綿密な時間割編成が必要となろう。

### 12. 履修者数のアンバランス

基礎科目の履修者数は対象クラス編成によって平均化することを試みているものの、年度によって再履修者数に変動があるため、どうしてもばらつきが発生する。履修者数に応じて、クラス編成を参考することも必要であろう。このことは、十分な教員数が確保できれば解消する問題ではあるが、現状の教員数では1クラス60人程度までに絞るには無理がある。クラス編成を考慮して大人数の講義も考える必要がある。

### 13. 履修登録単位数の上限設定

この影響は、一般教育演習の履修者数の変化に起きているように見られる。さらに、GPA制度の実

施に伴う選択科目の履修者数の減少もあり、開講数は既に学生のニーズを満たせる数に達していると考えられる。一般教育演習は、履修者数が年度により変動があることと、数人というクラスもありテーマの設定に一考を要する。もう少し整理してクラス数を少なくすることは可能であろう。

#### 14. 全体の構成

未だ、全学教育の全体の構成がくまなく全教員に理解されているとは言い難い。各検討WGからの報告だけでは徹底されない。このことは、基礎科目と専門科目の有機的な連関の観点から改善すべき点である。  
(池田隆司)

#### 4-3-1. 心理学実験

心理学実験は、2学期に2コマ連続で開講される選択科目である。授業では、毎回異なる心理学実験・実習を行い、受講生はその場でレポートを作成し提出することが義務づけられている。出席率80%以上の学生を対象に、出席50%・レポート内容50%の配分で、絶対評価で成績判定を行っている。

#### ■実施状況

平成18年度に『北海道大学 ティーチング・アシスタント マニュアル』が出版された。それにともない、新たにTAとなった大学院生に対して年1回のTA研修会を実施した。TAについて理解を深めるとともに、心理学実験TAとしての心構えや授業における役割を教育した。授業中に起こりうる問題場面を想定し、どのように対処したらよいかグループ討論を行い、TAの質の向上に努めた。

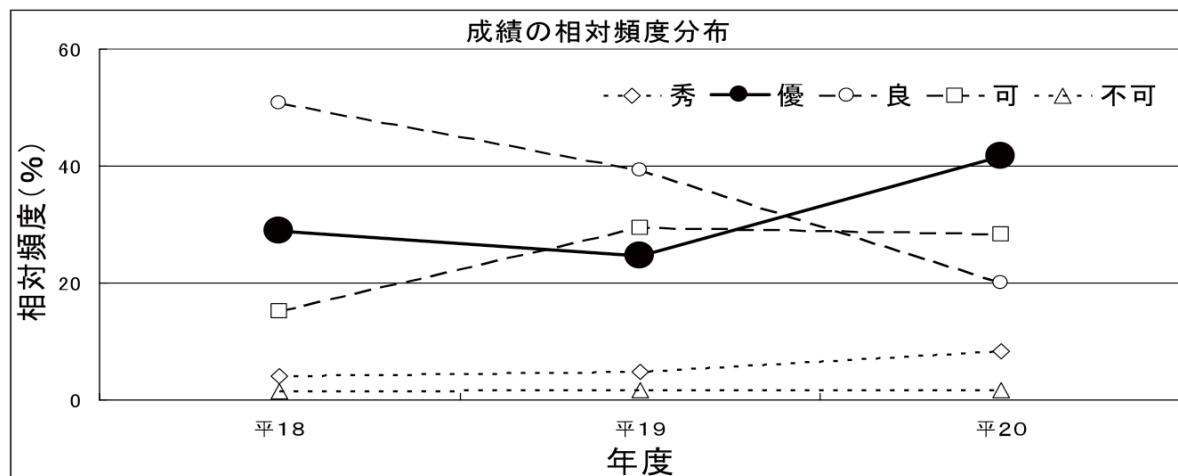


図1：心理学実験の成績分布の推移

#### ■教育改善の成果

成績分布を見ると、「優」評価の学生が増大している(図1)。最新のGPA平均値も、これまで最高の2.27に達している。理由の一つに、TAの成長と貢献をあげることができるだろう。受講生数の推移は、平成18~21年度: 84→62→62→108人であった。前年度比の受講生数の比率では、100→74→100→174%である。並列開講される必修科目の有無が受講生数に影響していると考えられる。このことから、心理学に関心を持つ学生は多数存在していると推測できる。

#### ■今後の改善方策

受講生の思考力・表現力を高めるため、①実験・実習の目的や考察のポイントを明確にして、受講生に提示する、②実験・実習後にグループ討論を取り入れ、論理的な思考や議論を重ねさせる、③これを文章化してレポートを作成する、といった改善策を考えている。またレポート内容の評価規準を明文化してシラバスに掲載し、透明性・客観性を高める努力も進めていく予定である。

(和田博美)

#### 4-3-2. 基礎自然科学実験

現代社会において、人間と科学技術は切っても切れない関係にある。文系の学部に所属しているからといって、文系の学部を卒業したからといって、科学技術と無縁ではいられない。しかし、実際に高校教育の早い段階から文系・理系に分かれるため、文系の学生の多くは、興味はあっても自然科学に関する教科、特に実験の教育を受ける機会はほとんどないのが現状である。したがって、文系の学部に所属している学生に、物理・化学・生物・地学の基礎的実習を行ってもらい、実習を通して幅広い自然現象に親しんでもらうことを目的として、「基礎自然科学実験」を開講している。自然の法則の認識過程を身近な例から学んでもらう、自然科学に親しみを持つてもらう、科学的好奇心を養ってもらう、などを目標とし、文系・理系の垣根を設けず、相互理解することを目指している。

基礎自然科学実験では、自然科学実験で行っている物理・化学・生物・地学の実験カテゴリーのうち、下記のテーマから各3テーマを抜粋し、実施している。

##### ◎物理系実験

- マイナス200度の世界と超伝導
- レーザー光で学ぶ光の世界
- 弦の振動と音の分解・合成
- アンプ作り

##### ◎化学系実験

- 酸化還元滴定によるCODの測定
- 身近な医薬品の合成
- 天然の香り物質の合成

##### ◎生物系実験

- 細胞分裂の観察
- PCRによるDNAの增幅
- イカの解剖

##### ◎地学系実験

- 地形の実体視と地質プロセス
- 堆積物からさぐる地球の環境
- 環境水の水質分析

#### ■現状と今後の課題

平成18~21年度の基礎自然科学実験の履修者は平均15人程度であり、将来はこの履修者数を増やすため、アンケート結果を考慮した各カテゴリー・テーマや教科書の改善が必要と思われる。たとえば、学生からの回答の中に「テキストがわかりづらく、説明されても何をやっているのかがよくわからなかった」「教科書通りにやればその通りになったが、どうしてそうなるのか理解できなかつた」といった基本的な問題点が指摘されている。現在、理系・文系に分け隔てなく、同じテーマと教科書を使用しているが、文系学生に本来の「幅広い自然現象に親しんでもらう」には、より懇切丁寧な資料

や教科書、各カテゴリーに共通した初心者向けのわかりやすいテーマを提供する必要がある。

(知北和久)

#### 4－3－3. 自然科学実験

平成 18 年度の新教育課程のスタートに伴い、多様な入学者に対応した新たな理科基礎科目教育の構築を目指して、新たに自然科学実験をスタートした。この自然科学実験では、①従来の講義補完と専門実験スキル習得のための実験から、大学の科学教育への導入・動機づけのための実験へ、②理系共通のコアカリキュラムとしての実験に転換し、③科学一般に対する興味を培うことを主眼に、環境・災害・エネルギー・共生型社会等の社会問題との関係にも配慮し、物理・化学・生物・地学の分野の有機的連関を重視した新たな総合自然科学実験へと編成しなおすことを目標とした。これに合わせ教材を一から見直し、理系の初年次学生が、使いやすく、魅力あるものに実験テーマを大幅に改良、あるいは新たに作製した。教科書も物理、化学、生物、地学が統一してビジュアルで分かりやすいものに大幅に刷新し、これまで科目別に作っていたものを一つの教科書としてまとめた。

自然科学実験は 2 単位の科目であり、物理系、化学系、生物系、地学系の 4 つのカテゴリーに分け、1 学期に重複しないように 2 つカテゴリーを選び、各カテゴリー 6 回の実験を行う。成績は出席、実験中の評価、レポート点で総合的に評価し、欠席、遅刻、レポート提出の遅刻などの取り扱いも厳密に点数化した。自然科学実験の初回には、履修生全員を対象にガイダンスを行い、物理、化学、生物、地学の各カテゴリーを紹介した後、学生にどのカテゴリーを選択するか希望調査を実施する。また、安全教育、受講時の注意事項、成績評価基準などを説明し、学生に徹底している。

膨大な数の学生に対応するため、学生証によるカードリーダーを導入し、出席確認の自動化を進めた。また、自然科学実験専用掲示板、およびレポートボックスを設け、学生の出席状況、レポート提出状況を迅速に掲示し、継続した学習への喚起を行っている。さらに平成 19 年度より北海道自然科学実験に関するホームページ (<http://gelens.high.hokudai.ac.jp/>) を開設し、実験に関する情報提供も開始するとともに、学生に対して実験のアンケート調査を実施し、学生の現状を把握することに努め、実験指導の進め方、テキストの改訂等を行ってきた。

##### 4－3－3－1. 自然科学実験（物理系）

物理系の実験テーマは、時代の要請に即すよう大幅に刷新した。例えば、ノギス、マイクロメータを使用した「大きさの精密測定と誤差」、「熱の仕事当量の測定」、「交流回路の基礎」、「アナログとデジタル」を廃止し、「目で見る電気信号」、「マイナス 200 度の世界と超伝導」、「レーザー光で学ぶ光の世界」、「弦の振動と音の分解・合成」、「重力加速度と地球」は以前の 5 テーマを大幅に変更・改良した。また新規に「放射線と統計」を追加し、全 6 テーマとした。さらに平成 20 年度には融合領域のテーマとして「燃料電池と地球にやさしいクリーンエネルギー」を追加した。

物理系自然科学実験は、教員 40 名（平成 20 年度は 41 名）、TA12 名（19 年度は 14 名）、技術職員 1 名、嘱託職員 1 名の体制で実施しており、平成 18 年度より自然科学実験のシステムを大きく変えたが、大きな混乱もなく運営されている。平成 18～20 年度の自然科学実験と、そのうちの物理系

実験の履修者数と GPA を表 1 に示す。

表 1：自然科学実験および物理系実験の履修者数と GPA

		H18 年度		H19 年度		H20 年度	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期
自然 科 学 実 験	人数	885	1,037	928	1,030	942	1,053
	GPA	2.74	2.78	2.72	2.69	2.70	2.69
うち 物 理 系	人数	610 (68.9%)	727 (70.1%)	618 (66.6%)	715 (69.4%)	653 (69.3%)	723 (68.7%)
	GPA	2.76	2.78	2.68	2.66	2.72	2.70

自然科学実験全体の履修者数は毎年約 1.8%程度の微増をしており、GPA は平成 18 年度のみ少し高いが、約 2.7 を維持している。物理系実験の履修者は 18, 19 年度ではほぼ同じで、20 年度に約 3% の増加を示し、GPA は自然科学実験の履修者とほぼ同様である。全学教育科目全体の GPA 平均：18 年度（1 学期／2 学期）2.34／2.28, 19 年度 2.33／2.29, 20 年度 2.31／2.31, と比べると、自然科学実験の GPA はかなり高い。また自然科学実験の履修者が微増していることを考えると、自然科学実験はうまく機能していると判断できる。ただし、「不可」をとる履修生の割合が各年度平均で、2.75%（物理 2.77%）→4.40%（物理 4.64%）と単調増加傾向にあり、全科目平均（5.05→6.20→6.55%）と比べるとまだ低い値ではあるが、今後対策をとる必要があると思われる。

物理系実験の履修者に対する平成 19 年度のアンケート調査では、実験内容が「60%以上」理解できたという回答は 46%，「40%以上」77%で、「20%以下」が 9% に上った。20 年度のアンケートでは、「よく理解できた」が 19%，「概要はわかった」以上は 82% に上った。これは 19 年度の 77% に対応する値で、学生の理解度は前年を上回る良い値となった。一方、「まったく理解できない」は 1.7% で、これは 19 年度の 9% に対応する値であり、かなり低い値となった。レポート作成に使った時間は、19 年度は「2 時間以内」19%，「4 時間」54%，「6 時間」19% で、ほぼ 9 割の学生が 6 時間以下を費やしている。20 年度は「1～3 時間」46%，「3～5 時間」42.4% で、前年度とほぼ同様の結果であった。現在、担当教員が特に時間をとってレポート作成の指導をする取り決めはないが、今後レポートの質を上げる指導をする必要がある。「教員、TA の指導は適切だったか」という問い合わせに対して、19 年度には、教員に関しては 70%，TA に関しては 63% が「良く指導している」と回答しており、20 年度には、82% の学生が教員、TA の「指導は適切だった」と回答している。教員、TA とも前年を上回る結果となり、指導に大きな問題はないといえる。ただし、「全く適切でなかった」という学生も、平成 19, 20 年度に約 5%, 2% いることを考えると、さらにきめ細かな対応が必要である。各実験テーマに関するアンケートで、「マイナス 200 度の世界と超伝導」は「特に興味をもったテーマ」として最も多くの学生が回答し、その他「内容をより理解できたテーマ」、「問題なく実験操作ができたテーマ」等でも最も多くの回答数を得ており、物理で最も適切なテーマといえる。他のテーマに関しては、否定的な意見もかなりあり、今後もっと学生が受け入れ易い工夫をする必要がある。アンケートの自由意見として、「レポートを返却してほしい」という意見があった。現在、レポートの返却は各教員の判断に任せているが、今後、統一する必要があると思われる。

以上のとおり、自然科学実験は所期の目的をある程度、実現していると考えられる。しかし、アン

ケートのところでも記したが、レポートの質を向上する必要がある。実験時間中に担当教員が指導する、あるいは教科書に模範レポートを載せるなどする必要があると思われる。 (松山秀生)

#### 4-3-3-2. 自然科学実験（化学系）

化学系実験は、単年度当たり延べ1,300人の学生が受講しており、C1：酸化還元滴定によるCODの測定、C2：吸収スペクトルと酸塩基平衡、C3：タンパク質分解酵素の反応速度解析、C4：ものさしで測る分子の大きさと表面圧、C5：身近な医薬品の合成、C6：天然のかおり物質の合成、の6つの実験テーマのすべてを履修する。上記の実験は、物理化学、分析化学、有機化学といった化学の基礎分野がまんべんなくカバーされており、将来の専門教育移行後に必要と予想される最低限の基礎的スキル、知識を習得することができる。また、C1、C3、C4については、「総合的実験」として、それぞれ地学系実験、生物系実験、物理系実験との関連性が配慮されている。平成18年度の自然科学実験の開始以来、大枠は変更されていないが、実際に実験教育を行う過程で浮かび上がってきた点については、テキストの改訂を含めた微調整を随時加えてきている。

#### ■実施体制

1クラス60人程度に対して、教員（教授・准教授・助教・非常勤講師）4名、TA2名を標準的に配置して、実験の準備、出席調査、レポートの回収を担当する技術員、技術補佐員との連携を通じて運営されている。評価は、提出されたレポートの点数評価を中心に実験態度等を加味して行っている。さらに、危険な薬品を用いる化学実験の特殊性を鑑み、全体ガイドンスに加えて、初回実験時のガイドンスにおいて安全上の注意点を再度喚起しており、安全面での周知も十分行われている。

#### ■学生の理解度と予習

予習は、スムーズに実験を進める上だけでなく、安全を確保するために非常に重要であり、全体ガイドンス、初回ガイドンスにおいても必要性を繰り返し周知している。全6回の実験終了後に提出された学生アンケートによると、大多数の受講者が実験前にテキストに目を通してある程度の予習を行っているが、「テキストを良く読み参考書を調べた」「テキストを良く読んだ」と回答した学生は2割弱にとどまっており、今後さらに理解度の向上、安全面の確保を図るために、予習を徹底させるための工夫が必要と考えられる。

また、アンケートでは、テキストだけではわかりにくいという意見も散見された。これはほとんどの受講生にとって初めての化学実験の体験であり、薬品や器具の名前もよくわからない（イメージがつかめない、わからない）という状況であることを考慮すると良く理解できる。これを補うために、実験前に行っている30～40分程度のパワーポイントを用いた説明で、写真を多用して理解を促進するよう工夫しているが、実際の実験の直前であり限界がある。実験テーマによっては、エッセンスとなる部分を簡略にまとめた補助プリントをあらかじめ作製して配布し、予習の助けとすることを検討する必要があるかもしれない。

#### ■学生の実験への取り組み姿勢

アンケート結果によると、「極めて熱心に取り組んだ」と「熱心に取り組んだ」と回答した受講生

が全体の 60~70%に達した。一方、「あまり熱心でなかった」「不真面目であった」と回答した受講生はほとんどおらず、大半の受講生が実験に興味をもって取り組んだといえよう。実際、「教科書でしか見たことのない実験器具を用いて本格的な実験ができるよかったです」「高校とはレベルが違い、非常に面白かった」という感想は毎年のように見られる。

### ■レポート

アンケート結果によると、60%以上の学生が 3 時間以上をかけており、十分な時間をかけてデータ解析、レポート作成、課題の調査を行っている。ただし、実験テーマによっては、明らかに理解が不十分とみなされる受講生も散見され、参考文献の調査、利用の仕方なども指導内容に含める必要があるかもしれない。

### ■教員と TA による指導体制

アンケート結果によると、約 80%の受講者が教員と TA による指導は「適切であった」と回答している一方で、7%の受講者が「あまり適切でなかった」と回答している。化学系実験では、年度初めに教員・TA 全員を対象にガイダンスを実施しているが、さらにきめ細かな指導ができるよう教える側へのサポート環境も整備していきたい。

### ■実験テーマの評価

アンケート結果によると、「C5：身近な医薬品の合成」、「C6：天然のかおり物質の合成」を「特に興味を持ったテーマ」に回答する学生が多くいた。これらの 2 テーマは有機化合物の合成であり、高校で学習した机上の有機化学を実際の実験で行うため、受講者にとっつきやすかったためと考えられる。実際、これらの 2 テーマに関しては、「内容をより理解できたテーマ」「テキストの記述がわかりやすかったテーマ」「実験前の説明がわかりやすかったテーマ」との回答も多く見られた。また、「C1：酸化還元滴定による COD の測定」についても、「内容をより理解できたテーマ」「テキストの記述がわかりやすかったテーマ」と回答する受講者が多くみられた。このテーマについても高校の化学でなじみ深い過マンガン酸カリウムによる酸化反応を用いていることが一因とみられる。一方、「C2：吸収スペクトルと酸塩基平衡」、「C3：タンパク質分解酵素の反応速度解析」、「C4：ものさしで測る分子の大きさと表面圧」については、「内容をほとんど理解できないテーマ」「ほとんど興味がもてないテーマ」「テキストの記述がわかりにくいテーマ」と回答した受講生が多く見られた。これらのテーマは、高校での化学にあまり登場しない数式を取り扱う物理化学的要素を含むことが一因と思われる。特に、「C2：吸収スペクトルと酸塩基平衡」では、「分光スペクトル」と「平衡」の二つの概念を理解する必要があり、レポートでも全体を十分理解できていない学生が散見された。また、「C3：タンパク質分解酵素の反応速度解析」では、速度式の導入のために未履修の微分方程式を用いるため、教える側としてもブラックボックスにせざるを得ない点がある上、多少難解な酵素反応の速度論まで踏み込むため、消化不良になっている感がある。これらのテーマについては、テキスト、実際の実験内容、実験前の説明などを再検討する必要があろう。一方、「実験設備や準備がよく整っていたテーマ」とする回答は「実験設備や準備が不十分だったテーマ」の数倍も多く、かつ特定のテーマに偏在することもなかった。従って、実験設備や準備については適切であり、特記する問題点はないと思われる。

#### 4－3－3－3. 自然科学実験（生物系）

##### ■履修者

過去 2 年間の理系学生向けの自然科学実験（生物系）の履修者数は、平成 19 年度 1 学期 476, 2 学期 484（計 960）人、20 年度 1 学期 470, 2 学期 533（計 1,003）人であった。文系学生向けの基礎自然科学実験の履修者定員は毎年 20 人としている。毎年の履修者数は安定しており、担当教員（理学部生物学科目担当教員および非常勤講師）および実験室のスペースもほぼ適切に対応ができた。

##### ■教科書

物理・化学・生物学・地学を含めた自然科学実験として、平成 18 年度から新しく編集した本学独自の教科書を用いている。実験理論や実験操作をわかりやすく説明するために、できる限り、図、表、写真および引用文献が掲載されている。実験の際に必要に応じてプリント配布を行い、学生が理解しやすいように努めた。よりよい教科書にするため、教員、TA、学生の意見を反映させ、毎年、改訂を行っている。また、学生が実験を十分理解し、かつ、安全に取り組めるように、教科書を使った事前の予習を十分行うよう学生に指示した。

##### ■実験テーマ

生物系実験では、以下の 6 つをテーマ（【 】内はキーワード）としている。分子、細胞、個体レベルでの生物学的テーマ、環境や化学との境界領域テーマ、および環境問題に結びつくテーマを含めて企画されている。

- (1) 頸微鏡の使い方（細胞分裂の観察）【頸微鏡、進化、遺伝、細胞】
- (2) 薄層クロマトグラフィーによる植物色素の分離【環境、適応、物質、クロマトグラフ、生理】
- (3) ゾウリムシの行動【行動、個体（細胞）、環境】
- (4) DNA 実験～PCR による遺伝子の增幅【進化、物質、遺伝、分子】
- (5) 生活の中の科学～イカの解剖【組織、器官】
- (6) 水の中の小さな生物～珪藻の多様性と環境【環境、水、多様性、汚染】

1 学期、2 学期ともに、第 1 回目の授業の際にガイダンスを行い、各実験テーマの説明および安全教育を行った。文系学生に対しては、理系学生とは別枠でわかりやすいガイダンスを行い、実験内容を理解しやすいように配慮した。実際の実験授業では、教員が説明・指導を行い、TA が補助した。高等学校の理科教育では実験が減少する傾向にあるなか、本自然科学実験は、新入生が本格的に実験を行い、教員や TA と身近に議論できる機会であるため、全学教育の中でも極めて重要な位置を占めていると考えられる。

アンケート調査によれば、毎年、9 割の学生が「ガイダンス内容をよく理解できた」、または「概要はわかった」と回答している。また、9 割以上の学生が「教員・TA ともに適切な実験の指導と説明を行った」と回答しており、TA の導入が学生実験でも効果を上げていると考えられる。多くの学生が 6 つの実験テーマのうち「イカの解剖」に興味を持って取り組めたと回答しており、身近な材料を用い

ることが学生の興味を引く上で効果的なことが明らかとなった。一方、「DNA 実験では、実験操作が難しい、教科書の記述や実験前の説明が理解しにくい」という意見もあった。これは、DNA 実験では細かい操作を行う上に、DNA 分子を直接見ることができないこと、遺伝子增幅法の原理の理解不足、などが原因であろうと考えられるため、事前に資料を配布し、学生の理解が深まるように努めた。

### ■今後改善すべき点

アンケート調査によると、予習をしっかり行った学生は約 2 割以内であった。また、約半数の学生が「レポート作成時間は 3 時間以内」と回答している。学生は、実験中、大変興味をもって取り組んでいるが、事前の予習および実験後のまとめにもっと時間をかけるよう学習指導して行く必要がある。

実験内容のレベルは、理系学生についてはほぼ適切であると考えられる。一方、文系学生を対象とした基礎自然科学実験では、物理・化学・生物学・地学の各カテゴリーから 3 つの実験テーマ（計 12 テーマ）を行うことになっている。生物系実験の 3 テーマ「顕微鏡の使い方」「DNA 実験」「イカの解剖」のうち、「DNA 実験」については、「内容が難しすぎる」との意見もあった。しかしながら、この実験には遺伝子增幅法などの現代の社会的インパクトのある内容が含まれているため、実験テーマからはずさない方がよいと考えられる。よって、ガイダンスとは別に、文系学生の第 1 回目の授業において、「DNA とは何か」といった基礎的な講義を含めた科学実験の理論やレポート・論文の書き方に関する授業を行った上で、第 2 回目授業から実験に入って行くことも今後検討して行くべきあると考えられる。

(増田隆一)

### 4-3-3-4. 自然科学実験（地学系）

地学は、地球と宇宙のしくみの過去・現在・未来を扱う自然科学分野であり、その対象は、固体地球から大気海洋、宇宙までと多岐にわたる。しかしながら半年間の地学系実験のカリキュラムでは、もちろんそのすべてを取り扱うことは不可能である。そこで地学系実験では、私たちが日常生活をおり、もっとも身近な存在である地球を対象とすることにした。

地球が誕生して以来 46 億年、地球ではさまざまな変化・変動が起こってきた。しかし、46 億年という時間は、人類の歴史と比較してとてもなく長く、直接観察したり、具体的にイメージすることができるのは、ほんの一部の地学現象に過ぎない。しかし幸運なことに、私たちを取り巻く大気や海洋、地層、岩石といった自然には、そのとてもなく長い時間軸に沿って起こった地球の歴史が、さまざまな形で記録、保持されている。そこで地学系実験では、それらを解凍・解読し、地球で起こってきたさまざまな変化・変動の規則性を明らかにする手法を身につけることを目的とする。それはまた、地球温暖化や資源・環境問題の解決、地震・火山噴火など自然災害の予知・予測といった社会の中での地学を意識するきっかけとなることを期待している。

このような学習目的達成のため、本実験では、以下の必須 5 テーマと、2 テーマから選択 1 テーマの合計 6 テーマを実施することにより、自然に刻まれた記録を読み解く初步的な手法について学ぶ。

#### 必須 1 地形の実体視と地質プロセス

（目的）地形の特徴とその成り立ち、それを作った地質プロセスについて理解する。

（実験内容）空中写真をステレオスコープを用いて観察する。また、地形図から得られる地形情報の

処理法を空中写真と関連させて行う。

#### 必須2 堆積物からさぐる地球の環境

(目的) 堆積物から堆積環境やその起源を考える。

(実験内容) 堆積岩の処理によって碎屑粒子を分離し、双眼実体顕微鏡を使用して鉱物・化石を観察し、堆積粒子から原岩・堆積環境・地質時代など地質学的な情報を読み取る。

#### 必須3 地球リソスフェアの岩石・鉱物しらべ

(目的) 身近な岩石や鉱物を観察し、地球リソスフェア（岩石圈）の成り立ちを考える。

(実験内容) 火成岩・堆積岩・変成岩・鉱物の標本を、肉眼・ルーペ・実体顕微鏡で観察する。異なる種類の岩石・鉱物の硬度・比重を測定する。

#### 必須4 偏光顕微鏡で見る岩石と鉱物の世界

(目的) 偏光顕微鏡の仕組みと光学的原理を理解し、岩石を観察する。

(実験内容) 偏光現象や多くの鉱物が示す複屈折現象を理解し、火成岩・堆積岩・変成岩・鉱物の薄片観察を行い、岩石中に記録されている情報を読み取る。

#### 必須5 環境水の水質分析

(目的) われわれの日常生活に直接関係する生活用水のほか、さまざまな産業に利用されている水の水質を把握するための調査・分析方法について学ぶ。

(実験内容) 簡単な器具や薬品を使って身近な環境水の水質を分析する。

#### 選択1 野外で体験する地質と地形観察

(目的) われわれの周囲の地質や地形について、そのでき方や人間社会とのかかわりを理解する。

(実験内容) 日帰りの地質見学を行い、野外で実際に火山噴出物や活断層地形、地層などを観察する。

#### 選択2 粉末X線回折法による鉱物の同定

(目的) X線の性質やX線回折の原理を学び、それを用いた鉱物種類の同定法について理解する。

(実験内容) 鉱物の粉末試料を作成し、粉末X線回折装置での回折実験を見学し、与えられた回折データをもとにデータの処理法と鉱物の検索・同定法を学ぶ。

本実験は1クラス最大30人の学生を対象としているが、大部分の学生は高校時代に地学実験はもちろん、地学の講義さえも受講してきていない現状がある。そこで、地球科学科所属の教員15名程度ができるだけ専門に近いテーマを担当し、時に最先端の研究の紹介なども織り交ぜながら基礎的な実験手法を説明し、その後、各学生がそれぞれの手と目と頭を動かして実験を行うことで、自然現象に対して何かを感じてもらえるよう指導している。また、TAの協力を得、実験器具の操作法や実験中に抱いた疑問などに対して迅速に対応するよう意識して指導している。アンケート調査からは、教員・TAの指導が「適切ではなかった」と感じた学生の割合はわずか1%であり、学生側からは指導面において高評価を得られている。

学生の反応は非常によく、「岩石鉱物の実験では実際にエメラルドなどをみて触ることができ、顕微鏡実験も偏光がとてもきれいだった」「大学生になってもまだ鉱物を調べたりするとは思わなかつたが、実際にやってみると興味を持てた」「実験をとっていなかつたら一生扱うことのない機器に触ることができて楽しかった」といった、これまで地学を勉強していなかつたが、新たに興味を持ち楽しむ実験を学べた、という声が非常に多かった。

テーマへの興味に関するアンケート調査では、空中写真をつかった地形・地質に関する実験と、化学系実験との融合テーマである環境水分析に対しての興味が多かった。しかし、ほとんどが地学初習者ということもあり、すべてのテーマにおいて初めて実験器具を見たり操作したりするため、どのテーマも興味をもって受講している。また、学生からの意見のなかには、選択テーマである「野外で体験する地質と地形観察」と「粉末X線回折法による鉱物の同定」のどちらも履修したいという声も多く、地学への興味の高さがうかがえた。さらに、実験に対する姿勢に関するアンケート調査では、実験を熱心に取り組めなかったと回答した学生はわずか2~3%であり、ほとんどの学生が実験に対して極めて真摯な態度でのぞんでいた。

小・中・高校において「地学」に触れることがほとんどなく、地学に対する知識・理解が乏しい状況のなかで、大学の地学実験を受講してはじめてその学問領域や体系を学ぶことで、地学への興味喚起や知識・理解の獲得をできたといえる。したがって、地学系実験全体としては、効果的な実験が遂行できているといえるだろう。しかし、高校で地学を学んでいないということを意識して、丁寧な説明や実験指導を心掛けた結果、「実験前の説明が長い」と感じている学生もいるようである。高校で地学を学んできた学生は非常に僅かではあるが、これらの学生にとっては説明が長く、“物足りなさ”を感じていたのも事実である。高校で履修した学生と初習者との間における知識差を、実験の場においてどのように支援・指導していくかについては、今後の課題である。

最初に述べたように、地学は対象が非常に幅広い学問であるが、昼間の室内実験であることの制約から、現在の実験テーマは固体地球を対象としたものに設定している。しかしながら、天文・地震・気象・海洋などに関するテーマへの学生からのリクエストもある。この件については、設備・環境などの問題から難しい点も多々あるが、地学の対象が幅広い自然であることを学んでもらうためにも、適当なテーマを立ち上げることも鋭意検討中である。(永井隆哉)

(参考：自然科学実験共通)

自然科学実験連絡会議 編 (2008) 「北海道大学全学教育自然科学実験アンケート調査」

自然科学実験連絡会議 編 (2009) 「北海道大学全学教育自然科学実験報告書」

## 5. 日本語・日本事情

### (1) 「日本語科目」

これまで全学教育科目「日本語科目」では、「本学の留学生にとって、その留学の目的をより効果的に達成するために役に立つ日本語を運用する能力の向上」という科目的目的に則り、各授業における目的を以下のように設定してきた（手引き。年度・学期により若干の文言の変更あり）。

- (a) 学習者がこれまで学習してきた日本語の知識を復習・整理すること
- (b) 大学での学習・研究に必要な日本語の知識を増やし日本語能力を伸長すること
- (c) 大学での学習・研究に必要なスタディ・スキルを獲得すること

しかしながら、平成15年度以降「日本留学試験」による選抜が行われるようになった頃から、初級の学習段階で定着していかなければならない学習項目が欠落していたり、実践的な運用能力が不足している学生が見られるようになった。この状況に対処するため、さらには予習・復習の習慣づけを行うため、従来はどちらかと言えば上述の(b), (c)におかれていた授業の力点を(a)にシフトさせるとともに、ある程度レメディアル的な要素を授業に加える方針を立てた（ただし、上記(a)～(c)の文言自体は大きく変更していない）。

たとえば、「日本語II」の例を挙げると、週2日の授業を読解・作文の二本立てとし、両授業では課題に対するフィードバックを徹底して行い、その際、必要に応じて初級レベルの学習項目の解説・復習を行うという授業を行った。さらに、作文の授業では、文章構成や表現の学習以前に、「何を書いたらいいのか分からぬ」、「書くことが見つけられない」といった学生が増えてきたことを考慮し、学生が自力で書く内容を発見できるようフィードバックを与えた。

いずれにしても、1, 2年次に提供される「日本語科目」では、学生が欠席遅刻や課題忘れをせずに毎回の授業に積極的に参加する、こうした基本的な学習態度を身につけることを促す方策が重要といえる。授業運営や内容の吟味工夫は、こうした意味でも必要不可欠である。

### (2) 「日本事情」

主に新入留学生を対象とする「日本事情」は、受講生が日本の社会・文化への理解を深めることを目的としている。授業は、複数の教員が分担して担当し、各教員の専門領域から日本の状況をいくつかの側面について考察する方法をとっている。授業形態は、講義、見学、ディスカッション、受講生による口頭での報告を組み合わせ、体験的・双方向的な授業により、自ら考え、理解を深めようとする力を養うことを重視してきた。学生自身が出身国の事情と比較しながら能動的に学べるようにしているが、受講生が一つの国籍に大きく偏る傾向があることから、今後は、ディスカッションや報告ではその状況を想定した課題の指示における工夫が必要であろう。

（柳町智治）

## 参考文献一覧

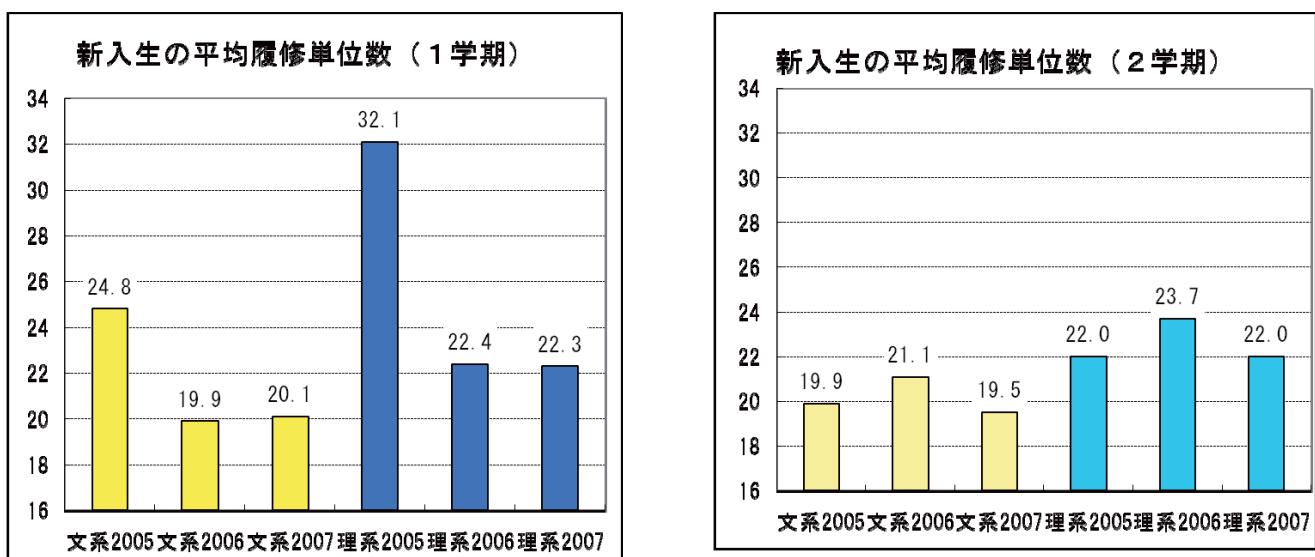
- ・ 平成 18 年度以降の教育課程について（最終報告）（平成 16 年 12 月，教育改革室・平成 18 年度以降の教育課程検討 WG）
- ・ 平成 18 年度以降の教育課程について 最終報告以後の検討結果（最終まとめ）（平成 17 年 5 月，教育改革室，教務委員会）
- ・ 平成 18 年度教育改革資料集（平成 19 年 3 月，教育改革室）
- ・ 北海道大学全学教育科目実施の手引き（教職員用）（平成 18～21 年度）
- ・ 北海道大学全学教育科目実施の手引き（別冊）（教職員用）成績評価基準のガイドライン（平成 18～21 年度）
- ・ 「秀」評価，GPA 制度及び履修登録単位数の上限設定の実施について Q&A（教職員用）（平成 18～20 年度，教務委員会）
- ・ 「秀」評価，GPA 制度，自由設計科目制度及び履修登録単位数の上限設定の実施について Q&A（教職員用）（平成 21 年度，教務委員会）
- ・ 自由設計科目制度ガイドブック（平成 21 年度入学者用）
- ・ コアカリキュラムに関するアンケート調査（報告書）（2006 年 3 月，高等教育機能開発総合センター・コアカリキュラム評価検討グループ）
- ・ 平成 18 年度からの新教育課程・「単位の実質化」に関する学生・教員アンケート調査（報告書）（2007 年 2 月，高等教育機能開発総合センター・コアカリキュラム調査検討グループ）
- ・ 平成 18 年度からの新教育課程・「単位の実質化」に関する第 2 回学生・教員アンケート調査（2007 年 2 月実施）報告書（2007 年 3 月，高等教育機能開発総合センター・コアカリキュラム調査検討グループ）
- ・ 平成 19～20 年度全学教育改革に関する第 3～6 回学生アンケート調査（2007 年度 9, 2 月, 2008 年度 9, 2 月実施）報告書（2010 年 3 月，高等教育機能開発総合センター・コアカリキュラム調査検討グループ）
- ・ 北海道大学高等教育機能開発総合センター点検評価報告書 2002～2006 年度（平成 14～18 年度）（2008 年 3 月）
- ・ 北海道大学全学教育自然科学実験アンケート調査（2008 年 3 月，自然科学実験連絡会議編）
- ・ 北海道大学全学教育自然科学実験報告書（2009 年 3 月，自然科学実験連絡会議編）

## 図・表・資料一覧

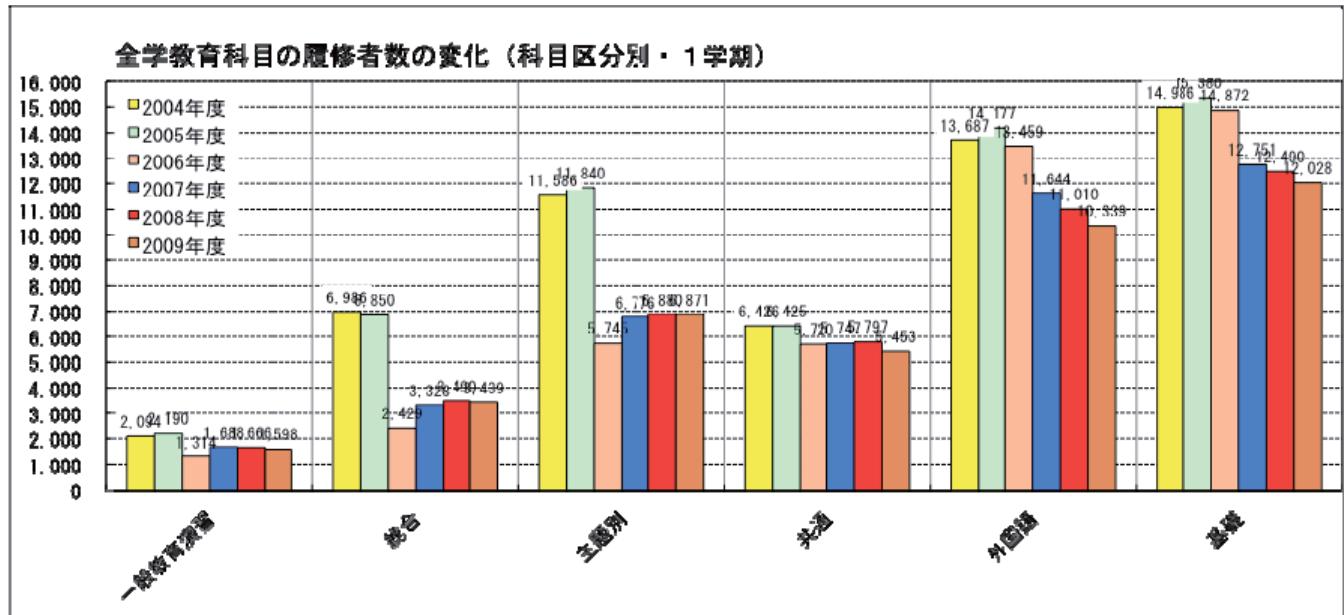
1. 各種データの年度・学期による変化に関するグラフ	92
2. 全学教育における各部局の授業担当状況（平成18～20年度）	96
3. 全学教育科目履修者数対比表（前年度との対比）	
平成18／17年度履修者数対比表	102
平成19／18年度履修者数対比表	104
平成20／19年度履修者数対比表	106
平成21／20年度履修者数対比表	108
4. 履修取消申請に関する集計表	110
(平成19年度第1学期～平成21年度第1学期)	
5. 全学教育科目成績評価の分布状況・GPAグラフ	
平成18年度第1学期	116
平成18年度第2学期	118
平成19年度第1学期	120
平成19年度第2学期	122
平成20年度第1学期	124
平成20年度第2学期	126
6. 学部・学科別GPA分布表・通算GPAグラフ	
平成18年度	128
平成19年度	132
平成20年度	136
7. 平成17～20年度入学者における学部学科別GPA（第1学期）、入学年度別GPA・履修登録単位数（平均値）比較表	140
8. 学生の「自習時間」に関するアンケート調査結果	142

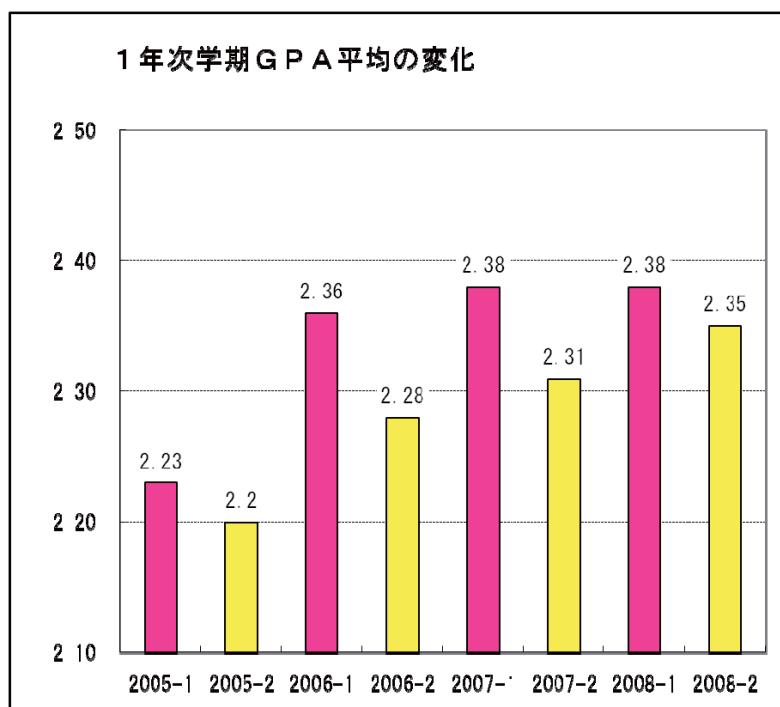
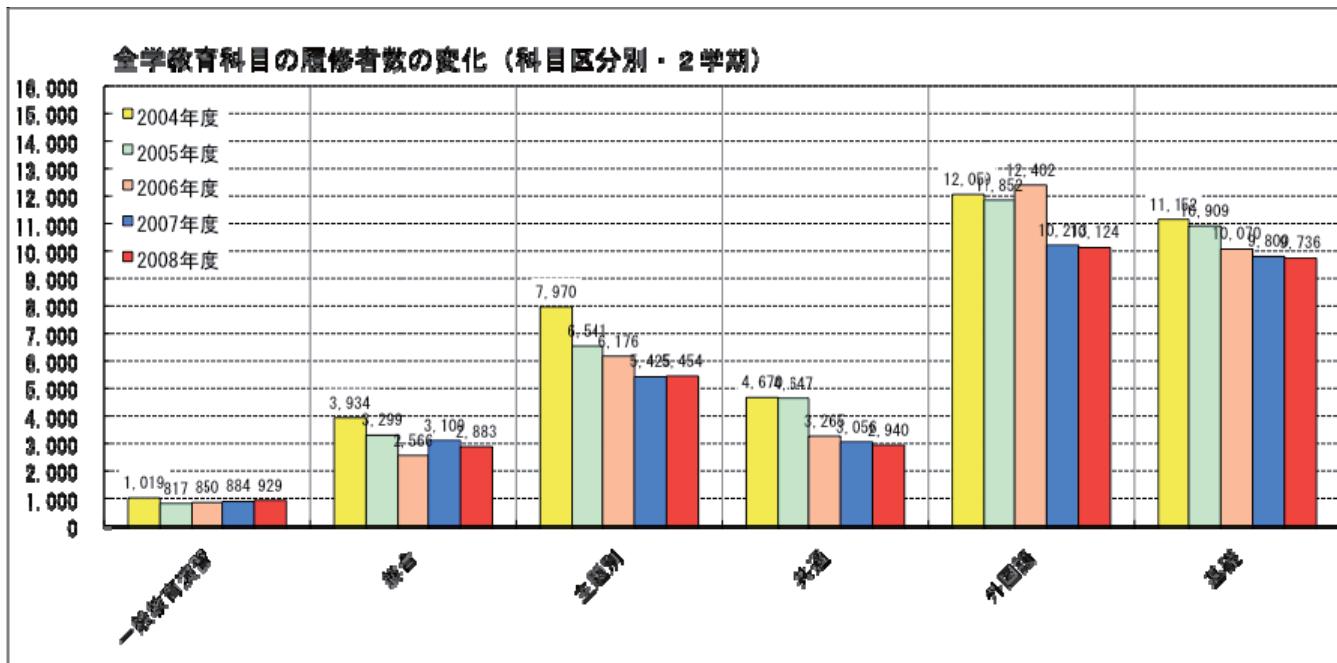
## <各種データの年度・学期による変化に関するグラフ>

新入生の平均履修単位数

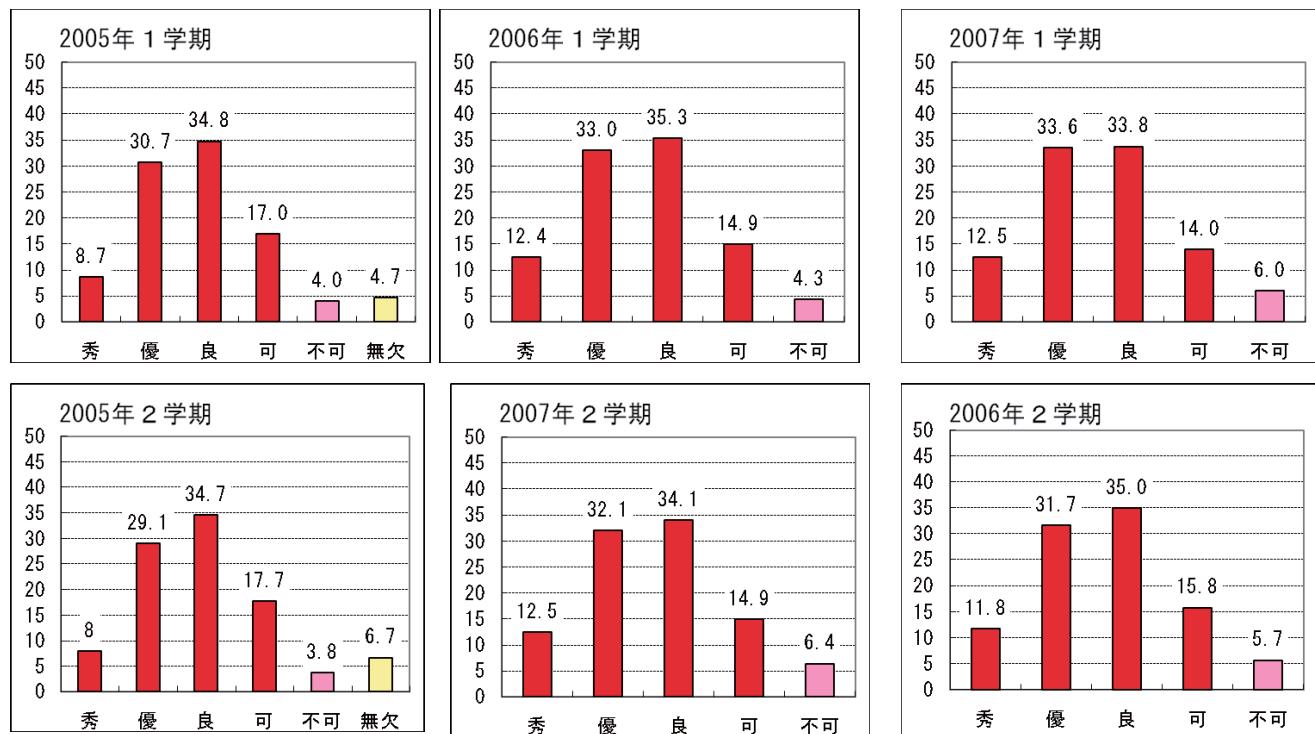


全学教育科目の履修者数の変化（科目区分別・1学期）



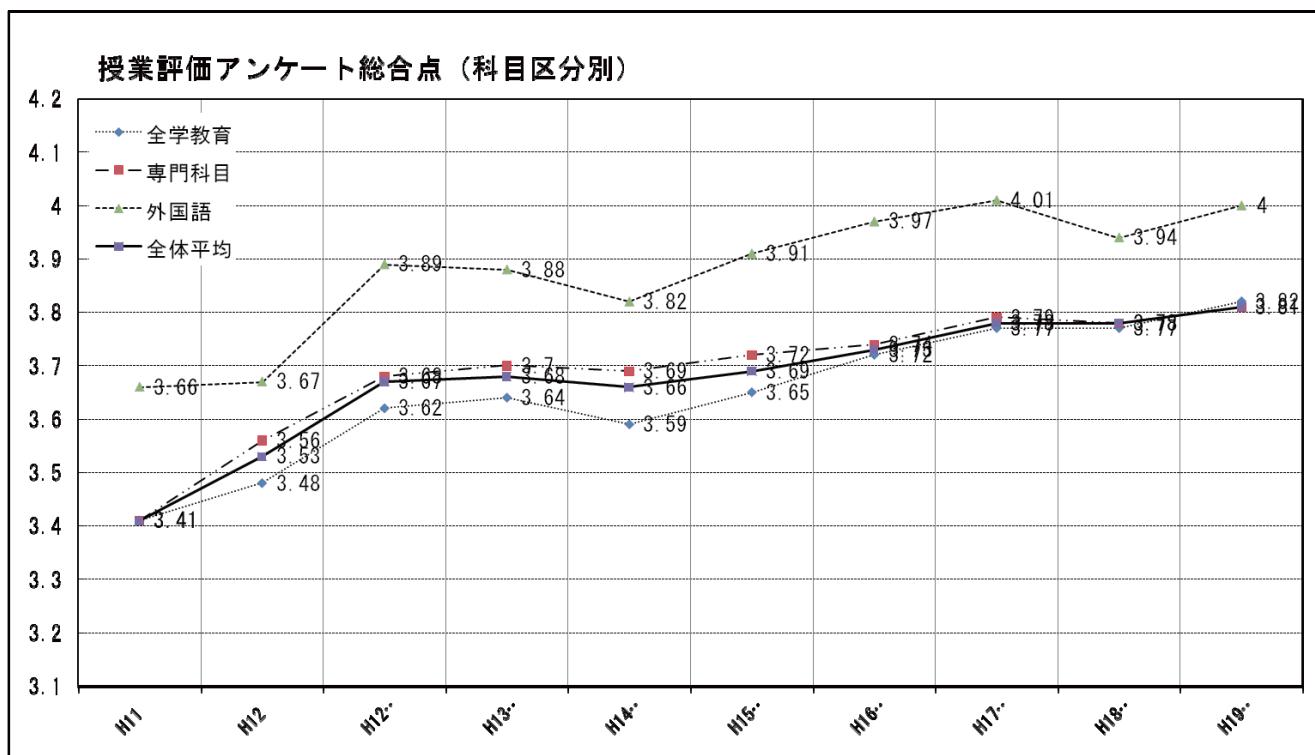


### 全学教育科目の成績分布の変化



### 授業評価アンケート総合点の変化

(全学教育・専門科目・外国語・全体)



平成18年度全学教育における各部局の授業担当状況

1. 講義担当コマ数(専任外国人教師を除く) 担当分を問う講師責任1人につき、責任部局は5~6コマ、准責任部局は6コマ(上記に計上)

22. 外国語受業及び実験等相当コマ数（専任（外國人教師を除く）担当全講義責任コマ数）（配当教員1人につき、責任部局は8～10コマ、准任部局は10コマ）に詰め上

3 新任部局の開講担当員数(配当教員1人あたりの負担コマ数(講義換算)が、責任部局では5コマ以上、准任部局では6コマ以上必要)		4 講義換算(×6/10)	
新任部局	准任部局	新任部局	准任部局
新任部局教員数(新任・予定)	配当教員数(HB-4.1予定)	新任部局教員数(講義換算×6/10)	准任部局教員数(講義換算×6/10)
124	60.13	20.25	12.04
新任部局教員1人あたり負担コマ数	配当教員1人あたり負担コマ数	新任部局教員1人あたり負担コマ数	准任部局教員1人あたり負担コマ数
4.96	5.01	5.06	4.96

人間竟と環境	総	32	2	3	2
3	3	8	1	1	2
3	3	8	1	1	2
3	3	8	1	1	2
2	3	8	1	1	2

科	病名	年齢	性別	主訴	既往歴	検査	治療	経過
眼科	白内障	72	女	視力障害	既往歴なし	眼圧正常	眼内薬注入	視力回復
耳鼻咽喉科	慢性副鼻腔炎	55	男	頭痛、鼻漏	既往歴なし	CT検査	抗生素投与	症状改善
整形外科	腰椎狭窄症	68	男	腰痛、下肢痛	既往歴なし	MRI検査	物理療法	疼痛軽減
泌尿器科	腎盂癌	75	男	血尿	既往歴なし	腫瘍マーカー検査	手術	手術成功
消化器科	胃癌	62	男	腹痛、体重減少	既往歴なし	内視鏡検査	化学療法	治療中
心臓血管科	心筋梗塞	65	男	胸痛	既往歴なし	心電図検査	溶栓療法	救命
脳神経科	脳梗塞	70	女	片麻痺	既往歴なし	CT検査	抗凝固療法	回復
呼吸器科	慢阻肺	60	男	呼吸困難	既往歴なし	胸部X線検査	吸入療法	緩和
皮膚科	湿疹	30	女	皮膚癢	既往歴なし	スキンスクラッチ	外用薬	改善
内分泌科	糖尿病	50	男	多飲多尿	既往歴なし	血糖検査	胰島素療法	血糖コントロール

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100


## 平成18年度全学教育における各部局の授業担当状況

### 6. 全部局の担当状況

部局	文	数	法	理	医	工	農	歯	水	空港	低風研	電子研	地政研	基研	研究室	北方	公出	外	計					
専任教員数(7.5、講師以上等+外)	103	53	46	169	140	38	33	7	276	104	35	24	14	12	10	11	5	31	18					
開講コマ数合計(等+外)	145	93	25	351	277	8	20	90	29	118	647	118	8	5	7	1	30	15	4	1578				
教員一人あたりの開講コマ数(等+外)	1.41	2.82	0.47	0.76	2.20	0.19	0.18	0.61	0.33	0.28	0.23	0.13	9.51	2.41	0.31	0.43	0.21	0.50	0.08	2.50				
開講コマ数合計(等+外+非)	155	125	25	430	400	7	27	21	158	31	9	9	9.91	118	9	15	5	7	1	30	15	19	4	157
非常勤勤務担当コマ数	10	32	0	8	1.19	0	0	1	68	2	0	0	0	337	0	1	0	0	0	0	0	0	0	24.64
非常勤勤務存続(非/全休)	6.15	25.60	0.00	18.60	24.29	0.00	0.00	4.76	43.04	6.45	0.00	0.00	34.25	0.00	11.11	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	24.64

全学教育科目は旧教務官室を継承した7つの責任部局と、医学部保健医学科の新設に際して実施されている。

表1. 表2は旧教務部から引き継いだ定員(配当員)に基づき、責任・専責責任部局が開講責任を負う科目のコマ数である。

責任部局については配当員1名につき、開講(表1)8~10コマ、実験・実技・外國語科目(表2)10コマの開講責任を負う。

表3は責任部局の配当員数と講義換算した開講コマ数を示す。ただし、開講負担状況を示したものである。

表4は表1・2で示されたマ数の内、開講負担状況を示しているコマを示す。これらが全学協力の状況が示す。

表5は全学の協力により実施される給付科目「一般教育演習・外國語演習」は講師以上の教員10名につき1コマを提供することとしている。

表6は全部局の担当状況をまとめた表である。

### 参考 英語演習コマ数統計(責任部局からの提出分+全学協力分+他科目からの変更分)

授業科目	部	局	文	外	非	專	非	專	理	工	農	歯	水	空港	低風研	電子研	地政研	基研	研究室	北方	公出	専	外	計
英語演習			9																					

※ 合併実質運営部局分は未実績より提供

平成18年度英語演習のコマについてでは、以下のように取り扱う。

1. 開講計画提出時(10月)に英語演習として提供されたコマ

・文・教・法・経・言語文化部 責任コマとして表記にて取り扱う。(講義換算として5ノ8を乘じる)

2. 他の科目より英語演習に変更(12月)したコマ

・英語演習としては計算せずに、提出された元の科目として計上する。

平成19年度 全学教育における各部局の授業担当状況

1. 誰が担当当コマ数（専任「外国人教師を除く」）相当分を担当教員1人につき、責任部局は5～6コマ、複数責任部局は6～7コマ）に計上

2. 外国語授業及び実験等担当分を開講責任コマ数 (配当教員1人につき、責任部局は8~10コマ、選

33. 責任部局の開講責任コマ数（配当教育1人あたりの負担コマ数）が、責任部局では5コマ以上、非責任部局では6コマ以上必要



平成20年度 全学教育における各部局の授業担当状況



平成18/17年度 第1学期 全学教育科目履修者数対比表(確定値)

2006/6/28

区分	授業科目	18年度1学期			17年度1学期			履修者数の差	前年比%
		科目数	履修者数	1科目の履修者数	科目数	履修者数	1科目の履修者数		
主題別科目	思索と言語	11	709	64.45	15	1,396	93.07	▲ 687	50.8%
	思索と言語(論文指導)	7	141	20.14	7	168	24.00	▲ 27	83.9%
	歴史の視座	10	601	60.10	14	1,125	80.36	▲ 524	53.4%
	歴史の視座(論文指導)	4	60	15.00	6	102	17.00	▲ 42	58.8%
	芸術と文学	6	364	60.67	15	1,158	77.20	▲ 794	31.4%
	芸術と文学(集中講義)	3	300	100.00	2	170	85.00	130	176.5%
	芸術と文学(論文指導)	4	69	17.25	4	125	31.25	▲ 56	55.2%
	社会の認識	18	1,901	105.61	24	3,332	138.83	▲ 1,431	57.1%
	社会の認識(論文指導)	11	150	13.64	12	281	23.42	▲ 131	53.4%
	科学・技術の世界	19	1,376	72.42	25	3,881	155.24	▲ 2,505	35.5%
	科学・技術の世界(論文指導)	3	74	24.67	4	102	25.50	▲ 28	72.5%
	主題別科目 小計	67	5,251	78.37	93	10,892	117.12	▲ 5,641	48.2%
	主題別科目(論文指導) 小計	28	494	17.64	31	823	26.55	▲ 329	60.0%
総合科目	環境と人間	23	1,162	50.52	23	3,257	141.61	▲ 2,095	35.7%
	健康と社会	9	903	100.33	8	2,558	319.75	▲ 1,655	35.3%
	人間と文化	5	275	55.00	3	331	110.33	▲ 56	83.1%
	特別講義	3	89	29.67	3	704	234.67	▲ 615	12.6%
	総合科目 小計	40	2,429	60.73	37	6,850	185.14	▲ 4,421	35.5%
共通科目	一般教育演習	51	634	12.43	78	1,614	20.69	▲ 980	39.3%
	一般教育演習(集中授業)	11	247	22.45	11	225	20.45	22	109.8%
	一般教育演習(論文指導)	33	433	13.12	18	351	19.50	82	123.4%
	一般教育演習(上記)小計	95	1,314	13.83	107	2,190	20.47	▲ 876	60.0%
共通科目	体育学A	57	2,065	36.23	60	2,463	41.05	▲ 398	83.8%
	体育学B【18年度新設講義科目】	1	32	32.00	—	—	—	—	—
	情報学【17年度:情報処理I】	20	2,651	132.55	15	2,682	178.80	▲ 31	98.8%
	統計学	11	908	82.55	11	1,211	110.09	▲ 303	75.0%
	共通科目 小計	89	5,656	63.55	86	6,356	73.91	▲ 700	89.0%
外国語を除く教養科目 合計		320	15,144	47.33	358	27,236	76.08	▲ 12,092	55.6%
論文指導(主題別・一般教育演習)小計		61	927	15.20	49	1,174	23.96	▲ 247	79.0%

外國語科目	英語	222	8,712	39.24	221	8,797	39.81	▲ 85	99.0%
	ドイツ語	46	1,507	32.76	51	1,656	32.47	▲ 149	91.0%
	フランス語	25	739	29.56	30	985	32.83	▲ 246	75.0%
	ロシア語	7	150	21.43	9	173	19.22	▲ 23	86.7%
	中国語	39	1,363	34.95	46	1,676	36.43	▲ 313	81.3%
	外国語科目 小計	339	12,471	36.79	357	13,287	37.22	▲ 816	93.9%
外国語演習	英語演習	34	326	9.59	18	290	16.11	36	112.4%
	ドイツ語演習	7	110	15.71	6	50	8.33	60	220.0%
	フランス語演習	16	119	7.44	15	115	7.67	4	103.5%
	ロシア語演習	8	32	4.00	8	45	5.63	▲ 13	71.1%
	中国語演習	16	176	11.00	6	93	15.50	83	189.2%
	イタリア語等演習	14	225	16.07	13	297	22.85	▲ 72	75.8%
外国語演習 小計		95	988	10.40	66	890	13.48	98	111.0%
外国語 合計		434	13,459	31.01	423	14,177	33.52	▲ 718	94.9%

基礎科目	人文科学の基礎	5	658	131.60	—	—	—	—	—
	社会科学の基礎	5	658	131.60	—	—	—	—	—
	文系基礎科目 小計	10	1,316	131.60	—	—	—	—	—
	線形代数学	33	1,862	56.42	37	2,255	60.95	▲ 393	82.6%
	微分積分学	42	2,444	58.19	45	2,946	65.47	▲ 502	83.0%
	数学概論	2	272	136.00	2	174	87.00	98	156.3%
	数学 小計	77	4,578	59.45	84	5,375	63.99	▲ 797	85.2%
	物理学・基礎物理学	43	2,746	63.86	46	3,080	66.96	▲ 334	89.2%
	化学・基礎化学	39	2,498	64.05	38	2,496	65.68	2	100.1%
	生物学・基礎生物学	31	1,673	53.97	30	1,867	62.23	▲ 194	89.6%
	地学・基礎地学	15	711	47.40	9	979	108.78	▲ 268	72.6%
	理科 小計	128	7,628	59.59	123	8,422	68.47	▲ 794	90.6%
	自然科学実験	17	885	52.06	—	—	—	▲ 249	84.3%
	基礎実験(旧カリ)	11	447	40.6	21	1,581	75.29		
	基礎自然科学実験	1	18	18.0	1	2	2.00	16	900.0%
	実験 小計	29	1,350	46.55	22	1,583	71.95	▲ 233	85.3%
	基礎科目 合計	244	14,872	60.95	229	15,380	67.16	▲ 508	96.7%

日本語・日本事情	3	37	12.33	3	54	18.00	▲ 17	68.5%
全学教育科目 合計	1,001	43,512	43.47	1,013	56,847	56.12	▲ 13,335	76.5%

平成18/17年度 第2学期 全学教育科目履修者数対比表

2006/11/7

区分	授業科目	18年度2学期			17年度2学期			履修者数の差	前年比%
		科目数	履修者数	1科目の履修者数	科目数	履修者数	1科目の履修者数		
主題別科目	思索と言語	11	632	57.45	6	365	60.83	267	173.2%
	思索と言語(論文指導)	7	59	8.43	8	165	20.63	▲ 106	35.8%
	歴史の視座	10	691	69.10	7	582	83.14	109	118.7%
	歴史の視座(論文指導)	5	90	18.00	4	60	15.00	30	150.0%
	芸術と文学	19	1,807	95.11	11	758	68.91	1,049	238.4%
	芸術と文学(集中講義)	0	0	—	1	63	63.00	—	—
	芸術と文学(論文指導)	3	64	21.33	4	113	28.25	▲ 49	56.6%
	社会の認識	14	1,282	91.57	21	2,786	132.67	▲ 1,504	46.0%
	社会の認識(論文指導)	8	113	14.13	6	82	13.67	31	137.8%
	科学・技術の世界	17	1,417	83.35	16	1,544	96.50	▲ 336	80.8%
	(図形科学概論)【18年度から「科学・技術の世界」】	0	0	—	1	209	209.00	—	—
	科学・技術の世界(論文指導)	2	39	19.50	1	23	23.00	16	169.6%
	主題別科目 小計	71	5,829	82.10	62	6,244	100.71	▲ 415	93.4%
	主題別科目(論文指導) 小計	25	365	14.60	23	443	19.26	▲ 78	82.4%
総合科目	環境と人間	9	993	110.33	9	1,342	149.11	▲ 349	74.0%
	健康と社会	5	834	166.80	5	823	164.60	11	101.3%
	人間と文化	5	328	65.60	6	654	109.00	▲ 326	50.2%
	特別講義	1	411	411.00	1	480	480.00	▲ 69	85.6%
	総合科目 小計	20	2,566	128.30	21	3,299	157.10	▲ 733	77.8%
	一般教育演習	33	489	14.82	42	522	12.43	▲ 33	93.7%
	一般教育演習(論文指導)	30	276	9.20	19	245	12.89	31	112.7%
共通科目	一般教育演習 小計	63	765	12.14	61	767	12.57	▲ 2	99.7%
	体育学A	53	1,717	32.40	55	2,123	38.60	▲ 406	80.9%
	体育学B【18年度新設講義科目】	1	46	46.00	—	—	—	—	—
	情報学【17年度:情報処理II・情報科学】	14	895	63.93	19	1,443	75.95	▲ 548	62.0%
	統計学	11	607	55.18	11	788	71.64	▲ 181	77.0%
	共通科目 小計	79	3,265	41.33	85	4,354	51.22	▲ 1,089	75.0%
	外国語を除く教養科目 合計	258	12,790	49.57	253	15,170	59.96	▲ 2,380	84.3%

論文指導(主題別・一般教育演習)小計	55	641	11.65	42	688	16.38	▲ 47	93.2%
--------------------	----	-----	-------	----	-----	-------	------	-------

外国語科目	英語	205	7,507	36.62	199	7,521	37.79	▲ 14	99.8%
	ドイツ語	34	1,150	33.82	42	1,343	31.98	▲ 193	85.6%
	フランス語	17	527	31.00	26	777	29.88	▲ 250	67.8%
	ロシア語	6	115	19.17	9	125	13.89	▲ 10	92.0%
	中国語	28	1,038	37.07	37	1,308	35.35	▲ 270	79.4%
	外国語科目 小計	290	10,337	35.64	313	11,074	35.38	▲ 737	93.3%
外国語演習	英語演習	49	1,002	20.45	13	280	21.54	722	357.9%
	ドイツ語演習	13	259	19.92	4	20	5.00	239	1295.0%
	フランス語演習	15	174	11.60	11	101	9.18	73	172.3%
	ロシア語演習	9	55	6.11	7	52	7.43	3	105.8%
	中国語演習	18	273	15.17	4	47	11.75	226	580.9%
	イタリア語等演習	15	284	18.93	13	278	21.38	6	102.2%
	外国語演習 小計	119	2,047	17.20	52	778	14.96	1,269	263.1%
	外国語 合計	409	12,384	30.28	365	11,852	32.47	532	104.5%

基礎科目	線形代数学	29	1,497	51.62	28	1,570	56.07	▲ 73	95.4%
	微分積分学(新カリ)	31	1,752	56.52	31	1,907	61.52	▲ 155	91.9%
	数学概論(旧カリ)	2	111	55.50	2	53	26.50	58	209.4%
	数学 小計	62	3,360	54.19	61	3,530	57.87	▲ 170	95.2%
	物理学・基礎物理学	31	1,848	59.61	30	1,848	61.60	0	100.0%
	化学・基礎化学	31	1,961	63.26	29	1,851	63.83	110	105.9%
	生物学・基礎生物学	22	1,353	61.50	19	1,286	67.68	67	105.2%
	地学・基礎地学	4	372	93.00	4	450	112.50	▲ 78	82.7%
	理科 小計	88	5,534	62.89	82	5,435	66.28	99	101.8%
	自然科学実験	18	1,037	57.61	—	—	—	▲ 852	56.2%
	基礎実験(旧カリ)	12	55	4.58	27	1,944	72.00	—	—
	心理学実験	5	84	16.80	4	84	21.00	0	100.0%
	実験 小計	35	1,176	33.60	31	2,028	65.42	▲ 852	58.0%
	基礎科目 合計	185	10,070	54.43	174	10,993	63.18	▲ 923	91.6%

日本語	2	29	14.50	2	41	20.50	▲ 12	70.7%
-----	---	----	-------	---	----	-------	------	-------

全学教育科目(2学期) 合計	854	35,273	41.30	794	38,056	47.93	▲ 2,783	92.7%
全学教育科目(1学期) 合計	1,001	43,512	43.47	1,013	56,847	56.12	▲ 13,335	76.5%
全学教育科目(通算) 合計	1,855	78,785	42.47	1,807	94,903	52.52	▲ 16,118	83.0%

平成19/18年度(第1学期)全学教育科目履修者数対比表(6月履修取消受付後)(2007.7.13)

区分	授業科目	19年度1学期			18年度1学期			19/18年度比較	
		クラス数	履修者数	1クラスの履修者数	クラス数	履修者数	1クラスの履修者数	履修者の増減	前年比%
主題別科目	思素と言語	10	985	98.50	9	652	72.44	333	151.1%
	思素と言語(論文指導)	6	109	18.17	7	141	20.14	▲ 32	77.3%
	歴史の視座	9	872	96.89	10	601	60.10	271	145.1%
	歴史の視座(論文指導)	2	33	16.50	4	60	15.00	▲ 27	55.0%
	芸術と文学	7	717	102.43	6	364	60.67	353	197.0%
	芸術と文学(集中)	2	194	97.00	3	300	100.00	▲ 106	64.7%
	芸術と文学(論文指導)	3	51	17.00	4	69	17.25	▲ 18	73.9%
	社会の認識	17	1,958	115.18	18	1,901	105.61	57	103.0%
	社会の認識(論文指導)	12	273	22.75	11	150	13.64	123	182.0%
	科学・技術の世界	20	1,474	73.70	19	1,376	72.42	98	107.1%
	科学・技術の世界(論文指導)	4	110	27.50	3	74	24.67	36	148.6%
	主題別科目 小計	92	6,776	73.65	94	5,688	60.51	1,388	125.8%
総合科目	(集中・論文指導除く)小計	63	6,006	95.33	62	4,894	78.94	1,112	122.7%
	(集中)小計	2	194	97.00	3	300	100.00	▲ 106	64.7%
	(論文指導)小計	27	576	21.33	29	494	17.03	82	116.6%
	環境と人間	13	1,245	95.77	23	1,162	50.52	83	107.1%
	健康と社会	5	1,619	323.80	9	903	100.33	716	179.3%
	人間と文化	5	312	62.40	5	275	55.00	37	113.5%
	特別講義	2	152	76.00	3	89	29.67	63	170.8%
	総合科目 小計	25	3,328	133.12	40	2,429	60.73	899	137.0%
	一般教育演習	92	1,688	18.35	95	1,314	13.83	621	128.5%
	(集中・論文指導除く)小計	27	488	18.07	51	634	12.43	▲ 146	77.0%
	(集中:フィールド体験)小計	12	284	23.67	11	247	22.45	37	115.0%
	(論文指導)小計	53	916	17.28	33	433	13.12	483	211.5%
共通科目	体育学A(実技・1単位)	53	2,070	39.06	57	2,065	36.23	5	100.2%
	体育学B(講義・2単位)	1	58	58.00	1	32	32.00	26	181.3%
	情報学	20	2,673	133.65	20	2,651	132.55	22	100.8%
	統計学	11	880	80.00	11	908	82.55	▲ 28	96.9%
	インターンシップ	2	65	32.50	2	64	32.00	-	-
	共通科目 小計	85	5,746	67.60	91	5,720	62.86	90	101.6%
	外国語を除く教養科目 合計	294	17,538	59.65	320	15,151	47.35	2,387	115.8%
	うち論文指導(主題別・一般教育演習)小計	80	1,492	18.65	62	927	14.95	565	160.9%
外国語科目	英語	145	5,838	40.26	222	8,712	39.24	▲ 2,874	67.0%
	ドイツ語	36	1,235	34.31	46	1,507	32.76	▲ 272	82.0%
	フランス語	16	591	36.94	25	739	29.56	▲ 148	80.0%
	ロシア語	6	90	15.00	7	150	21.43	▲ 60	60.0%
	スペイン語(H19新設)	4	195	48.75	-	-	-	-	-
	中国語	32	997	31.16	39	1,363	34.95	▲ 366	73.1%
	韓国語(H19新設)	4	163	40.75	-	-	-	-	-
	外国語科目 小計	243	9,109	37.49	339	12,471	36.79	▲ 3,362	73.0%
	英語演習	92	1,577	17.14	34	326	9.59	1,251	483.7%
	英語演習(集中)	2	18	9.00	0	0	-	18	-
外国語演習	ドイツ語演習	15	214	14.27	7	110	15.71	104	194.5%
	フランス語演習	16	164	10.25	16	119	7.44	45	137.8%
	ロシア語演習	10	23	2.30	8	32	4.00	▲ 9	71.9%
	スペイン語演習	3	56	18.67	2	48	24.00	8	116.7%
	中国語演習	19	271	14.26	16	176	11.00	95	154.0%
	韓国語演習(H18:朝鮮語演習・朝鮮語)	3	49	16.33	2	38	19.00	11	128.9%
	外国語特別演習	13	163	12.54	10	139	13.90	▲ 33	83.2%
	西洋古典語(H18:思索と言語)	-	-	-	2	57	28.50	-	-
	外国語演習 小計	173	2,535	14.65	97	1,045	10.77	1,490	242.6%
	外国語 合計	416	11,644	27.99	436	13,516	31.00	▲ 1,872	86.1%
基礎科目	人文科学の基礎	5	706	141.20	5	658	131.60	48	107.3%
	社会科学の基礎	5	722	144.40	5	658	131.60	64	109.7%
	文系基礎科目 小計	10	1,428	142.80	10	1,316	131.60	112	108.5%
	線形代数学	33	1,895	57.42	33	1,862	56.42	33	101.8%
	微分積分学	32	1,909	59.66	42	2,444	58.19	▲ 535	78.1%
	数学概論	5	440	88.00	2	272	136.00	168	161.8%
	数学 小計	70	4,244	60.63	77	4,578	59.45	▲ 334	92.7%
	基礎物理学・物理学	36	2,018	56.06	43	2,746	63.86	▲ 728	73.5%
	基礎化学・化学	34	2,023	59.50	39	2,498	64.05	▲ 475	81.0%
	基礎生物学・生物学	23	1,458	63.39	31	1,673	53.97	▲ 215	87.1%
	基礎地学・地学・基礎地球惑星科学	7	587	83.86	15	711	47.40	▲ 124	82.6%
	理科 小計	100	6,086	60.86	128	7,628	59.59	▲ 1,542	79.8%
	基礎自然科学実験	1	14	14.00	1	18	18.00	▲ 4	77.8%
	自然科学実験	18	928	51.56	17	885	52.06	43	104.9%
	基礎実験(旧カリ:1単位)	11	51	4.64	11	447	40.64	▲ 396	11.4%
	実験 小計	30	993	33.10	29	1,350	46.55	▲ 357	73.6%
	基礎科目 合計	210	12,751	60.72	244	14,872	60.95	▲ 2,121	85.7%
	日本語・日本事情	4	27	6.75	3	37	12.33	▲ 10	73.0%
	全学教育科目 1学期合計	924	41,960	45.41	1,003	43,576	43.45	▲ 1,616	96.3%

平成19/18年度(第2学期)全学教育科目履修者数対比表(12月履修取消受付後)(2007.12.26)

	授業科目	19年度2学期			18年度2学期			19/18年度比較	
		クラス数	履修者数	1クラスの履修者数	クラス数	履修者数	1クラスの履修者数	履修者の増減	前年比%
主 題 別 科 目	思索と言語	13	695	53.46	11	632	57.45	63	110.0%
	思索と言語(論文指導)	3	26	8.67	7	59	8.43	▲33	44.1%
	歴史の視座	12	878	73.17	10	691	69.10	187	127.1%
	歴史の視座(論文指導)	2	17	8.50	5	90	18.00	▲73	18.9%
	芸術と文学	13	1,069	82.23	19	1,807	95.11	▲738	59.2%
	芸術と文学(集中)	1	70	70.00	0	0	—	70	—
	芸術と文学(論文指導)	4	68	17.00	3	64	21.33	4	106.3%
	社会の認識	20	1,479	73.95	14	1,282	91.57	197	115.4%
	社会の認識(論文指導)	10	117	11.70	8	113	14.13	4	103.5%
	科学・技術の世界	12	1,012	84.33	17	1,417	83.35	▲405	71.4%
	科学・技術の世界(論文指導)	0	0	0.00	2	39	19.50	▲39	0.0%
主題別科目 小計		90	5,431	60.34	96	6,194	64.52	▲763	87.7%
(集中・論文指導除く)小計		70	5,133	73.33	71	5,829	82.10	▲696	88.1%
(集中)小計		1	70	70.00	0	0	—	70	—
(論文指導)小計		19	228	12.00	25	365	14.60	▲137	62.5%
総 合 科 目	環境と人間	11	1,101	100.09	9	993	110.33	108	110.9%
	健康と社会	7	934	133.43	5	834	166.80	100	112.0%
	人間と文化	9	777	86.33	5	328	65.60	449	236.9%
	特別講義	1	297	297.00	1	411	411.00	▲114	72.3%
	総合科目 小計	28	3,109	111.04	20	2,566	128.30	543	121.2%
	一般教育演習	54	884	16.37	66	850	12.88	34	104.0%
	(集中・論文指導除く)小計	23	403	17.52	33	489	14.82	▲86	82.4%
	(集中: フィールド体験)小計	3	80	27	3	85	28.33	▲5	94.1%
	(論文指導)小計	28	401	14.32	30	276	9.20	125	145.3%
	共通科目 小計	79	3,056	38.68	79	3,265	41.33	▲209	93.6%
外国語を除く教養科目 合計		251	12,480	49.72	261	12,875	49.33	▲395	96.9%
論文指導(主題別・一般教育演習)小計		47	629	13.38	55	641	11.65	▲12	98.1%
外 国 語 科 目	英語	157	5,291	33.70	205	7,507	36.62	▲2,216	70.5%
	ドイツ語	33	1,083	32.82	34	1,150	33.82	▲67	94.2%
	フランス語	14	466	33.29	17	527	31.00	▲61	88.4%
	ロシア語	6	68	11.33	6	115	19.17	▲47	59.1%
	スペイン語(H19新設)	5	202	40.40	—	—	—	202	—
	中国語	28	850	30.36	28	1,038	37.07	▲188	81.9%
	韓国語(H19新設)	5	173	34.60	—	—	—	173	—
	外国语科目 小計	248	8,133	32.79	290	10,337	35.64	▲2,204	78.7%
	英語演習	66	1,089	16.50	49	1,002	20.45	87	108.7%
	ドイツ語演習	15	231	15.40	13	259	19.92	▲28	89.2%
外 国 語 演 習	フランス語演習	16	205	12.81	15	174	11.60	31	117.8%
	ロシア語演習	9	38	4.22	9	55	6.11	▲17	69.1%
	スペイン語演習	4	66	16.50	2	57	28.50	9	115.8%
	中国語演習	22	286	13.00	18	273	15.17	13	104.8%
	韓国語演習(H18:朝鮮語演習・朝鮮語)	6	77	12.83	3	50	16.67	27	154.0%
	外国语特別演習	9	82	9.11	10	177	17.70	▲95	46.3%
	外国语演習 小計	147	2,074	14.11	119	2,047	17.20	27	101.3%
	外国语 合計	395	10,207	25.84	409	12,384	30.28	▲2,177	82.4%
	線形代数学	27	1,382	51.19	29	1,497	51.62	▲115	92.3%
	微分積分学	29	1,724	59.45	31	1,752	56.52	▲28	98.4%
基 礎 科 目	数学概論	1	46	46.00	2	111	55.50	▲65	41.4%
	数学 小計	57	3,152	55.30	62	3,360	54.19	▲208	93.8%
	基礎物理学・物理学	31	1,843	59.45	31	1,848	59.61	▲5	99.7%
	基礎化学・化学	31	1,913	61.71	31	1,961	63.26	▲48	97.6%
	基礎生物学・生物学	21	1,361	64.81	22	1,353	61.50	8	100.6%
	基礎地学	4	426	106.50	4	372	93.00	54	114.5%
	理科 小計	87	5,543	63.71	88	5,534	62.89	9	100.2%
	心理学実験	3	62	20.67	5	84	16.80	▲22	73.8%
	自然科学実験(2単位)	18	1,030	57.22	18	1,037	57.61	▲7	99.3%
	基礎実験(旧カリ:1単位)	10	13	1.30	12	55	4.58	▲42	23.6%
	実験 小計	31	1,105	35.65	35	1,176	33.60	▲71	94.0%
基礎科目 合計		175	9,800	56.00	185	10,070	54.43	▲270	97.3%
日本語		1	20	20.00	2	29	14.50	▲9	69.0%
全学教育科目 2学期合計		822	32,507	39.55	857	35,358	41.26	▲2,851	91.9%
全学教育科目 1学期合計		924	41,960	45.41	1,003	43,576	43.45	▲1,616	96.3%
全学教育科目 1・2学期合計		1,746	74,467	42.65	1,860	78,934	42.44	▲4,467	94.3%

平成20/19年度(第1学期)全学教育科目履修者数対比表(履修取消受付後) (2008.7.23)

区分	授業科目	20年度1学期			19年度1学期			20/19年度比較	
		クラス数	履修者数	1クラスの履修者数	クラス数	履修者数	1クラスの履修者数	履修者の増減	前年比%
主題別科目	思索と言語	7	833	119.00	10	985	98.50	▲ 152	84.6%
	思索と言語(論文指導)	7	131	18.71	6	109	18.17	22	120.2%
	歴史の視座	7	903	129.00	9	872	96.89	31	103.6%
	歴史の視座(論文指導)	2	31	15.50	2	33	16.50	▲ 2	93.9%
	芸術と文学	7	542	77.43	7	717	102.43	▲ 175	75.6%
	芸術と文学(集中)	2	173	86.50	2	194	97.00	▲ 21	89.2%
	芸術と文学(論文指導)	6	115	19.17	3	51	17.00	64	225.5%
	社会の認識	21	2,098	99.90	17	1,958	115.18	140	107.2%
	社会の認識(論文指導)	10	219	21.90	12	273	22.75	▲ 54	80.2%
	科学・技術の世界	21	1,806	86.00	20	1,474	73.70	332	122.5%
	科学・技術の世界(論文指導)	1	29	29.00	4	110	27.50	▲ 81	26.4%
	主題別科目 小計	91	6,880	75.60	92	6,776	73.65	104	101.5%
総合科目	(集中・論文指導除く)小計	63	6,182	98.13	63	6,006	95.33	176	102.9%
	(集中)小計	2	173	86.50	2	194	97.00	▲ 21	89.2%
	(論文指導)小計	26	525	20.19	27	576	21.33	▲ 51	91.1%
	環境と人間	14	1,088	77.71	13	1,245	95.77	▲ 157	87.4%
	健康と社会	8	1,737	217.13	5	1,619	323.80	118	107.3%
共通科目	人間と文化	7	544	77.71	5	312	62.40	232	174.4%
	特別講義	2	122	61.00	2	152	76.00	▲ 30	80.3%
	総合科目 小計	31	3,491	112.61	25	3,328	133.12	163	104.9%
	一般教育演習	84	1,666	19.83	92	1,688	18.35	▲ 22	98.7%
	(集中・論文指導除く)小計	25	496	19.84	27	488	18.07	8	101.6%
外國語科目	(集中:フィールド体験)小計	10	239	23.90	12	284	23.67	▲ 45	84.2%
	(論文指導)小計	49	931	19.00	53	916	17.28	15	101.6%
	体育学A(実技・1単位)	53	2,076	39.17	53	2,070	39.06	6	100.3%
	体育学B(講義・2単位)	1	80	80.00	1	58	58.00	22	137.9%
	情報学	19	2,689	141.53	20	2,673	133.65	16	100.6%
外国語演習	統計学	11	896	81.45	11	880	80.00	16	101.8%
	インターナンシップ	2	56	28.00	2	66	33.00	▲ 10	84.8%
	共通科目 小計	86	5,797	67.41	87	5,747	66.06	50	100.9%
	外国語を除く教養科目 合計	292	17,834	61.08	296	17,539	59.25	295	101.7%
	うち論文指導(主題別・一般教育演習)小計	75	1,456	19.41	80	1,492	18.65	▲ 36	97.6%
外國語	英語	141	5,590	39.65	145	5,838	40.26	▲ 248	95.8%
	ドイツ語	37	1,059	28.62	36	1,235	34.31	▲ 176	85.7%
	フランス語	14	564	40.29	16	591	36.94	▲ 27	95.4%
	ロシア語	6	89	14.83	6	90	15.00	▲ 1	98.9%
	スペイン語	6	247	41.17	4	195	48.75	52	126.7%
外國語演習	中国語	36	763	21.19	32	997	31.16	▲ 234	76.5%
	韓国語	5	156	31.20	4	163	40.75	▲ 7	95.7%
	外國語科目 小計	245	8,468	34.56	243	9,109	37.49	▲ 641	93.0%
	英語演習	90	1,487	16.52	92	1,577	17.14	▲ 90	94.3%
	英語演習(集中)	-	-	-	2	18	9.00	-	-
外國語演習	ドイツ語演習	19	266	14.00	15	214	14.27	52	124.3%
	フランス語演習	14	177	12.64	16	164	10.25	13	107.9%
	ロシア語演習	9	32	3.56	10	23	2.30	9	139.1%
	スペイン語演習	7	107	15.29	3	56	18.67	51	191.1%
	中国語演習	22	262	11.91	19	271	14.26	▲ 9	96.7%
外國語	韓国語演習(H18:朝鮮語演習・朝鮮語)	7	69	9.86	3	49	16.33	20	140.8%
	外國語特別演習	14	142	10.14	13	163	12.54	▲ 21	87.1%
	外國語演習 小計	182	2,542	13.97	173	2,535	14.65	7	100.3%
	外國語 合計	427	11,010	25.78	416	11,644	27.99	▲ 634	94.6%
	人文科学の基礎	5	716	143.20	5	706	141.20	10	101.4%
基礎科目	社会科学の基礎	5	701	140.20	5	722	144.40	▲ 21	97.1%
	文系基礎科目 小計	10	1,417	141.70	10	1,428	142.80	▲ 11	99.2%
	線形代数学	32	1,956	61.13	33	1,895	57.42	61	103.2%
	微分積分学	32	1,906	59.56	32	1,909	59.66	▲ 3	99.8%
	数学概論	5	312	62.40	5	440	88.00	▲ 128	70.9%
基礎科目	数学 小計	69	4,174	60.49	70	4,244	60.63	▲ 70	98.4%
	基礎物理学・物理学	36	1,998	55.50	36	2,018	56.06	▲ 20	99.0%
	基礎化学・化学	34	2,009	59.09	34	2,023	59.50	▲ 14	99.3%
	基礎生物学・生物学	20	1,389	69.45	23	1,458	63.39	▲ 69	95.3%
	基礎地学・地学・基礎地球惑星科学	7	534	76.29	7	587	83.86	▲ 53	91.0%
基礎科目	理科 小計	97	5,930	61.13	100	6,086	60.86	▲ 156	97.4%
	基礎自然科学実験	1	10	10.00	1	14	14.00	▲ 4	71.4%
	自然科学実験	18	942	52.33	18	928	51.56	14	101.5%
	基礎実験(旧カリ:1単位)	9	17	1.89	11	51	4.64	▲ 34	33.3%
	実験 小計	28	969	34.61	30	993	33.10	▲ 24	97.6%
全学教育科目	基礎科目 合計	204	12,490	61.23	210	12,751	60.72	▲ 261	98.0%
	日本語・日本事情	4	32	8.00	4	27	6.75	5	118.5%
全学教育科目 1学期合計		927	41,366	44.62	926	41,961	45.31	▲ 595	98.6%

平成20/19年度(第2学期)全学教育科目履修者数対比表 (12月履修取消受付後) (2008.12.26)

区分	授業科目	20年度2学期			19年度2学期			20/19年度比較	
		クラス数	履修者数	1クラスの履修者数	クラス数	履修者数	1クラスの履修者数	履修者の増減	前年比%
主題別科目	思索と言語	13	1,006	77.38	13	695	53.46	311	144.7%
	思索と言語(論文指導)	3	25	8.33	3	26	8.67	▲1	96.2%
	歴史の視座	12	1,167	97.25	12	878	73.17	289	132.9%
	歴史の視座(論文指導)	2	31	15.50	2	17	8.50	14	182.4%
	芸術と文学	11	1,030	93.64	13	1,069	82.23	▲39	96.4%
	芸術と文学(集中)	—	—	—	1	70	70.00	—	—
	芸術と文学(論文指導)	1	22	22.00	4	68	17.00	▲46	32.4%
	社会の認識	12	1,330	110.83	20	1,479	73.95	▲149	89.9%
	社会の認識(論文指導)	6	107	17.83	10	117	11.70	▲10	91.5%
	科学・技術の世界	9	736	81.78	12	1,012	84.33	▲276	72.7%
	科学・技術の世界(論文指導)	—	—	—	—	—	—	—	—
	主題別科目 小計	69	5,454	79.04	90	5,431	60.34	23	100.4%
総合科目	(集中・論文指導除く)小計	57	5,269	92.44	70	5,133	73.33	136	102.6%
	(集中)小計	—	—	—	1	70	70.00	—	—
	(論文指導)小計	12	185	15.42	19	228	12.00	▲43	81.1%
	環境と人間	11	967	87.91	11	1,101	100.09	▲134	87.8%
共通科目	健康と社会	7	1,076	153.71	7	934	133.43	142	115.2%
	人間と文化	5	505	101.00	9	777	86.33	▲272	65.0%
	特別講義	1	335	335.00	1	297	297.00	38	112.8%
	総合科目 小計	24	2,883	120.13	28	3,109	111.04	▲226	92.7%
	一般教育演習	56	929	16.59	54	884	16.37	45	105.1%
外国語科目	(集中・論文指導除く)小計	17	284	16.71	23	403	17.52	▲119	70.5%
	(集中:フィールド体験)小計	4	115	28.75	3	80	27	35	143.8%
	(論文指導)小計	35	530	15.14	28	401	14.32	129	132.2%
	体育学A(実技・1単位)	48	1,700	35.42	53	1,752	33.06	▲52	97.0%
外國語演習	体育学B(講義・2単位)	1	63	63.00	1	59	59.00	4	106.8%
	情報学	14	724	51.71	14	741	52.93	▲17	97.7%
	統計学	11	453	41.18	11	504	45.82	▲51	89.9%
	共通科目 小計	74	2,940	39.73	79	3,056	38.68	▲116	96.2%
外国語を除く教養科目 合計		223	12,206	54.74	251	12,480	49.72	▲274	97.8%
論文指導(主題別・一般教育演習)小計		47	715	15.21	47	629	13.38	86	113.7%
外国語演習	英語	153	5,173	33.81	157	5,291	33.70	▲118	97.8%
	ドイツ語	32	1,066	33.31	33	1,083	32.82	▲17	98.4%
	フランス語	12	548	45.67	14	466	33.29	82	117.6%
	ロシア語	5	87	17.40	6	68	11.33	19	127.9%
	スペイン語	6	255	42.50	5	202	40.40	53	126.2%
	中国語	27	720	26.67	28	850	30.36	▲130	84.7%
	韓国語	5	160	32.00	5	173	34.60	▲13	92.5%
	外国語科目 小計	240	8,009	33.37	248	8,133	32.79	▲124	98.5%
基礎科目	英語演習	52	1,112	21.38	66	1,089	16.50	23	102.1%
	ドイツ語演習	20	285	14.25	15	231	15.40	54	123.4%
	フランス語演習	14	198	14.14	16	205	12.81	▲7	96.6%
	ロシア語演習	8	31	3.88	9	38	4.22	▲7	81.6%
	スペイン語演習	5	84	16.80	4	66	16.50	18	127.3%
	中国語演習	27	236	8.74	22	286	13.00	▲50	82.5%
	韓国語演習(H18:朝鮮語演習・朝鮮語)	7	51	7.29	6	77	12.83	▲26	66.2%
	外国語特別演習	14	118	8.43	9	82	9.11	36	143.9%
	外国語演習 小計	147	2,115	14.39	147	2,074	14.11	41	102.0%
	外国語 合計	387	10,124	26.16	395	10,207	25.84	▲83	99.2%
全学教育科目	線形代数学	26	1,364	52.46	27	1,382	51.19	▲18	98.7%
	微分積分学	28	1,749	62.46	29	1,724	59.45	25	101.5%
	数学概論	1	19	19.00	1	46	46.00	▲27	41.3%
	数学 小計	55	3,132	56.95	57	3,152	55.30	▲20	99.4%
	基礎物理学・物理学	31	1,755	56.61	31	1,843	59.45	▲88	95.2%
	基礎化学・化学	30	1,916	63.87	31	1,913	61.71	3	100.2%
	基礎生物学・生物学	19	1,358	71.47	21	1,361	64.81	▲3	99.8%
	基礎地学	4	454	113.50	4	426	106.50	28	106.6%
	理科 小計	84	5,483	65.27	87	5,543	63.71	▲60	98.9%
	心理学実験	4	62	15.50	3	62	20.67	0	100.0%
	自然科学実験(2単位)	18	1,053	58.50	18	1,030	57.22	23	102.2%
	基礎実験(旧カリ:1単位)	3	6	2.00	10	13	1.30	▲7	46.2%
	実験 小計	25	1,121	44.84	31	1,105	35.65	16	101.4%
	基礎科目 合計	164	9,736	59.37	175	9,800	56.00	▲64	99.3%
	日本語	1	19	19.00	1	20	20.00	▲1	95.0%
全学教育科目 2学期合計		775	32,085	41.40	822	32,507	39.55	▲422	98.7%
全学教育科目 1学期合計		927	41,366	44.62	926	41,961	45.31	▲595	98.6%
全学教育科目 1・2学期合計		1,702	73,451	43.16	1,748	74,468	42.60	▲1,017	98.6%

## 平成21/20年度(第1学期)全学教育科目履修者数対比表(履修取消受付後)

(09.07.01)

区分	授業科目	21年度1学期			20年度1学期			21/20年度比較	
		クラス数	履修者数	1クラスの履修者数	クラス数	履修者数	1クラスの履修者数	履修者の増減	前年比%
	一般教育演習(フレッシュマンセミナー)	84	1,598	19.02	84	1,666	19.83	▲68	95.9%
	(集中・論文指導除く)小計	19	350	18.42	25	496	19.84	▲146	70.6%
	(集中:フィールド体験)小計	12	289	24.08	10	239	23.90	50	120.9%
	(論文指導)小計	53	959	18.09	49	931	19.00	28	103.0%
総合科目	環境と人間	15	1,027	68.47	14	1,087	77.64	▲60	94.5%
	健康と社会	9	1,863	207.00	8	1,737	217.13	126	107.3%
	人間と文化	6	421	70.17	7	544	77.71	▲123	77.4%
	人間と文化(集中)	1	18	18.00	—	—	—	18	—
	特別講義	2	110	55.00	2	122	61.00	▲12	90.2%
	総合科目 小計	33	3,439	104.21	31	3,490	112.58	▲51	98.5%
	思索と言語	7	809	115.57	7	833	119.00	▲24	97.1%
主題別科目	思索と言語(論文指導)	5	104	20.80	7	131	18.71	▲27	79.4%
	歴史の視座	12	985	82.08	7	903	129.00	82	109.1%
	歴史の視座(論文指導)	3	92	30.67	2	31	15.50	61	296.8%
	芸術と文学	13	865	66.54	7	542	77.43	323	159.6%
	芸術と文学(集中)	2	140	70.00	2	173	86.50	▲33	80.9%
	芸術と文学(論文指導)	6	121	20.17	6	115	19.17	6	105.2%
	社会の認識	19	2,008	105.68	21	2,098	99.90	▲90	95.7%
	社会の認識(論文指導)	10	165	16.50	10	219	21.90	▲54	75.3%
	科学・技術の世界	17	1,518	89.29	21	1,806	86.00	▲288	84.1%
	科学・技術の世界(論文指導)	3	64	21.33	1	29	29.00	35	220.7%
	主題別科目 小計	97	6,871	70.84	91	6,880	75.60	▲9	99.9%
共通科目	(集中・論文指導除く)小計	68	6,185	90.96	63	6,182	98.13	3	100.0%
	(集中)小計	2	140	70.00	2	173	86.50	▲33	80.9%
	(論文指導)小計	27	546	20.22	26	525	20.19	21	104.0%
	体育学A(実技・1単位)	53	1,968	37.13	53	2,076	39.17	▲108	94.8%
外国語科目	体育学B(講義・2単位)	1	89	89.00	1	80	80.00	9	111.3%
	情報学	19	2,566	135.05	19	2,689	141.53	▲123	95.4%
	統計学	11	830	75.45	11	896	81.45	▲66	92.6%
	インターンシップ	2	91	45.50	2	56	28.00	35	162.5%
	共通科目 小計	86	5,544	64.47	86	5,797	67.41	▲253	95.6%
外国语を除く教養科目 合計		300	17,452	58.17	292	17,833	61.07	▲381	97.9%
うち論文指導(主題別・一般教育演習)小計		80	1,505	18.81	75	1,456	19.41	49	103.4%
外国語演習	英語	138	5,308	38.46	141	5,590	39.65	▲282	95.0%
	ドイツ語	32	1,053	32.91	37	1,059	28.62	▲6	99.4%
	フランス語	15	490	32.67	14	564	40.29	▲74	86.9%
	ロシア語	5	73	14.60	6	89	14.83	▲16	82.0%
	スペイン語	6	259	43.17	6	247	41.17	12	104.9%
	中国語	26	722	27.77	36	763	21.19	▲41	94.6%
	韓国語	5	166	33.20	5	156	31.20	10	106.4%
	外国語科目 小計	227	8,071	35.56	245	8,468	34.56	▲397	95.3%
	英語演習	78	1,293	16.58	90	1,487	16.52	▲194	87.0%
	ドイツ語演習	14	195	13.93	19	266	14.00	▲71	73.3%
基礎科目	フランス語演習	13	227	17.46	14	177	12.64	50	128.2%
	ロシア語演習	4	22	5.50	9	32	3.56	▲10	68.8%
	スペイン語演習	6	88	14.67	7	107	15.29	▲19	82.2%
	中国語演習	16	206	12.88	22	262	11.91	▲56	78.6%
	韓国語演習	6	79	13.17	7	69	9.86	10	114.5%
	外国語特別演習	11	158	14.36	14	142	10.14	16	111.3%
	外国語演習 小計	148	2,268	15.32	182	2,542	13.97	▲274	89.2%
	外国語 合計	375	10,339	27.57	427	11,010	25.78	▲671	93.9%
	人文科学の基礎	5	669	133.80	5	716	143.20	▲47	93.4%
	社会科学の基礎	5	709	141.80	5	701	140.20	8	101.1%
基礎科目	文系基礎科目 小計	10	1,378	137.80	10	1,417	141.70	▲39	97.2%
	線形代数学	30	1,884	62.80	32	1,956	61.13	▲72	96.3%
	微分積分学	31	1,774	57.23	32	1,906	59.56	▲132	93.1%
	数学概論	4	203	50.75	5	312	62.40	▲109	65.1%
	数学 小計	65	3,861	59.40	69	4,174	60.49	▲313	92.5%
	基礎物理学・物理学	35	1,835	52.43	36	1,998	55.50	▲163	91.8%
	基礎化学・化学	32	1,965	61.41	34	2,009	59.09	▲44	97.8%
	基礎生物学・生物学	19	1,405	73.95	20	1,389	69.45	16	101.2%
	基礎地学	7	626	89.43	7	534	76.29	92	117.2%
	理科 小計	93	5,831	62.70	97	5,930	61.13	▲99	98.3%
基礎自然科学実験		1	16	16.00	1	10	10.00	6	160.0%
自然科学実験		18	936	52.00	18	942	52.33	▲6	99.4%
基礎実験(旧カリ:1単位)		4	6	1.50	9	17	1.89	▲11	35.3%
実験 小計		23	958	41.65	28	969	34.61	▲11	98.9%
基礎科目 合計		191	12,028	62.97	204	12,490	61.23	▲462	96.3%
日本語・日本事情		4	38	9.50	4	32	8.00	6	118.8%
全学教育科目 1学期合計		870	39,857	45.81	927	41,365	44.62	▲1,508	96.4%

平成21/20年度(第2学期)全学教育科目履修者数対比表(09.12.18取消後)

区分	授業科目	21年度2学期			20年度2学期			21/20年度比較	
		クラス数	履修者数	1クラスの履修者数	クラス数	履修者数	1クラスの履修者数	履修者の増減	前年比%
	一般教育演習(フレッシュマンセミナー)	48	884	18.42	56	929	16.59	▲45	95.2%
	(集中・論文指導除く)小計	16	292	18.25	17	284	16.71	8	102.8%
	(集中:フィールド体験)小計	3	108	36.00	4	115	29	▲7	94%
	(論文指導)小計	29	484	16.69	35	530	15.14	▲46	91.3%
総合科目	環境と人間	14	768	54.86	11	967	87.91	▲199	79.4%
	健康と社会	8	1,111	138.88	7	1,076	153.71	35	103.3%
	人間と文化	4	323	80.75	5	505	101.00	▲182	64.0%
	人間と文化(集中)	1	10	10.00	—	—	—	—	—
	特別講義	1	202	202.00	1	335	335.00	▲133	60.3%
	総合科目 小計	28	2,414	86.21	24	2,883	120.13	▲469	83.7%
主題別科目	思索と言語	11	1,210	110.00	13	1,006	77.38	204	120.3%
	思索と言語(論文指導)	3	55	18.33	3	25	8.33	30	220.0%
	歴史の視座	5	1,085	217.00	12	1,167	97.25	▲82	93.0%
	歴史の視座(論文指導)	3	54	18.00	2	31	15.50	23	174.2%
	芸術と文学	7	784	112.00	11	1,030	93.64	▲246	76.1%
	芸術と文学(論文指導)	1	10	10.00	1	22	22.00	▲12	45.5%
	社会の認識	14	1,926	137.57	12	1,330	110.83	596	144.8%
	社会の認識(論文指導)	6	96	16.00	6	107	17.83	▲11	89.7%
	科学・技術の世界	14	1,266	90.43	9	736	81.78	530	172.0%
	科学・技術の世界(論文指導)	—	—	—	—	—	—	—	—
	主題別科目 小計	64	6,486	101.34	69	5,454	79.04	1,032	118.9%
	(集中・論文指導除く)小計	51	6,271	122.96	57	5,269	92.44	1,002	119.0%
	(論文指導)小計	13	215	16.54	12	185	15.42	30	116.2%
共通科目	体育学A(実技・1単位)	47	1,606	34.17	48	1,700	35.42	▲94	94.5%
	体育学B(講義・2単位)	1	68	68.00	1	63	63.00	5	107.9%
	情報学	14	834	59.57	14	724	51.71	110	115.2%
	統計学	9	533	59.22	11	453	41.18	80	117.7%
	共通科目 小計	71	3,041	42.83	74	2,940	39.73	101	103.4%
	外国語を除く教養科目 合計	211	12,825	60.78	223	12,206	54.74	619	105.1%
外国語科目	うち論文指導(主題別・一般教育演習)小計	42	699	16.64	47	715	15.21	▲16	97.8%
	英語	152	4,934	32.46	153	5,173	33.81	▲239	95.4%
	ドイツ語	29	1,035	35.69	32	1,066	33.31	▲31	97.1%
	フランス語	13	483	37.15	12	548	45.67	▲65	88.1%
	ロシア語	5	66	13.20	5	87	17.40	▲21	75.9%
	スペイン語	6	249	41.50	6	255	42.50	▲6	97.6%
	中国語	23	711	30.91	27	720	26.67	▲9	98.8%
	韓国語	5	172	34.40	5	160	32.00	12	107.5%
	外国語科目 小計	233	7,650	32.83	240	8,009	33.37	▲359	95.5%
	英語演習	56	1,050	18.75	52	1,112	21.38	▲62	94.4%
外国語演習	ドイツ語演習	16	261	16.31	20	285	14.25	▲24	91.6%
	フランス語演習	13	213	16.38	14	198	14.14	15	107.6%
	ロシア語演習	6	51	8.50	8	31	3.88	20	164.5%
	スペイン語演習	6	92	15.33	5	84	16.80	8	109.5%
	中国語演習	17	240	14.12	27	236	8.74	4	101.7%
	韓国語演習	6	66	11.00	7	51	7.29	15	129.4%
	外国語特別演習	11	113	10.27	14	118	8.43	▲5	95.8%
	外国語演習 小計	131	2,086	15.92	147	2,115	14.39	▲29	98.6%
	外国語 合計	364	9,736	26.75	387	10,124	26.16	▲388	96.2%
基礎科目	線形代数学	26	1,336	51.38	26	1,364	52.46	▲28	97.9%
	微分積分学	28	1,670	59.64	28	1,749	62.46	▲79	95.5%
	数学概論	1	10	10.00	1	19	19.00	▲9	52.6%
	数学 小計	55	3,016	54.84	55	3,132	56.95	▲116	96.3%
	基礎物理学・物理学	30	1,732	57.73	31	1,755	56.61	▲23	98.7%
	基礎化学・化学	30	1,847	61.57	30	1,916	63.87	▲69	96.4%
	基礎生物学・生物学	18	1,334	74.11	19	1,358	71.47	▲24	98.2%
	基礎地学	4	524	131.00	4	454	113.50	70	115.4%
	理科 小計	82	5,437	66.30	84	5,483	65.27	▲46	99.2%
	心理学実験	4	107	26.75	4	62	15.50	45	172.6%
	自然科学実験(2単位)	18	1,023	56.83	18	1,053	58.50	▲30	97.2%
	基礎実験(旧カリ:1単位)	6	7	1.17	3	6	2.00	1	116.7%
	実験 小計	28	1,137	40.61	25	1,121	44.84	16	101.4%
	基礎科目 合計	165	9,590	58.12	164	9,736	59.37	▲146	98.5%
	日本語・日本事情	1	22	22.00	1	19	19.00	3	115.8%
	全学教育科目 2学期合計	741	32,173	43.42	775	32,085	41.40	88	100.3%
	全学教育科目 1学期合計	870	39,857	45.81	927	41,365	44.62	▲1,508	96.4%
	全学教育科目 1・2学期合計	1,611	72,030	44.71	1,702	73,450	43.16	▲1,420	98.1%

# 平成19年度第1学期 履修取消し申請に関する集計表（全学教育科目）

科目名	科目別取消人数 講義数	取消人 数(延べ)		学部別取消し申請者数	
		1年	2年	1年	2年
思素と言語	7	21			
歴史の視座	4	7			
芸術と文学	5	12			
社会の認識	15	28			
科学・技術の世界	15	42			
環境と人間	10	21			
健康と社会	4	13			
人間と文化	2	2			
特別講義	2	7			
一般教育演習	42	77			
体育学A	9	14			
情報学 I	3	9			
統計学	5	6			
英語演習	37	46			
ドイツ語演習	7	8			
フランス語演習	4	10			
ロシア語演習	2	2			
スペイン語演習	7	15			
中国語演習	2	7			
韓国語演習	2	2			
朝鮮語演習	2	3			
イタリア語演習	2	6			
ラテン語演習	1	1			
外国语特別演習	2	2			
線形代数学 I	1	1			
数学概論	3	19			
基礎物理学 I	1	1			
基礎化学 I	1	1			
基礎生物学 I	1	1			
基礎地学 I	3	3			
基礎自然科学実験	1	4			
	202	391			
計					

科目名	科目別取消人数 講義数	取消人 数(延べ)		学部別取消し延べ人数	
		1年	2年	1年	2年
思素と言語	7	21			
歴史の視座	4	7			
芸術と文学	5	12			
社会の認識	15	28			
科学・技術の世界	15	42			
環境と人間	10	21			
健康と社会	4	13			
人間と文化	2	2			
特別講義	2	7			
一般教育演習	42	77			
体育学A	9	14			
情報学 I	3	9			
統計学	5	6			
英語演習	37	46			
ドイツ語演習	7	8			
フランス語演習	4	10			
ロシア語演習	2	2			
スペイン語演習	7	15			
中国語演習	2	7			
韓国語演習	2	2			
朝鮮語演習	2	3			
イタリア語演習	2	6			
ラテン語演習	1	1			
外国语特別演習	2	2			
線形代数学 I	1	1			
数学概論	3	19			
基礎物理学 I	1	1			
基礎化学 I	1	1			
基礎生物学 I	1	1			
基礎地学 I	3	3			
基礎自然科学実験	1	4			
	202	391			
計					

平成19年度第2学期 履修取消申請に関する集計表

科目名	講義数	取消数	取消人数 (延べ)
思索と言語	11	29	
歴史の視座	11	27	
芸術と文学	12	35	
社会の認識	17	49	
科学・技術の世界	10	50	
環境と人間	11	24	
健康と社会	4	12	
人間と文化	5	19	
特別講義	1	7	
一般教育演習	42	91	
体育学A	14	21	
情報学II	5	9	
統計学	4	9	
英語演習	44	94	
ドイツ語演習	7	18	
フランス語演習	8	24	
ロシア語演習	2	3	
スペイン語演習	3	7	
中国語演習	13	27	
韓国語演習	2	4	
朝鮮語演習	1	1	
外国語特別演習	2	3	
線形代数学I	1	15	
微分積分学I	2	5	
微分積分学II	9	17	
数学概論	1	1	
基礎物理学I	3	5	
基礎物理学II	3	3	
基礎化学I	5	11	
基礎生物学I	4	5	
基礎地学I	2	2	
計	264	633	

科目別取消人数

学部	取消人数 (延べ)	学年別内訳
文学部	76	1年内訳 68 2年内訳 8
教育学部	16	1年内訳 12 2年内訳 4
法学部	62	1年内訳 57 2年内訳 5
経済学部	61	1年内訳 58 2年内訳 3
理学部	82	1年内訳 76 2年内訳 6
医学部医学科	20	1年内訳 20 2年内訳 0
医学部保健学科	61	1年内訳 59 2年内訳 2
農学部	4	1年内訳 4 2年内訳 0
歯学部	11	1年内訳 9 2年内訳 2
薬学部	141	1年内訳 134 2年内訳 7
工学部	52	1年内訳 43 2年内訳 9
獣医学部	8	1年内訳 4 2年内訳 4
水産学部	39	1年内訳 38 2年内訳 1
計	633	1年内訳 582 2年内訳 51

学部別取消申請者数

学部	取消申請者数	学年別内訳	一人当たりの申請科目数平均	申請率(申請者/在籍者)
文学部	49	1年内訳 44 2年内訳 5	1.55	12.1%
教育学部	16	1年内訳 12 2年内訳 4	1.00	14.0%
法学部	47	1年内訳 43 2年内訳 4	1.32	10.2%
経済学部	48	1年内訳 45 2年内訳 3	1.27	11.5%
理学部	66	1年内訳 61 2年内訳 5	1.24	10.0%
医学部医学科	16	1年内訳 16 2年内訳 0	1.25	8.0%
医学部保健学科	49	1年内訳 48 2年内訳 1	1.24	12.1%
農学部	3	1年内訳 0 2年内訳 3	1.33	2.4%
歯学部	10	1年内訳 8 2年内訳 2	1.10	6.1%
工学部	119	1年内訳 113 2年内訳 6	1.18	8.0%
農学部	39	1年内訳 32 2年内訳 7	1.33	8.4%
獣医学部	5	1年内訳 3 2年内訳 2	1.60	5.7%
水産学部	36	1年内訳 35 2年内訳 1	1.08	7.5%
計	503	1年内訳 463 2年内訳 40	1.26	9.2%

# 平成20年度第1学期 履修取消申請に関する集計表

科目別取消人数

科目名	取消講義数	取消人數 (延べ)
思索と言語	9	31
歴史の視座	6	19
芸術と文学	9	21
社会の認識	20	63
科学 技術の世界	17	64
環境と人間	12	39
健康と社会	7	21
人間と文化	7	22
特別講義	2	16
一般教育演習	36	59
体育学A	8	17
体育学B	1	3
情報学 I	4	11
統計学	3	10
英語演習	46	78
ドイツ語演習	15	28
フランス語演習	7	17
ロシア語演習	7	10
スペイン語演習	7	17
中国語演習	9	25
韓国語演習	4	8
朝鮮語演習	2	2
イタリア語演習	1	1
外国語特別演習	7	12
線形代数学 I	1	1
線形代数学 II	1	1
微分積分学 I	1	1
数学概論	4	11
基礎物理学 I	1	2
基礎物理学 II	1	1
物理学	1	3
基礎化学 I	2	2
基礎化学 II	1	1
化学	1	1
基礎地学 I	5	5
計	265	623

学部別取消延べ人数

学部	取消人數 (延べ)
文学部	52
教育学部	25
法学部	52
経済学部	90
理学部	34
医学部医学科	30
医学部保健学科	28
歯学部	3
薬学部	14
工学部	162
農学部	60
獣医学部	6
水産学部	67
計	623

学部	申請者数	内訳			申請率 (申請者／在籍者)
		1年	2年	3年	
文学部	47	23	19	5	7.7%
教育学部	24	9	11	4	12.7%
法学部	45	30	13	2	6.5%
経済学部	74	49	24	1	12.1%
理学部	29	13	16	0	3.1%
医学部医学科	19	6	13	0	6.3%
医学部保健学科	25	12	12	1	4.1%
歯学部	3	3	0	0	1.7%
薬学部	13	8	5	0	5.4%
工学部	147	61	83	3	6.6%
農学部	42	20	20	2	6.2%
獣医学部	6	1	4	1	4.6%
水産学部	53	11	42	0	7.9%
計	527	246	262	19	6.5%

# 平成20年度第2学期 履修取消申請に関する集計表

科目名	取消人数 (延べ)	該当講義数
思素と言語	90	12
歴史の視座	53	11
芸術と文学	30	8
社会の認識	39	9
科学・技術の世界	66	9
環境と人間	33	10
健康と社会	10	6
人間と文化	39	5
特別講義	16	1
一般教育演習	98	38
体育学A	27	16
情報学II	15	6
統計学	17	4
英語演習	88	39
ドイツ語演習	25	11
フランス語演習	22	7
ロシア語演習	9	3
スペイン語演習	6	4
中国語演習	30	12
韓国語演習	12	3
外国語特別演習	13	7
線形代数学I	2	1
線形代数学II	16	8
微分積分学I	5	2
微分積分学II	13	8
数学概論	2	1
基礎物理学I	1	1
基礎物理学II	12	5
物理学	11	4
基礎化学II	6	4
化学	1	1
基礎生物学I	4	3
生物学	11	3
基礎地学II	3	3
心理学実験	3	2
計	828	267

学部別取消人数	内訳			
学部	取消人数 (延べ)	1年	2年	3年
文学部		131	117	13
教育学部		23	19	3
法学部		82	69	12
経済学部		79	70	9
理学部		81	77	4
医学部医学科		30	25	5
医学部保健学科		55	51	3
歯学部		6	6	
薬学部		28	25	3
工学部		177	150	24
農学部		96	75	17
獣医学部		10	6	4
水産学部		30	30	
計		828	720	97
		11		

学部別取消申請者数	内訳	申請率 (申請者／在籍 科目数平均)
学部	申請者数 取消者数	1人当たりの申請 科目数平均
文学部	94	1.39
教育学部	18	1.28
法学部	58	1.41
経済学部	66	1.20
理学部	73	1.11
医学部医学科	20	1.50
医学部保健学科	44	1.25
歯学部	6	1.00
薬学部	22	1.27
工学部	148	1.20
農学部	73	1.32
獣医学部	10	1.00
水産学部	27	1.11
計	659	1.26
	9	8.1%

# 平成21年度第1学期 履修取消申請に関する集計表

科目名	該当講義数	取消人數 (延べ)	学部	取消人數 (延べ)	1年	2年	3年	4年
一般教育演習(フレッシュマンセミナー)	18	22	文学部	60	20	26	13	1
環境と人間	14	44	教育学部	17	3	11	2	1
健康と社会	9	36	法学部	64	15	47	2	0
人間と文化	4	16	経済学部	78	29	47	0	2
特別講義	2	7	理学部	45	8	29	4	4
思索と言語	9	18	医学部医学科	12	9	3	0	0
歴史の視座	8	19	医学部保健学科	23	14	8	0	1
芸術と文学	14	37	歯学部	4	4	0	0	0
社会の認識	18	73	薬学部	6	6	0	0	0
科学・技術の世界	11	37	工学部	116	33	81	1	1
体育学A	6	10	農学部	49	14	30	3	2
体育学B	1	2	獣医学部	3	1	2	0	0
情報学I	1	10	水産学部	55	13	42	0	0
情報学II	1	1	計	532	169	326	25	12
統計学	4	15						
英語演習	39	68						
ドイツ語演習	10	25						
フランス語演習	5	10						
スペイン語演習	2	3						
中国語演習	8	14						
韓国語演習(朝鮮語演習)	5	10						
外国語特別演習	7	13						
線形代数学I	1	1	文学部	44	16	16	11	1
線形代数学II	1	2	教育学部	16	3	10	2	1
微分積分学I	2	4	法学部	53	15	36	2	0
微分積分学II	1	2	経済学部	63	23	39	0	1
数学概論	2	21	理学部	44	8	29	3	4
基礎化学II	1	2	医学部医学科	12	9	3	0	0
基礎地学I	1	9	医学部保健学科	23	14	8	0	1
基礎自然科学実験	1	1	歯学部	3	3	0	0	0
計	206	532	薬学部	6	6	0	0	0
工学部	99	32	工学部	65	1	1	117	3.2%
農学部	41	12	農学部	24	3	2	120	4.3%
獣医学部	3	1	獣医学部	2	0	0	100	1.7%
水産学部	44	13	水産学部	31	0	0	125	4.8%
計	451	155	計	263	22	11	118	4.0%

学部別取消人數	該当講義数 (延べ)	取消人數 (延べ)	内訳				申請率 (申請者／在籍)
			1年	2年	3年	4年	
文学部	60	20	26	13	1		5.1%
教育学部	17	3	11	2			6.1%
法学部	64	15	47	2			5.5%
経済学部	78	29	47	0			7.4%
理学部	45	8	29				3.3%
医学部医学科	12	9	3				2.9%
医学部保健学科	23	14	8				2.8%
歯学部	3	3	0				1.3%
薬学部	6	6	0				1.8%
工学部	99	32	65	1	1	117	3.2%
農学部	41	12	24	3	2	120	4.3%
獣医学部	3	1	2	0	0	100	1.7%
水産学部	44	13	31	0	0	125	4.8%
計	451	155	263	22	11	118	4.0%

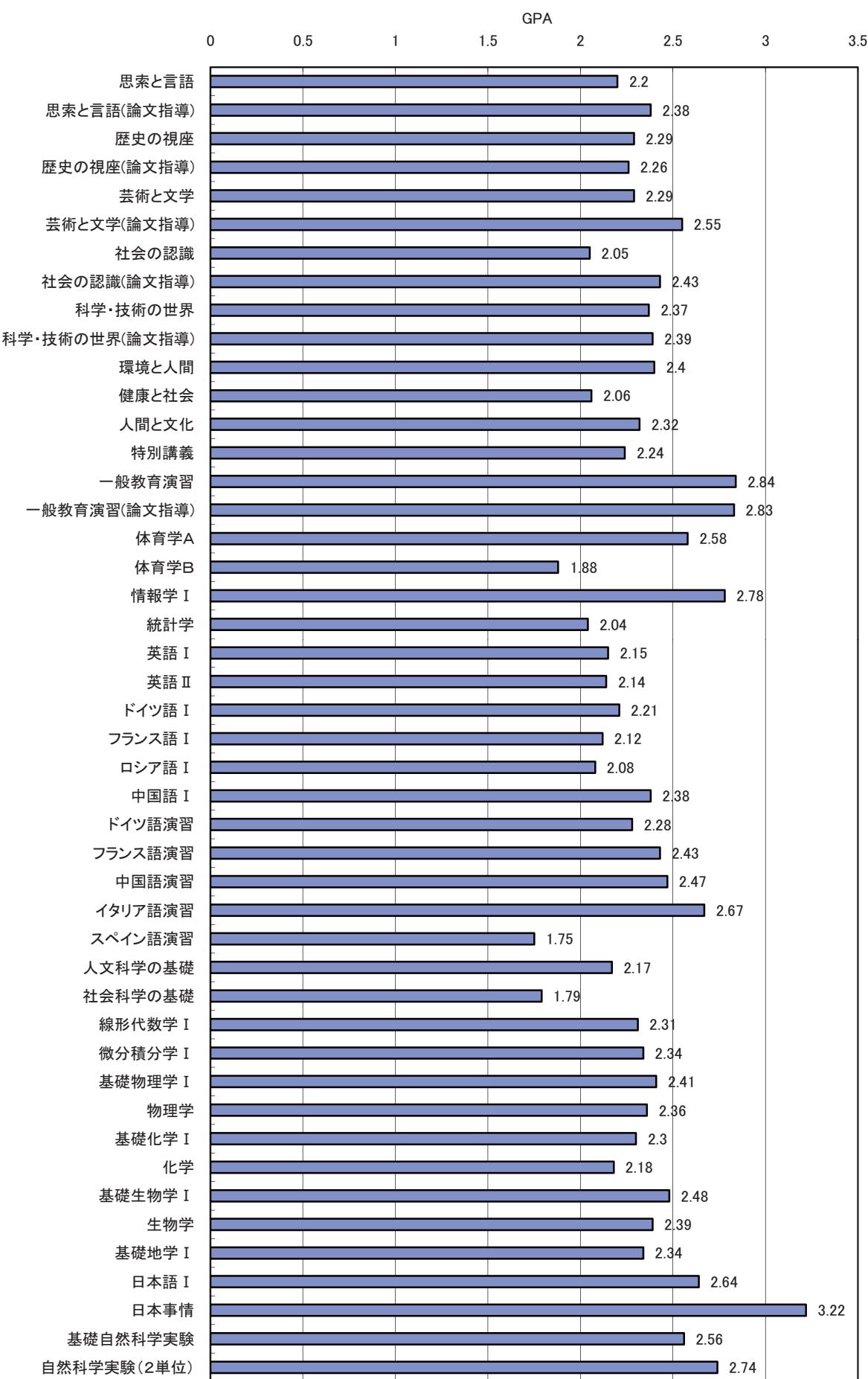
## 平成21/20年度(第1学期) 履修取消人数(延べ)対比表

科目別取消人数	平成20年度第1学期		平成21年度第1学期		取消人数 (延べ)の増減	
	科目名	取消講義数	取消人数 (延べ)	該当講義数		
一般教育演習(フレッシュマンセミナー)		36	59	18	22	▲ 37
環境と人間		12	39	14	44	5
健康と社会		7	21	9	36	15
人間と文化		7	22	4	16	▲ 6
特別講義		2	16	2	7	▲ 9
思索と言語		9	31	9	18	▲ 13
歴史の視座		6	19	8	19	0
芸術と文学		9	21	14	37	16
社会の認識		20	63	18	73	10
科学・技術の世界		17	64	11	37	▲ 27
体育学A		8	17	6	10	▲ 7
体育学B		1	3	1	2	▲ 1
情報学 I		4	11	1	10	▲ 1
情報学 II		0	0	1	1	1
統計学		3	10	4	15	5
英語演習		46	78	39	68	▲ 10
ドイツ語演習		15	28	10	25	▲ 3
フランス語演習		7	17	5	10	▲ 7
ロシア語演習		7	10	0	0	▲ 10
スペイン語演習		7	17	2	3	▲ 14
中国語演習		9	25	8	14	▲ 11
韓国語演習(朝鮮語演習)		4	8	5	10	2
外国語特別演習		7	12	7	13	1
線形代数学 I		1	1	1	1	0
線形代数学 II		1	1	1	2	1
微分積分学 I		1	1	2	4	3
微分積分学 II		0	0	1	2	2
数学概論		4	11	2	21	10
基礎物理学 I		1	2	0	0	▲ 2
基礎物理学 II		1	1	0	0	▲ 1
基礎化学 I		2	2	0	0	▲ 2
基礎化学 II		1	1	1	2	1
基礎生物学 I		0	0	0	0	0
基礎生物学 II		0	0	0	0	0
基礎地学 I		5	5	1	9	4
基礎自然科学実験		0	0	1	1	1
自然科学実験		0	0	0	0	0
朝鮮語演習		2	2			
イタリア語演習		1	1			
物理学		1	3			
化学		1	1			
計		265	623	206	532	▲ 84

平成18年度第1学期 成績評価の分布状況(科目別平均値)

区分	科目名	科目数	履修者数	修得者数	秀	優	良	可	不可	秀(%)	優(%)	良(%)	可(%)	不可(%)	GPA
分野別科目	思素と言語 (講義題目数10)	434	393	36	152	154	51	41	8.3	35.0	35.5	11.8	9.4	2.21	
	思素と言語(論文指導) (講義題目数7)	103	95	10	44	30	11	8	9.7	42.7	29.1	10.7	7.8	2.36	
	歴史の視座 (講義題目数10)	347	329	38	115	122	54	18	11.0	33.1	35.2	15.6	5.2	2.29	
	歴史の視座(論文指導) (講義題目数3)	37	35	4	9	20	2	2	10.8	24.3	54.1	5.4	5.4	2.30	
	芸術と文学 (講義題目数6)	212	210	16	71	84	39	2	7.5	33.5	39.6	18.4	0.9	2.28	
	芸術と文学(論文指導) (講義題目数4)	49	47	8	21	15	3	2	16.3	42.9	30.6	6.1	4.1	2.61	
	社会の認識 (講義題目数18)	1,130	1,028	85	325	386	232	102	7.5	28.8	34.2	20.5	9.0	2.05	
	社会の認識(論文指導) (講義題目数11)	121	114	17	45	43	9	7	14.0	37.2	35.5	7.4	5.8	2.46	
	科学・技術の世界 (講義題目数19)	1,027	941	184	300	339	118	86	17.9	29.2	33.0	11.5	8.4	2.37	
	科学・技術の世界(論文指導) (講義題目数3)	62	60	3	24	31	2	2	4.8	38.7	50.0	3.2	3.2	2.39	
複合科目	環境と人間 (講義題目数23)	612	597	65	200	274	58	15	10.6	32.7	44.8	9.5	2.5	2.40	
	健康と社会 (講義題目数9)	594	579	49	125	246	159	15	8.2	21.0	41.4	26.8	2.5	2.06	
	人間と文化 (講義題目数5)	122	113	10	55	31	17	9	8.2	45.1	25.4	13.9	7.4	2.33	
	特別講義 (講義題目数3)	70	67	5	22	31	9	3	7.1	31.4	44.3	12.9	4.3	2.24	
一般教育演習	一般教育演習 (講義題目数51)	617	601	133	319	124	25	16	21.6	51.7	20.1	4.1	2.6	2.86	
	一般教育演習(論文指導) (講義題目数33)	423	414	109	169	112	24	9	25.8	40.0	26.5	5.7	2.1	2.82	
共通科目	体育学A (講義題目数57)	2,041	1,979	69	1,270	533	107	62	3.4	62.2	26.1	5.2	3.0	2.58	
	体育学B (講義題目数1)	32	29	2	5	15	7	3	6.3	15.6	46.9	21.9	9.4	1.88	
	情報学 I (講義題目数20)	2,562	2,488	648	1,038	621	181	74	25.3	40.5	24.2	7.1	2.9	2.78	
	統計学 (講義題目数11)	810	702	103	208	225	166	108	12.7	25.7	27.8	20.5	13.3	2.04	
外国語科目	英語 I (講義題目数72)	2,591	2,530	215	629	1,125	561	61	8.3	24.3	43.4	21.7	2.4	2.15	
	英語 II (講義題目数49)	2,598	2,547	95	694	1,337	421	51	3.7	26.7	51.5	16.2	2.0	2.14	
	ドイツ語 I (講義題目数31)	1,075	1,028	117	323	349	239	47	10.9	30.0	32.5	22.2	4.4	2.21	
	フランス語 I (講義題目数15)	468	442	60	113	145	124	26	12.8	24.1	31.0	26.5	5.6	2.12	
	ロシア語 I (講義題目数4)	99	87	16	24	23	24	12	16.2	24.2	23.2	24.2	12.1	2.08	
	中国語 I (講義題目数26)	952	915	156	304	275	180	37	16.4	31.9	28.9	18.9	3.9	2.38	
外国語演習	英語演習 (講義題目数2)	2	2	1	1				50.0	50.0				3.50	
	ドイツ語演習 (講義題目数6)	70	58	10	25	19	4	12	14.3	35.7	27.1	5.7	17.1	2.24	
	フランス語演習 (講義題目数7)	46	40	10	15	10	5	6	21.7	32.6	21.7	10.9	13.0	2.39	
	ロシア語演習 (講義題目数3)	5	4	1	1	2		1	20.0	20.0	40.0		20.0	2.20	
	中国語演習 (講義題目数6)	81	78	17	28	18	15	3	21.0	34.6	22.2	18.5	3.7	2.51	
	イタリア語演習 (講義題目数2)	11	11	2	2	4	3		18.2	18.2	36.4	27.3		2.27	
	スペイン語演習 (講義題目数1)	12	9		5	2	2	3		41.7	16.7	16.7	25.0	1.75	
	朝鮮語演習 (講義題目数1)	3	1		1			2		33.3			66.7	1.00	
	ポーランド語演習 (講義題目数1)	1	1			1					100.0			2.00	
基礎科目	外国語特別演習 (講義題目数1)	4	4	1	3				25.0	75.0				3.25	
	人文科学の基礎 (講義題目数5)	658	614	57	215	212	130	44	8.7	32.7	32.2	19.8	6.7	2.17	
	社会科学の基礎 (講義題目数5)	658	596	39	115	233	209	62	5.9	17.5	35.4	31.8	9.4	1.79	
	線形代数学 I (講義題目数33)	1,750	1,688	234	491	668	295	62	13.4	28.1	38.2	16.9	3.5	2.31	
	微分積分学 I (講義題目数33)	1,713	1,636	251	523	586	276	77	14.7	30.5	34.2	16.1	4.5	2.35	
	物理学 (講義題目数9)	447	414	78	136	136	64	33	17.4	30.4	30.4	14.3	7.4	2.36	
	基礎物理学 I (講義題目数20)	1,293	1,258	186	403	495	174	35	14.4	31.2	38.3	13.5	2.7	2.41	
	化学 (講義題目数10)	551	515	59	151	209	96	36	10.7	27.4	37.9	17.4	6.5	2.18	
	基礎化学 I (講義題目数19)	1,315	1,269	164	358	543	204	46	12.5	27.2	41.3	15.5	3.5	2.30	
	生物学 (講義題目数6)	271	263	42	80	99	42	8	15.5	29.5	36.5	15.5	3.0	2.39	
	基礎生物学 I (講義題目数16)	1,007	981	163	325	378	115	26	16.2	32.3	37.5	11.4	2.6	2.48	
	基礎地学 I (講義題目数7)	482	461	60	162	164	75	21	12.4	33.6	34.0	15.6	4.4	2.34	
	自然科学実験(2単位) (講義題目数17)	884	854	136	443	273	2	30	15.4	50.1	30.9	0.2	3.4	2.74	
	基礎自然科学実験 (講義題目数1)	18	15	5	6	4		3	27.8	33.3	22.2		16.7	2.56	
	日本語 I (講義題目数1)	11	11	2	4	4	1		18.2	36.4	36.4	9.1		2.64	
	日本事情 (講義題目数1)	9	9	4	3	2			44.4	33.3	22.2			3.22	
総計		(講義題目数714)	30,490	29,162	3,775	10,100	10,752	4,535	1,328	12.4	33.1	35.3	14.9	4.4	2.34

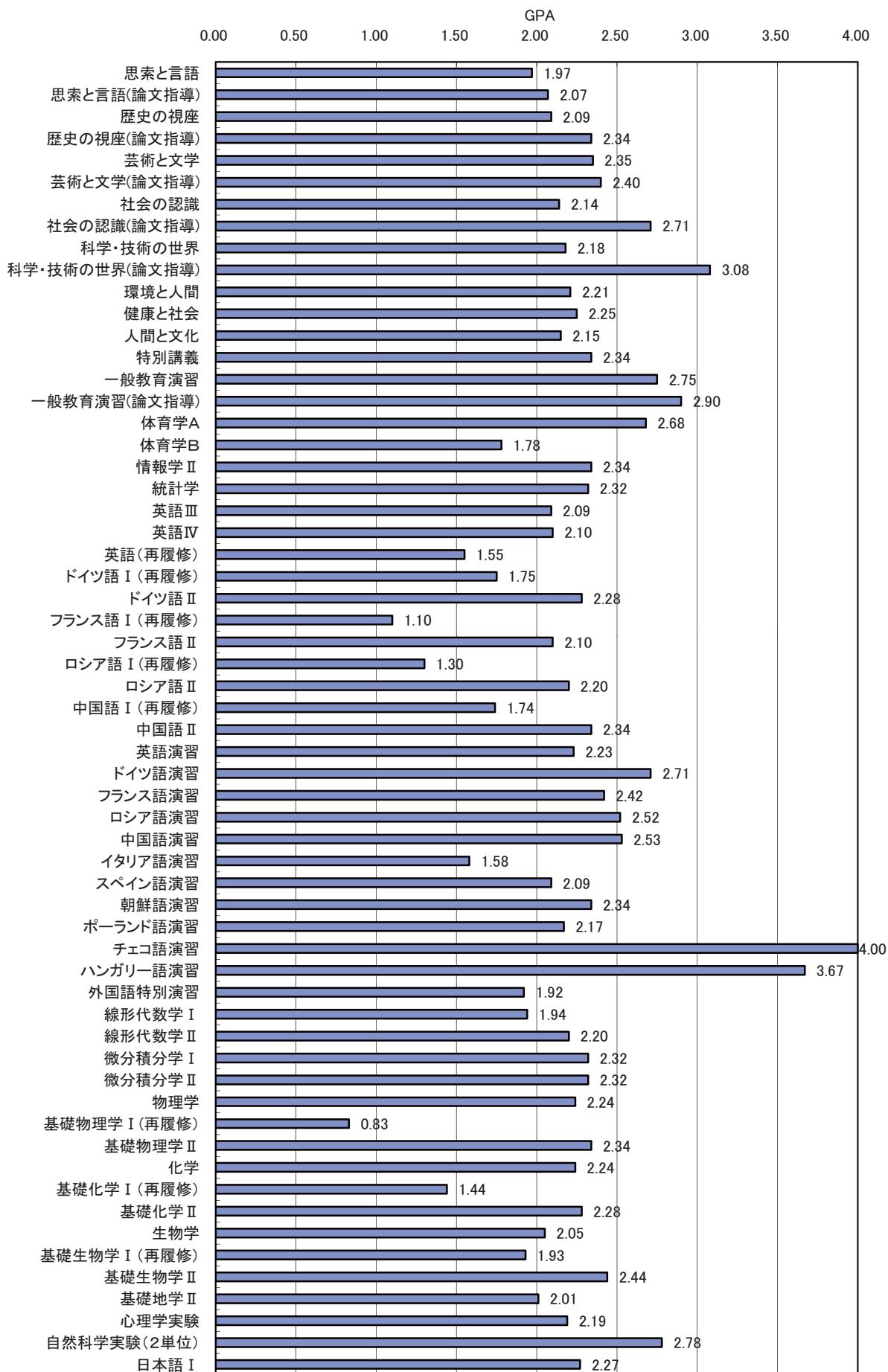
**平成18年度 第1学期  
科目別GPA平均値**



平成18年度第2学期 成績評価の分布状況(科目別平均値)

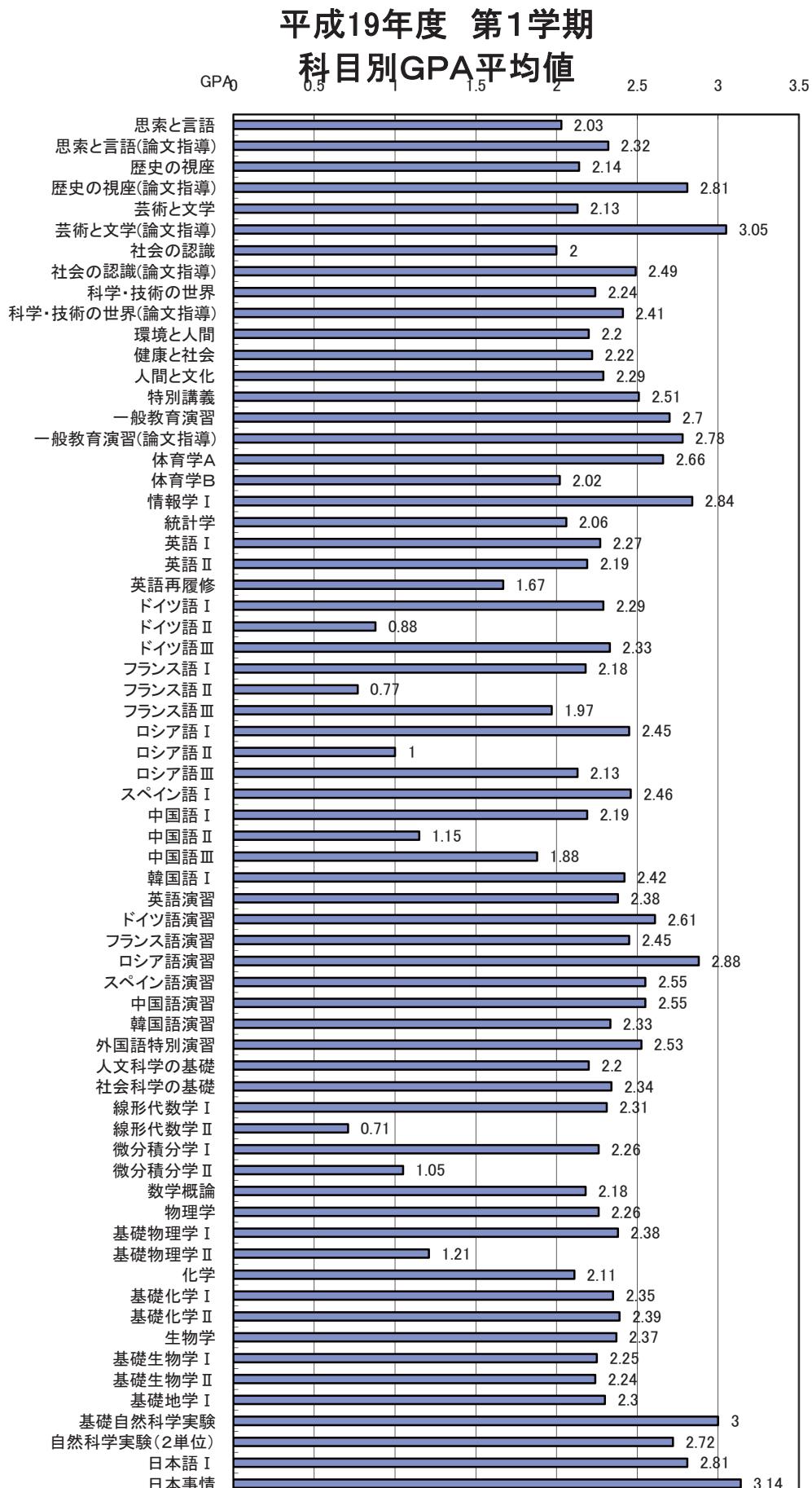
区分	科目名	担当教員名	履修者数	修得者数	秀	優	良	可	不可	秀(%)	優(%)	良(%)	可(%)	不可(%)	GPA
主題別科目	思索と言語	(講義題目数9)	520	452	47	126	180	99	68	9.0	24.2	34.6	19.0	13.1	1.97
	思索と言語(論文指導)	(講義題目数7)	54	47	3	20	16	8	7	5.6	37.0	29.6	14.8	13.0	2.07
	歴史の視座	(講義題目数10)	572	520	34	184	204	98	52	5.9	32.2	35.7	17.1	9.1	2.09
	歴史の視座(論文指導)	(講義題目数5)	88	83	6	37	31	9	5	6.8	42.0	35.2	10.2	5.7	2.34
	芸術と文学	(講義題目数19)	1598	1463	243	509	538	173	135	15.2	31.9	33.7	10.8	8.4	2.35
	芸術と文学(論文指導)	(講義題目数3)	62	60	5	24	26	5	2	8.1	38.7	41.9	8.1	3.2	2.40
	社会の認識	(講義題目数14)	1049	949	97	327	346	179	100	9.2	31.2	33.0	17.1	9.5	2.14
	社会の認識(論文指導)	(講義題目数8)	97	94	10	60	19	5	3	10.3	61.9	19.6	5.2	3.1	2.71
	科学・技術の世界	(講義題目数17)	1255	1181	106	379	477	219	74	8.4	30.2	38.0	17.5	5.9	2.18
	科学・技術の世界(論文指導)	(講義題目数2)	36	36	9	23	2	2		25.0	63.9	5.6	5.6		3.08
総合科目	環境と人間	(講義題目数9)	848	826	62	192	475	97	22	7.3	22.6	56.0	11.4	2.6	2.21
	健康と社会	(講義題目数5)	767	741	80	202	341	118	26	10.4	26.3	44.5	15.4	3.4	2.25
	人間と文化	(講義題目数5)	273	257	27	71	108	51	16	9.9	26.0	39.6	18.7	5.9	2.15
	特別講義	(講義題目数1)	397	389	20	161	159	49	8	5.0	40.6	40.1	12.3	2.0	2.34
一般教育演習	一般教育演習	(講義題目数33)	475	459	107	206	115	31	16	22.5	43.4	24.2	6.5	3.4	2.75
	一般教育演習(論文指導)	(講義題目数30)	267	255	59	155	32	9	12	22.1	58.1	12.0	3.4	4.5	2.90
共通科目	体育学A	(講義題目数53)	1678	1628	135	1057	346	90	50	8.0	63.0	20.6	5.4	3.0	2.68
	体育学B	(講義題目数1)	45	40	2	9	16	13	5	4.4	20.0	35.6	28.9	11.1	1.78
	情報学 II	(講義題目数13)	831	784	135	240	274	135	47	16.2	28.9	33.0	16.2	5.7	2.34
	統計学	(講義題目数11)	557	511	105	164	138	104	46	18.9	29.4	24.8	18.7	8.3	2.32
外国語科目	英語III	(講義題目数78)	2467	2382	186	590	1039	567	85	7.5	23.9	42.1	23.0	3.4	2.09
	英語IV	(講義題目数70)	2476	2384	195	600	1034	555	92	7.9	24.2	41.8	22.4	3.7	2.10
	英語(再履修)	(講義題目数12)	78	63	2	10	32	19	15	2.6	12.8	41.0	24.4	19.2	1.55
	ドイツ語 I(再履修)	(講義題目数2)	36	31	1	9	11	10	5	2.8	25.0	30.6	27.8	13.9	1.75
	ドイツ語 II	(講義題目数31)	1064	1007	137	331	342	197	57	12.9	31.1	32.1	18.5	5.4	2.28
	フランス語 I(再履修)	(講義題目数1)	20	15		2	3	10	5		10.0	15.0	50.0	25.0	1.10
	フランス語 II	(講義題目数15)	461	431	51	122	141	117	30	11.1	26.5	30.6	25.4	6.5	2.10
	ロシア語 I(再履修)	(講義題目数1)	10	8		1	3	4	2		10.0	30.0	40.0	20.0	1.30
	ロシア語 II	(講義題目数4)	96	90	11	28	32	19	6	11.5	29.2	33.3	19.8	6.3	2.20
	中国語 I(再履修)	(講義題目数1)	34	31	2	3	16	10	3	5.9	8.8	47.1	29.4	8.8	1.74
外国語演習	中国語 II	(講義題目数26)	950	903	160	279	283	181	47	16.8	29.4	29.8	19.1	4.9	2.34
	英語演習	(講義題目数47)	863	808	108	255	281	164	55	12.5	29.5	32.6	19.0	6.4	2.23
	ドイツ語演習	(講義題目数12)	235	223	51	102	56	14	12	21.7	43.4	23.8	6.0	5.1	2.71
	フランス語演習	(講義題目数11)	134	123	26	49	25	23	11	19.4	36.6	18.7	17.2	8.2	2.42
	ロシア語演習	(講義題目数4)	33	31	3	17	9	2	2	9.1	51.5	27.3	6.1	6.1	2.52
	中国語演習	(講義題目数15)	203	189	44	66	61	18	14	21.7	32.5	30.0	8.9	6.9	2.53
	イタリア語演習	(講義題目数2)	36	30	3	4	10	13	6	8.3	11.1	27.8	36.1	16.7	1.58
	スペイン語演習	(講義題目数2)	32	28	3	10	10	5	4	9.4	31.3	31.3	15.6	12.5	2.09
	朝鮮語演習	(講義題目数2)	29	26	5	9	9	3	3	17.2	31.0	31.0	10.3	10.3	2.34
	ポーランド語演習	(講義題目数1)	36	36	3	10	13	10		8.3	27.8	36.1	27.8		2.17
	チェコ語演習	(講義題目数2)	2	2	2					100.0					4.00
	ハンガリー語演習	(講義題目数1)	3	3	2	1				66.7	33.3				3.67
基礎科目	外国語特別演習	(講義題目数2)	13	11	1	3	5	2	2	7.7	23.1	38.5	15.4	15.4	1.92
	線形代数学 I	(講義題目数2)	130	110	14	28	44	24	20	10.8	21.5	33.8	18.5	15.4	1.94
	線形代数学 II	(講義題目数27)	1202	1106	173	304	416	213	96	14.4	25.3	34.6	17.7	8.0	2.20
	微分積分学 I	(講義題目数2)	191	181	26	56	73	26	10	13.6	29.3	38.2	13.6	5.2	2.32
	微分積分学 II	(講義題目数29)	1433	1345	204	434	502	205	88	14.2	30.3	35.0	14.3	6.1	2.32
	物理学	(講義題目数11)	473	427	48	157	173	49	46	10.1	33.2	36.6	10.4	9.7	2.24
	基礎物理学 I(再履修)	(講義題目数2)	30	11	2	3	2	4	19	6.7	10.0	6.7	13.3	63.3	0.83
	基礎物理学 II	(講義題目数20)	1213	1146	174	381	403	188	67	14.3	31.4	33.2	15.5	5.5	2.34
	化学	(講義題目数11)	557	519	71	163	191	94	38	12.7	29.3	34.3	16.9	6.8	2.24
	基礎化学 I(再履修)	(講義題目数1)	32	25		5	11	9	7		15.6	34.4	28.1	21.9	1.44
	基礎化学 II	(講義題目数19)	1260	1193	175	333	488	197	67	13.9	26.4	38.7	15.6	5.3	2.28
	生物学	(講義題目数6)	319	270	48	79	82	61	49	15.0	24.8	25.7	19.1	15.4	2.05
	基礎生物学 I(再履修)	(講義題目数1)	15	13	2	2	6	3	2	13.3	13.3	40.0	20.0	13.3	1.93
	基礎生物学 II	(講義題目数15)	971	950	142	312	368	128	21	14.6	32.1	37.9	13.2	2.2	2.44
	基礎地学 II	(講義題目数4)	354	339	22	70	165	82	15	6.2	19.8	46.6	23.2	4.2	2.01
	心理学実験	(講義題目数5)	73	72	3	21	37	11	1	4.1	28.8	50.7	15.1	1.4	2.19
	自然科学実験(2単位)	(講義題目数18)	1036	1014	162	535	311	6	22	15.6	51.6	30.0	0.6	2.1	2.78
日本語科目	日本語 I	(講義題目数1)	11	11	2	2	4	3		18.2	18.2	36.4	27.3		2.27
	総計	(講義題目数771)	30080	28362	3556	9532	10534	4740	1718	11.8	31.7	35.0	15.8	5.7	2.28

平成18年度 第2学期  
科目別GPA平均値



平成19年度第1学期 成績評価の分布状況(科目別平均値)

区分	科目名	講義題目数	履修者数	修得者数	秀	優	良	可	不可	秀(%)	優(%)	良(%)	可(%)	不可(%)	GPA
主題別科目	思索と言語	6	908	792	98	246	269	179	116	10.8	27.1	29.6	19.7	12.8	2.03
	思索と言語(論文指導)	6	104	98	8	44	31	15	6	7.7	42.3	29.8	14.4	5.8	2.32
	歴史の視座	9	811	715	100	221	283	111	96	12.3	27.3	34.9	13.7	11.8	2.15
	歴史の視座(論文指導)	2	32	29	8	16	5		3	25.0	50.0	15.6		9.4	2.81
	芸術と文学	7	669	605	36	224	261	84	64	5.4	33.5	39.0	12.6	9.6	2.13
	芸術と文学(論文指導)	3	44	43	11	26	6		1	25.0	59.1	13.6		2.3	3.05
	社会の認識	17	1786	1618	117	503	590	408	168	6.6	28.2	33.0	22.8	9.4	2.00
	社会の認識(論文指導)	12	255	236	33	115	70	18	19	12.9	45.1	27.5	7.1	7.5	2.49
	科学・技術の世界	20	1382	1243	177	433	450	183	139	12.8	31.3	32.6	13.2	10.1	2.24
	科学・技術の世界(論文指導)	4	104	95	8	48	36	3	9	7.7	46.2	34.6	2.9	8.7	2.41
総合科目	環境と人間	13	1139	1071	80	354	490	147	68	7.0	31.1	43.0	12.9	6.0	2.20
	健康と社会	5	1551	1502	171	345	745	241	49	11.0	22.2	48.0	15.5	3.2	2.22
	人間と文化	5	270	257	34	85	89	49	13	12.6	31.5	33.0	18.1	4.8	2.29
	特別講義	2	152	147	12	70	59	6	5	7.9	46.1	38.8	3.9	3.3	2.51
一般教育演習	一般教育演習	27	485	468	80	246	111	31	17	16.5	50.7	22.9	6.4	3.5	2.70
	一般教育演習(論文指導)	53	908	879	184	452	191	52	29	20.3	49.8	21.0	5.7	3.2	2.78
共通科目	体育学A	53	2055	2008	141	1293	456	118	47	6.9	62.9	22.2	5.7	2.3	2.66
	体育学B	1	57	53		18	26	9	4		31.6	45.6	15.8	7.0	2.02
	情報学 I	20	2629	2542	612	1310	470	150	87	23.3	49.8	17.9	5.7	3.3	2.84
	統計学	11	844	746	97	239	226	184	98	11.5	28.3	26.8	21.8	11.6	2.06
外国語科目	英語 I	81	2622	2548	283	710	1136	419	74	10.8	27.1	43.3	16.0	2.8	2.27
	英語 II	50	2640	2550	131	784	1265	370	90	5.0	29.7	47.9	14.0	3.4	2.19
	英語再履修	14	126	101	7	21	46	27	25	5.6	16.7	36.5	21.4	19.8	1.67
	ドイツ語 I	30	1027	970	129	336	325	180	57	12.6	32.7	31.6	17.5	5.6	2.29
	ドイツ語 II	2	41	23	2		7	14	18	4.9		17.1	34.1	43.9	0.88
	ドイツ語 III	6	123	111	16	43	41	11	12	13.0	35.0	33.3	8.9	9.8	2.33
	フランス語 I	12	416	386	56	110	133	87	30	13.5	26.4	32.0	20.9	7.2	2.18
	フランス語 II	1	22	13			4	9	9			18.2	40.9	40.9	0.77
	フランス語 III	4	120	107	16	23	35	33	13	13.3	19.2	29.2	27.5	10.8	1.97
	ロシア語 I	4	64	60	15	17	18	10	4	23.4	26.6	28.1	15.6	6.3	2.45
	ロシア語 II	1	6	2		2			4		33.3		66.7		1.00
	ロシア語 III	1	16	14	3	4	3	4	2	18.8	25.0	18.8	25.0	12.5	2.13
	スペイン語 I	4	195	186	34	67	57	28	9	17.4	34.4	29.2	14.4	4.6	2.46
	中国語 I	26	780	748	98	221	222	207	32	12.6	28.3	28.5	26.5	4.1	2.19
	中国語 II	3	39	33		2	8	23	6		5.1	20.5	59.0	15.4	1.15
	中国語 III	4	143	116	12	43	31	30	27	8.4	30.1	21.7	21.0	18.9	1.88
	韓国語 I	4	163	153	35	46	45	27	10	21.5	28.2	27.6	16.6	6.1	2.42
外国語演習	英語演習	92	1422	1327	220	453	486	168	95	15.5	31.9	34.2	11.8	6.7	2.38
	ドイツ語演習	15	198	179	55	61	50	13	19	27.8	30.8	25.3	6.6	9.6	2.61
	フランス語演習	15	149	135	25	64	27	19	14	16.8	43.0	18.1	12.8	9.4	2.45
	ロシア語演習	7	16	14	7	4	3		2	43.8	25.0	18.8		12.5	2.88
	スペイン語演習	3	49	46	12	15	13	6	3	24.5	30.6	26.5	12.2	6.1	2.55
	中国語演習	18	244	226	67	72	51	36	18	27.5	29.5	20.9	14.8	7.4	2.55
	韓国語演習	5	33	26	9	10	4	3	7	27.3	30.3	12.1	9.1	21.2	2.33
	外国語特別演習	18	118	105	29	41	24	11	13	24.6	34.7	20.3	9.3	11.0	2.53
基礎科目	人文科学の基礎	5	706	655	61	221	270	103	51	8.6	31.3	38.2	14.6	7.2	2.20
	社会科学の基礎	5	721	692	67	262	273	90	29	9.3	36.3	37.9	12.5	4.0	2.34
	線形代数学 I	32	1799	1734	237	508	696	293	65	13.2	28.2	38.7	16.3	3.6	2.31
	線形代数学 II	1	41	15	2	3	2	8	26	4.9	7.3	4.9	19.5	63.4	0.71
	微分積分学 I	31	1778	1672	253	469	643	307	106	14.2	26.4	36.2	17.3	6.0	2.26
	微分積分学 II	1	57	26	1	10	11	4	31	1.8	17.5	19.3	7.0	54.4	1.05
	数学概論	5	323	280	50	92	89	49	43	15.5	28.5	27.6	15.2	13.3	2.18
	物理学	14	483	444	70	136	164	74	39	14.5	28.2	34.0	15.3	8.1	2.26
	基礎物理学 I	20	1323	1273	198	422	444	209	50	15.0	31.9	33.6	15.8	3.8	2.38
	基礎物理学 II	1	48	33		6	13	14	15		12.5	27.1	29.2	31.3	1.21
	化学	11	598	530	63	172	199	96	68	10.5	28.8	33.3	16.1	11.4	2.11
	基礎化学 I	19	1327	1272	222	350	486	214	55	16.7	26.4	36.6	16.1	4.1	2.35
	基礎化学 II	1	33	30	6	11	9	4	3	18.2	33.3	27.3	12.1	9.1	2.39
	生物学	6	341	323	43	116	123	41	18	12.6	34.0	36.1	12.0	5.3	2.37
	基礎生物学 I	15	1069	1020	125	289	431	175	49	11.7	27.0	40.3	16.4	4.6	2.25
	基礎生物学 II	1	17	14	1	9	3	1	3	5.9	52.9	17.6	5.9	17.6	2.24
	基礎地学 I	7	562	531	67	176	210	78	31	11.9	31.3	37.4	13.9	5.5	2.30
	基礎自然科学実験	1	14	13	6	4	3		1	42.9	28.6	21.4		7.1	3.00
	自然科学実験(2単位)	18	925	888	155	440	279	14	37	16.8	47.6	30.2	1.5	4.0	2.72
日本語科目	日本語 I	1	16	16	4	5	7			25.0	31.3	43.8			2.81
	日本事情	1	7	7	2	4	1			28.6	57.1	14.3			3.14
	総計	892	39145	36794	4901	13142	13254	5497	2351	12.5	33.6	33.9	14.0	6.0	2.33



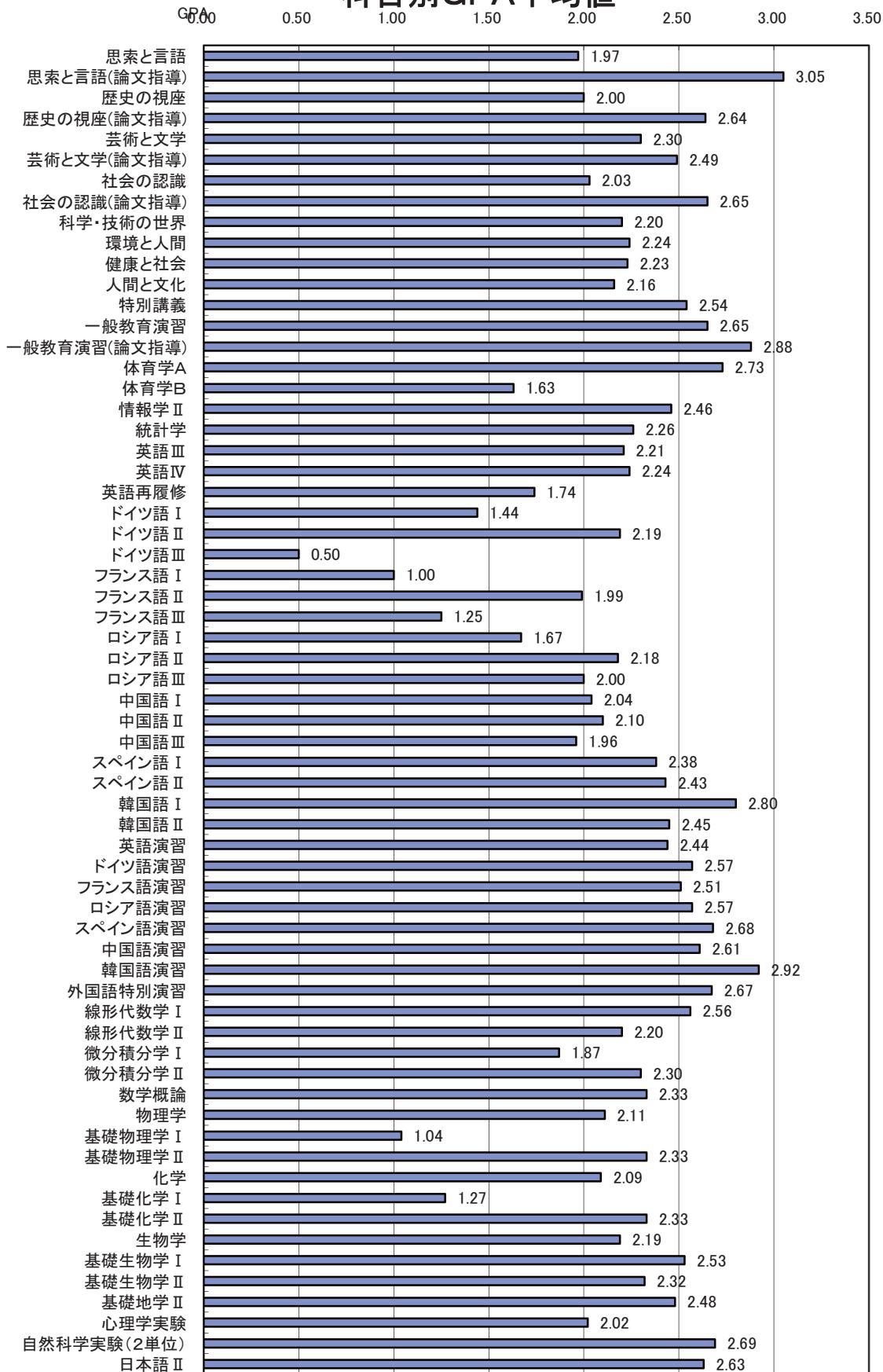
平成19年度第2学期 成績評価の分布状況(科目別平均値)

※平成19年度以降入学のみ対象

区分	科目名	講義題目数	履修者数	修得者数	秀	優	良	可	不可	秀(%)	優(%)	良(%)	可(%)	不可(%)	GPA
主題別科目	思索と言語	11	644	558	52	175	206	125	86	8.1	27.2	32.0	19.4	13.4	1.97
	思索と言語(論文指導)	3	21	21	9	6	4	2		42.9	28.6	19.0	9.5		3.05
	歴史の視座	12	810	716	54	229	288	145	94	6.7	28.3	35.6	17.9	11.6	2.00
	歴史の視座(論文指導)	2	14	13	2	7	4		1	14.3	50.0	28.6		7.1	2.64
	芸術と文学	14	1081	1006	109	387	378	132	75	10.1	35.8	35.0	12.2	6.9	2.30
	芸術と文学(論文指導)	4	59	55	9	22	21	3	4	15.3	37.3	35.6	5.1	6.8	2.49
	社会の認識	20	1358	1180	98	435	409	238	178	7.2	32.0	30.1	17.5	13.1	2.03
	社会の認識(論文指導)	10	113	110	21	48	30	11	3	18.6	42.5	26.5	9.7	2.7	2.65
	科学・技術の世界	12	951	872	103	299	315	155	79	10.8	31.4	33.1	16.3	8.3	2.20
総合科目	環境と人間	11	1045	993	86	274	545	88	52	8.2	26.2	52.2	8.4	5.0	2.24
	健康と社会	7	886	830	122	219	338	151	56	13.8	24.7	38.1	17.0	6.3	2.23
	人間と文化	9	739	676	61	225	286	104	63	8.3	30.4	38.7	14.1	8.5	2.16
	特別講義	1	291	283	30	127	111	15	8	10.3	43.6	38.1	5.2	2.7	2.54
一般教育演習	一般教育演習	23	399	387	64	188	104	31	12	16.0	47.1	26.1	7.8	3.0	2.65
	一般教育演習(論文指導)	28	393	379	93	200	75	11	14	23.7	50.9	19.1	2.8	3.6	2.88
共通科目	体育学A	53	1737	1710	230	992	358	130	27	13.2	57.1	20.6	7.5	1.6	2.73
	体育学B	1	57	47	1	9	25	12	10	1.8	15.8	43.9	21.1	17.5	1.63
	情報学II	13	710	658	118	267	202	71	52	16.6	37.6	28.5	10.0	7.3	2.46
	統計学	11	479	431	75	154	120	82	48	15.7	32.2	25.1	17.1	10.0	2.26
外国語科目	英語III	79	2479	2361	254	646	1056	405	118	10.2	26.1	42.6	16.3	4.8	2.21
	英語IV	70	2468	2362	275	678	990	419	106	11.1	27.5	40.1	17.0	4.3	2.24
	英語再履修	8	110	85	7	27	31	20	25	6.4	24.5	28.2	18.2	22.7	1.74
	ドイツ語I	2	43	33		7	15	11	10		16.3	34.9	25.6	23.3	1.44
	ドイツ語II	30	1010	965	94	324	318	229	45	9.3	32.1	31.5	22.7	4.5	2.19
	ドイツ語III	1	10	3			2	1	7			20.0	10.0	70.0	0.50
	フランス語I	1	24	17		2	3	12	7		8.3	12.5	50.0	29.2	1.00
	フランス語II	12	409	371	48	96	108	119	38	11.7	23.5	26.4	29.1	9.3	1.99
	フランス語III	1	8	7			3	4	1			37.5	50.0	12.5	1.25
	ロシア語I	1	3	3		1		2			33.3		66.7		1.67
	ロシア語II	4	62	55	13	12	17	13	7	21.0	19.4	27.4	21.0	11.3	2.18
	ロシア語III	1	1	1			1					100.0			2.00
	中国語I	1	28	26	1	8	12	5	2	3.6	28.6	42.9	17.9	7.1	2.04
	中国語II	26	778	717	111	178	230	198	61	14.3	22.9	29.6	25.4	7.8	2.10
	中国語III	2	24	22	3	1	14	4	2	12.5	4.2	58.3	16.7	8.3	1.96
	スペイン語I	1	8	8	1	2	4	1		12.5	25.0	50.0	12.5		2.38
	スペイン語II	4	194	184	38	63	47	36	10	19.6	32.5	24.2	18.6	5.2	2.43
	韓国語I	1	10	9	2	6	1		1	20.0	60.0	10.0		10.0	2.80
	韓国語II	4	163	157	45	36	35	41	6	27.6	22.1	21.5	25.2	3.7	2.45
外国語演習	英語演習	66	1015	962	169	354	300	139	53	16.7	34.9	29.6	13.7	5.2	2.44
	ドイツ語演習	15	214	206	40	83	57	26	8	18.7	38.8	26.6	12.1	3.7	2.57
	フランス語演習	16	194	185	30	84	44	27	9	15.5	43.3	22.7	13.9	4.6	2.51
	ロシア語演習	3	21	19	8	3	5	3	2	38.1	14.3	23.8	14.3	9.5	2.57
	スペイン語演習	4	56	54	15	19	13	7	2	26.8	33.9	23.2	12.5	3.6	2.68
	中国語演習	20	271	257	63	91	80	23	14	23.2	33.6	29.5	8.5	5.2	2.61
	韓国語演習	5	62	58	23	22	10	3	4	37.1	35.5	16.1	4.8	6.5	2.92
	外国語特別演習	17	55	50	12	25	11	2	5	21.8	45.5	20.0	3.6	9.1	2.67
基礎科目	線形代数学I	2	109	105	20	39	36	10	4	18.3	35.8	33.0	9.2	3.7	2.56
	線形代数学II	25	1197	1104	159	312	425	208	93	13.3	26.1	35.5	17.4	7.8	2.20
	微分積分学I	2	147	134	9	40	34	51	13	6.1	27.2	23.1	34.7	8.8	1.87
	微分積分学II	27	1518	1427	213	419	589	206	91	14.0	27.6	38.8	13.6	6.0	2.30
	数学概論	1	18	17	4	4	5	4	1	22.2	22.2	27.8	22.2	5.6	2.33
	物理学	10	492	424	66	136	145	77	68	13.4	27.6	29.5	15.7	13.8	2.11
	基礎物理学I	1	28	20	1	1	4	14	8	3.6	3.6	14.3	50.0	28.6	1.04
	基礎物理学II	20	1234	1176	174	358	456	188	58	14.1	29.0	37.0	15.2	4.7	2.33
	化学	11	592	535	65	149	208	113	57	11.0	25.2	35.1	19.1	9.6	2.09
	基礎化学I	1	30	19		5	9	5	11		16.7	30.0	16.7	36.7	1.27
	基礎化学II	19	1244	1160	184	382	422	172	84	14.8	30.7	33.9	13.8	6.8	2.33
	生物学	6	329	301	42	87	119	53	28	12.8	26.4	36.2	16.1	8.5	2.19
	基礎生物学I	1	17	15	2	10	2	1	2	11.8	58.8	11.8	5.9	11.8	2.53
	基礎生物学II	14	981	956	135	276	362	183	25	13.8	28.1	36.9	18.7	2.5	2.32
	基礎地学II	4	408	401	44	163	151	43	7	10.8	40.0	37.0	10.5	1.7	2.48
	心理学実験	3	61	60	3	15	24	18	1	4.9	24.6	39.3	29.5	1.6	2.02
	自然科学実験(2単位)	18	1027	999	144	498	337	20	28	14.0	48.5	32.8	1.9	2.7	2.69
日本語科目	日本語II	1	16	16	3	6	5	2		18.8	37.5	31.3	12.5		2.63
	総計	806	30955	28971	3857	9931	10559	4624	1984	12.5	32.1	34.1	14.9	6.4	2.29

## 平成19年度 第2学期

### 科目別GPA平均値

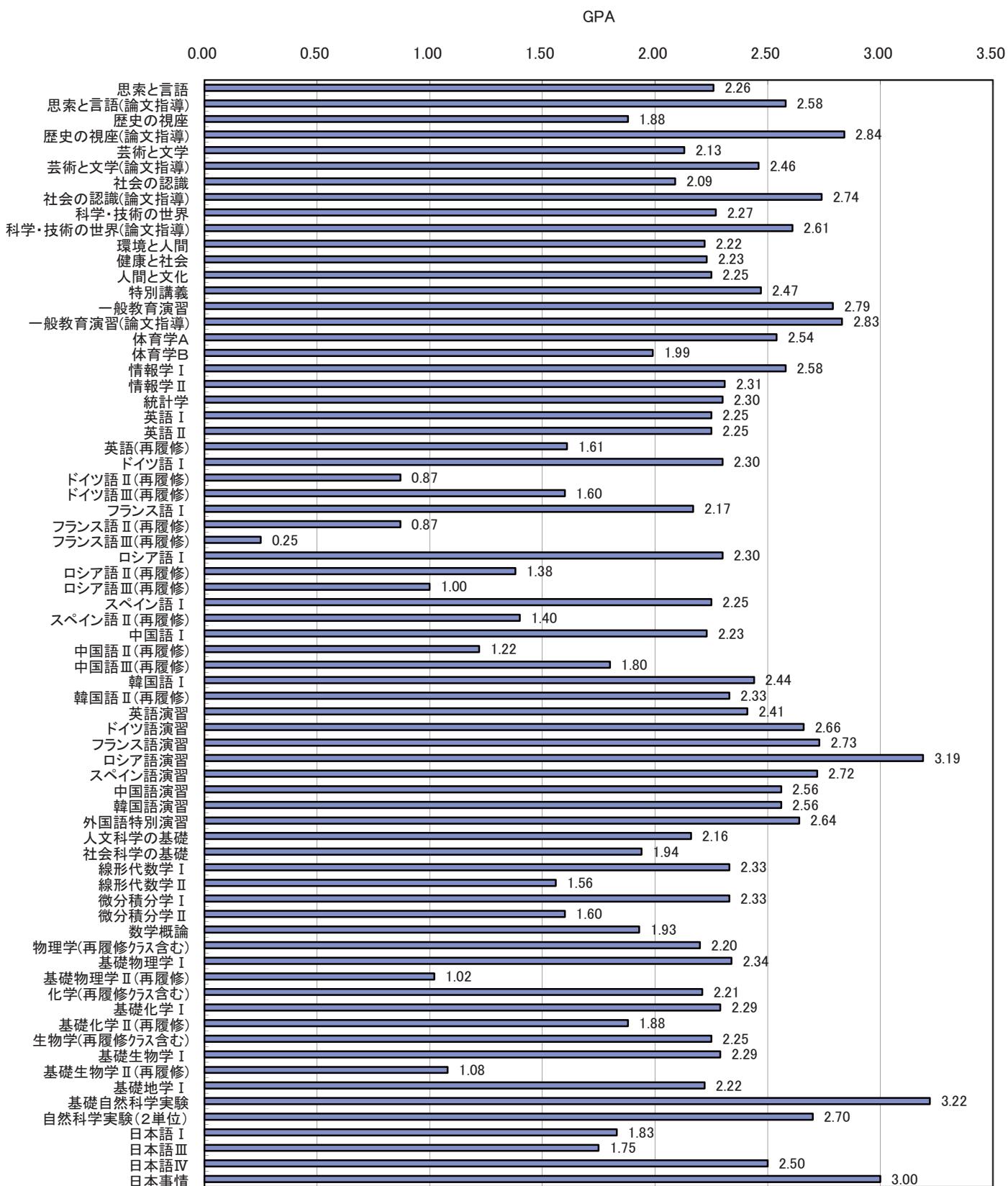


平成20年度第1学期 成績評価の分布状況(科目別平均値)

\*平成18年度以降入学のみ対象

区分	科目名	講義題目数	履修者数	修得者数	秀	優	良	可	不可	秀(%)	優(%)	良(%)	可(%)	不可(%)	GPA	
主題別科目	思素と言語	6	797	664	190	205	161	108	133	23.8	25.7	20.2	13.6	16.7	2.26	
	思素と言語(論文指導)	7	130	118	22	60	32	4	12	16.9	46.2	24.6	3.1	9.2	2.58	
	歴史の視座	7	855	704	74	211	258	161	151	8.7	24.7	30.2	18.8	17.7	1.88	
	歴史の視座(論文指導)	2	31	30	10	10	8	2	1	32.3	32.3	25.8	6.5	3.2	2.84	
	芸術と文学	7	531	490	27	157	246	60	41	5.1	29.6	46.3	11.3	7.7	2.13	
	芸術と文学(論文指導)	6	114	107	17	44	34	12	7	14.9	38.6	29.8	10.5	6.1	2.46	
	社会の認識	21	2,018	1,812	202	599	609	402	206	10.0	29.7	30.2	19.9	10.2	2.09	
	社会の認識(論文指導)	10	217	210	42	107	45	16	7	19.4	49.3	20.7	7.4	3.2	2.74	
	科学・技術の世界	21	1,758	1,595	179	661	535	220	163	10.2	37.6	30.4	12.5	9.3	2.27	
	科学・技術の世界(論文指導)	1	28	27		20	6	1	1	71.4	21.4	3.6	3.6	2.61		
総合科目	環境と人間	14	1,056	978	99	298	472	109	78	9.4	28.2	44.7	10.3	7.4	2.22	
	健康と社会	8	1,711	1,652	169	462	728	293	59	9.9	27.0	42.5	17.1	3.4	2.23	
	人間と文化	7	521	465	66	162	184	53	56	12.7	31.1	35.3	10.2	10.7	2.25	
	特別講義	2	122	115	16	46	46	7	7	13.1	37.7	37.7	5.7	5.7	2.47	
一般教育演習	一般教育演習	25	496	481	103	248	100	30	15	20.8	50.0	20.2	6.0	3.0	2.79	
	一般教育演習(論文指導)	49	929	888	227	435	186	40	41	24.4	46.8	20.0	4.3	4.4	2.83	
共通科目	体育学A	53	2,068	2,022	101	1,205	510	206	46	4.9	58.3	24.7	10.0	2.2	2.54	
	体育学B	1	79	63	7	23	27	6	16	8.9	29.1	34.2	7.6	20.3	1.99	
	情報学 I	19	2,655	2,568	357	1,222	778	211	87	13.4	46.0	29.3	7.9	3.3	2.58	
	情報学 II	1	13	11	2	5	3	1	2	15.4	38.5	23.1	7.7	15.4	2.31	
	統計学	11	879	783	170	248	236	129	96	19.3	28.2	26.8	14.7	10.9	2.30	
外国語科目	英語 I	77	2,625	2,537	255	767	1,065	450	88	9.7	29.2	40.6	17.1	3.4	2.25	
	英語 II	50	2,648	2,583	120	843	1,338	282	65	4.5	31.8	50.5	10.6	2.5	2.25	
	英語(再履修)	12	169	121	20	21	49	31	48	11.8	12.4	29.0	18.3	28.4	1.61	
	ドイツ語 I	30	998	945	153	300	287	205	53	15.3	30.1	28.8	20.5	5.3	2.30	
	ドイツ語 II(再履修)	2	38	18		2	11	5	20		5.3	28.9	13.2	52.6	0.87	
	ドイツ語 III(再履修)	4	5	3	1		2		2	20.0		40.0		40.0	1.60	
	フランス語 I	11	505	471	65	139	152	115	34	12.9	27.5	30.1	22.8	6.7	2.17	
	フランス語 II(再履修)	1	39	27		2	3	22	12		5.1	7.7	56.4	30.8	0.87	
	フランス語 III(再履修)	1	4	1				1	3			25.0	75.0	0.25		
	ロシア語 I	4	80	70	13	26	23	8	10	16.3	32.5	28.8	10.0	12.5	2.30	
	ロシア語 II(再履修)	1	8	6		2	1	3	2		25.0	12.5	37.5	25.0	1.38	
	ロシア語 III(再履修)	1	1	1				1				100.0		1.00		
	スペイン語 I	5	237	217	27	83	70	37	20	11.4	35.0	29.5	15.6	8.4	2.25	
	スペイン語 II(再履修)	1	10	7		2	3	2	3		20.0	30.0	20.0	30.0	1.40	
	中国語 I	26	677	628	101	187	206	134	49	14.9	27.6	30.4	19.8	7.2	2.23	
	中国語 II(再履修)	4	63	47	1	4	19	23	16	1.6	6.3	30.2	36.5	25.4	1.22	
	中国語 III(再履修)	5	5	5			4	1				80.0	20.0		1.80	
	韓国語 I	4	153	145	41	37	32	35	8	26.8	24.2	20.9	22.9	5.2	2.44	
	韓国語 II(再履修)	1	3	3		1	2				33.3	66.7			2.33	
外国語演習	英語演習	90	1,424	1,318	234	475	460	149	106	16.4	33.4	32.3	10.5	7.4	2.41	
	ドイツ語演習	19	260	237	65	105	50	17	23	25.0	40.4	19.2	6.5	8.8	2.66	
	フランス語演習	14	165	151	50	59	31	11	14	30.3	35.8	18.8	6.7	8.5	2.73	
	ロシア語演習	7	21	20	10	7	3		1	47.6	33.3	14.3		4.8	3.19	
	スペイン語演習	7	97	96	21	35	35	5	1	21.6	36.1	36.1	5.2	1.0	2.72	
	中国語演習	22	251	227	71	80	42	34	24	28.3	31.9	16.7	13.5	9.6	2.56	
	韓国語演習	10	63	53	19	21	9	4	10	30.2	33.3	14.3	6.3	15.9	2.56	
	外国語特別演習	20	113	104	28	46	18	12	9	24.8	40.7	15.9	10.6	8.0	2.64	
基礎科目	人文科学の基礎	5	716	682	39	254	242	147	34	5.4	35.5	33.8	20.5	4.7	2.16	
	社会科学の基礎	5	701	626	29	184	282	131	75	4.1	26.2	40.2	18.7	10.7	1.94	
	線形代数学 I	31	1,862	1,792	261	526	705	300	70	14.0	28.2	37.9	16.1	3.8	2.33	
	線形代数学 II	1	59	37	6	10	17	4	22	10.2	16.9	28.8	6.8	37.3	1.56	
	微分積分学 I	31	1,812	1,729	261	523	668	277	83	14.4	28.9	36.9	15.3	4.6	2.33	
	微分積分学 II	1	65	45	8	10	15	12	20	12.3	15.4	23.1	18.5	30.8	1.60	
	数学概論	5	258	207	42	50	65	50	51	16.3	19.4	25.2	19.4	19.8	1.93	
	物理学(再履修クラス含む)	13	508	455	70	146	160	79	53	13.8	28.7	31.5	15.6	10.4	2.20	
	基礎物理学 I	20	1,356	1,305	171	438	475	221	51	12.6	32.3	35.0	16.3	3.8	2.34	
	基礎物理学 II(再履修)	1	43	25	2	4	5	14	18	4.7	9.3	11.6	32.6	41.9	1.02	
	化学(再履修クラス含む)	11	618	568	79	173	216	100	50	12.8	28.0	35.0	16.2	8.1	2.21	
	基礎化学 I	19	1,306	1,228	205	354	445	224	78	15.7	27.1	34.1	17.2	6.0	2.29	
	基礎化学 II(再履修)	1	50	45	4	8	21	12	5	8.0	16.0	42.0	24.0	10.0	1.88	
	生物学(再履修クラス含む)	6	330	320	45	87	112	76	10	13.6	26.4	33.9	23.0	3.0	2.25	
	基礎生物学 I	13	1,029	988	124	311	379	174	41	12.1	30.2	36.8	16.9	4.0	2.29	
	基礎生物学 II(再履修)	1	13	8		2	2	4	5		15.4	15.4	30.8	38.5	1.08	
	基礎地学 I	7	523	487	54	165	181	87	36	10.3	31.5	34.6	16.6	6.9	2.22	
	基礎自然科学実験	1	9	8	6	1	1		1	66.7	11.1	11.1		11.1	3.22	
	自然科学実験(2単位)	18	937	894	149	454	283	8	43	15.9	48.5	30.2	0.9	4.6	2.70	
日本語科目	日本語 I	1	18	16	1	2	10	3	2	5.6	11.1	55.6	16.7	11.1	1.83	
	日本語III	1	4	3		2		1	1		50.0		25.0	25.0	1.75	
	日本語IV	1	4	4	1	1	1			25.0	25.0	25.0	25.0		2.50	
	日本事情	1	6	6	2	3		1		33.3	50.0		16.7		3.00	
総計		901	39,897	37,302	4,934	13,380	13,404	5,584	2,595	12.4	33.5	33.6	14.0	6.5	2.31	

# 平成20年度 第1学期 科目別GPA平均値

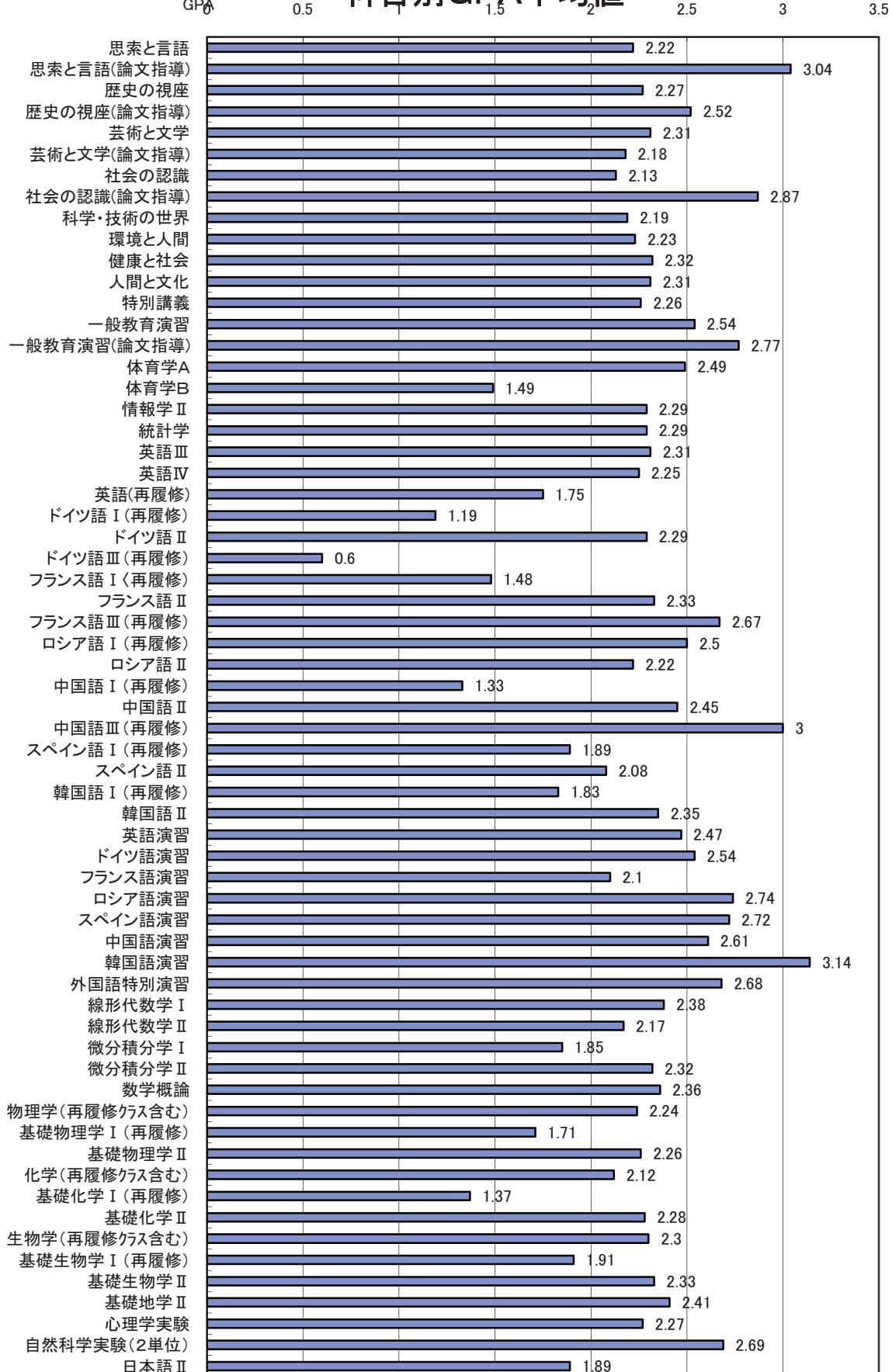


平成20年度第2学期 成績評価の分布状況(科目別平均値)

※平成18年度以降入学のみ対象

区分	科目名	講義題目数	履修者数	修得者数	秀	優	良	可	不可	秀(%)	優(%)	良(%)	可(%)	不可(%)	GPA
主題別科目	思索と言語	12	961	871	107	309	326	129	90	11.1	32.2	33.9	13.4	9.4	2.22
	思索と言語(論文指導)	3	24	22	10	10	1	1	2	41.7	41.7	4.2	4.2	8.3	3.04
	歴史の視座	12	1114	1003	109	444	315	135	111	9.8	39.9	28.3	12.1	10	2.27
	歴史の視座(論文指導)	2	29	28	5	10	10	3	1	17.2	34.5	34.5	10.3	3.4	2.52
	芸術と文学	11	996	931	101	342	386	102	65	10.1	34.3	38.8	10.2	6.5	2.31
	芸術と文学(論文指導)	1	22	19	2	10	3	4	3	9.1	45.5	13.6	18.2	13.6	2.18
	社会の認識	12	1283	1168	111	349	530	178	115	8.7	27.2	41.3	13.9	9	2.13
	社会の認識(論文指導)	6	106	104	19	62	19	4	2	17.9	58.5	17.9	3.8	1.9	2.87
	科学・技術の世界	9	718	667	54	241	263	109	51	7.5	33.6	36.6	15.2	7.1	2.19
総合科目	環境と人間	11	929	862	89	293	360	120	67	9.6	31.5	38.8	12.9	7.2	2.23
	健康と社会	7	1052	1004	137	289	450	128	48	13	27.5	42.8	12.2	4.6	2.32
	人間と文化	5	486	449	60	161	170	58	37	12.3	33.1	35	11.9	7.6	2.31
	特別講義	1	333	322	18	148	82	74	11	5.4	44.4	24.6	22.2	3.3	2.26
一般教育演習	一般教育演習	21	397	372	44	207	89	32	25	11.1	52.1	22.4	8.1	6.3	2.54
	一般教育演習(論文指導)	35	526	499	102	282	88	27	27	19.4	53.6	16.7	5.1	5.1	2.77
共通科目	体育学A	48	1692	1656	94	889	494	179	36	5.6	52.5	29.2	10.6	2.1	2.49
	体育学B	1	63	48	1	10	23	14	15	1.6	15.9	36.5	22.2	23.8	1.49
	情報学Ⅱ	13	715	643	101	248	194	100	72	14.1	34.7	27.1	14	10.1	2.29
	統計学	11	445	408	73	138	118	79	37	16.4	31	26.5	17.8	8.3	2.29
外国語科目	英語Ⅲ	76	2500	2396	322	744	915	415	104	12.9	29.8	36.6	16.6	4.2	2.31
	英語Ⅳ	70	2498	2374	299	693	967	415	124	12	27.7	38.7	16.6	5	2.25
	英語(再履修)	7	115	88	16	19	27	26	27	13.9	16.5	23.5	22.6	23.5	1.75
	ドイツ語Ⅰ(再履修)	2	48	33		4	16	13	15		8.3	33.3	27.1	31.3	1.19
	ドイツ語Ⅱ	30	1003	939	146	299	317	177	64	14.6	29.8	31.6	17.6	6.4	2.29
	ドイツ語Ⅲ(再履修)	2	5	2			1	1	3		20	20	60	0.6	
	フランス語Ⅰ(再履修)	1	33	24		8	9	7	9		24.2	27.3	21.2	27.3	1.48
	フランス語Ⅱ	11	503	474	74	152	174	74	29	14.7	30.2	34.6	14.7	5.8	2.33
	フランス語Ⅲ(再履修)	2	3	3		2	1			66.7	33.3		2.67		
	ロシア語Ⅰ(再履修)	1	8	7	2	2	3		1	25	25	37.5		12.5	2.5
	ロシア語Ⅱ	4	79	73	15	15	27	16	6	19	19	34.2	20.3	7.6	2.22
	中国語Ⅰ(再履修)	1	42	34		3	16	15	8		7.1	38.1	35.7	19	1.33
	中国語Ⅱ	27	672	626	134	215	188	89	46	19.9	32	28	13.2	6.8	2.45
	中国語Ⅲ(再履修)	1	1	1		1				100				3	
	スペイン語Ⅰ(再履修)	1	18	14	2	5	4	3	4	11.1	27.8	22.2	16.7	22.2	1.89
	スペイン語Ⅱ	5	237	211	28	64	70	49	26	11.8	27	29.5	20.7	11	2.08
	韓国語Ⅰ(再履修)	1	6	4	1	1	2		2	16.7	16.7	33.3		33.3	1.83
	韓国語Ⅱ	4	154	141	37	36	38	30	13	24	23.4	24.7	19.5	8.4	2.35
外国語演習	英語演習	51	1069	1024	165	399	325	135	45	15.4	37.3	30.4	12.6	4.2	2.47
	ドイツ語演習	20	282	257	64	107	52	34	25	22.7	37.9	18.4	12.1	8.9	2.54
	フランス語演習	12	187	169	26	38	70	35	18	13.9	20.3	37.4	18.7	9.6	2.1
	ロシア語演習	7	23	19	8	9	2		4	34.8	39.1	8.7		17.4	2.74
	スペイン語演習	5	83	80	19	36	17	8	3	22.9	43.4	20.5	9.6	3.6	2.72
	中国語演習	26	223	204	71	63	38	32	19	31.8	28.3	17	14.3	8.5	2.61
	韓国語演習	7	44	42	21	13	7	1	2	47.7	29.5	15.9	2.3	4.5	3.14
	外国語特別演習	12	92	86	28	31	15	12	6	30.4	33.7	16.3	13	6.5	2.68
基礎科目	線形代数学Ⅰ	2	88	82	15	23	36	8	6	17	26.1	40.9	9.1	6.8	2.38
	線形代数学Ⅱ	24	1254	1139	149	346	445	199	115	11.9	27.6	35.5	15.9	9.2	2.17
	微分積分学Ⅰ	2	139	111	18	27	38	28	28	12.9	19.4	27.3	20.1	20.1	1.85
	微分積分学Ⅱ	26	1591	1506	248	431	585	242	85	15.6	27.1	36.8	15.2	5.3	2.32
	数学概論	1	11	7	6		1		4	54.5		9.1		36.4	2.36
	物理学(再履修クラス含む)	10	476	439	68	125	174	72	37	14.3	26.3	36.6	15.1	7.8	2.24
	基礎物理学Ⅰ(再履修)	1	34	23	7	3	8	5	11	20.6	8.8	23.5	14.7	32.4	1.71
	基礎物理学Ⅱ	20	1206	1135	155	355	410	215	71	12.9	29.4	34	17.8	5.9	2.26
	化学(再履修クラス含む)	11	604	538	74	166	191	107	66	12.3	27.5	31.6	17.7	10.9	2.12
	基礎化学Ⅰ(再履修)	1	54	38		11	14	13	16		20.4	25.9	24.1	29.6	1.37
	基礎化学Ⅱ	18	1242	1156	176	369	411	200	86	14.2	29.7	33.1	16.1	6.9	2.28
	生物学(再履修クラス含む)	6	338	307	57	96	108	46	31	16.9	28.4	32	13.6	9.2	2.3
	基礎生物学Ⅰ(再履修)	1	23	16	4	5	6	1	7	17.4	21.7	26.1	4.3	30.4	1.91
	基礎生物学Ⅱ	12	977	955	116	295	388	156	22	11.9	30.2	39.7	16	2.3	2.33
	基礎地学Ⅱ	4	449	435	42	168	184	41	14	9.4	37.4	41	9.1	3.1	2.41
	心理学実験	4	60	59	5	25	12	17	1	8.3	41.7	20	28.3	1.7	2.27
	自然科学実験(2単位)	18	1050	1006	166	495	335	10	44	15.8	47.1	31.9	1	4.2	2.69
日本語科目	日本語Ⅱ	1	18	14	3	4	3	4	4	16.7	22.2	16.7	22.2	22.2	1.89
	総計	769	31433	29367	4024	10345	10571	4427	2066	12.8	32.9	33.6	14.1	6.6	2.31

## 平成20年度 第2学期 科目別GPA平均値



# 平成18年度 学部・学科別 GPA

2月28日速報値

## 1 平成18年度 学部・学科別 GPA

	第1学期	第2学期	2学期 -1学期
文学部	2.31	2.36	0.05
教育学部	2.33	2.38	0.05
法学部	2.35	2.27	▲0.08
経済学部	2.16	2.18	0.02
理学部	2.33	2.22	▲0.11
医学部一医学科	2.61	2.47	▲0.14
医学部一保健学科	2.41	2.46	0.05
歯学部	2.28	2.13	▲0.15
薬学部	2.46	2.09	▲0.37
工学部一応用理工系学科	2.34	2.31	▲0.03
工学部一情報エレクトロニクス学科	2.35	2.12	▲0.23
工学部一機械知能工学科	2.30	2.08	▲0.22
工学部一環境社会工学科	2.29	2.14	▲0.15
農学部	2.51	2.52	0.01
獣医学部	2.54	2.46	▲0.08
水産学部	2.40	2.25	▲0.15
全学平均	2.36	2.27	▲0.09

## 2 通算GPA

第1学期	第2学期	2学期 -1学期
2.28	2.34	0.06
2.28	2.32	0.04
2.31	2.28	▲0.03
2.12	2.15	0.03
2.29	2.25	▲0.04
2.58	2.50	▲0.08
2.32	2.42	0.10
2.25	2.20	▲0.05
2.40	2.26	▲0.14
2.28	2.31	0.03
2.29	2.21	▲0.08
2.27	2.17	▲0.10
2.24	2.19	▲0.05
2.45	2.50	0.05
2.54	2.51	▲0.03
2.34	2.29	▲0.05
2.31	2.30	▲0.01

注1. 第1学期のGPAは、成績が確定した後に計算していることから、12月に取りまとめた報告書と異なる。

注2. 全学平均は別途計算していることから、表の平均とはならない。(単純に各学部の平均値で求めていない)

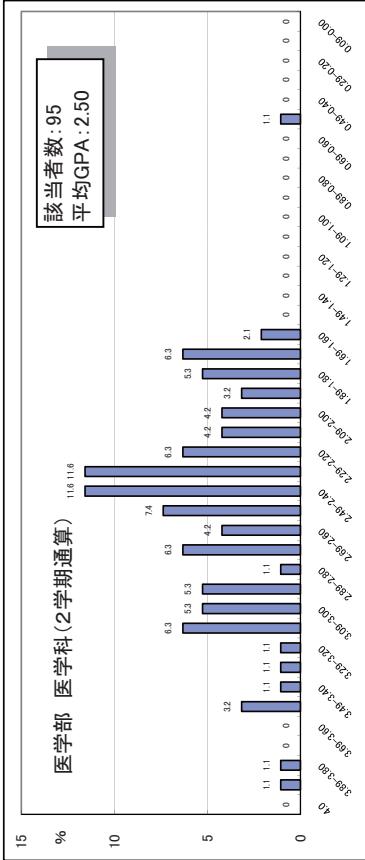
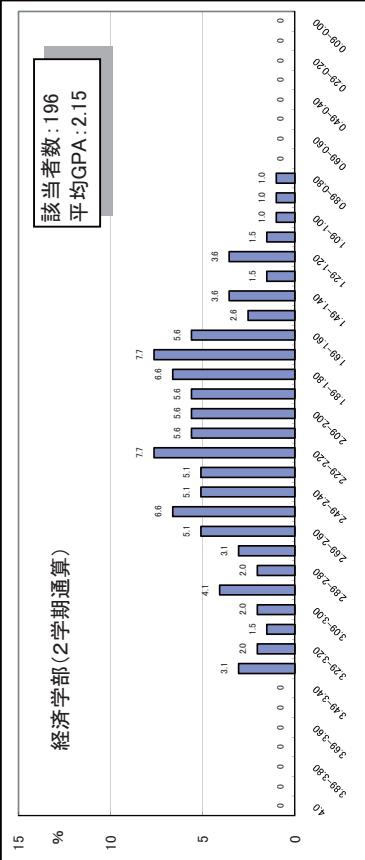
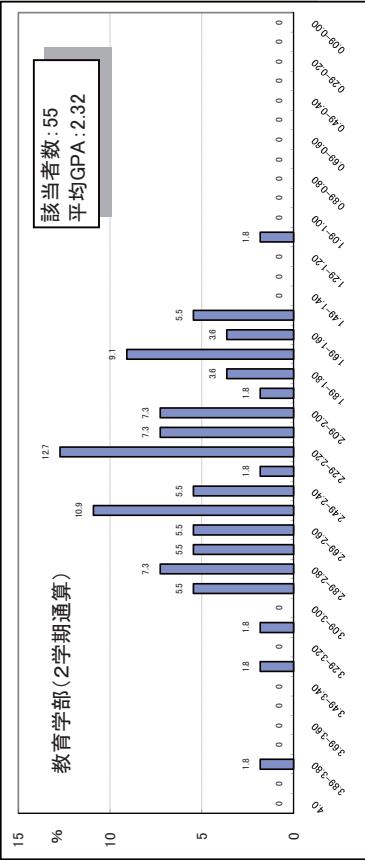
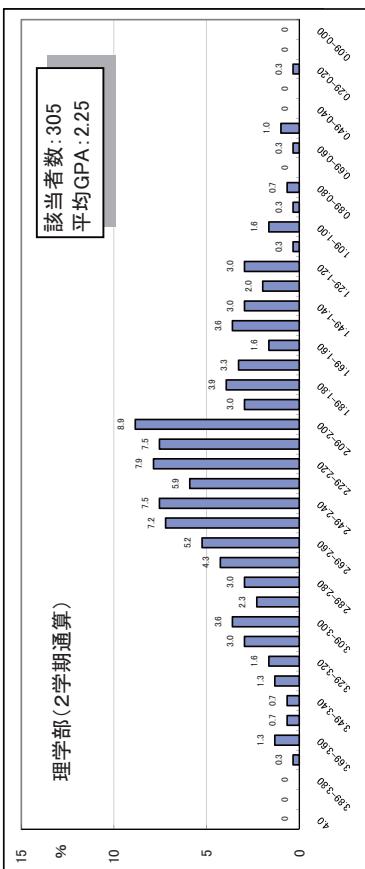
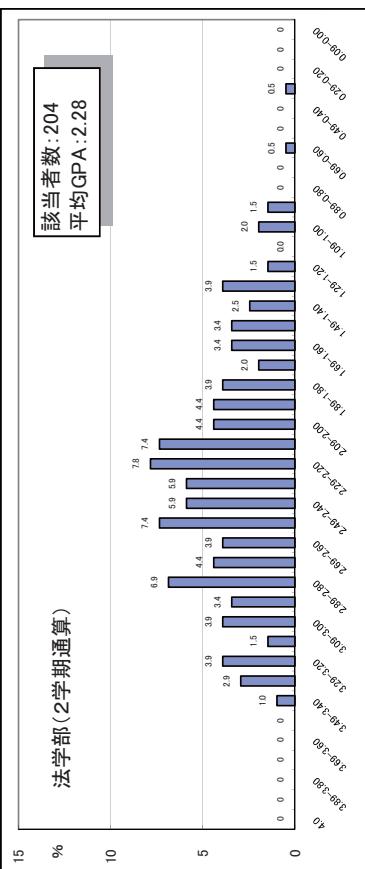
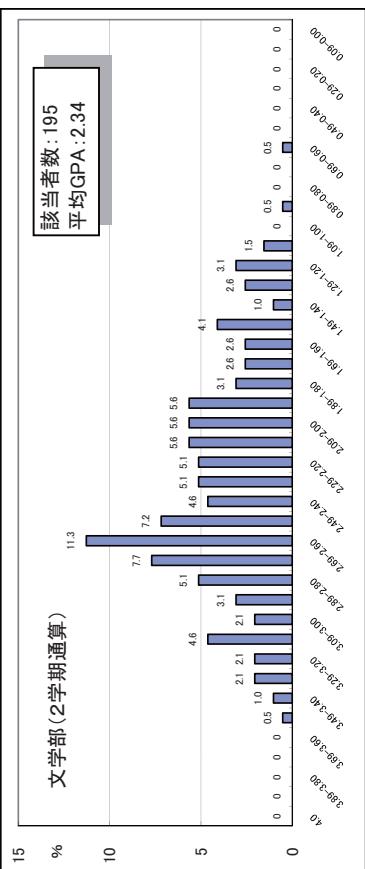
## 3 平成17年度第2学期 学期GPAとの比較

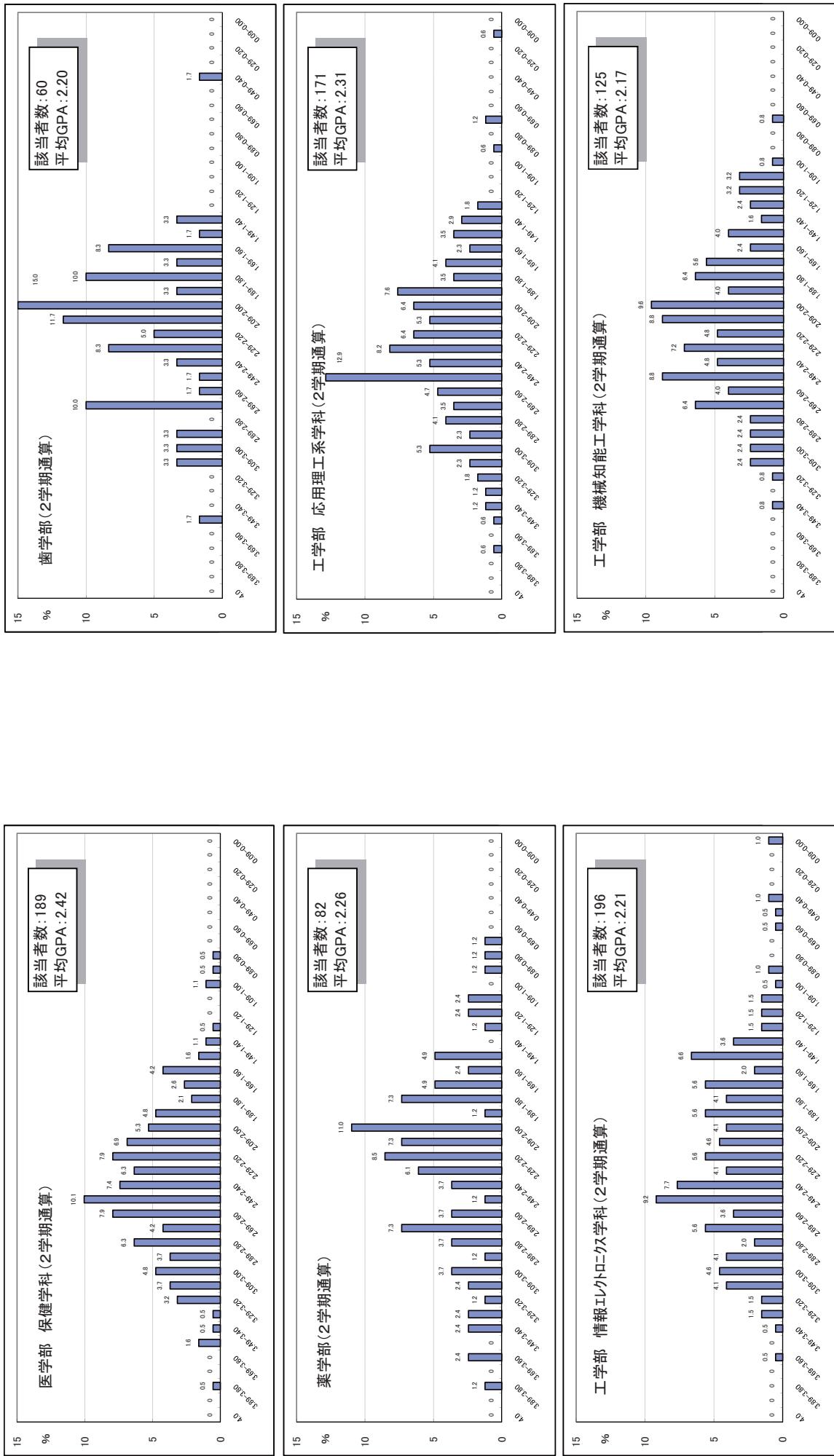
	平成17年度 第2学期	平成18年度 第2学期	18年 -17年
文学部	2.36	2.36	0.00
教育学部	2.15	2.38	0.23
法学部	2.08	2.27	0.19
経済学部	2.14	2.18	0.04
理学部	2.13	2.22	0.09
医学部一医学科	2.24	2.47	0.23
医学部一保健学科	2.35	2.46	0.11
歯学部	2.18	2.13	▲0.05
薬学部	2.22	2.09	▲0.13
工学部一応用理工系学科	2.15	2.31	0.16
工学部一情報エレクトロニクス学科	2.07	2.12	0.05
工学部一機械知能工学科	2.07	2.08	0.01
工学部一環境社会工学科	2.15	2.14	▲0.01
農学部	2.47	2.52	0.05
獣医学部	2.35	2.46	0.11
水産学部	2.14	2.25	0.11
全学平均	2.20	2.27	0.07

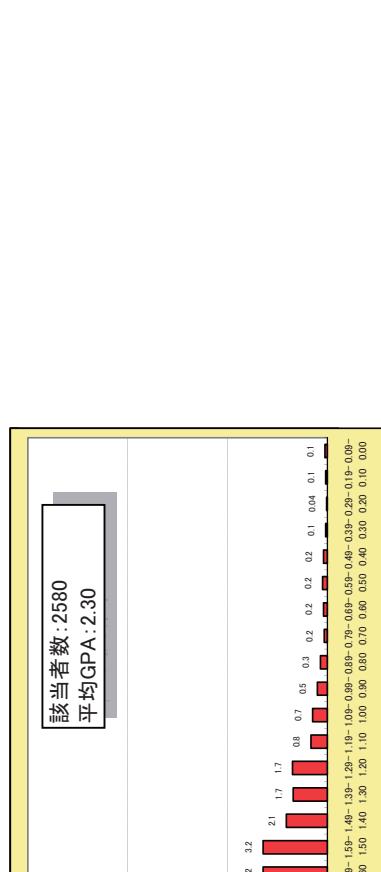
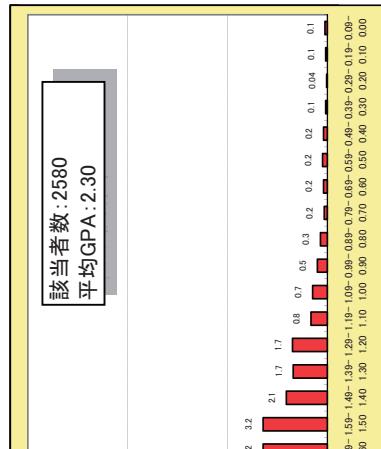
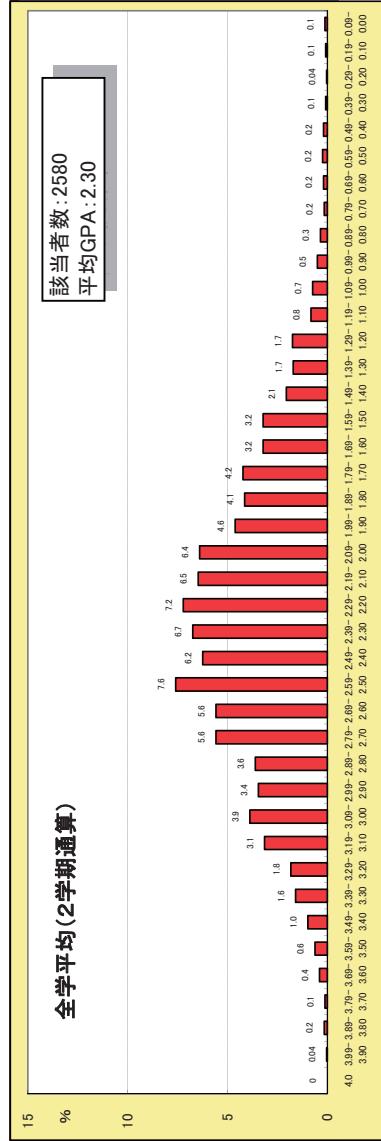
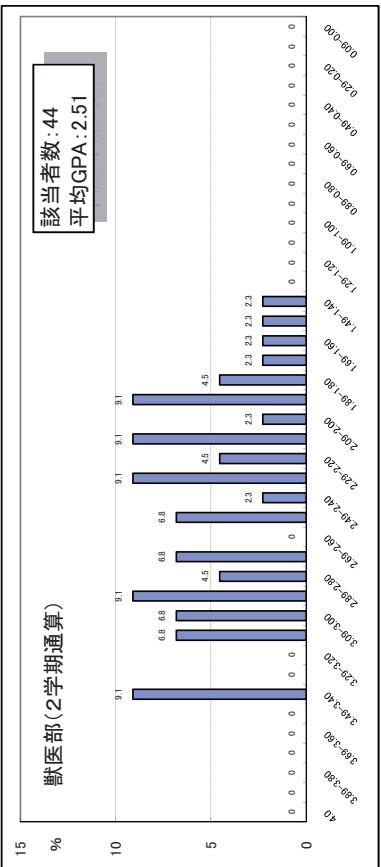
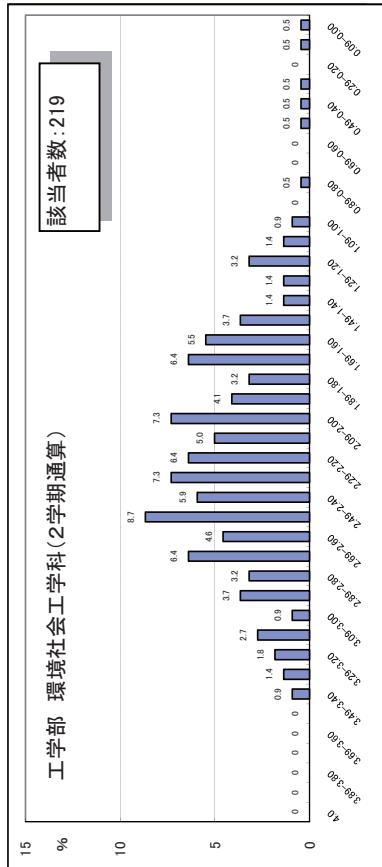
## 4 平成17年度第2学期 通算GPAとの比較

	平成17年度 第2学期	平成18年度 第2学期	18年 -17年
文学部	2.41	2.34	▲0.07
教育学部	2.25	2.32	0.07
法学部	2.22	2.28	0.06
経済学部	2.10	2.15	0.05
理学部	2.18	2.25	0.07
医学部一医学科	2.23	2.50	0.27
医学部一保健学科	2.43	2.42	▲0.01
歯学部	2.20	2.20	0.00
薬学部	2.30	2.26	▲0.04
工学部一応用理工系学科	2.14	2.31	0.17
工学部一情報エレクトロニクス学科	2.08	2.21	0.13
工学部一機械知能工学科	2.07	2.17	0.10
工学部一環境社会工学科	2.25	2.19	▲0.06
農学部	2.42	2.50	0.08
獣医学部	2.39	2.51	0.12
水産学部	2.20	2.29	0.09
全学平均	2.23	2.30	0.07

H18年度 2学期通算GPA







# 平成19年度 学部・学科別 GPA

(2008.4.17現在)

## 1 平成19年度 学部・学科別 GPA

	第1学期	第2学期	2学期 -1学期
文学部	2.45	2.48	0.03
教育学部	2.44	2.37	▲ 0.07
法学部	2.54	2.29	▲ 0.25
経済学部	2.27	2.26	▲ 0.01
理学部	2.34	2.30	▲ 0.04
医学部-医学科	2.61	2.32	▲ 0.29
医学部-保健学科	2.43	2.45	0.02
歯学部	2.20	2.32	0.12
薬学部	2.56	2.37	▲ 0.19
工学部-応用理工系学科	2.22	2.17	▲ 0.05
工学部-情報エレクトロニクス学科	2.17	2.18	0.01
工学部-機械知能工学科	2.27	2.21	▲ 0.06
工学部-環境社会工学科	2.44	2.34	▲ 0.10
農学部	2.47	2.42	▲ 0.05
獣医学部	2.44	2.35	▲ 0.09
水産学部	2.39	2.25	▲ 0.14
全学平均	2.38	2.31	▲ 0.07

## 2 通算GPA

第1学期	第2学期	2学期 -1学期
2.41	2.45	0.04
2.38	2.37	▲ 0.01
2.50	2.38	▲ 0.12
2.22	2.24	0.02
2.28	2.29	0.01
2.57	2.46	▲ 0.11
2.43	2.40	▲ 0.03
2.20	2.28	0.08
2.51	2.50	▲ 0.01
2.15	2.19	0.04
2.11	2.16	0.05
2.20	2.21	0.01
2.38	2.37	▲ 0.01
2.43	2.45	0.02
2.44	2.43	▲ 0.01
2.33	2.30	▲ 0.03
2.33	2.33	0.00

注1. 第1学期のGPAは、成績が確定した後に計算していることから、12月に取りまとめた報告書と異なる。

注2. 全学平均は別途計算していることから、表の平均とはならない。(単純に各学部の平均値で求めていない)

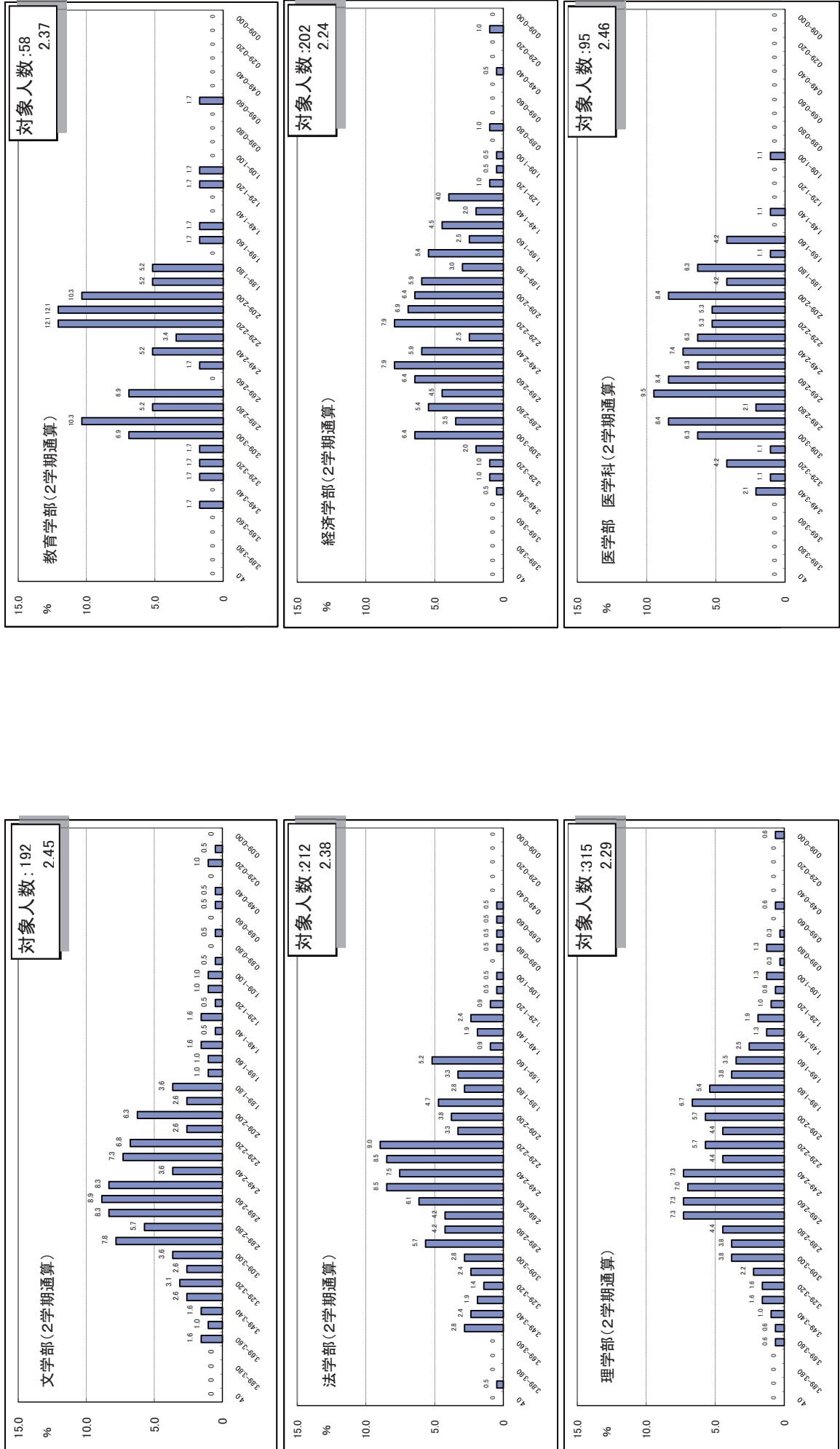
## 3 平成18年度第2学期 学期GPAとの比較

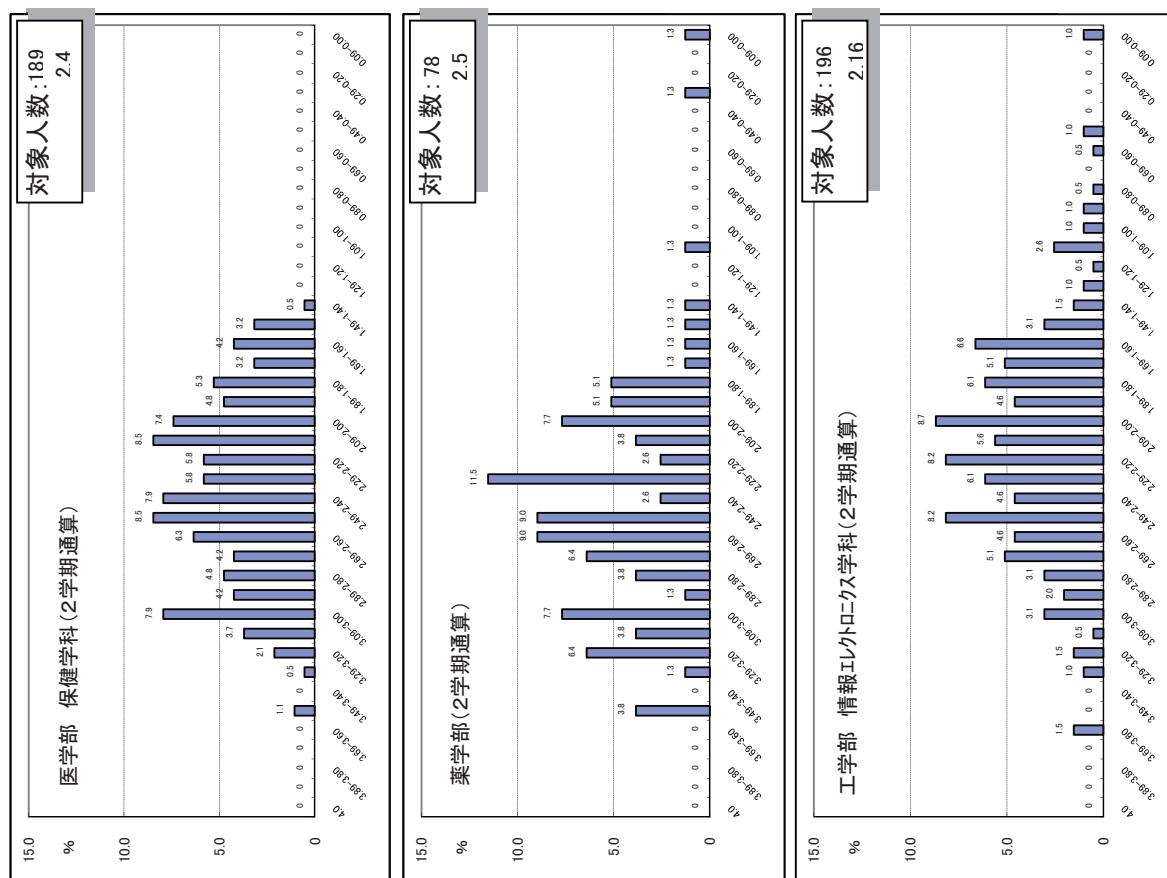
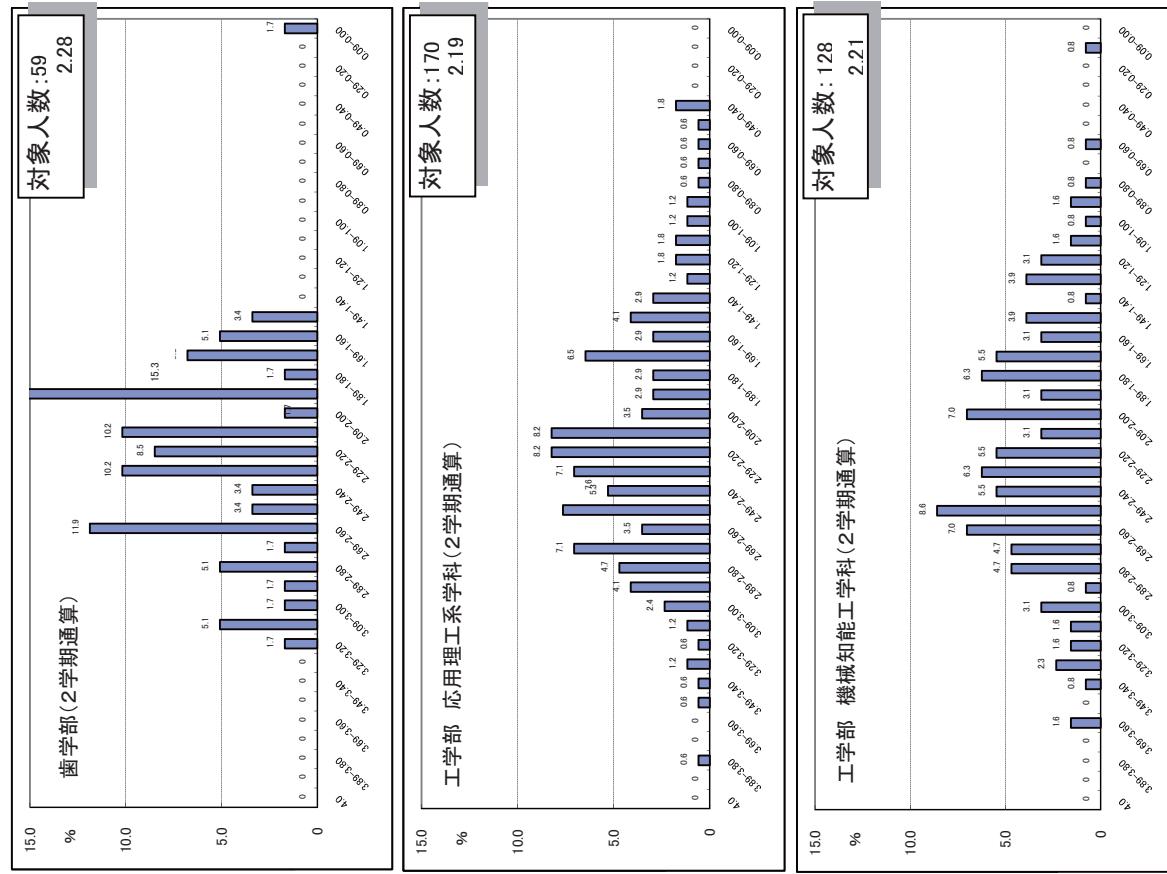
	平成18年度 第2学期	平成19年度 第2学期	19年 -18年
文学部	2.36	2.48	0.12
教育学部	2.38	2.37	▲ 0.01
法学部	2.27	2.29	0.02
経済学部	2.18	2.26	0.08
理学部	2.22	2.30	0.08
医学部-医学科	2.47	2.32	▲ 0.15
医学部-保健学科	2.46	2.45	▲ 0.01
歯学部	2.13	2.32	0.19
薬学部	2.09	2.37	0.28
工学部-応用理工系学科	2.31	2.17	▲ 0.14
工学部-情報エレクトロニクス学科	2.12	2.18	0.06
工学部-機械知能工学科	2.08	2.21	0.13
工学部-環境社会工学科	2.14	2.34	0.20
農学部	2.52	2.42	▲ 0.10
獣医学部	2.46	2.35	▲ 0.11
水産学部	2.25	2.25	0.00
全学平均	2.27	2.31	0.04

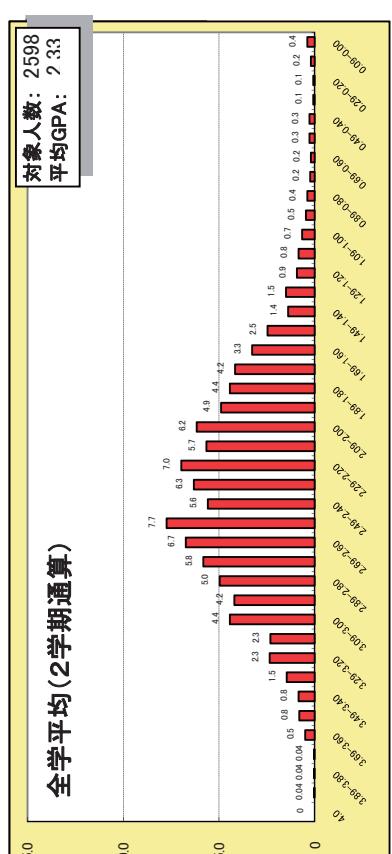
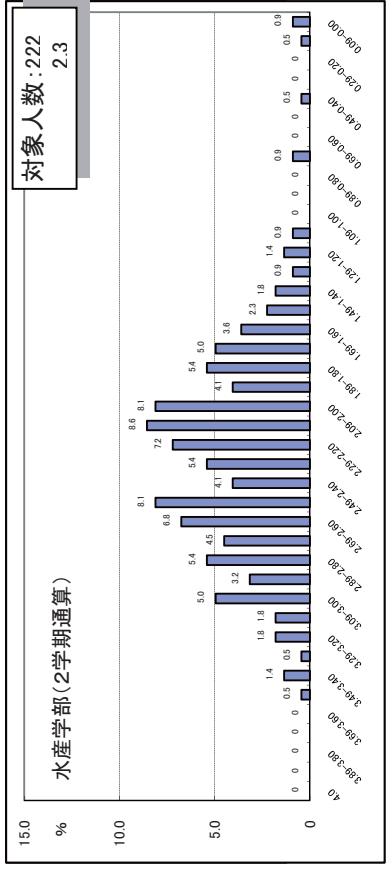
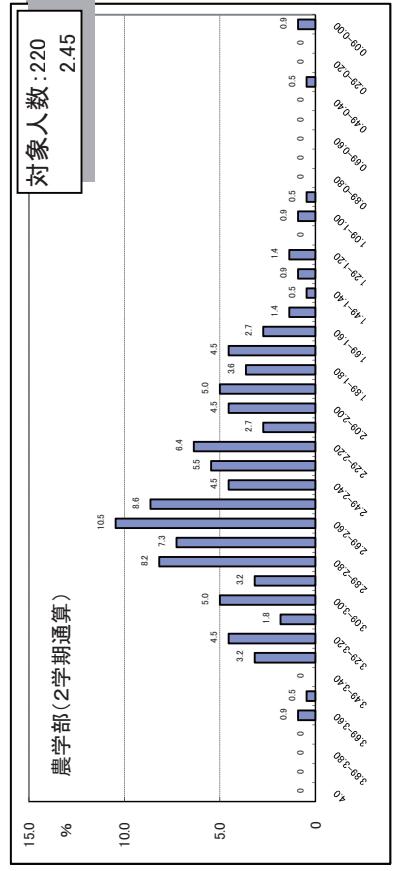
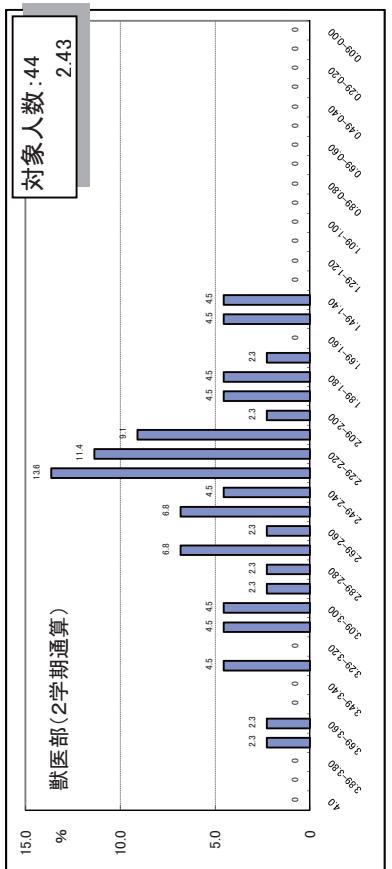
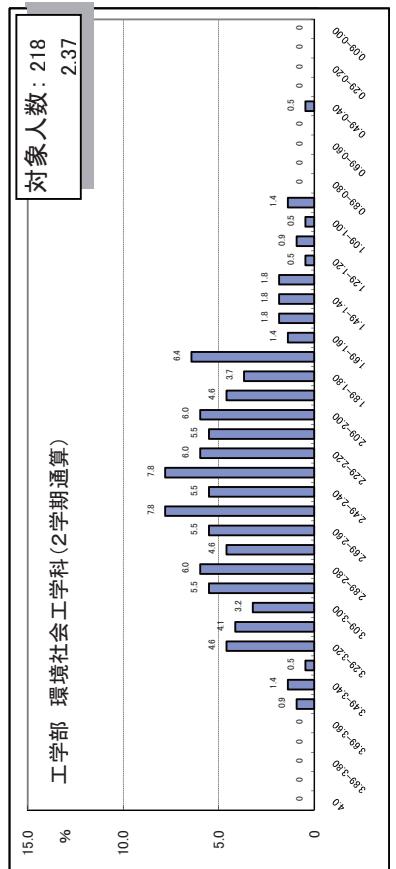
## 4 平成18年度第2学期 通算GPAとの比較

	平成18年度 第2学期	平成19年度 第2学期	19年 -18年
文学部	2.34	2.45	0.11
教育学部	2.32	2.37	0.05
法学部	2.28	2.38	0.10
経済学部	2.15	2.24	0.09
理学部	2.25	2.29	0.04
医学部-医学科	2.50	2.46	▲ 0.04
医学部-保健学科	2.42	2.40	▲ 0.02
歯学部	2.20	2.28	0.08
薬学部	2.26	2.50	0.24
工学部-応用理工系学科	2.31	2.19	▲ 0.12
工学部-情報エレクトロニクス学科	2.21	2.16	▲ 0.05
工学部-機械知能工学科	2.17	2.21	0.04
工学部-環境社会工学科	2.19	2.37	0.18
農学部	2.50	2.45	▲ 0.05
獣医学部	2.51	2.43	▲ 0.08
水産学部	2.29	2.30	0.01
全学平均	2.30	2.33	0.03

# H19年度 2学期通算GPA







# 平成20年度 学部・学科別 GPA

(2009.4.28現在)

## 1 平成20年度 学部・学科別 GPA

	第1学期	第2学期	2学期 -1学期
文学部	2.46	2.54	0.08
教育学部	2.23	2.32	0.09
法学部	2.39	2.25	▲ 0.14
経済学部	2.28	2.36	0.08
理学部	2.34	2.36	0.02
医学部－医学科	2.53	2.33	▲ 0.20
医学部－保健学科	2.49	2.48	▲ 0.01
歯学部	2.21	2.34	0.13
薬学部	2.63	2.45	▲ 0.18
工学部－応用理工系学科	2.29	2.24	▲ 0.05
工学部－情報エレクトロニクス学科	2.35	2.29	▲ 0.06
工学部－機械知能工学科	2.33	2.18	▲ 0.15
工学部－環境社会工学科	2.36	2.27	▲ 0.09
農学部	2.49	2.47	▲ 0.02
獣医学部	2.62	2.51	▲ 0.11
水産学部	2.24	2.24	0.00
全学平均	2.38	2.35	▲ 0.03

## 2 通算GPA

第1学期	第2学期	2学期 -1学期
2.44	2.51	0.07
2.18	2.24	0.06
2.36	2.30	▲ 0.06
2.25	2.31	0.06
2.31	2.35	0.04
2.54	2.46	▲ 0.08
2.46	2.49	0.03
2.19	2.31	0.12
2.61	2.54	▲ 0.07
2.24	2.26	0.02
2.31	2.31	0.00
2.29	2.24	▲ 0.05
2.33	2.36	0.03
2.47	2.49	0.02
2.62	2.54	▲ 0.08
2.20	2.23	0.03
2.35	2.36	0.01

注1. 第1学期のGPAは、成績が確定した後に計算していることから、12月に取りまとめた報告書と異なる。

注2. 全学平均は別途計算していることから、表の平均とはならない。(単純に各学部の平均値で求めていない)

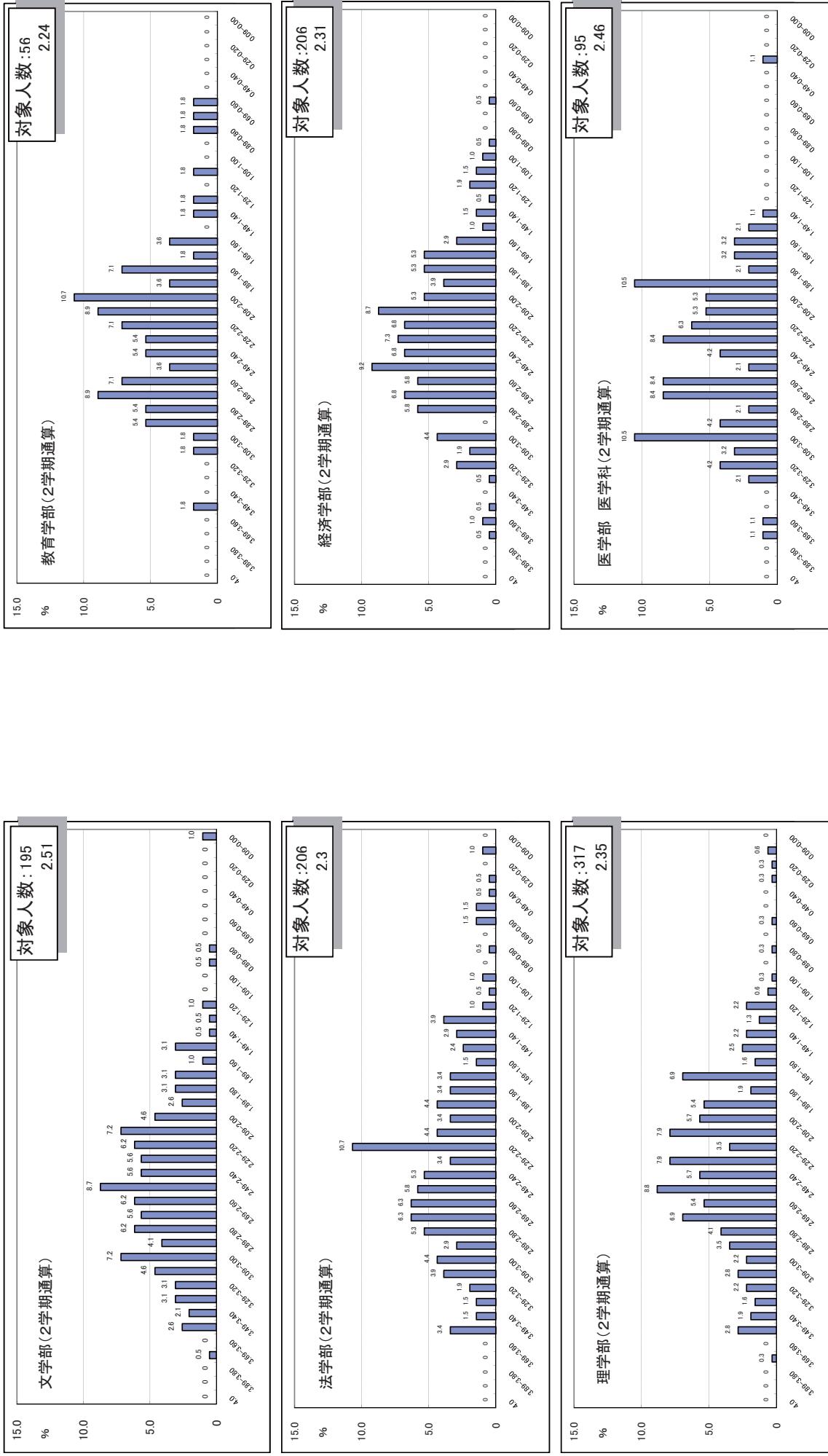
## 3 平成20年度第2学期 学期GPAとの比較

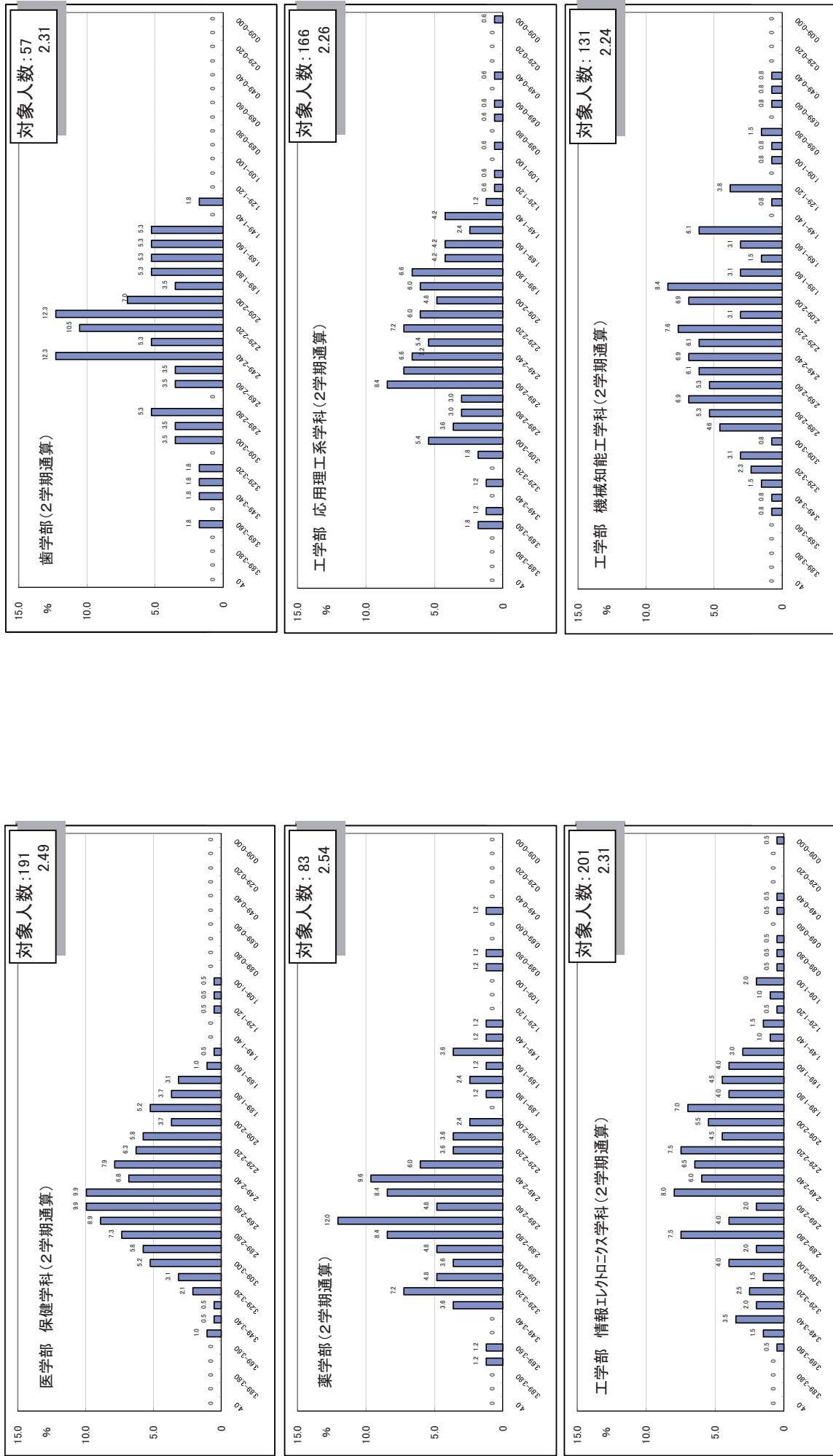
	平成19年度平成20年度 第2学期	20年 -19年
文学部	2.48	2.54
教育学部	2.37	2.32 ▲ 0.05
法学部	2.29	2.25 ▲ 0.04
経済学部	2.26	2.36 0.10
理学部	2.30	2.36 0.06
医学部－医学科	2.32	2.33 0.01
医学部－保健学科	2.45	2.48 0.03
歯学部	2.32	2.34 0.02
薬学部	2.37	2.45 0.08
工学部－応用理工系学科	2.17	2.24 0.07
工学部－情報エレクトロニクス学科	2.18	2.29 0.11
工学部－機械知能工学科	2.21	2.18 ▲ 0.03
工学部－環境社会工学科	2.34	2.27 ▲ 0.07
農学部	2.42	2.47 0.05
獣医学部	2.35	2.51 0.16
水産学部	2.25	2.24 ▲ 0.01
全学平均	2.31	2.35 0.04

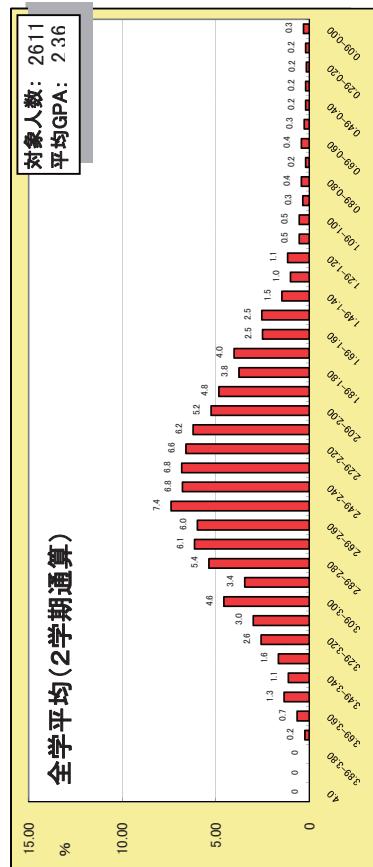
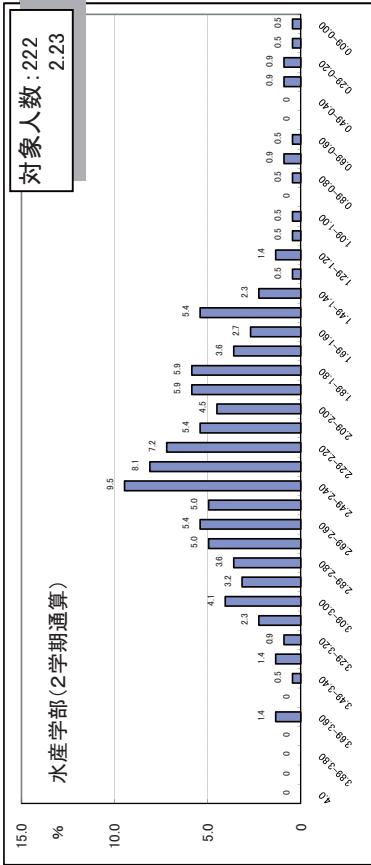
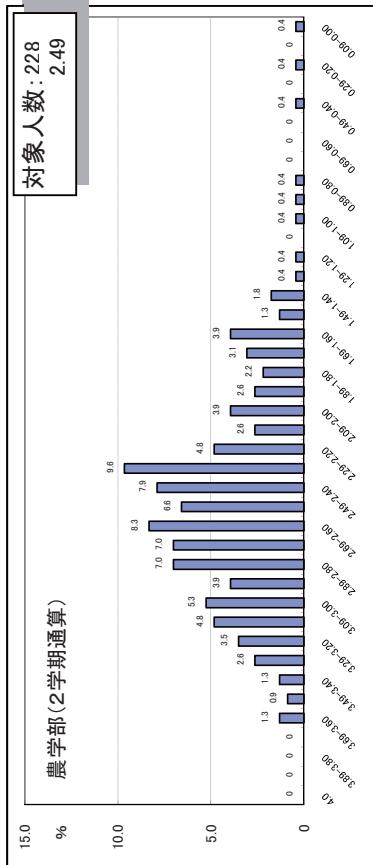
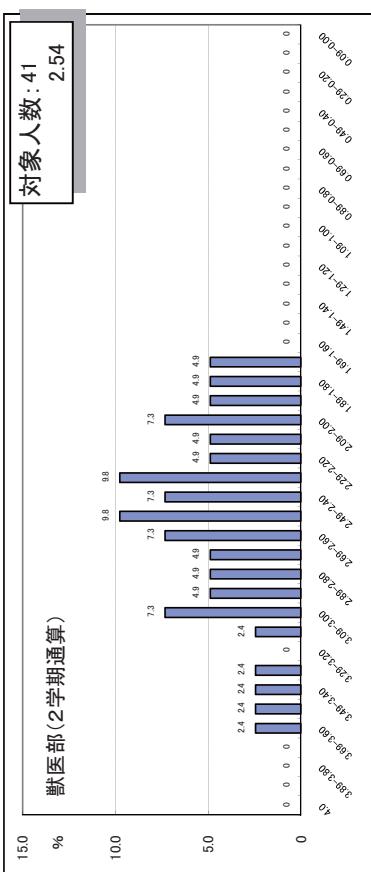
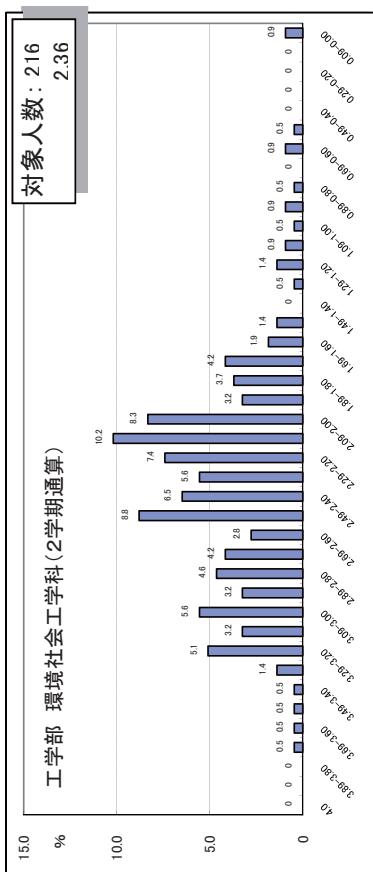
## 4 平成19年度第2学期 通算GPAとの比較

	平成19年度平成20年度 第2学期	20年 -19年
文学部	2.45	2.51 0.06
教育学部	2.37	2.24 ▲ 0.13
法学部	2.38	2.30 ▲ 0.08
経済学部	2.24	2.31 0.07
理学部	2.29	2.35 0.06
医学部－医学科	2.46	2.46 0.00
医学部－保健学科	2.40	2.49 0.09
歯学部	2.28	2.31 0.03
薬学部	2.50	2.54 0.04
工学部－応用理工系学科	2.19	2.26 0.07
工学部－情報エレクトロニクス学科	2.16	2.31 0.15
工学部－機械知能工学科	2.21	2.24 0.03
工学部－環境社会工学科	2.37	2.36 ▲ 0.01
農学部	2.45	2.49 0.04
獣医学部	2.43	2.54 0.11
水産学部	2.30	2.23 ▲ 0.07
全学平均	2.33	2.36 0.03

## H20年度 2学期期通算GPA







## 平成17～20年度入学者における 学部学科別 GPA(第1学期)

学期GPA	※体育学Ⅰ及び情報学Ⅰを含めたGPA						
	平成17年度 第1学期	平成18年度 第1学期 18.9.8 速報値	平成19年度 第1学期 19.9.9 速報値	平成20年度 第1学期 20.9.10速報値	20年度- 19年度	18～20年 度の平均	17～20年 度の平均
文学部	2.41	2.31	2.45	2.46	0.01	2.41	2.41
教育学部	2.31	2.33	2.44	2.23	▲ 0.21	2.33	2.33
法学部	2.36	2.35	2.53	2.39	▲ 0.14	2.42	2.41
経済学部	2.05	2.16	2.27	2.28	0.01	2.24	2.19
理学部	2.18	2.33	2.34	2.34	0.00	2.34	2.30
医学部－医学科	2.21	2.61	2.61	2.53	▲ 0.08	2.58	2.49
医学部－保健学科	2.32	2.41	2.43	2.49	0.06	2.44	2.41
歯学部	2.22	2.28	2.20	2.21	0.01	2.23	2.23
薬学部	2.36	2.46	2.56	2.63	0.07	2.55	2.50
工学部－応用理工系学科	2.1	2.34	2.22	2.29	0.07	2.28	2.24
工学部－情報エレクトロニクス学科	2.05	2.35	2.17	2.35	0.18	2.29	2.23
工学部－機械知能工学科	2.05	2.30	2.27	2.33	0.06	2.30	2.24
工学部－環境社会工学科	2.29	2.29	2.44	2.36	▲ 0.08	2.36	2.35
農学部	2.36	2.51	2.47	2.49	0.02	2.49	2.46
獣医学部	2.41	2.54	2.44	2.62	0.18	2.53	2.50
水産学部	2.22	2.40	2.37	2.24	▲ 0.13	2.34	2.31
<b>全学平均</b>	<b>2.23</b>	<b>2.36</b>	<b>2.38</b>	<b>2.38</b>	<b>0.00</b>	<b>2.37</b>	<b>2.34</b>

通算GPA	※体育学Ⅰ及び情報学Ⅰを除いたGPA						
	平成17年度 第1学期	平成18年度 第1学期 18.9.8 速報値	平成19年度 第1学期 19.9.9 速報値	平成20年度 第1学期 20.9.10速報値	20年度- 19年度	18～20年 度の平均	17～20年 度の平均
文学部	2.41	2.28	2.41	2.44	0.03	2.38	2.39
教育学部	2.31	2.28	2.38	2.18	▲ 0.20	2.28	2.29
法学部	2.36	2.31	2.5	2.36	▲ 0.14	2.39	2.38
経済学部	2.05	2.12	2.22	2.25	0.03	2.20	2.16
理学部	2.18	2.29	2.28	2.31	0.03	2.29	2.27
医学部－医学科	2.21	2.58	2.57	2.54	▲ 0.03	2.56	2.48
医学部－保健学科	2.32	2.32	2.43	2.46	0.03	2.40	2.38
歯学部	2.22	2.25	2.2	2.19	▲ 0.01	2.21	2.22
薬学部	2.36	2.4	2.51	2.61	0.10	2.51	2.47
工学部－応用理工系学科	2.1	2.28	2.15	2.24	0.09	2.22	2.19
工学部－情報エレクトロニクス学科	2.05	2.29	2.11	2.31	0.20	2.24	2.19
工学部－機械知能工学科	2.05	2.27	2.2	2.29	0.09	2.25	2.20
工学部－環境社会工学科	2.29	2.24	2.38	2.33	▲ 0.05	2.32	2.31
農学部	2.36	2.45	2.42	2.47	0.05	2.45	2.43
獣医学部	2.41	2.54	2.44	2.62	0.18	2.53	2.50
水産学部	2.22	2.34	2.3	2.2	▲ 0.10	2.28	2.27
<b>全学平均</b>	<b>2.23</b>	<b>2.31</b>	<b>2.33</b>	<b>2.35</b>	<b>0.02</b>	<b>2.33</b>	<b>2.31</b>

### 注意

- 平成17年度のGPAについては「試行」として実施した際の数値であり、一部、18年度以降の算出方法と異なるものである。
- 平成18年度から新たなカリキュラムを実施。

**入学年度別 G P A ・履修登録単位数（平均値）比較表**

17年度 入学者	17年度						18年度						19年度						20年度						4年次1学期						4年次2学期					
	1年次1学期			1年次2学期			前学期 通算GPA 比較			2年次1学期			前学期 通算GPA 比較			2年次2学期			前学期 通算GPA 比較			3年次1学期			前学期 通算GPA 比較			3年次2学期			前学期 通算GPA 比較					
	登録 単位数 平均	学期	通算	登録 単位数	学期	通算	登録 単位数	学期	通算	登録 単位数	学期	通算	登録 単位数	学期	通算	登録 単位数	学期	通算	登録 単位数	学期	通算	登録 単位数	学期	通算	登録 単位数	学期	通算	登録 単位数	学期	通算	登録 単位数	学期	通算			
文学部	23.2	2.41	2.41	16.9	2.36	2.41	0.00	22.8	2.34	2.42	0.01	22.2	2.44	2.42	0.00	21.7	2.55	2.46	0.04	21.1	2.51	2.46	0.00	9.7	2.61	2.43	△ 0.03	16.3	2.73	2.45	0.02					
教育学部	26.1	2.31	2.31	18.5	2.15	2.25	△ 0.08	21.1	2.19	2.25	0.00	22.8	2.28	2.27	0.02	20.4	2.54	2.38	0.11	18.9	2.34	2.36	△ 0.02	7.9	2.59	2.35	△ 0.03	15.8	2.77	2.36	0.01					
法学部	23.7	2.36	2.36	23.4	2.08	2.22	△ 0.14	21.1	1.97	2.15	△ 0.07	23.3	1.54	2.02	△ 0.13	23.7	1.79	1.98	△ 0.04	29.8	1.87	1.94	△ 0.04	13.0	1.78	1.77	△ 0.21	13.9	2.11	1.94	0.17					
経済学部	26.1	2.05	2.05	21.1	2.14	2.10	0.05	19.1	2.06	2.10	0.00	16.7	1.68	2.05	△ 0.05	26.5	2.07	2.05	2.00	△ 0.05	9.3	1.90	1.83	△ 0.22	7.8	3.00	2.08	0.25								
理学部	32.3	2.18	2.18	23.2	2.13	2.18	0.00	14.5	2.17	2.22	0.04	18.2	2.25	2.22	0.00	21.9	2.25	2.24	0.02	20.4	2.21	2.21	△ 0.03	8.3	2.13	2.10	△ 0.14	13.2	2.93	2.26	0.16					
医学部－医学	37.2	2.21	2.21	21.4	2.24	2.23	0.02	14.8	2.31	2.26	0.03	17.0	2.34	2.30	0.04	21.6	2.1	2.27	△ 0.03	22.3	2.36	2.32	0.05	4.7	2.71	2.26	△ 0.01	18.4	2.11	2.27	0.01					
医学部－保健	27.3	2.32	2.32	14.3	2.35	2.43	0.11	13.6	2.24	2.31	△ 0.12	20.0	2.39	2.35	0.04	19.7	2.55	2.42	0.07	14.3	2.68	2.42	0.00	7.0	2.16	2.27	△ 0.15	8.5	2.88	2.47	0.20					
歯学部	34.8	2.22	2.22	20.2	2.18	2.20	△ 0.02	11.2	1.85	1.93	△ 0.27	14.3	2.41	2.26	0.33	17.5	2.45	2.29	0.05	27.5	2.60	2.34	0.05	8.2	2.15	2.17	△ 0.12	26.8	2.09	2.30	0.13					
薬学部	33.6	2.36	2.36	23.0	2.22	2.30	△ 0.08	21.7	1.75	2.16	0.03	20.3	2.17	0.01	10.9	1.83	2.16	△ 0.01	28.9	2.65	2.24	0.08	7.5	2.29	2.22	0.06	8.7	3.40	2.32	0.10						
工学部－応用	31.7	2.10	2.10	23.4	2.15	2.14	0.04	20.3	2.11	2.14	0.00	20.8	2.18	2.20	0.06	14.4	2.06	2.17	△ 0.03	20.1	2.36	2.25	0.08	5.9	2.54	2.42	△ 0.25	8.3	2.36	2.25	△ 0.17					
工学部－情報	30.0	2.05	2.05	26.4	2.07	2.08	0.03	20.5	2.13	2.09	0.01	22.0	2.25	2.18	0.09	14.5	2.47	2.24	0.06	21.1	2.46	2.31	0.07	9.7	2.73	2.36	△ 0.12	6.9	2.67	2.27	△ 0.09					
工学部－機械	30.8	2.05	2.05	22.7	2.07	2.07	0.02	19.2	1.93	2.06	△ 0.01	18.2	2.27	2.14	0.08	11.3	1.83	2.06	△ 0.08	27.8	2.16	2.21	0.15	6.1	2.19	2.00	△ 0.06	9.3	2.42	2.17	0.17					
工学部－環境	34.5	2.29	2.29	22.3	2.15	2.25	△ 0.04	16.2	2.07	2.22	△ 0.03	21.2	1.98	2.20	△ 0.02	14.0	2.11	2.27	0.07	18.3	2.21	2.22	△ 0.05	14.2	2.17	2.26	△ 0.01	10.7	2.62	2.21	△ 0.05					
農学部	29.8	2.36	2.36	21.3	2.47	2.42	0.08	17.3	2.42	2.45	0.03	18.8	2.52	2.47	0.02	19.4	2.53	2.46	△ 0.01	17.4	2.44	2.41	△ 0.05	8.2	2.84	2.45	△ 0.01	11.1	2.94	2.48	0.03					
獣医学部	35.7	2.41	2.41	17.8	2.35	2.39	△ 0.02	12.0	2.15	2.37	△ 0.02	17.9	2.16	2.29	△ 0.08	8.3	1.84	1.91	△ 0.38	24.6	2.35	2.36	0.45	13.1	2.34	2.34	△ 0.43	23.8	2.43	2.39	0.05					
水産学部	31.4	2.22	2.22	25.2	2.14	2.20	△ 0.02	18.0	2.27	2.21	0.01	20.6	2.30	2.25	0.04	16.7	2.28	2.26	0.01	15.4	2.39	2.25	△ 0.01	4.6	2.04	2.25	△ 0.01	11.1	2.77	2.29	0.04					
全学平均	29.5	2.23	2.23	21.8	2.20	2.23	0.00	18.0	2.14	2.22	△ 0.01	20.1	2.17	2.23	0.01	18.6	2.25	2.25	0.02	21.1	2.34	2.25	0.00	8.4	2.33	2.22	△ 0.03	13.1	2.63	2.28	0.06					

※17年度入学者に履修登録単位数の上限設定制度は導入されていない。

18年度 入学者	18年度						19年度						20年度						4年次1学期						4年次2学期									
	1年次1学期			1年次2学期			前学期 通算GPA 比較			2年次1学期			前学期 通算GPA 比較			2年次2学期			前学期 通算GPA 比較			3年次1学期			前学期 通算GPA 比較			3年次2学期			前学期 通算GPA 比較			
	登録 単位数 平均	学期	通算	登録 単位数	学期	通算	登録 単位数	学期	通算	登録 単位数	学期	通算	登録 単位数	学期	通算	登録 単位数	学期	通算	登録 単位数	学期	通算	登録 単位数	学期	通算	登録 単位数	学期	通算	登録 単位数	学期	通算				
文学部	20.3	2.31	2.28	19.8	2.36	2.34	0.06	26.2	2.11	2.24	△ 0.10	25.1	2.21	2.24	0.00	24.3	2.31	2.25	0.01	18.0	2.12	2.15	△ 0.10											
教育学部	20.8	2.33	2.28	19.8	2.38	2.32	0.04	20.7	2.41	2.36	0.04	23.0	2.28	2.33	△ 0.03	20.6	2.53	2.33	0.00	17.5	2.39	2.30	△ 0.03											
法学部	17.6	2.35	2.31	25.1	2.26	2.28	△ 0.03	22.8	1.58	2.02	△ 0.26	28.4	1.55	1.89	△ 0.13	27.7	1.51	1.80	△ 0.09	26.9	1.79	1.79	△ 0.01											
経済学部	20.7	2.16	2.12	19.8	2.18	2.15	0.03	26.7	2.06	2.14	△ 0.01	20.6	1.96	2.10	△ 0.04	23.9	1.84	2.04	△ 0.08	21.3	2.08	2.01	△ 0.03											
理学部	23.4	2.33	2.29	24.3	2.22	2.25	△ 0.04	18.1	2.37	2.29	0.04	21.2	2.23	2.31	0.02	19.7	2.22	2.28	△ 0.03	17.6	2.31	2.28	0.11											
医学部－医学	23.6	2.61	2.58	27.4	2.47	2.50	0.08	13.4	2.33	2.42	△ 0.08	21.3	2.20	2.46	0.04	20.6	2.30	2.28	△ 0.18	11.1	2.18	2.39	0.11											
医学部－保健	21.5	2.41	2.32	18.0	2.46	2.42	0.10	12.2	2.07	2.23	△ 0.19	19.8	2.46	2.44	0.21	20.4	2.53	2.42	△ 0.02	14.6	2.61	2.48	0.08											
歯学部	21.0	2.27	2.22	20.2	2.26	2.24	0.05	14.7	1.94	2.13	△ 0.06	23.7	1.94	2.13	0.00	19.0	2.10	2.39	△ 0.26	16.9	2.08	2.12	△ 0.27											
理学部	23.7	2.34	2.28	24.9	2.30	2.29	0.01	17.3	2.26	2.29	0.00	19.5	2.34	2.35	0.06	23.0	2.31																	

# 平成19年度第2学期・20年度第1学期の「自習時間」

(平成18年度第1学期～19年度第1学期との比較)

コアカリキュラム調査検討グループ作成、2009年5月7日速報

\* 授業アンケートの設問13(この授業1回(90分)のための予習・復習に費やした時間は平均( )であった)の集計結果

\* 平均自習時間は、30分以下=0.5、1時間=1、2時間=2、3時間=3、4時間以上=4に換算して算出

\* 回答数は件数、平均自習時間は時間、それ以外の数値は%

回答総計

年度・学期	H19-2	H20-1
回答数	24,564	28,031
30分以下	47.8	44.5
1時間	26.9	28.8
2時間	16.2	17.8
3時間	5.1	4.9
4時間以上	4.1	3.9
平均自習時間	1.15	1.17
同 H18-2・H19-1	1.07	1.14
同 H18-1		1.06
H18年度比増減	0.08	0.11

## (1) 授業の形態別

H19-2		H20-1	
講義	演習	講義	演習
22,130	2,434	25,351	2,680
49.2	34.6	45.8	32.8
27.0	25.7	28.9	28.5
15.7	21.3	17.2	23.2
4.5	9.7	4.6	8.5
3.6	8.6	3.6	7.1
1.11	1.49	1.14	1.45
1.03	1.46	1.11	1.48
		1.03	1.42
		0.08	0.03
		0.11	0.03

## (2) 必修・選択の別

H19-2		H20-1	
必修	選択	必修	選択
15,581	8,983	18,490	9,541
43.2	55.8	40.5	52.5
29.3	22.6	31.1	24.4
17.6	13.8	19.1	15.2
5.4	4.5	5.4	4.1
4.5	3.3	4.0	3.8
1.20	1.05	1.22	1.09
1.10	1.00	1.19	1.04
		1.10	0.98
		0.10	0.05
		0.12	0.11

(「選択必修」は「必修」に含める)

## (3) 受講登録学生数(クラス規模)別

年度・学期	H19-2					H20-1				
	25人以下	26～50	51～100	101～200	201以上	25人以下	26～50	51～100	101～200	201以上
回答数	1,589	7,618	9,574	4,479	1,304	2,112	6,721	11,819	5,032	2,347
30分以下	42.5	45.4	46.4	54.3	55.4	32.3	42.6	44.1	52.6	46.4
1時間	28.3	29.9	26.9	22.5	23.0	31.2	32.5	28.6	24.5	26.8
2時間	18.2	16.3	17.1	14.1	14.1	23.4	16.9	18.4	15.3	17.3
3時間	6.5	4.6	5.3	4.9	4.4	7.4	4.5	5.1	4.2	4.8
4時間以上	4.5	3.8	4.3	4.2	3.1	5.7	3.6	3.8	3.5	4.8
平均自習時間	1.24	1.14	1.17	1.09	1.05	1.39	1.15	1.18	1.08	1.18
同 H18-2・H19-1	1.25	1.08	1.07	0.93	1.04	1.42	1.10	1.19	1.05	0.99
同 H18-1						1.40	1.03	1.07	1.02	0.92
H18年度比増減	▲ 0.01	0.06	0.10	0.16	0.01	▲ 0.01	0.12	0.11	0.06	0.26

## (4) 科目区分別：(4-1) 全学教育科目(内訳は(4-1a)(4-1b)を参照)

## (4-2) 専門科目(内訳は(4-2a)を参照)

科目区分	全学教育科目					専門科目						
	H19-2			H20-1		H19-2			H20-1		H20-1	
年度・学期	講義	演習	小計	講義	演習	小計	講義	演習	小計	講義	演習	小計
回答数	7,624	985	8,609	9,875	1,426	11,301	14,467	1,430	15,897	15,457	1,273	16,730
30分以下	49.3	43.8	48.6	47.2	42.0	46.5	49.3	27.8	47.4	44.8	23.3	43.2
1時間	27.4	28.0	27.4	28.8	25.0	28.4	26.8	24.5	26.6	28.9	32.1	29.2
2時間	15.0	16.7	15.2	16.2	20.1	16.0	15.9	24.7	16.7	17.9	25.9	18.5
3時間	4.9	7.0	5.2	4.5	6.1	4.7	4.4	11.5	5.0	4.6	10.6	5.1
4時間以上	3.4	4.6	3.5	3.3	6.9	3.8	3.6	11.5	4.3	3.7	8.1	4.0
平均自習時間	1.10	1.23	1.12	1.11	1.32	1.14	1.11	1.68	1.16	1.16	1.60	1.19
同 H18-2・H19-1	1.08	1.18	1.09	1.13	1.38	1.16	1.01	1.61	1.06	1.10	1.60	1.13
同 H18-1				1.10	1.32	1.12				0.98	1.54	1.02
H18年度比増減	0.02	0.05	0.03	0.02	0.00	0.02	0.10	0.07	0.10	0.18	0.06	0.17

## (4-1a) 全学教育科目の内訳(科目区分別)

(1コマ(90分)の授業で2単位の科目)

科目区分	主題別科目		総合科目		一般教育演習		共通科目(講義)		外国語演習		基礎科目	
	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1
年度・学期												
回答数	1,433	2,625	1,030	1,523	254	657	354	606	412	421	2,589	3,529
30分以下	65.2	57.7	64.7	62.4	39.0	39.6	50.8	29.0	26.7	35.2	44.4	44.3
1時間	17.4	21.6	16.1	16.7	35.8	25.6	27.7	36.0	36.4	32.3	27.7	32.0
2時間	10.7	13.1	11.2	12.4	13.4	20.4	15.0	23.9	25.0	22.3	16.6	16.7
3時間	4.4	3.8	4.4	4.3	4.7	5.6	3.4	6.9	10.2	6.4	6.6	4.4
4時間以上	2.3	3.8	3.7	4.2	7.1	8.8	3.1	4.1	1.7	3.8	4.6	2.6
平均自習時間	0.94	1.03	0.99	1.02	1.25	1.38	1.06	1.36	1.37	1.29	1.21	1.11
必要な学修時間/週	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
学修時間充足%	40.7%	42.2%	41.5%	42.0%	45.8%	48.0%	42.7%	47.7%	47.8%	46.5%	45.2%	43.5%
同 H18-2・H19-1	0.94	0.97	0.88	0.86	1.10	1.51	1.07	1.39	1.50	1.17	1.11	1.18
同 H18-1		0.85		0.96		1.51		1.25		1.22		1.11
H18年度比増減	0.00	0.18	0.11	0.06	0.15	▲ 0.13	▲ 0.01	0.11	▲ 0.13	0.07	0.10	0.00

科目区分	日本語・日本事情		共通科目(実技)		外国語(講義)		情報学 I	理系基礎	文系基礎(H20-1)			小計
年度・学期	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H20-1	H19-2	H20-1	人文科学	社会科学	
回答数	0	49	319	348	2,218	1,543	191	2,589	2,849	365	240	605
30分以下	-	20.4	69.6	54.6	37.2	29.1	23.0	44.4	41.5	50.4	64.6	56.0
1時間	-	26.5	11.0	15.2	38.6	43.1	70.0	27.7	32.7	30.1	27.5	29.1
2時間	-	32.7	8.5	16.7	17.8	20.3	65.0	16.6	18.1	14.8	5.0	10.9
3時間	-	12.2	4.7	6.6	3.8	4.7	22.0	6.6	4.9	3.3	1.7	2.6
4時間以上	-	8.2	6.3	6.9	2.6	2.8	11.0	4.6	2.8	1.4	1.3	1.3
平均自習時間	-	1.71	1.02	1.23	1.15	1.24	1.68	1.21	1.16	1.00	0.80	0.92
必要な学修時間/週	6	6	3	3	3	3	6	6	6	6	6	6
学修時間充足%	-	53.5%	84.0%	91.0%	88.3%	91.3%	53.1%	45.2%	44.3%	41.7%	38.3%	40.3%
同 H18-2・H19-1	1.56	0.86	0.90	1.41	1.15	1.22	2.16	1.10	1.23	0.93	0.90	0.91
同 H18-1		1.09		1.04		1.22	1.79		1.07	1.61	0.82	1.25
H18年度比増減	-	0.62	0.12	0.19	0.00	0.02	▲ 0.11	0.11	0.09	▲ 0.61	▲ 0.02	▲ 0.33

(4-2a) 専門科目の内訳(学部・授業形態別)

学部	文				教育				法			
	講義		演習		講義		演習		講義		演習	
授業形態	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1
年度・学期	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1
回答数	1,000	802	112	77	414	280	9	102	1,183	1,086	111	95
30分以下	71.7	62.5	24.1	23.4	56.0	56.1	11.1	17.6	47.8	40.2	6.3	5.3
1時間	18.5	23.1	28.6	37.7	25.8	25.0	44.4	32.4	31.7	35.3	18.9	21.1
2時間	6.9	9.7	23.2	23.4	12.3	13.6	33.3	32.4	14.1	19.2	32.4	30.5
3時間	1.8	2.7	12.5	10.4	4.6	3.6	0.0	13.7	4.0	3.1	24.3	28.4
4時間以上	1.1	2.0	11.6	5.2	1.2	1.8	11.1	3.9	2.5	2.1	16.0	14.7
平均自習時間	0.78	0.90	1.71	1.48	0.97	0.98	1.61	1.63	1.06	1.11	2.32	2.29
同 H18-2・H19-1	0.81	0.81	1.51	1.27	0.77	0.85	1.40	1.88	1.03	0.99	2.00	2.41
同 H18-1		0.79		1.38		0.76		1.48		0.93		1.96
H18年度比増減	▲ 0.03	0.11	0.20	0.10	0.20	0.22	0.21	0.15	0.03	0.18	0.32	0.33

学部	経済				理				医			
	講義		演習		講義		演習		講義		演習	
授業形態	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1
年度・学期	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1
回答数	340	775	14	0	1,080	935	59	117	1,547	2,255	487	153
30分以下	54.4	45.4	0.0	-	36.2	31.8	3.4	9.4	49.3	43.3	32.6	9.8
1時間	25.3	28.9	21.4	-	34.6	38.5	8.5	41.9	25.5	28.0	25.3	30.1
2時間	14.1	17.7	35.7	-	21.6	22.6	30.5	35.0	17.5	18.5	25.3	29.4
3時間	3.8	4.1	35.7	-	5.3	4.7	15.3	12.0	4.4	6.3	11.3	12.4
4時間以上	2.4	3.9	7.1	-	2.3	2.5	42.4	1.7	3.3	3.9	5.3	18.3
平均自習時間	1.02	1.15	2.29	-	1.21	1.24	2.86	1.59	1.12	1.21	1.48	2.04
同 H18-2・H19-1	0.98	1.02	2.56	2.77	1.03	1.12	1.40	1.31	1.04	1.22	1.47	1.74
同 H18-1		0.93		2.78		1.11		1.34		1.08		1.04
H18年度比増減	0.04	0.22	▲ 0.27	-	0.18	0.13	1.46	0.25	0.08	0.13	0.01	1.00

学部	歯				薬				工			
	講義		演習		講義		演習		講義		演習	
授業形態	H19-2	H20-1										
年度・学期	H19-2	H20-1										
回答数	703	443	0	0	722	1,228	0	0	4,604	4,273	394	538
30分以下	41.0	35.2	-	-	48.8	47.4	-	-	45.9	40.7	23.9	28.8
1時間	25.7	20.3	-	-	29.2	27.0	-	-	27.6	31.0	24.6	30.1
2時間	17.4	22.8	-	-	13.4	17.7	-	-	17.0	19.8	24.9	25.3
3時間	7.8	10.8	-	-	3.6	3.9	-	-	4.9	4.9	9.1	8.4
4時間以上	8.1	10.8	-	-	5.0	4.1	-	-	4.6	3.6	17.5	7.4
平均自習時間	1.37	1.59	-	-	1.11	1.14	-	-	1.18	1.20	1.84	1.50
同 H18-2・H19-1	1.08	1.40	1.17	-	0.97	1.03	-	-	1.07	1.16	1.65	1.52
同 H18-1		1.44		-		0.82		-		1.01		1.69
H18年度比増減	0.29	0.15	-	-	0.14	0.32	-	-	0.11	0.19	0.19	▲ 0.19

学部	農				獣医				水産			
	講義		演習		講義		演習		講義		演習	
授業形態	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1
年度・学期	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1	H19-2	H20-1
回答数	1,186	1,561	5	0	292	187	239	191	1,396	1,632	0	0
30分以下	58.1	53.4	-	-	48.6	46.5	44.8	39.3	50.1	49.8	-	-
1時間	23.8	26.6	-	-	24.7	23.5	26.8	36.1	23.9	25.2	-	-
2時間	13.2	14.1	-	-	18.5	15.5	17.2	14.7	18.2	16.2	-	-
3時間	3.0	2.8	-	-	5.8	9.6	7.9	4.2	3.4	4.1	-	-
4時間以上	1.9	3.1	-	-	2.4	4.8	3.3	5.8	4.4	4.8	-	-
平均自習時間	0.96	1.02	-	-	1.13	1.26	1.21	1.21	1.13	1.14	-	-
同 H18-2・H19-1	0.94	1.06	1.42	1.22	1.11	1.24	1.10	1.02	0.96	1.09	-	-
同 H18-1		0.90		0.98		0.93		1.32		0.94		-
H18年度比増減	0.02	0.12	-	-	0.02	0.33	0.11	▲ 0.11	0.17	0.20	-	-

## 編集後記

平成18年度新教育課程と「単位の実質化」の取り組みがはじまって4年たち、最初の卒業生が出ること、また第1期中期目標・中期計画（2004～09年度）が終了することから、平成18年度教育改革の実施状況中間評価報告書をまとめることになりました。

各種のデータや各年度の評価は、全学教育委員会をはじめさまざまな委員会等にすでに報告されたものを再録しました。今回の作業では、それらのデータと全体的な報告・評価を踏まえて、各科目責任者に科目ごとの実施状況と評価をまとめていただきました。

科目責任者には平成21年度第1学期までの資料をもとに、昨年末までに原稿をまとめていただきました。その後、平成21年度第2学期のデータが出はじめましたので、その部分については、必要に応じて編集担当の責任で補足させていただきました。

来年度から第2期中期目標・中期計画（2010～15年度）がスタートし、1年後には総合入試による最初の新入生を迎えます。それらの新しい課題の準備に本報告書が役立てば幸いです。

私事で恐縮ですが、この3月をもって8年間務めたセンター長補佐の任を終えます。平成18年度教育改革とその検証に関わったことは貴重な体験でした。全学教育ひいては北大の教育全体のますますの発展を祈っております。（安藤厚）

北海道大学HP

<http://www.hokudai.ac.jp/>

高等教育機能開発総合センターHP

<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.asp>

---

## 平成18年度新教育課程の実施状況中間評価報告書 (2006～2009年度) (平成18～21年度)

発行 2010年3月25日

編集 北海道大学 高等教育機能開発総合センター

全学教育委員会 委員長 脇田 稔

編集担当 安藤 厚

連絡先 〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

北海道大学 学務部教務課（全学教育担当）

TEL : 011-706-5344, FAX : 011-706-7854

E-mail : kyoutsu@jimu.hokudai.ac.jp

---





